SB473（遺構：図 1741、遺物：図 1740）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。北側と西側は撹乱により失われており、東側はSB475に、南側はSB474に切られている。検出時には両遺構の埋土と異なり、黒色土のブロック土が含まれていた。本遺構の周縁はすべて竪穴住居跡などの遺構により切られており、その平面形は不明であるが、底面が平坦で小穴を検出したため、竪穴住居跡と推定した。

形状　本遺構の周縁はすべて竪穴住居跡などの遺構により切られているため不明であり、深さは約0.1ｍである。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であるが、ブロック土を多く含んでいることから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面で小穴を２基検出した。そのうち、P1は楕円形を呈し、埋土はほぼ水平堆積で、上層と下層の層界付近で土器（5983）が横位でまとまって出土した。

遺物出土状況　埋土中から土器24点、小穴から土器11点が出土した。埋土中の出土土器はⅠ期、Ⅳ期、Ⅵ期～Ⅶ期の土器が出土したが、Ⅰ期とⅣ期のものは周辺からの混入と考えられる。小穴からはⅥ期～Ⅶ期の壺（5983）や高坏などが出土した。

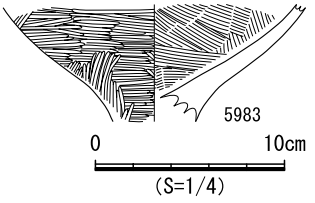


図 1740　SB473 遺物実測図

出土遺物　5983はⅥ期～Ⅶ期壺。底部付近の破片で、外面は丁寧なミガキ、内面がハケによる調整が認められる。

時期　小穴から出土した遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

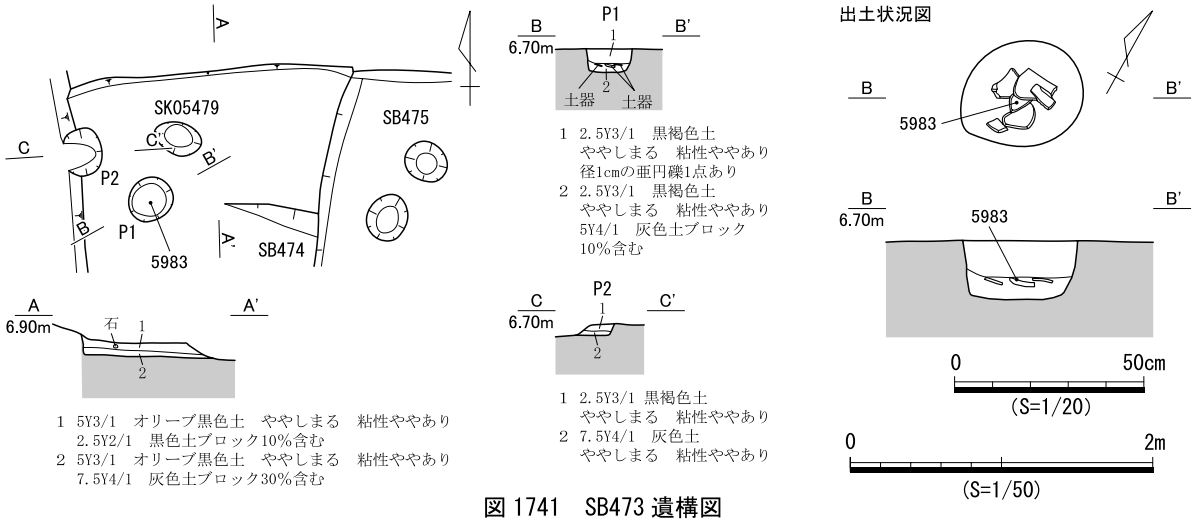


図 1741　SB473 遺構図

SB474（遺構：図 1743、遺物：図 1742）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。北側でSB473を切り、東側はSB475に、南側はSB476に切られている。遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状　北辺のわずかな範囲しか検出できておらず、不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。上層に亜円礫、下層にブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面にて小穴を４基検出したが、土層断面で柱痕跡を確認できる遺構はなく、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器145点、小穴から土器16点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが主体で、わずかにⅠ期、Ⅳ期、Ⅴ期のものが出土した。また、P4からはⅤ期～Ⅵ期の甕底部（5984）が出土した。

出土遺物　5984はⅤ期～Ⅵ期甕Ａ類。平底の底部には大きな焼成後の穿孔が認められる。

時期　Ⅵ期のSB477を切ることと出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

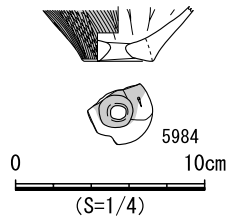


図 1742　SB474 遺物実測図

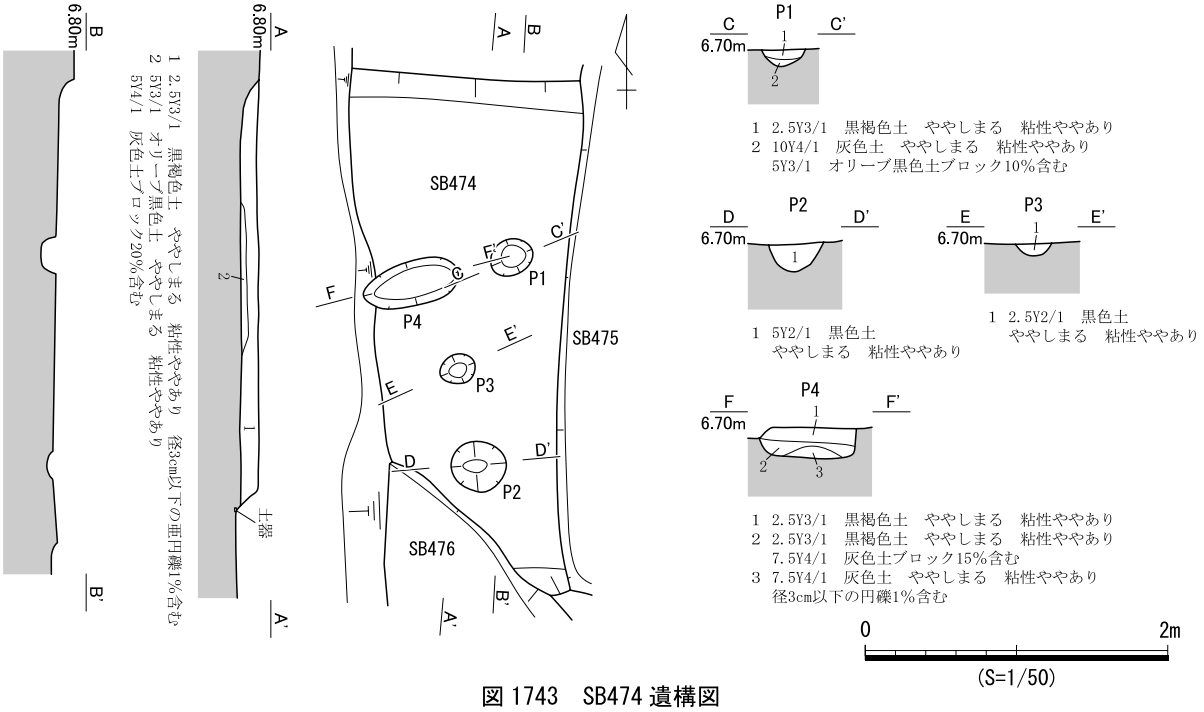


図 1743　SB474 遺構図

SB475（遺構：図 1744・1745、遺物：図 1746）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央は撹乱により失われ、西側でSB473とSB474を切る。平面形は明瞭であったが、南西隅はやや不明瞭であった。

形状　規模は不明であるが、西辺、南辺ともに丸みを帯び、およそ方形を呈する。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　４層に分層した。１・２層が覆土、５・６層が掘形埋土である。覆土の大半は１層であり、２層にはブロック土が混入している。

床面　平坦で貼床（整地土）がある。床面の認識はやや困難であったが、小穴や壁溝を確認できた面を床面とした。床面では３基の小穴を検出し、そのうちP1では土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、P1とP2が柱穴と考えられる。壁溝は掘形が浅く皿状を呈し、西辺と南辺沿いで検出できた。また、掘形底面では小穴を２基検出し、そのうちP4では土層断面で柱痕跡を確認した。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器674点、壁溝から土器38点、小穴から土器35点が出土した。埋土中

の出土土器はⅥ期～Ⅶ期の細片が多い。縄文時代晩期とＶ期の土器片は、混入の可能性が高い。

出土遺物　5985はⅥ期～Ⅶ期甕Ａ4類。頸部の屈曲は弱く、短く外反し、端部はつまみあげられる。5986はＶ期高坏Ｂ類。坏底部から口縁部が直線的に開く。5987はⅥ期器台Ｂ1ａ類。脚部が中空でほぼ直立し、裾部が円錐状に開く。現状では透孔は認められない。

時期　Ⅵ期のSB477を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

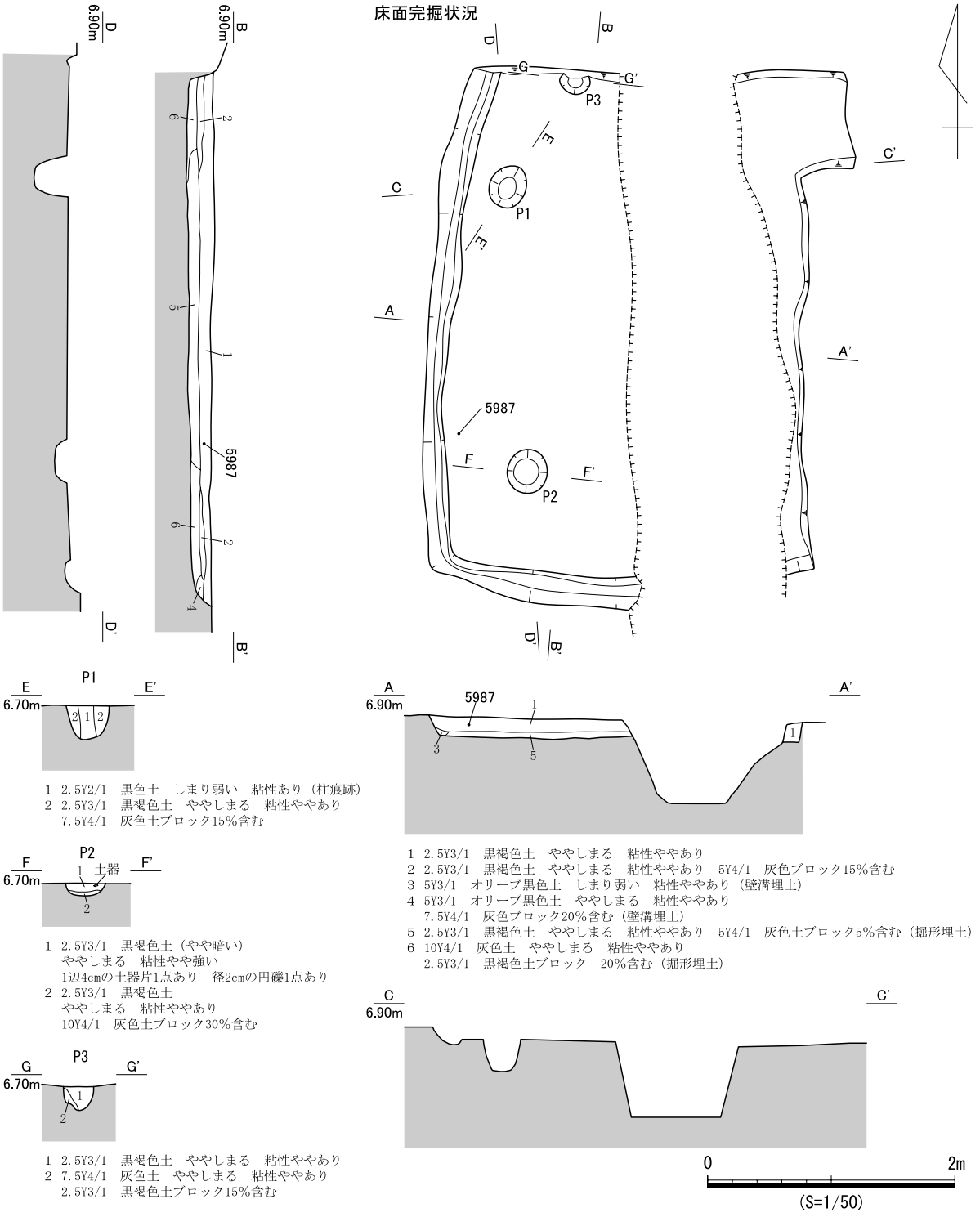


図 1744　SB475 遺構図（１）

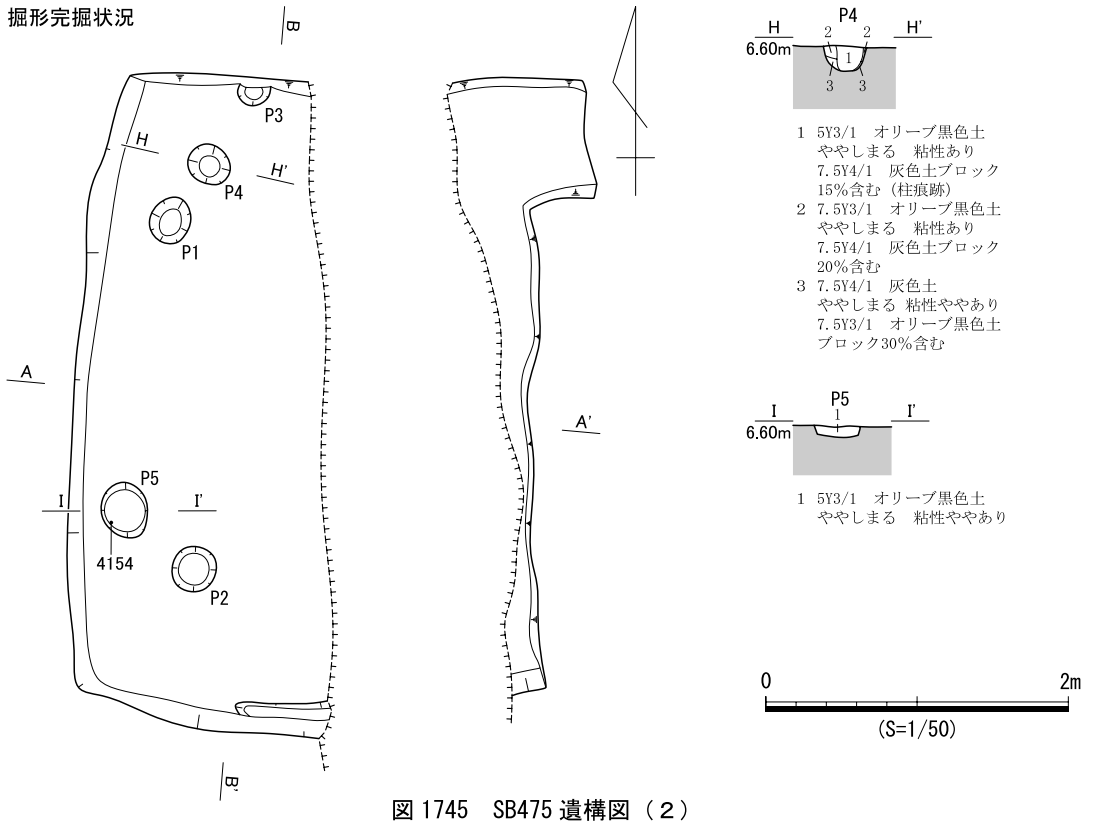


図 1745　SB475 遺構図（２）

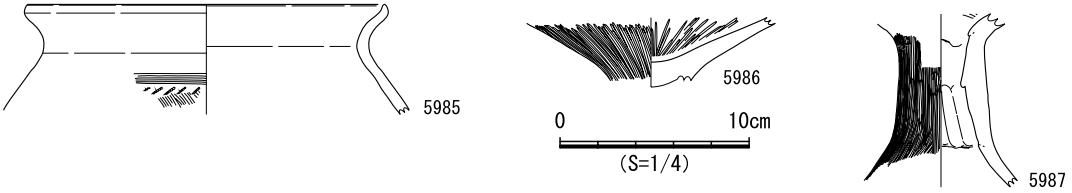


図 1746　SB475 遺物実測図

SB476（遺構：図 1747、遺物：図 1748）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われ、北側でSB474を、

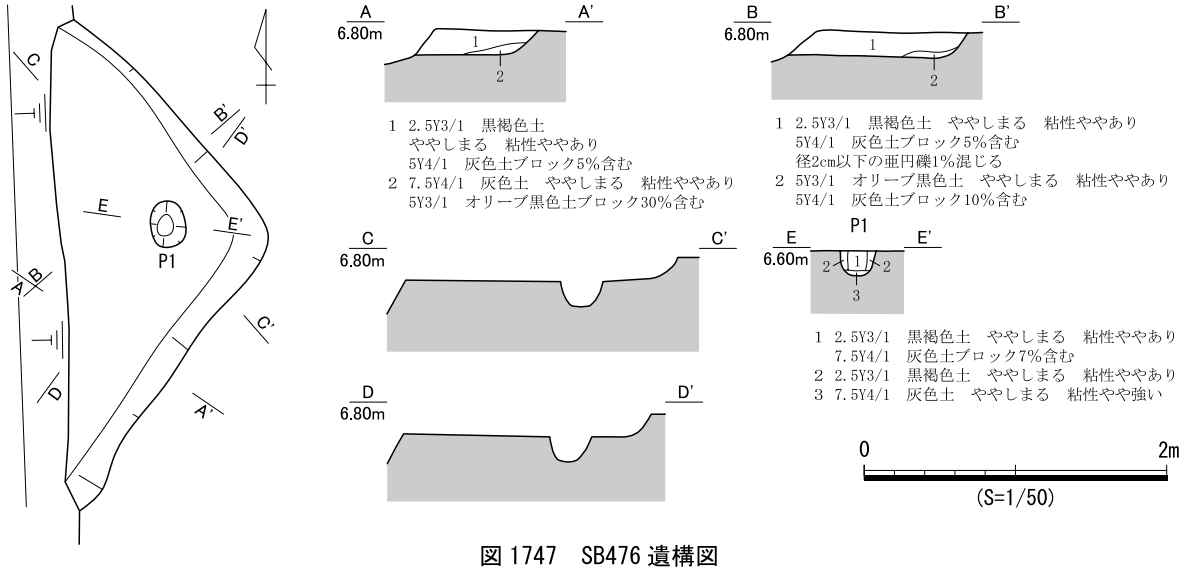


図 1747　SB476 遺構図

東側でSB477を切る。平面形は北東辺が明瞭に検出できたが、南東辺は不明瞭であった。

形状　平面形の一部分しか検出できていないが、北東辺と南東辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。埋土の大半は１層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。２層は壁面沿いの三角堆積層であり、この層もブロック土を多く含む。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を１基（P1）検出した。P1は土層断面で柱痕跡を確認できたが、住居の大半が調査区域外に位置するため、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器151点、小穴から土器２点が出土した。床面南側ではⅦ期甕Ｂ類（5989）の破片が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。なお、Ⅳ期の甕が埋土中から出土しているが、住居下にあるSZ173の混入遺物の可能性がある。

出土遺物　5988はⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にはタタキ痕が認められる。外面はタタキの後にハケ調整が認められる。5989はⅦ期甕B4類。口縁部が直線的に開き、端部直下には刺突を加える。

時期　Ⅵ期のSB476を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

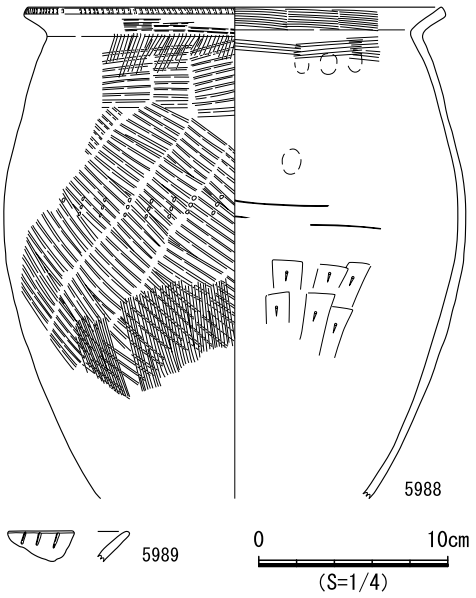


図1748　SB476遺物実測図

SB477（**遺構**：図1750、**遺物**：図1749）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、検出面において黒色土中に灰色ブロックが含まれていた。本遺構の周縁は複数の竪穴住居跡（SB474～SB476、SB479～SB481）に切られており、その平面形は不明であるが、埋土の状態が他の竪穴住居跡に類似し、底面で小穴を検出したため、竪穴住居跡と判断した。

埋土　２層に分層した、ほぼ水平堆積でブロック土の混入が認められるため、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を３基検出し、そのうちP3は土層断面で柱痕跡を確認した。しかし、住居の平面形が不明であるため、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中の出土遺物はなく、小穴から土器37点が出土した。P3からはⅥ期の甕Ｄ類と高坏Ｃ類が出土しており、Ⅶ期の遺物は確認できなかった。

出土遺物　5990はⅥ期甕D1b類。屈曲部から口縁部上段が外側へ引き出される。5991、5992はⅥ期高坏Ｃ類。5991の坏底部は平坦で、5992の脚部は透孔付近から下方が内湾する。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期と考えられる。

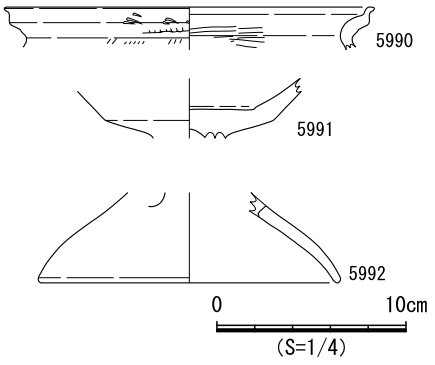


図1749　SB477遺物実測図

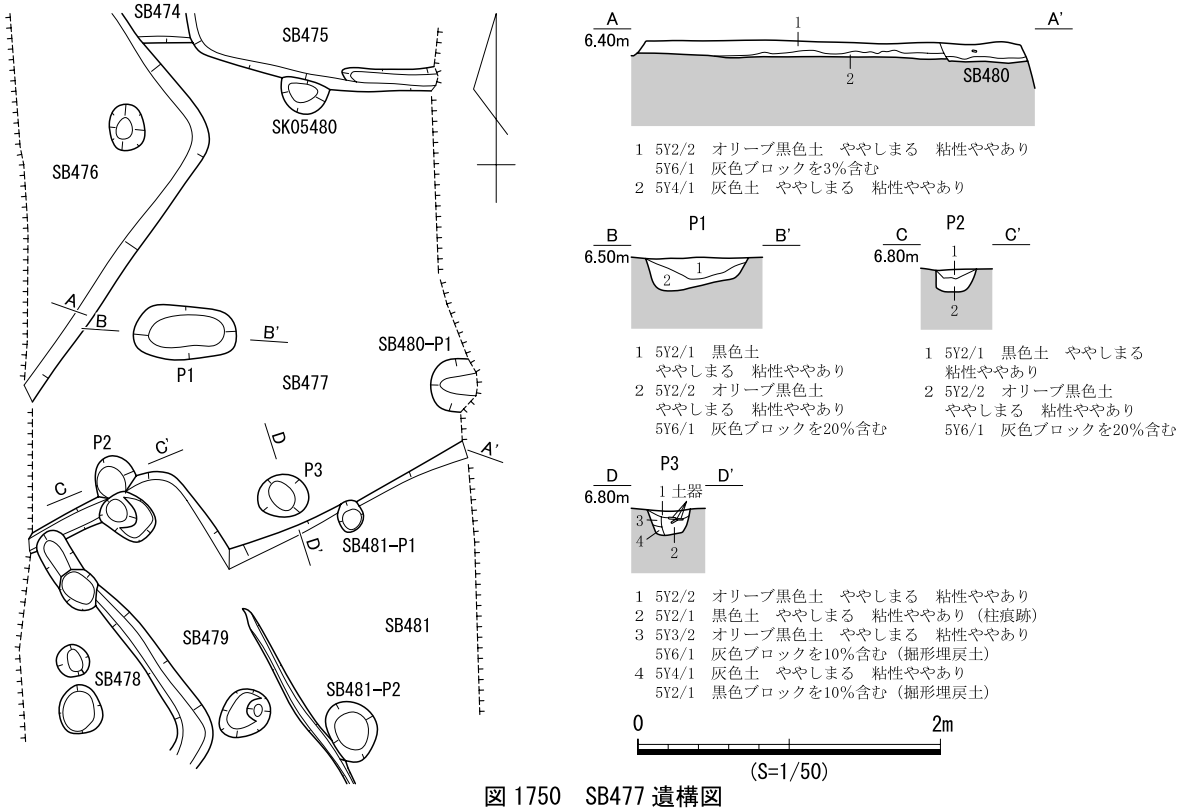


図 1750　SB477 遺構図

SB478（遺構：図 1751、遺物：図 1752）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。本遺構は SB479 掘形底面で検出し、検出面では住居の埋土は失われ、壁溝と小穴の平面形が明瞭に確認できた。

形状　北東辺と南東辺の一部しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面では小穴を２基検出し、そのうち P1 は掘形が深い。しかし、住居の全容が不明であるため、その性格も不明である。壁溝は、途切れることなく巡っている。

遺物出土状況　壁溝から土器 22 点、小穴から土器 11 点が出土した。出土土器のうち時期が判明する

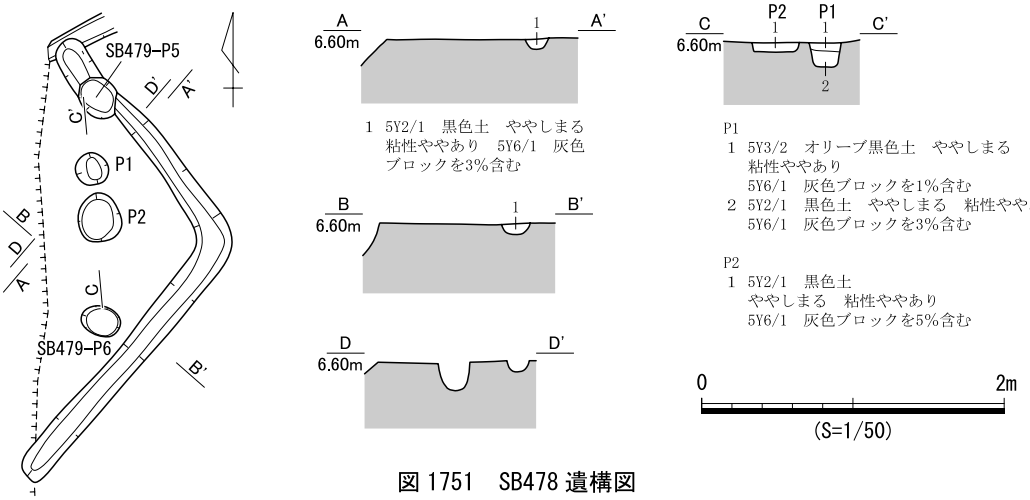


図 1751　SB478 遺構図

ものはⅦ期に属する。

出土遺物　5993はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈曲し、直線的に開く。端部に強い押圧を加え、外方へ粘土がはみ出す。5994はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部から口縁部が開いて立ち上がる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

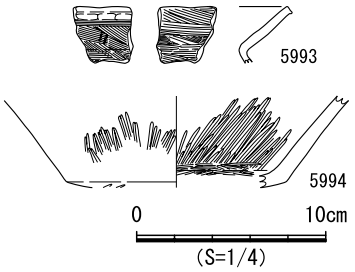


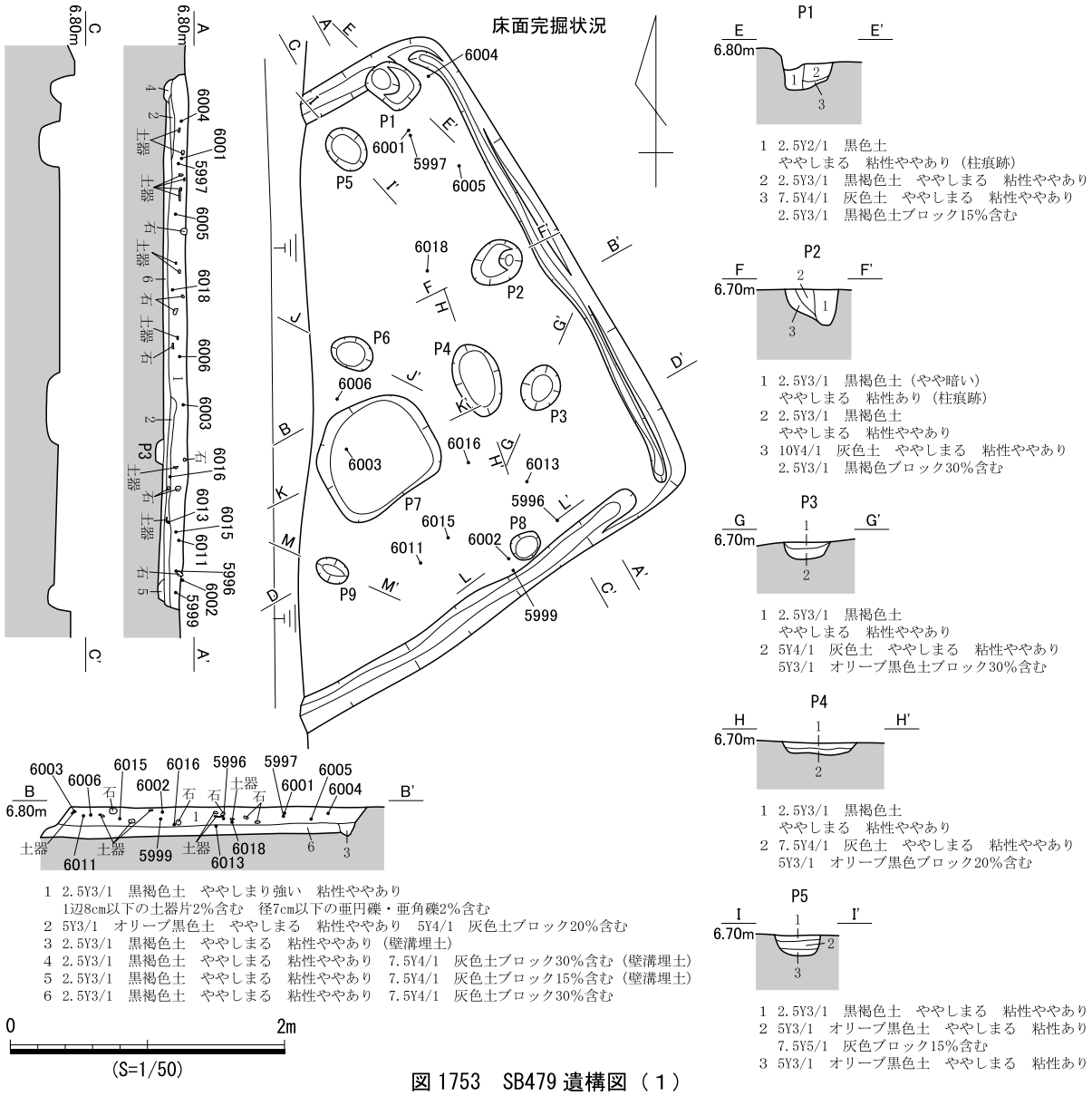
図 1752　SB478 遺物実測図

SB479（遺構：図 1753・1754、遺物：図 1755）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。北側でSB477を、東側でSB481を切り、掘形底面でSB478を検出した。本遺構の平面形は北側は明瞭であったが、南側は不明瞭であった。

形状　北西－南東長約4.0ｍで、隅丸方形を呈する。深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　３層に分層した。１・２層が覆土、６層が掘形埋土である。覆土はほぼ水平に堆積し、１層中



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまり強い　粘性ややあり
　1辺8cm以下の土器片2%含む　径7cm以下の亜円礫・亜角礫2%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1　灰色土ブロック20%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり（壁溝埋土）
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む（壁溝埋土）
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック15%含む（壁溝埋土）
6　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　7.5Y4/1　灰色土ブロック30%含む

P1
1　2.5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり（柱痕跡）
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
3　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色土ブロック15%含む

P2
1　2.5Y3/1　黒褐色土（やや暗い）
　ややしまる　粘性あり（柱痕跡）
2　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
3　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1　黒褐色ブロック30%含む

P3
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色土ブロック30%含む

P4
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロック20%含む

P5
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　7.5Y5/1　灰色ブロック15%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり

図 1753　SB479 遺構図（１）

に土器片を多く含み、２層中にはブロック土が含まれる。

床面　平坦で貼床（整地土）がある。床面の認識はやや困難であったが、東壁面沿いで壁溝が見えた高さを床面とした。床面では小穴を９基検出し、そのうちP1とP2は土層断面で柱痕跡を確認できた。しかし、位置的に本遺構の柱穴とは想定できず、その性格は不明である。また、P7は不整方形を呈し、検出面でほぼ完形に復元できるⅨ期の土師器甕（6003）が出土した。壁溝は深くて壁面の立ち上がりも強いが、北東隅と南東隅で途切れている。なお、掘形底面では住居南東隅にて小穴を２基検出した。

遺物出土状況　埋土中から土器2,677点、壁溝から土器37点、小穴から土器133点が出土した。埋土中や床面直上の土器はⅥ期～Ⅸ期のものが多く、縄文時代晩期の破片も混入している。また、P1からはⅧ期の高坏が出土し、P7検出面の甕（6003）は口縁部を南に向けて出土した。

出土遺物　5995はⅦ期壺。胴部に線刻が認められる。5996はⅧ期壺。胴部が球形を呈する。5997と5998はⅨ期壺。5997の胴部は小型の球形を呈する。5998は大型の壺底部。底面には木葉痕が残る。5999、6000はⅧ期甕Ｄ類。5999は口縁部で、屈曲が弱く、大きく開く。6000は器壁の薄い脚部が直線的に開く。6001はⅥ期～Ⅶ期甕。器壁の薄い脚部で、端部内面には粘土の折り返しが認められる。6002～6005はⅨ期甕。6002は口縁部が内湾するが、端部に肥厚した内傾面は認められない。布留型甕の模倣であろう。6003はほぼ完形品で、布留型甕を模倣したものと考えられる。口縁部はわずか

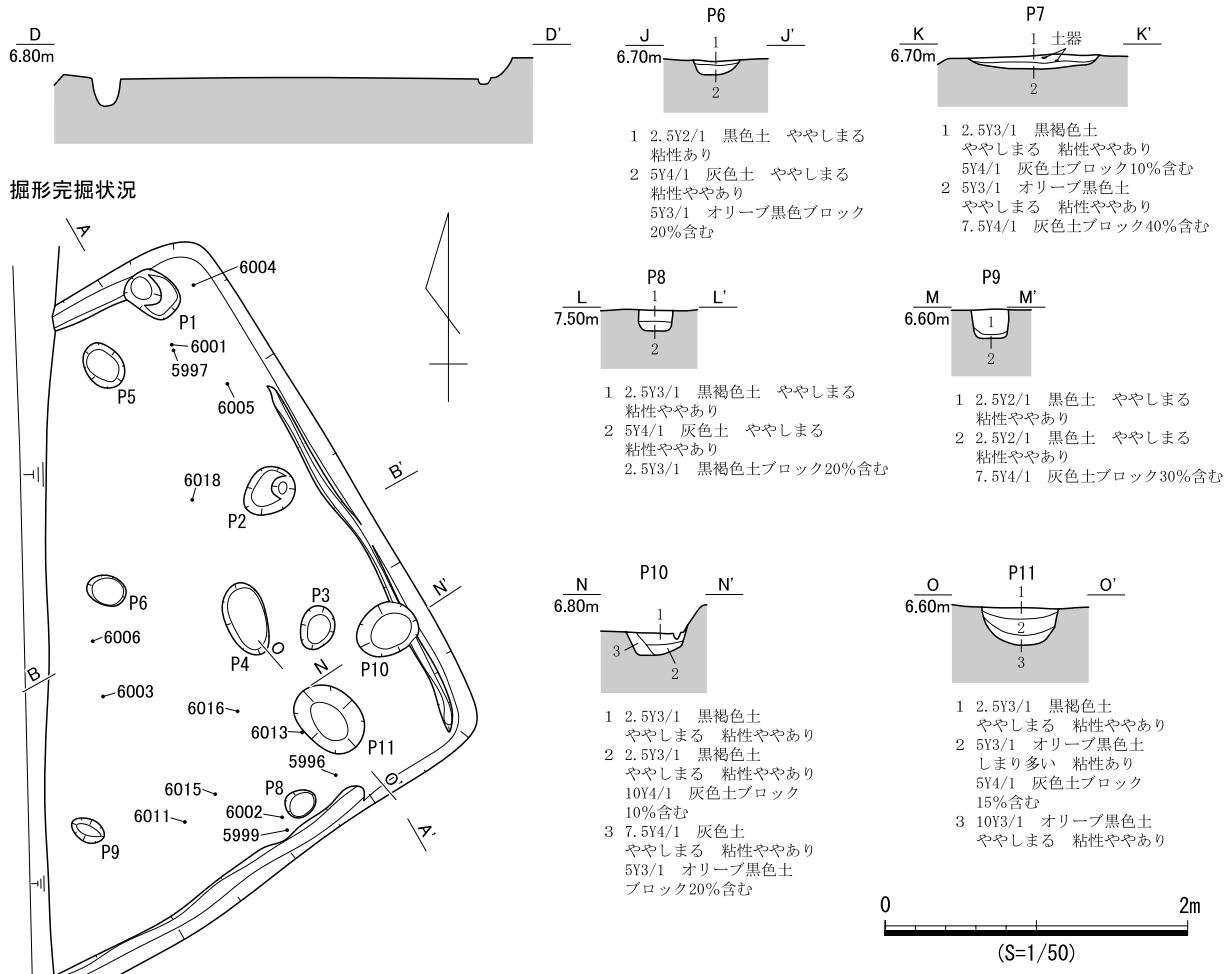


図1754　SB479遺構図（２）

に内湾し、端部は内傾して肥厚する。胴部は球形を呈するが、やや縦方向に長い。摩耗が著しいが、ハケ目がわずかに残る。6004、6005は口縁部で、弱く屈曲して端部が肥厚する。6006はⅧ期～Ⅸ期甕Ｄ類。底部から器壁の薄い脚部が開く。6007はⅨ期鉢。胴部は丸みを帯び、口縁部が直線的に外側に開く。6008はⅤ期高坏Ｂ類。脚部は円柱状で、透孔付近から外反する。6009はⅥ期高坏C3b類。口縁部が肥厚し、内面に多条沈線を施文する。6010、6011はⅦ期高坏C4c類。6010は内外面ともに加飾する。やや厚い器壁の内面には多条沈線を施文する。端部を尖らせ、その外面には山形文、多条沈線を施文する。山形文は端部直下に認められ、クシによる二重山形文となる。6011は口縁部途中まで段を形成し、その上方に多条沈線のみを施文する。6012、6013はⅦ期高坏Ｃ類。ともに脚部が円錐状に開く。6014はⅦ期高坏D5類。端部の平坦面及び内面に多条沈線を施し、内面には多条沈線間に３帯の連孤文を施文する。6015はⅧ期高坏。脚部が付根から短く大きく開く。6016はⅨ期高坏。器壁の薄い作りの脚部が円錐状に開き、細かいミガキが認められる。6017、6018はⅧ期器台。6017は坏底部から口縁部が短く外反する。6018は内湾する小型の受部が完存する。6019、6020はともにⅥ期～Ⅶ期手捏ねＣ類。平底から口縁部が外傾して直線的に立ち上がる。

時期　出土遺物はⅥ期～Ⅸ期に属するが、Ⅶ期のSB478より後出することから、Ⅷ期～Ⅸ期と考えられる。

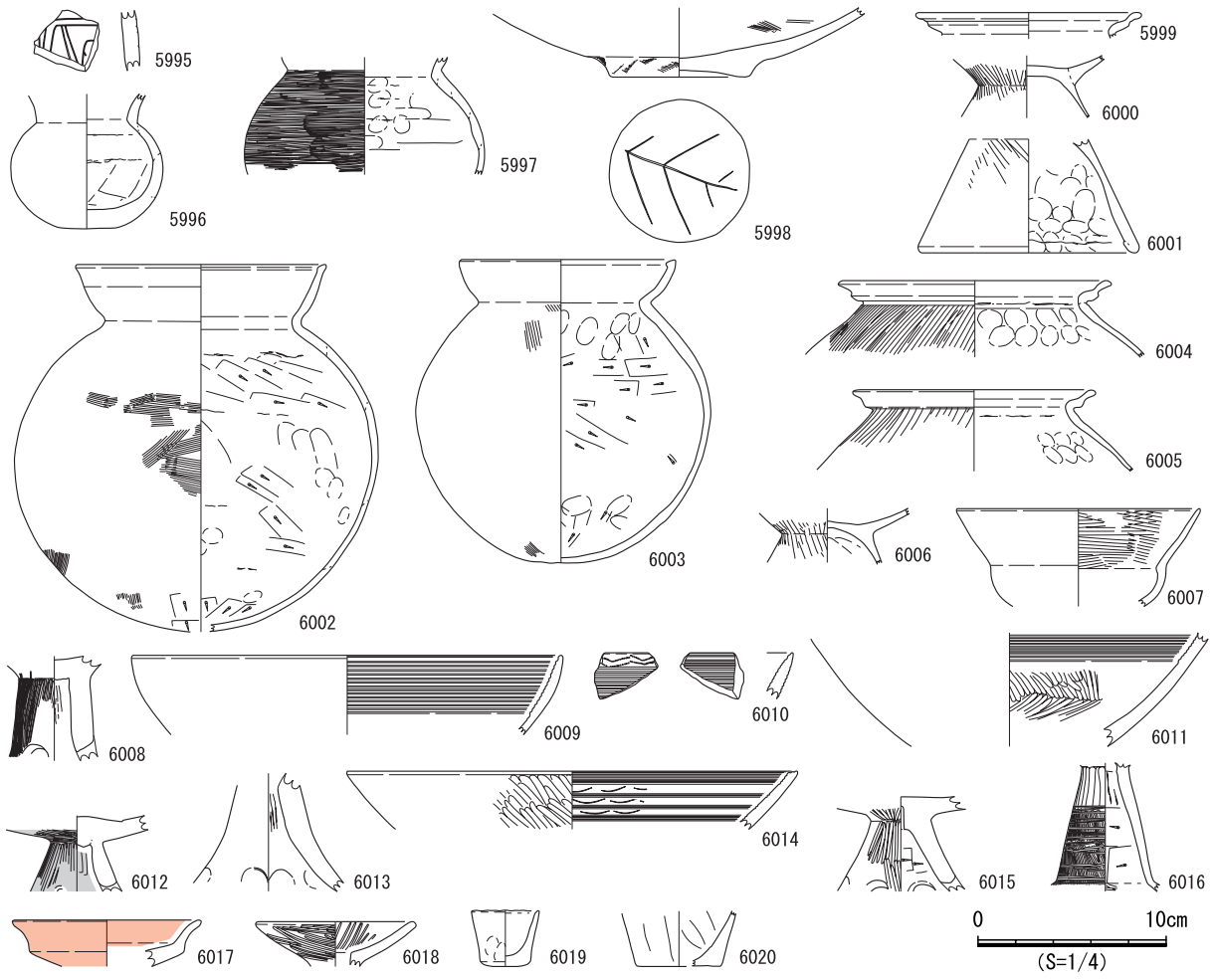


図 1755　SB479 遺物実測図

SB480（遺構：図1756、遺物：図1757）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は撹乱により失われている。南側をSD1092に切られ、西側でSB477を切る。本遺構の平面形は不明瞭であった。遺構の全容は不明であるが、西辺が直線的にのび底面が平坦であることから、竪穴住居跡と判断した。

形状　西辺が直線的にのびるが全体形は不明である。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。上下層ともにブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面にて小穴１基を検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器222点が出土した。出土土器の多くはⅥ期～Ⅶ期である。

出土遺物　6021はⅥ期高坏H1類。口縁部が内湾して立ち上がり、内外面ともに丁寧なミガキ調整が認められる。端部を丸くおさめ、外面に煤が付着する。6022はⅦ期高坏C3c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。

時期　Ⅵ期のSB477を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

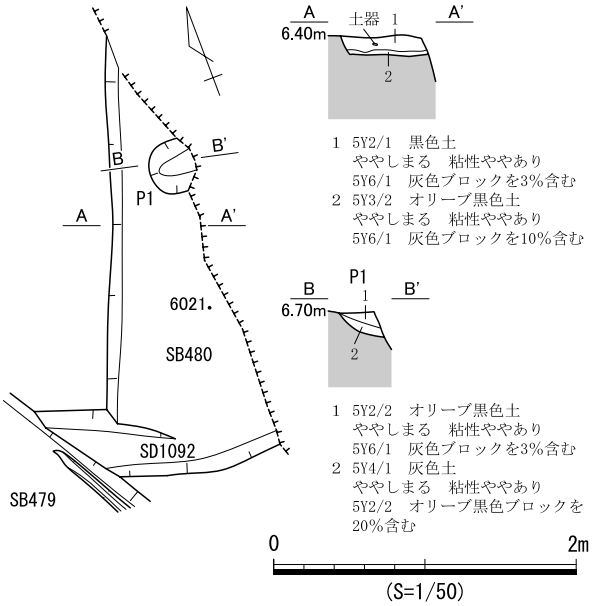


図1756　SB480遺構図

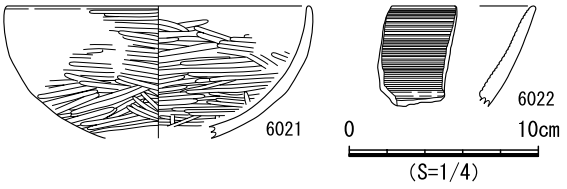


図1757　SB480遺物実測図

SB481（遺構：図1758、遺物：図1759）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東側を撹乱により失われ、西側はSB479に、南側はSB482に切られている。平面形は南辺は明瞭に確認できたが、北辺は不明瞭であった。

形状　南北長約4.0ｍで、東西に長い長方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。ブロック土をわずかに含むことや、周辺遺構との重複が著しいことなどから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を４基検出した。そのうちP2では土層断面で柱痕跡を確認できたが、住居のほぼ中央に位置し、その性格は不明である。なお、SB479の掘形底面で検出したSB479-P10・P11は、本遺構に伴う小穴の可能性もある。

遺物出土状況　埋土中から土器90点、小穴から土器100点が出土した。小穴のうちP4からは60点の土器片が出土している。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期、Ⅷ期以降の土器片もわずかに出土したが、これらは混入と考えられる。

出土遺物　6023はⅦ期高坏G3c類。口縁部直下に刺突文を施文し、下方に多条沈線が認められる。

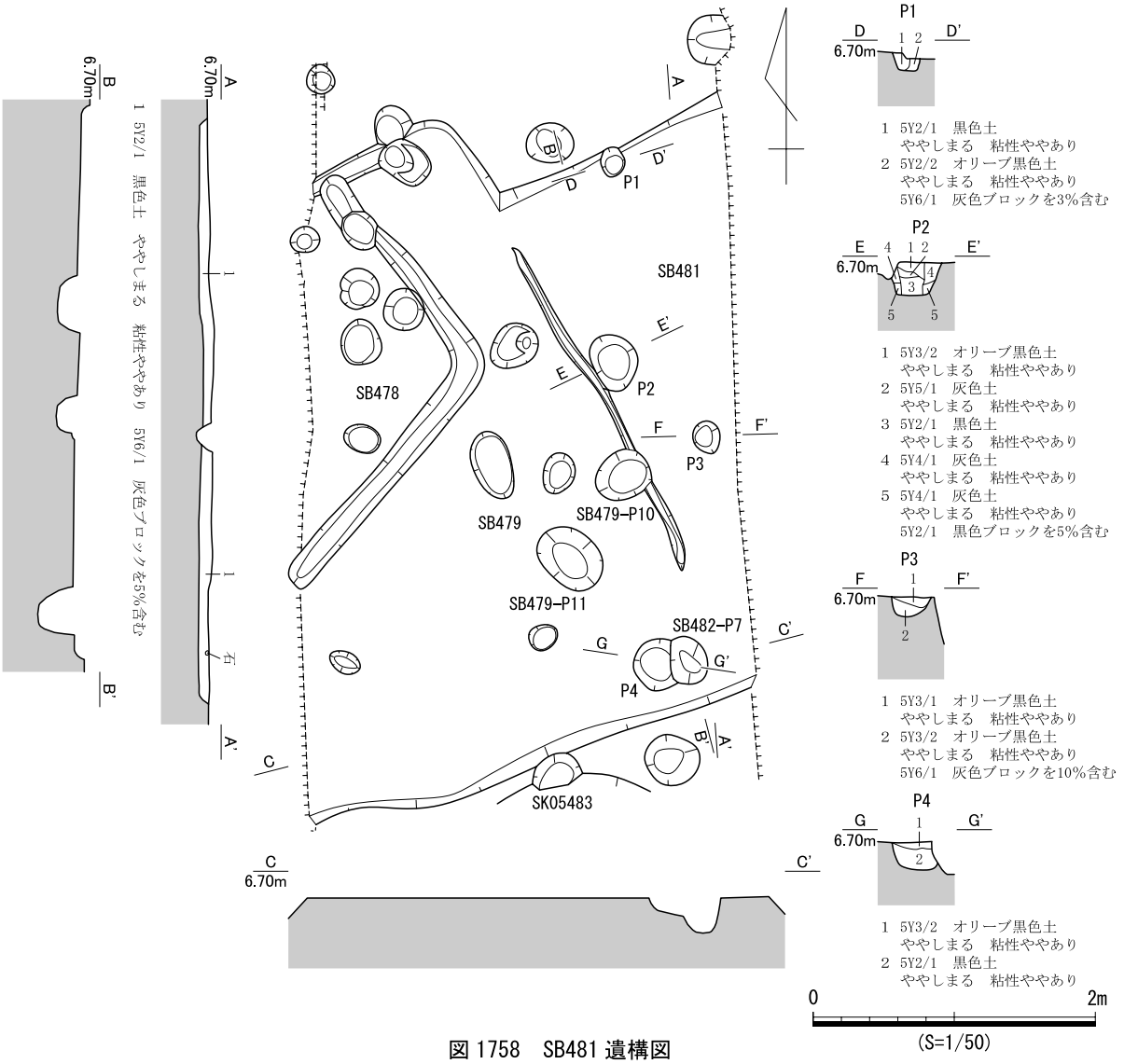


図 1758　SB481 遺構図

現状では、多条沈線間に山形文を２帯、羽状文を１帯施文する。精緻な作りで、刺突は貝の可能性が高い。6024はⅨ期高坏。脚部の開きはわずかで、円柱状に近い。

時期　Ⅷ期～Ⅸ期のSB479とⅥ期～Ⅶ期のSB482に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

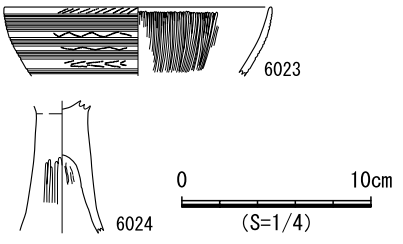


図 1759　SB481 遺物実測図

SB482（遺構：図 1760、遺物：図 1761）

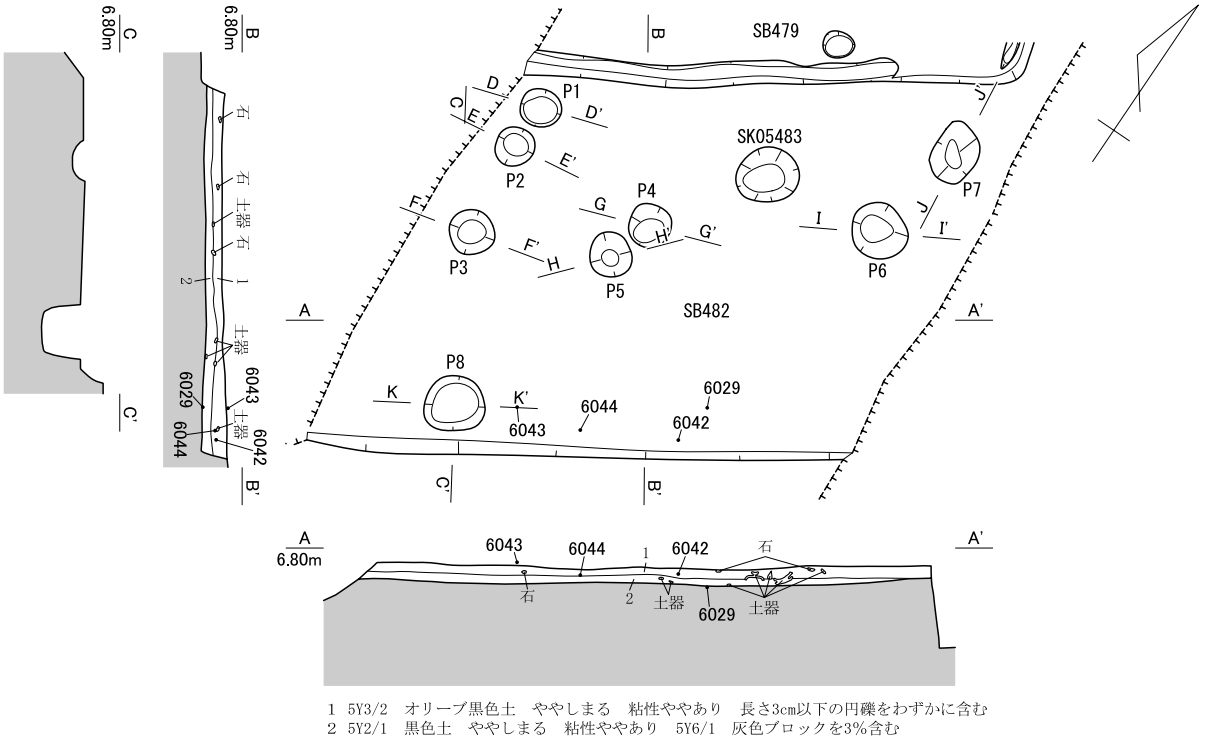
検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は撹乱により失われ、北側をSB479に切られ、北側でSB481を切る。本遺構の平面形は南辺西側は比較的明瞭であったが、東側にむかうにつれて不明瞭になった。南辺のみしか検出できていないが、南辺が直線的で底面が平坦であることから竪穴住居跡と判断した。

形状　南辺が直線的にのびることから、方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。上下層ともに土器片を多く含み、ブロック土や円礫も混入することから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を８基検出した。土層断面で柱痕跡を確認できた遺構はないものの、P4、P5、P7、P8は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。しかし、本遺構の柱穴の推定は困難であった。

遺物出土状況　埋土中から土器2,151点、石器類１点、小穴から土器162点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、Ⅵ期～Ⅶ期のものが多く、復元できる個体はⅦ期のものが目立つ。Ⅷ期以降の



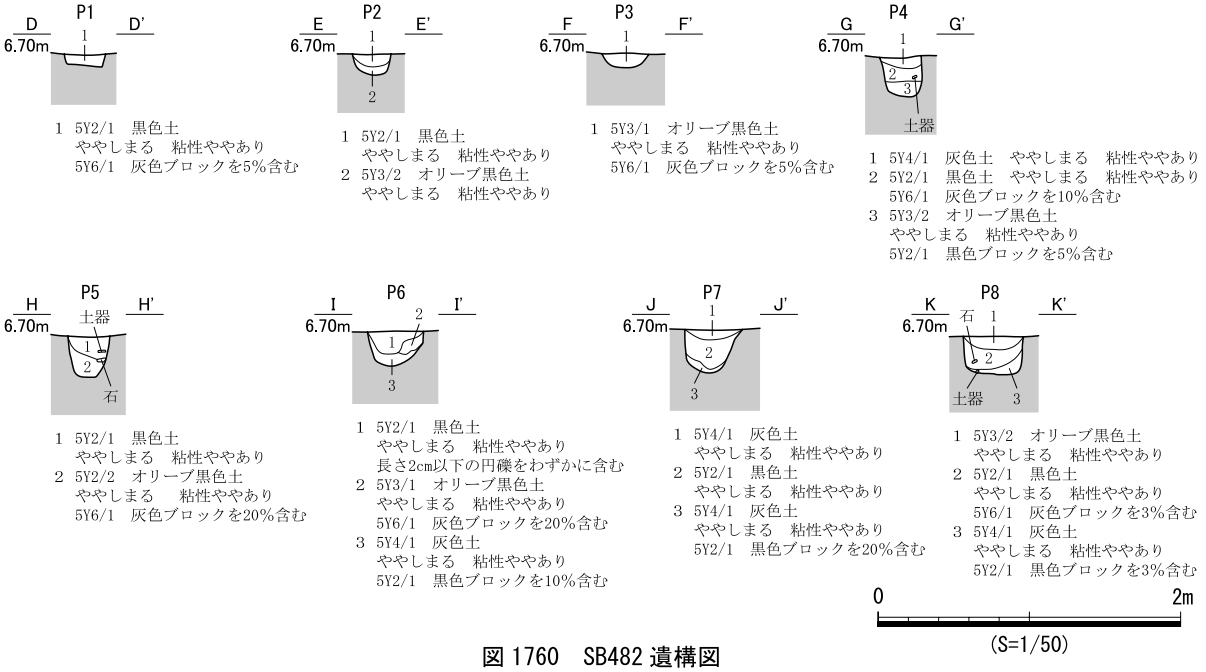


図 1760　SB482 遺構図

土器片は混入と考えられる。

出土遺物　6025はⅤ期～Ⅵ期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を下方に大きく拡張する。上方への拡張もわずかに認められ、端部外面には６条の擬凹線が認められる。6026はⅦ期壺H2b類。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁部中位やや下まで細かい加飾が認められる。多条沈線を施文し、その間に小さなクシ状工具を用いて山形文、刺突文を加えている。精緻な作りの資料である。6027はⅥ期～Ⅶ期壺H2a類。口縁部が内湾し、加飾は見られない。6028はⅥ期～Ⅶ期壺。木葉文状の線刻が認められるものの確認可能な範囲が狭く、現状では文様全体の様相は不明である。6029はⅤ期～Ⅵ期甕Ｂ類。脚部が短く直立気味に開き、器壁は厚い。6030はⅥ期～Ⅶ期甕。胴部には粗いハケ目が残り、

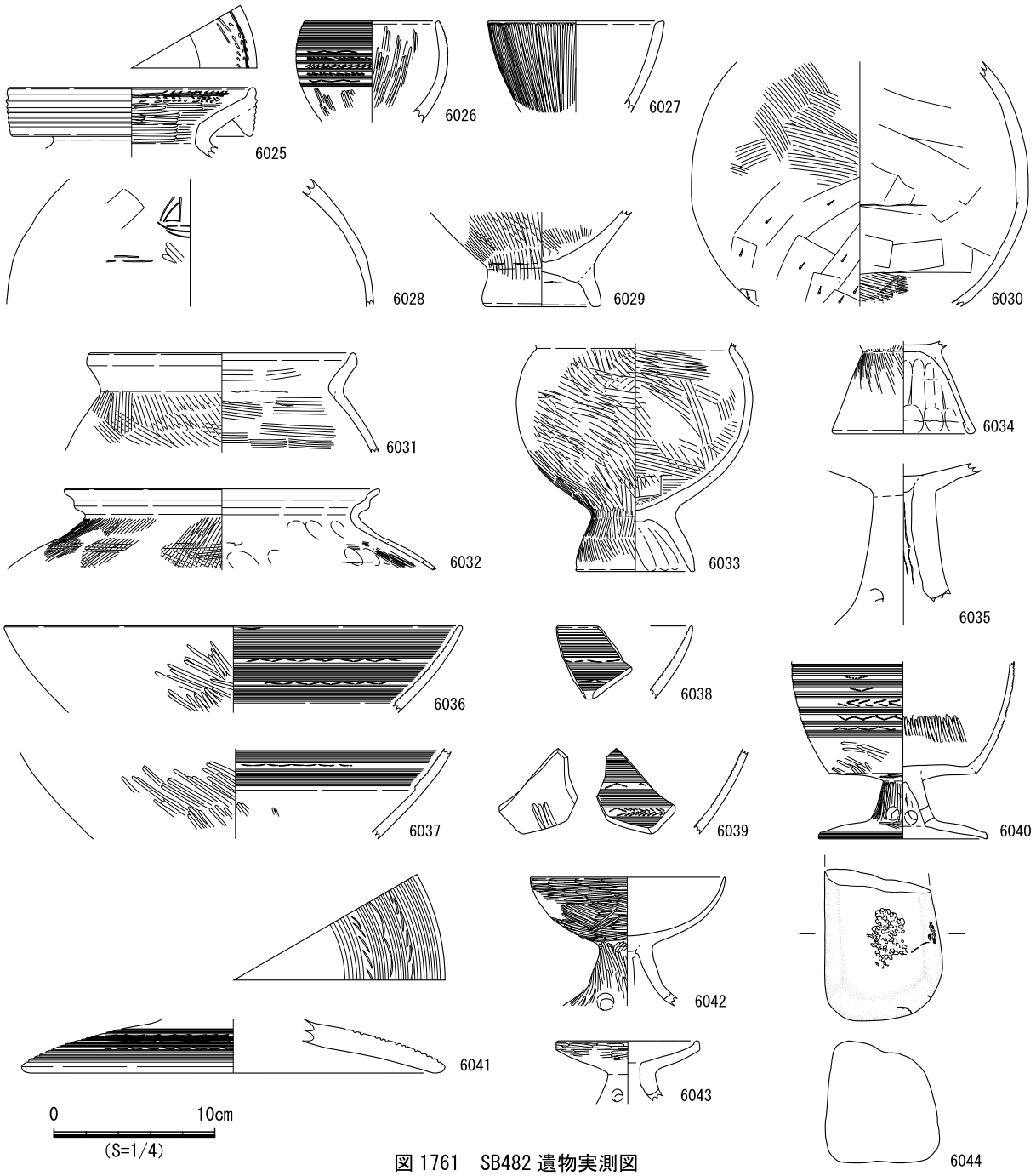


図 1761　SB482 遺物実測図

煤が付着する。6031はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が短く屈曲し、内面はわずかに内湾する。端部外面が直立するように平坦面を形成し、先端は尖る。6032はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く明瞭に屈曲し、上段がわずかに外方に引き出され、平坦面をもつ。6033はⅥ期～Ⅶ期甕E3類。小型の甕で脚部が付き、胴部は球形を呈する。粗いハケ目が残り、煤が付着する。6034はⅧ期～Ⅸ期甕。器壁は薄く、脚部が開く。6035はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔を境に大きく外反する。6036～6039はⅦ期高坏C4d類。6036～6038は口縁部内面に多条沈線を施文し、その間に山形文を配する。6036は6037と同一個体の可能性がある。6039は山形文のほかにクシによる羽状文が認められる。6040、6041はⅦ期高坏G3c類。6040は口縁部が開いて立ち上がる。外面には中位より下まで多条沈線を施し、山形文４帯と羽状文１帯をその間に加える。脚部は中程で強く屈曲して開き、２孔１対の透孔を２方向に配置する。脚端部は平坦面をもつ。6041は脚裾部の小片。多条沈線を施文し、その間に山形文、刺突文を加える。6042はⅦ期高坏H1類。坏部は完存し、内湾する。脚部は円錐状に開き、透孔のやや上からさらに大きく開く。6043はⅦ期器台C1類。受部が弱く内湾し、皿状を呈する。6044は叩石。上方が割れた長楕円礫の平坦面に敲打痕が残る。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB481を切っているが出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられ、Ⅶ期により多くの土器が廃棄されたと推定される。

SB483（遺構：図1762・1763、遺物：図1764・1765）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、中央は撹乱により失われている。西側はSK05487に切られ、北側はSB482床面で、南側はSB484床面でそれぞれ検出した。なお、平面形は比較的明瞭であった。

形状　遺構の北辺と西辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。全体的に中央に向かって緩やかに下降する堆積層であるが、埋土のいずれの層にもブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面では柱穴などは全く確認できず、大きな穴（P1）のみを住居北西隅で検出した。P1は不整楕円形を呈し、壁面の傾斜は緩やかで、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に分層でき、上層に多量の土器が含まれていた。

遺物出土状況　埋土中から土器1,562点、石器類２点、小穴から土器693点が出土した。出土遺物の多くはⅧ期に属し、わずかにⅤ～Ⅶ期の破片も出土したが混入と考えられる。P1中央東寄りではほぼ完形の小型の甕Ｄ類（6056）が横位で口縁部を南に向けて出土し、その東側には通常の大きさのⅧ期甕Ｄ類（6055）が口縁部を北に向けて潰れたような状態で出土した。また、その東側には木製の棒状材も横位で出土した。一方、中央西寄りではⅧ期の壺（6047）とⅧ期甕（6059）が出土した。

出土遺物　6045はⅤ期壺B1類。口縁部が強く外反し、端部を上下両方にわずかに拡張する。端部には明瞭な平坦面を形成し、円形刺突文を施文する。6046はⅧ期壺。口縁部が頸部から強く外反し、端部には平坦面を形成する。端部には沈線状の窪みが認められる。6047はⅧ期壺。口縁部がわずかに外反して立ち上がる。端部には平坦面をもち、内外面ともにハケ目が残る。6048はⅧ期～Ⅸ期壺。平底の底部がやや突出する。6049はⅤ期甕A2a類。口縁部が受口状となる。端部には明瞭な平坦面をもち、

口縁部内面にも顕著な平坦面を形成する。端部外面には刺突文を施文する。6050はⅦ期甕D2b類。口縁部が短く明確に屈曲し、上方がわずかに引き出される。6051はⅦ期甕Ｄ類脚部。6052はⅦ期～Ⅷ期甕。口縁部が明瞭に屈曲する。強く外方に引き出され、平坦面を形成する。端部は直立気味に立ち上がり、外面には煤が付着する。6053～6062はⅧ期甕Ｄ類。6053、6054、6062は脚部。6062は器壁の薄い作りである。6055は口縁部と胴部の一部と、脚部すべてを欠損する。6057より小型である。6056はほぼ完形品で、器高約11㎝の小型品である。6057はほぼ完形。口縁部は大きく外方に引き出され、端部は外反気味となる。胴部最大径は中央の上方となり、全面に粗いハケ目が認められる。最大径の部位より下方には煤が付着する。脚部はやや細身で、脚高が高い。6058、6060、6061は口縁部が6061

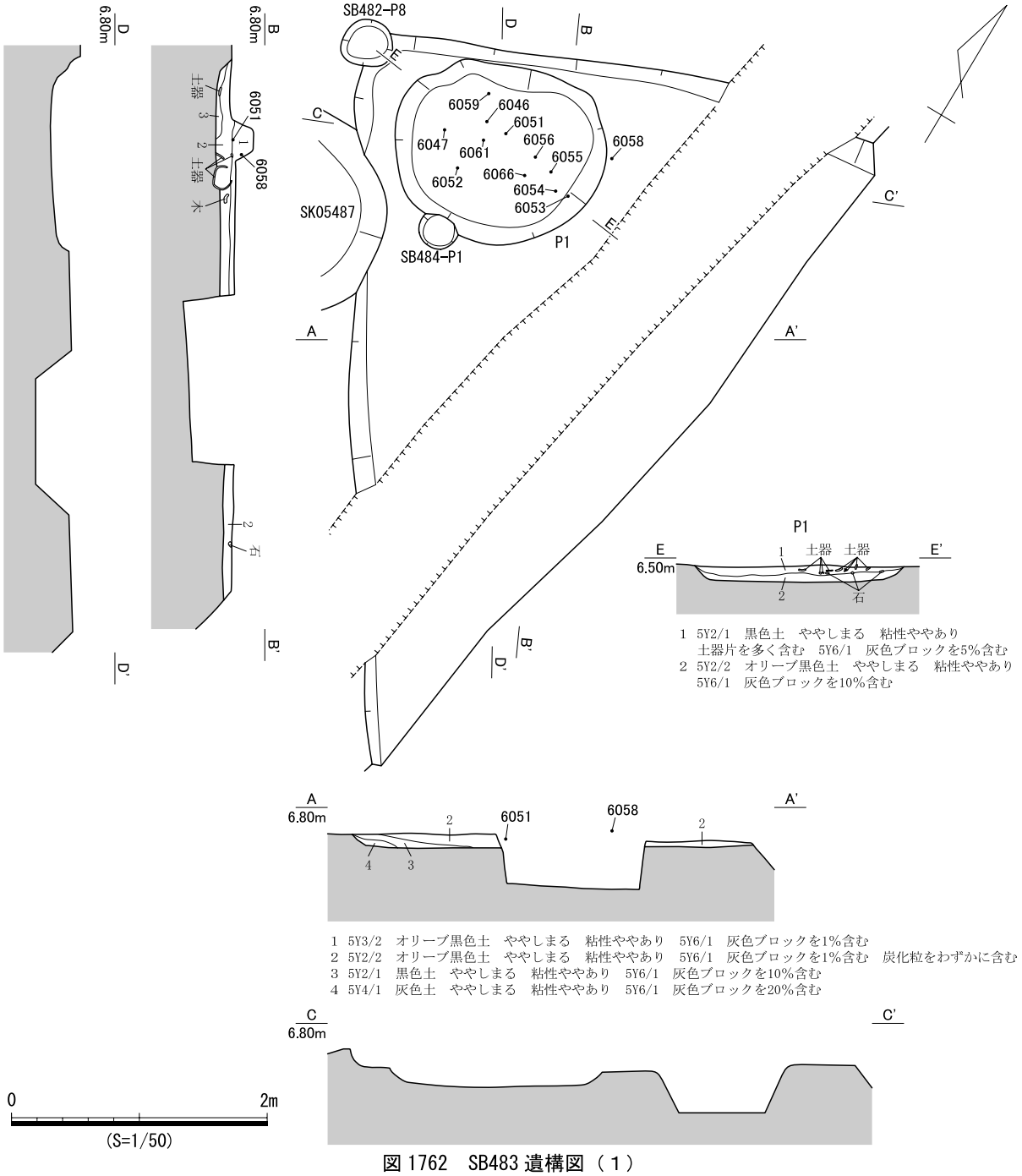


図1762　SB483遺構図（１）

は口縁部が大きく外方に拡張する。6059は口縁部が完存する資料で、端部に凹面が認められる。6063はⅥ期～Ⅶ期の高坏。脚裾部がハの字状に開き、端部を丸く収める。付根部分の器壁が厚い。6064はＶ高坏Ｂ類。脚部に、現状では２条１組の沈線が５帯認められる。6065はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚部が円錐状に開く。6066はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部から口縁部が外傾して立ち上がる。内面の段、外面の稜ともに明瞭に残る。6067はＶ期器台Ａ1類。口縁部が大きく外反し、端部には明瞭な平坦面を有する。端部平坦

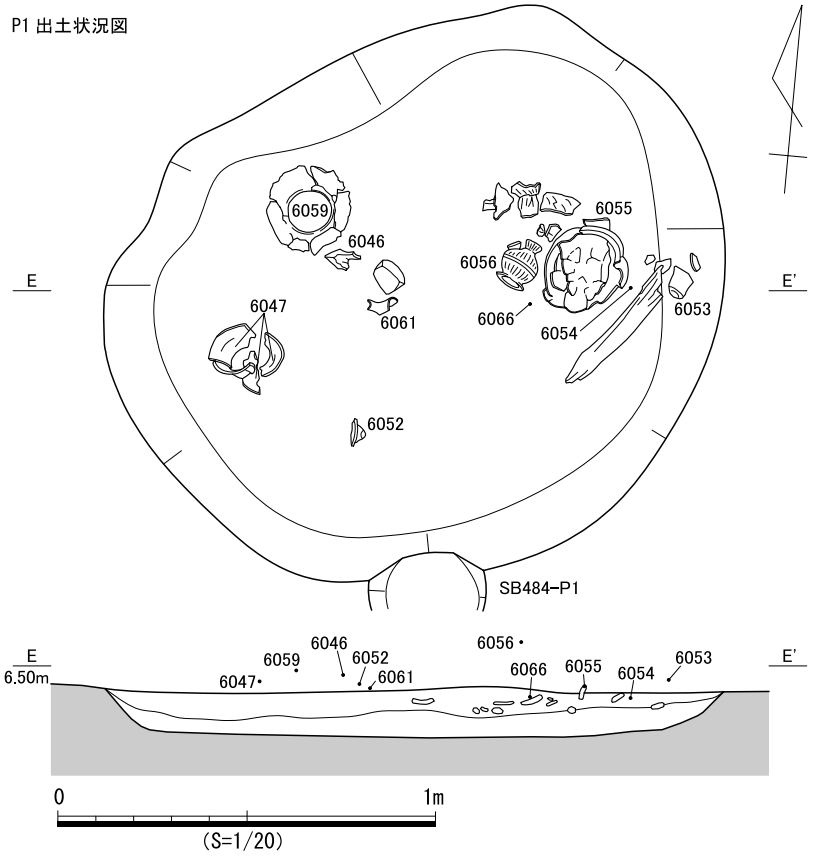


図 1763　SB483 遺構図（２）

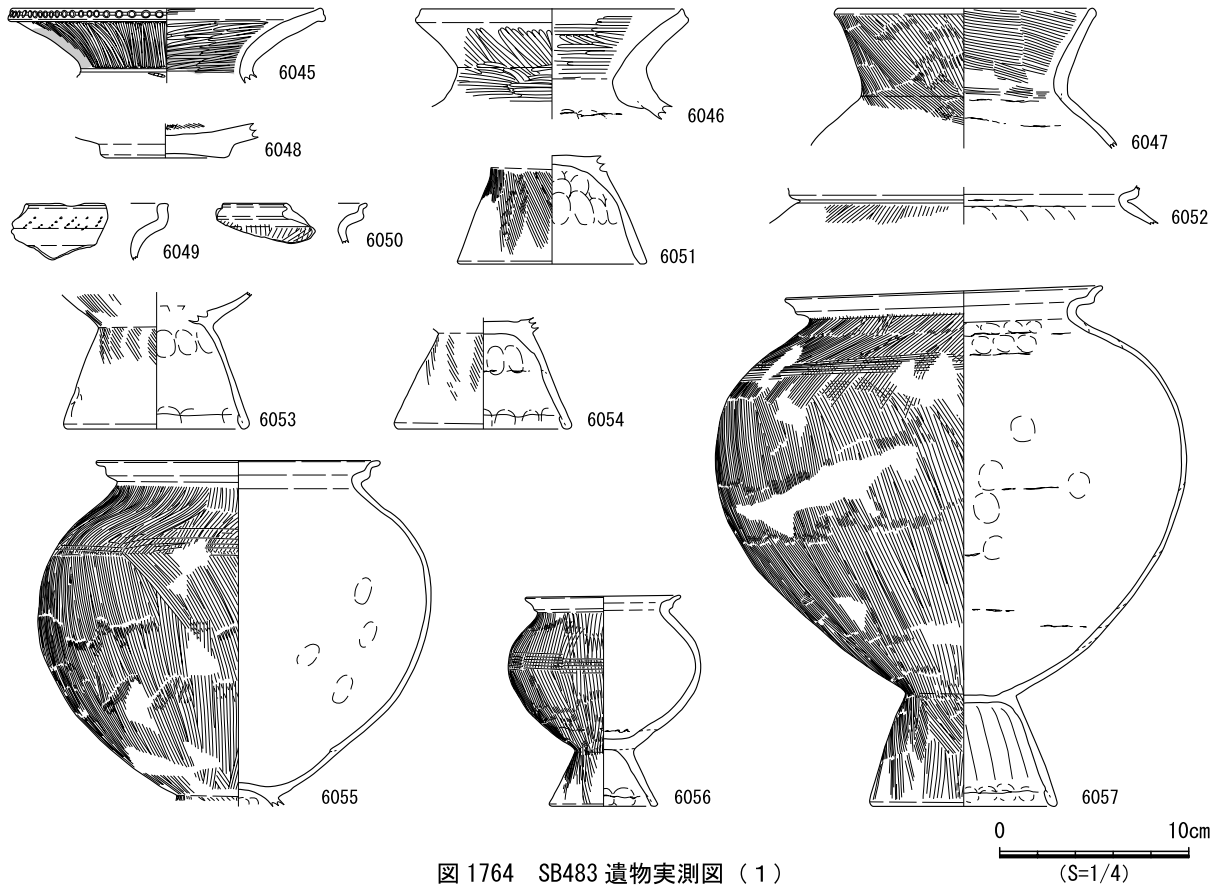


図 1764　SB483 遺物実測図（１）

面には円形浮文を貼付する。内面の端部に沿った一帯に煤が付着しており、二次的な使用が認められる。

時期　出土遺物の時期からⅦ期～Ⅷ期と考えられるが、本遺構はⅥ期～Ⅶ期のSB482床面で検出しており、出土遺物の時期と遺構の重複関係とが矛盾している。SB483-P1付近の出土土器はⅧ期～Ⅸ期のSB484の土器集中箇所の下に位置することから、遺構の平面形の確認時に誤認した可能性がある。

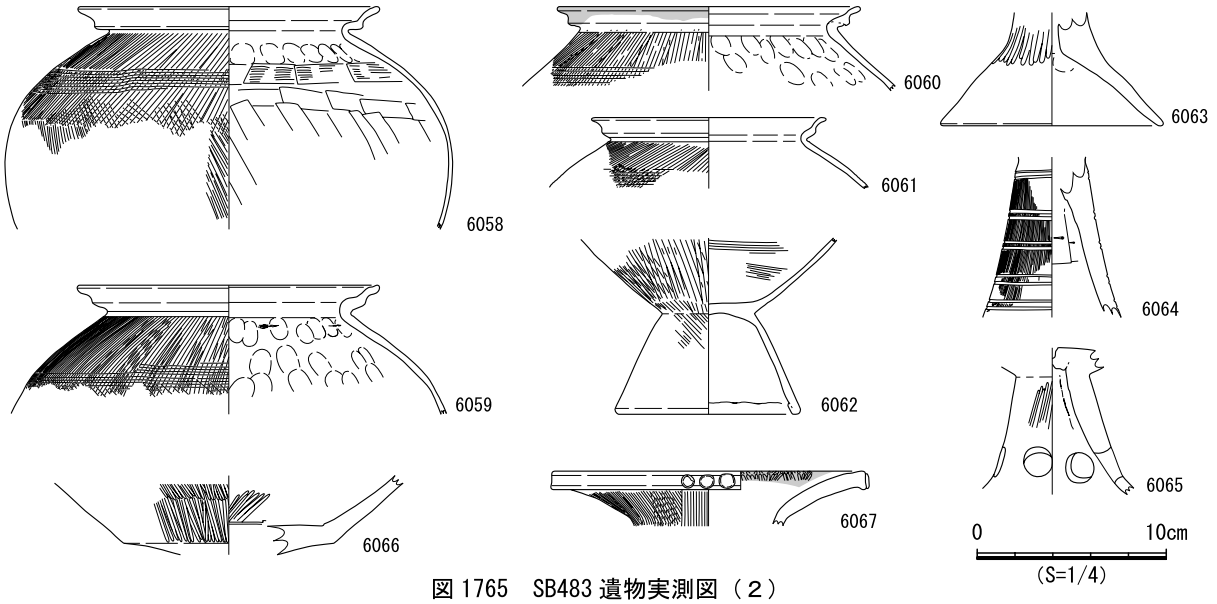


図 1765　SB483 遺物実測図（２）

SB484（遺構：図 1766、遺物：図 1767）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央と西側は撹乱により失われ、北西隅はSK05487に切られている。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状　東西両端の形状は不明であるが、南北長約5.6ｍで北西隅が西側へやや突出する不整方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は南辺と北辺が急で、西辺は緩やかである。

埋土　２層に分層し、上層は炭化粒を含む。上下層ともブロック土が混入し、層界の凹凸も顕著であることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床は（整地度）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を６基検出したが、いずれも浅く土層断面等で柱痕跡を確認できなかったため、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器1,848点、小穴から土器86点が出土した。土器は北壁沿いで細かく割れた破片が多数出土したものの、残存状態の良好な破片は出土しなかった。出土遺物はⅥ期～Ⅸ期の土器片が含まれ、わずかに縄文土器やⅠ期の土器片も出土した。

出土遺物　6068はⅧ期甕Ｄ類。口縁部が大きく外方に引き出され、端部は外反する。6069はⅧ期～Ⅸ期甕脚部。器壁が非常に薄い。6070はⅨ期甕。6068より口縁部の屈曲が弱くなる。

時期　出土遺物の時期はⅥ期～Ⅸ期であるが、本遺構はⅦ期～Ⅷ期のSB483より後出するため、Ⅷ期～Ⅸ期と考えられる。

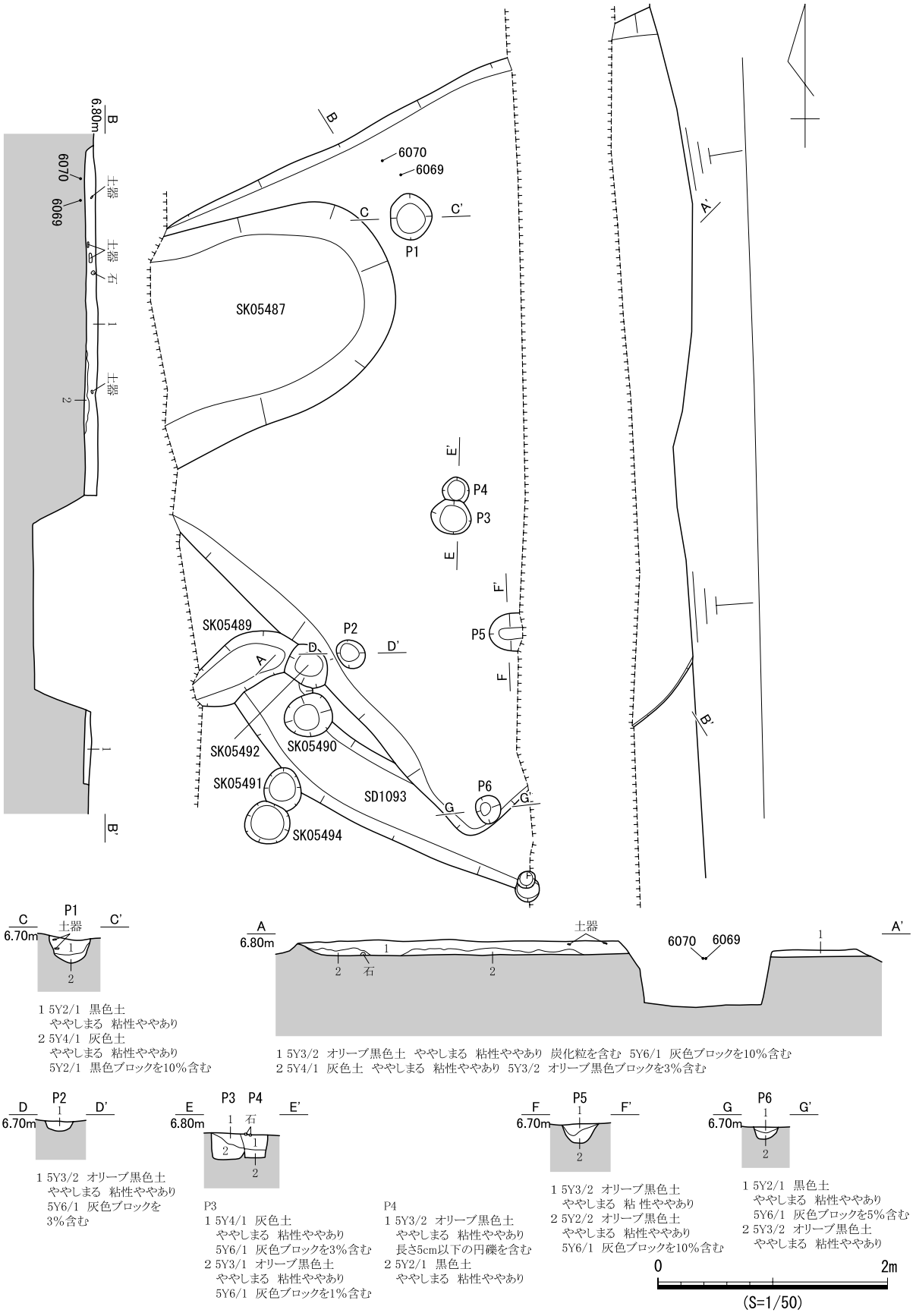


図 1766　SB484 遺構図

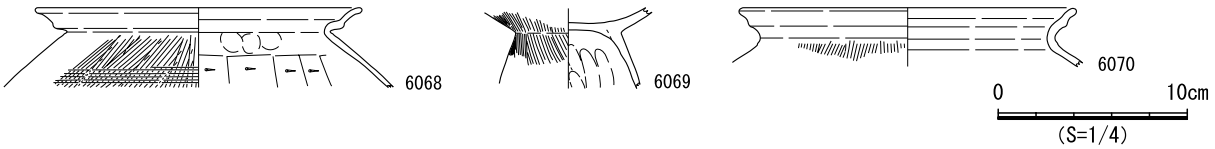


図 1767　SB484 遺物実測図

SB485（遺構：図 1768）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は撹乱により失われており、北側はSB484に、南側はSB486に切られている。検出時には両遺構の埋土と異なり、Ⅴ層のブロック土が全体的に含まれていた。本遺構の周縁はすべて竪穴住居跡に切られているため平面形は不明であるが、底面が平坦であることや埋土除去後に小穴を検出したため竪穴住居跡と判断した。

埋土　２層に分層した。上下層ともブロック土が含まれていることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では小穴を２基検出し、そのうちP2は掘形が深く壁面の傾斜がほぼ垂直であることから、柱穴の可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から土器166点、小穴から土器５点が出土した。出土土器にはⅥ期～Ⅶ期及び縄文土器の小片が含まれるが、いずれも小片であり図示していない。

時期　Ⅷ期～Ⅸ期のSB484とⅦ期～Ⅷ期のSB486に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

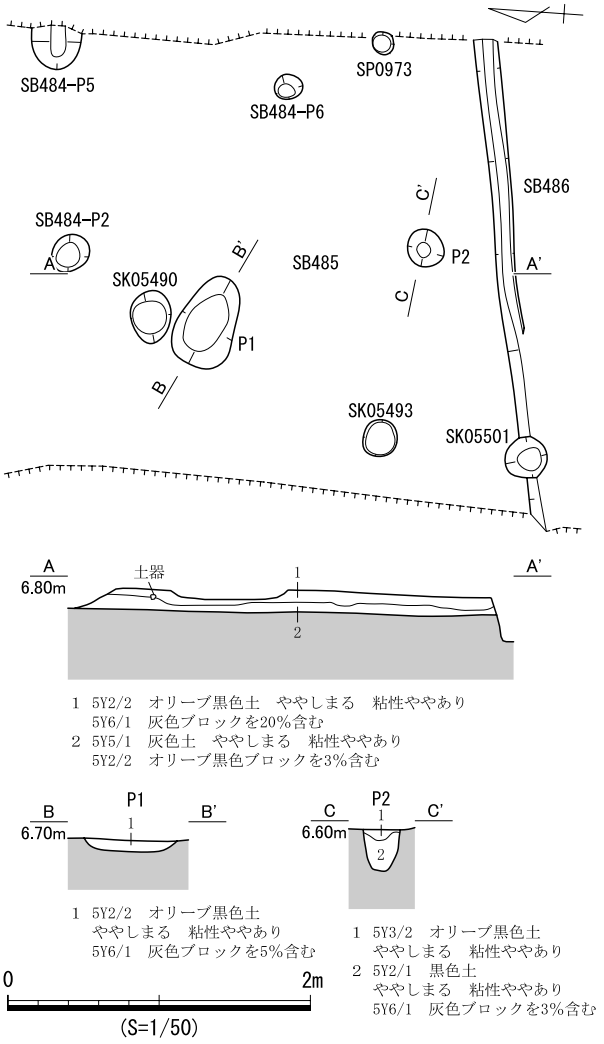


図 1768　SB485 遺構図

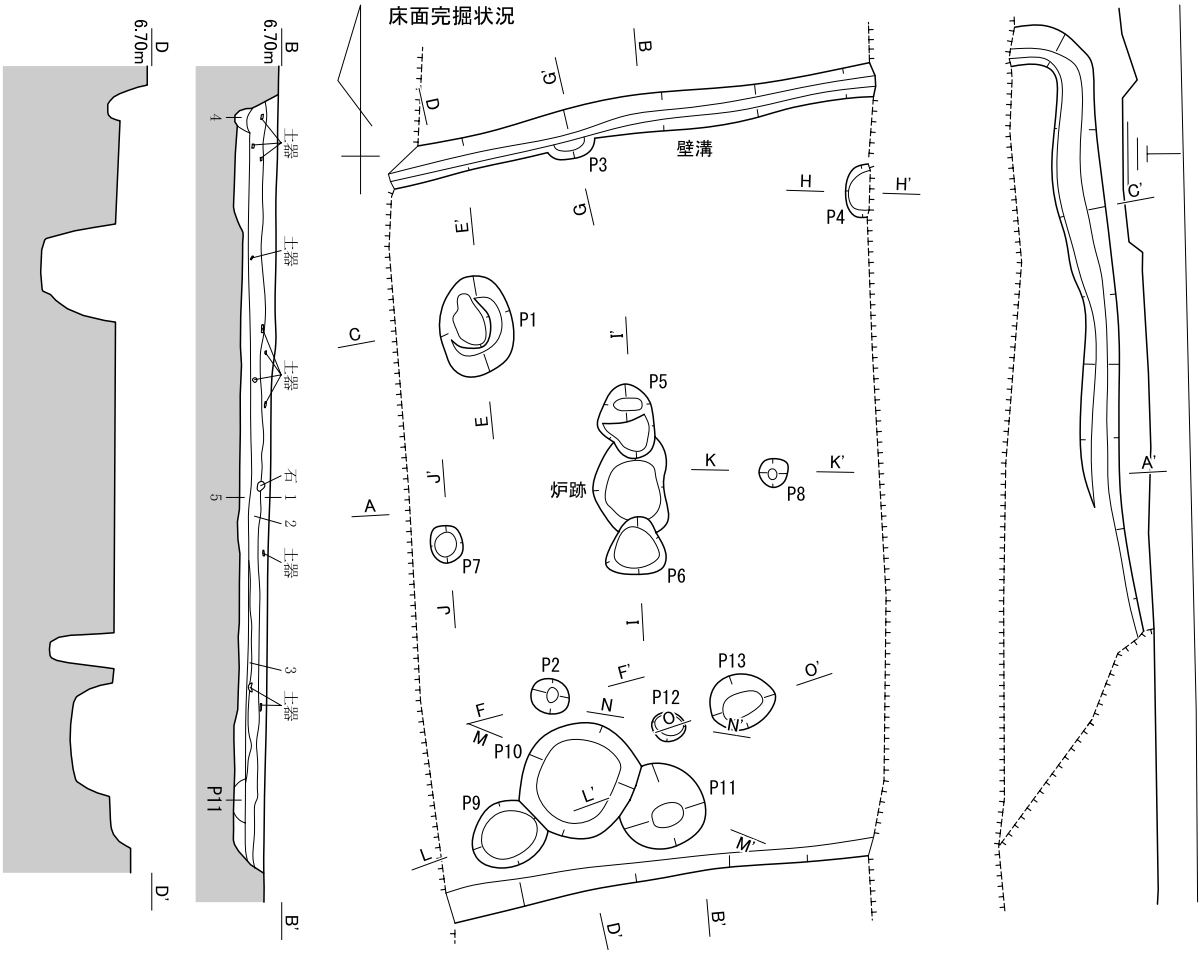
SB486（遺構：図 1769～1771、遺物：図 1772）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。中央と西側、南東隅は撹乱により失われ、北側でSB485を切る。本遺構の平面形は明瞭であった。

形状　南北長約5.1ｍで、隅丸方形を呈する。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。１～３層が覆土、５層が掘形埋土である。覆土はほぼ水平堆積であり、床面直上に堆積している３層のみブロック土を多く含む。

床面　平坦で貼床（整地土）がある。住居の中央付近で炉跡を確認した面を床面と判断したが、硬化



1 5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む(柱痕跡)
3 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり(柱痕跡)
4 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
(掘形埋戻土)
5 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを20%含む
(掘形埋戻土)

1 10YR3/1 黒褐色土 しまる 粘性ややあり 1辺5cm以下の土器片1%含む
2 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 1辺5cm以下の土器片2%含む 径5cm以下の亜鉛礫1%含む
3 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y4/1 灰色土ブロック40%含む
4 2.5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y6/1 灰色土ブロックを3%含む
5 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y6/1 灰色ブロックを20%含む

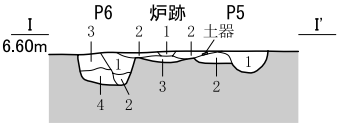
1 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む

1 5Y2/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む

1 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y2/1 黒色ブロックを5%含む

0 2m
(S=1/50)

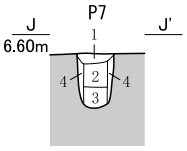
図 1769　SB486 遺構図（１）



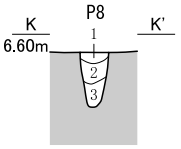
P6
1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む
3 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを40%含む
4 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを3%含む

SF1
1 10YR6/6 明黄褐色土
ややしまる 粘性ややあり 焼土
2 2.5Y3/2 黒褐色土
ややしまる 粘性ややあり 焼土粒を含む
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
3 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり

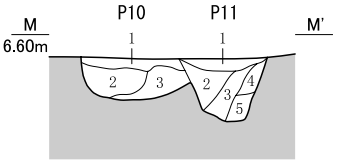
P5
1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり



1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む(柱痕跡)
3 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり(柱痕跡)
4 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y2/2 オリーブ黒色ブロックを20%含む（掘形埋戻土)

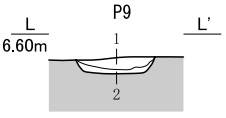


1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
3 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む

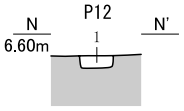


P10
1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
3 5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを20%含む

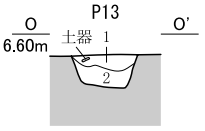
P11
1 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
3 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを40%含む
4 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを5%含む
5 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y2/2 オリーブ黒色ブロックを3%含む



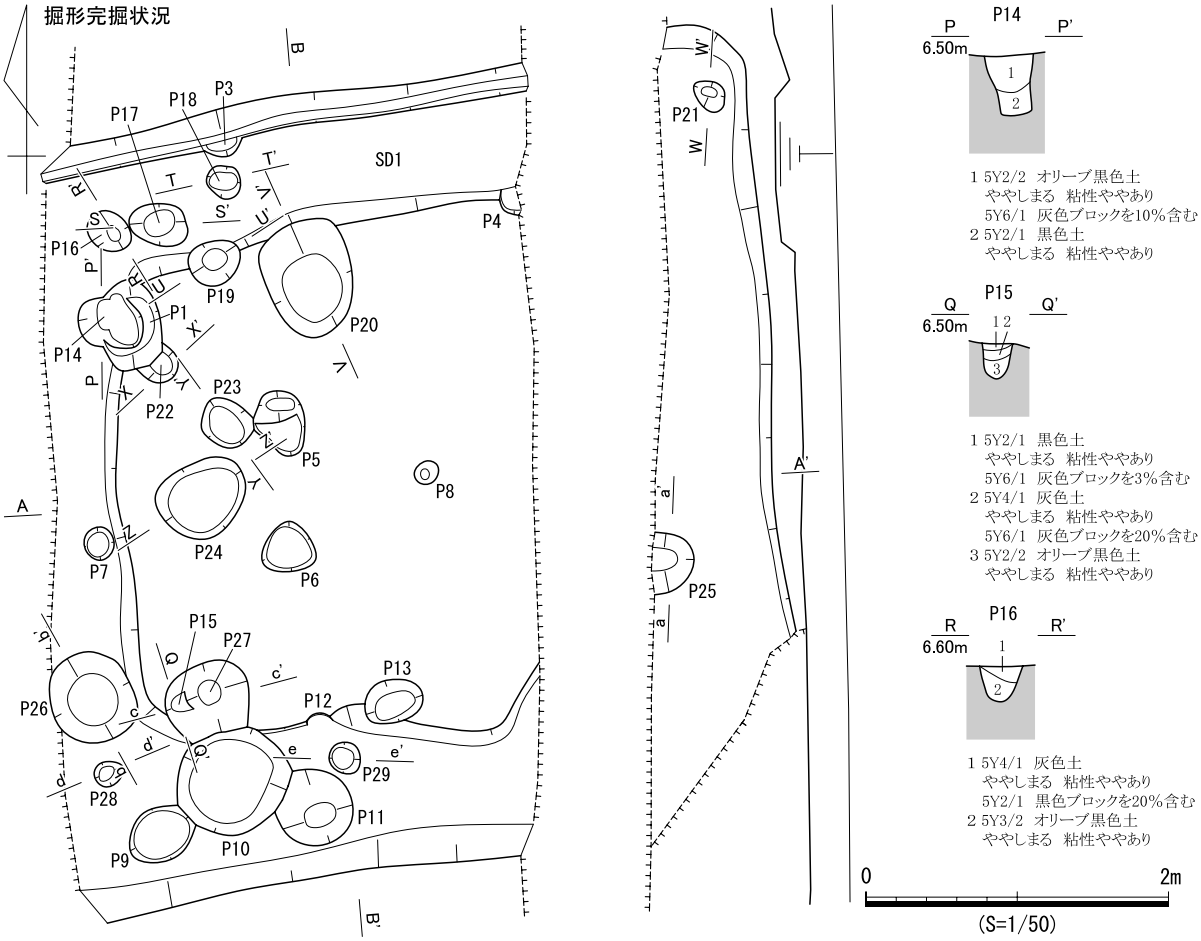
1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1 オリーブ黒色ブロックを3%含む



1 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む



1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを5%含む
2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり



1 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを10%含む
2 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり

1 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む
2 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを20%含む
3 5Y2/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり

1 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y2/1 黒色ブロックを20%含む
2 5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり

図 1770　SB486 遺構図（２）

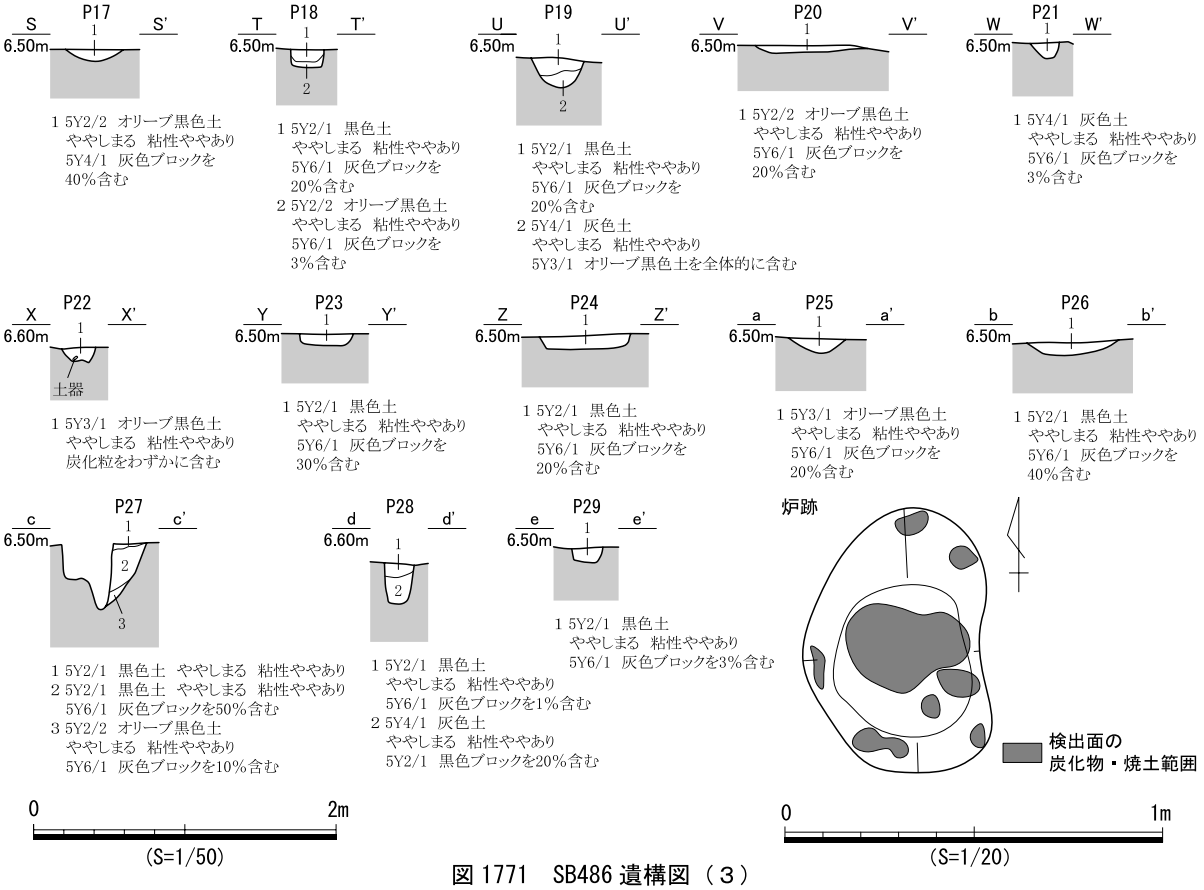


図 1771　SB486 遺構図（３）

面は確認できず、ブロック土を含む整地土が全面に広がっていた。床面では炉跡１基、小穴13基を検出した。炉跡は南北に長い楕円形を呈し、検出面において中央付近に長さ約30㎝の範囲で焼土がまとまって出土した。その周辺には焼土粒と炭化物、灰色ブロック土などが広がっていた。焼土の厚さは約１㎝であり、それを掘削すると黒色土が残り、最終的には中央部分が浅い凹みとなった。また、炉跡の南北両側では２基の小穴（P5、P6）を検出し、南側のP6は掘形が深く壁面の傾斜も急であるが、北側のP5は浅くて底面が丸い形状であった。調査中は、これらの２基の小穴が炉跡に伴う可能性を考えていたが、埋土中に炭化物や焼土粒、灰層などは確認できなかった。小穴13基のうち、P1とP7は土層断面で柱痕跡を確認した。また、P2とP8は掘形が深くほぼ垂直に掘り込まれており、P2は住居の貼床を除去すると下から掘形（P27）を検出したため、柱部分のみをP2として認識したことになる。これらのことから、本遺構の柱穴はP1とP2であったと考えられる。また、南壁沿いではP9～P11というやや大きな穴を検出し、いずれもブロック土が含まれていた。なお、壁溝は北壁と東壁沿いは明確に確認できたものの、南壁沿いには確認できなかった。

掘形　埋土は単層であり、ブロック土を多く含む土である。それを掘削すると基盤層であるⅤ層が見え、住居周縁のみ溝状に幅広く黒色土が残った（SD1）。掘形底面では小穴を16基検出し、そのうち、P17、P26、P27の３基はSD1掘削後に検出した。また、P14、P15、P28は掘形が深く、ほぼ垂直に掘り込まれている。SD1埋土上面で多数の掘り込みを確認できたことから、本遺構はSD1埋没後に一時期竪穴住居跡としての機能があり、さらに床面を整地するなどの改築を行った可能性が指摘できる。

遺物出土状況　埋土中から土器5,780点、石器類４点、壁溝から土器55点、炉跡から土器７点、床面

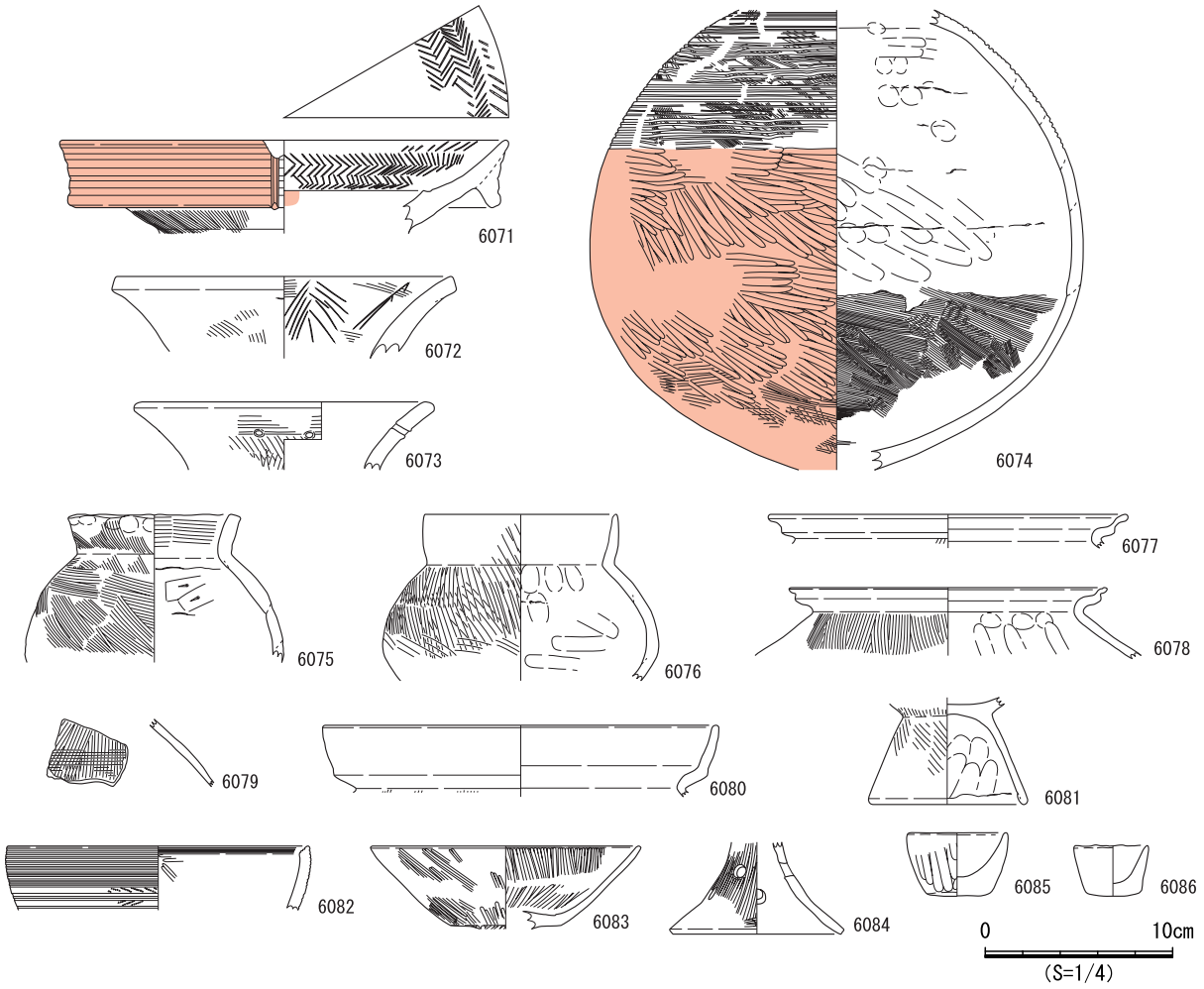


図 1772　SB486 遺物実測図

上の小穴から土器 203 点、掘形底面の小穴から土器 53 点が出土し、掘形周縁の溝状遺構（SD1）からは遺物が出土しなかった。埋土中からは遺物が散在して出土し、床面に近いほど大きな土器片が出土した。床面上の小穴では P1 と P10 から遺物の出土が目立ち、掘形底面の小穴からはいずれも 10 点以下しか遺物が出土しなかった。出土土器の時期はⅤ期～Ⅸ期に属し、そのうちⅦ期～Ⅷ期の遺物が多く、他の時期の遺物は混入と考えられる。

出土遺物　6071 はⅦ期壺 A5 類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部下端を大きく拡張する。口縁部内面には羽状文を施文し、直下に段を設ける。端部外面には擬凹線を施文し、赤彩、棒状浮文が認められる。6072 はⅦ期壺 B2a 類。口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面を持つ。口縁部内面には先の細い工具による線刻が認められ、山形が幾重にも重なる形が複数描かれる。6073 はⅧ期～Ⅸ期壺。大きく外反する口縁部に２箇所の穿孔が認められ、焼成前に形成されたものである。6074 はⅦ期～Ⅷ期壺。胴部上半にはハケ調整の後に直線文を施文する。文様に歪みが見られたり施文時の押圧が一定でなかったりして、やや粗雑な印象を受ける。最大径以下にはハケ調整後にミガキを施し、全体に赤彩が認められる。6075、6076 はⅦ期甕 E3 類。ともに口縁部が短く外反する。6075 はナデによって端部に平坦面を形成し、一部で粘土が外方にはみ出す。6076 は器面に粗いハケ調整を施す。6077 はⅦ期甕 D2b 類。口縁部が短く明確に屈曲し、上方がわずかに引き出される。6078 はⅧ期甕 D

類。口縁部下段が大きく外に引き出され、上段が短く外反する。6079はⅧ期甕Ｄ類。胴部にヨコハケが認められる。6080はⅧ期～Ⅸ期甕。いわゆる有段口縁甕で、屈曲した口縁部が段をもって内湾気味に立ち上がる。形状は北陸系に類似するが、胎土は甕Ｄ類と共通する。6081はⅧ期～Ⅸ期甕Ｄ類。器壁の薄い脚部がハの字状に開く。6082はⅦ期高坏G3c類。口縁部外面に多条沈線を施文し、その間にクシによる刺突文を加える。端部には内傾面を形成し、沈線が認められる。6083はⅦ期～Ⅷ期高坏。坏底部は小さくなり、口縁部が大きく開く。坏底部にはわずかに段が認められる。6084は高坏脚部が円錐状に開き、裾部がわずかに内湾気味となる。透孔を千鳥状に配置する。6083と同一個体の脚部と考えられる。6085、6086はⅥ期～Ⅶ期手捏ねＣ類。6086は小型で、ともにユビナデ痕が明瞭に残る。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

SB487（遺構：図1773・1774、遺物：図1775）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は撹乱により失われ、南側でSB488、SB489を切る。また、埋土上面でSH024を検出し、検出面は若干硬化していた。なお、平面形は北辺、南辺ともに明瞭である。

形状　南北長約6.1ｍであり、北辺と南辺が平行することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　３層に分層した。各層ともにブロック土を含み、層界の凹凸も顕著であることから、人為堆積と考えられる。また、後述するようにP5がSH024の掘形とするならば、本遺構の廃棄後、比較的短期間のうちにSH024が構築され、本遺構はその整地のために埋没した可能性がある。なお、住居の中央付近から南西側にかけては、埋土中に部分的に炭化物層を確認できた。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では方形周溝墓の埋土を検出しており、その埋土と本遺構に伴う埋土の識別が困難であった。床面では小穴７基を検出した。このうち、P3とP6は掘形が深く、P3では東側に傾斜した加工材を検出した。しかし、この加工材に伴う掘形は確認できず、P3の埋土は中央が窪む堆積であった。なお、P5はSH024を構成する柱穴（SH024-P6）が掘形の中央に位置し、P5の埋土は上下層ともにブロック土を含むことから、SH024-P6の掘形の可能性もある。また、P2とP4は長さ約１ｍの隅丸方形状の穴であり、検出時の埋土が類似していた。いずれもブロック土を多く含むことから人為堆積と考えられ、P2の上層には焼土粒を確認した。これらの遺構の平面形は、住居床面で検出した方形周溝墓SZ179の埋土中に収まっていることから、本遺構に伴うものではなく、方形周溝墓の周溝の窪地を利用した土坑かもしれない。

遺物出土状況　埋土中から土器1,994点、石器類２点、小穴から土器230点、木製品１点が出土した。出土遺物の大半は小片で、時期が判別できたものはⅦ期に属する破片が多い。P3からは加工材が斜位で出土した。

出土遺物　6087はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が短く屈曲し、端部が内湾して立ち上がる。内面には凹面を作り出すためのナデの痕跡が残る。外面は端部直下に刺突が認められ、全面に煤が付着する。6088はⅦ期甕A3類。直立気味の頸部から口縁部が弱く屈曲し、端部を丸くおさめる。また、端部には刺突が加えられている。6089はⅦ期高坏D4類。内傾する端部と内面に多条沈線を施文する。内面の

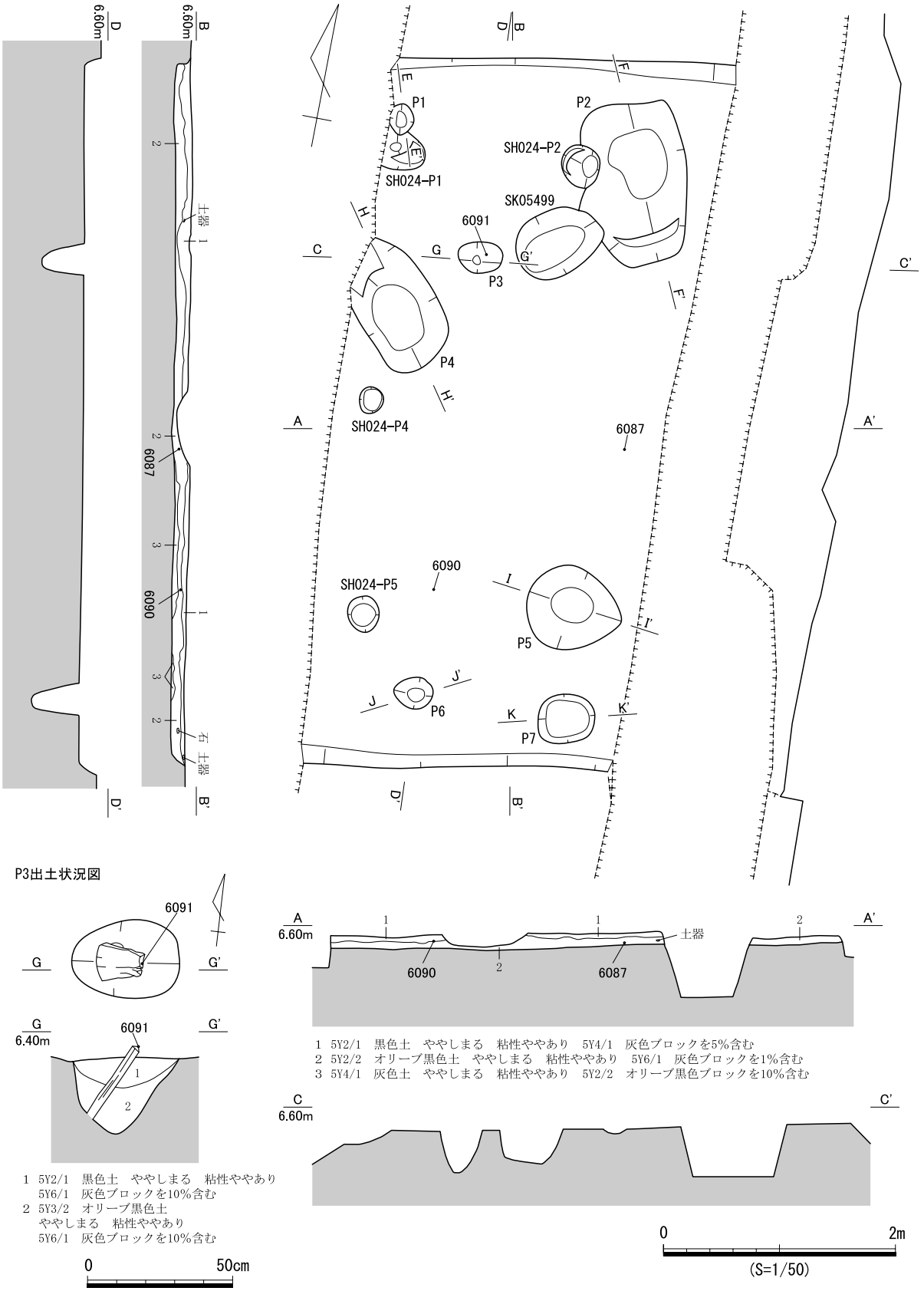


図 1773　SB487 遺構図（１）

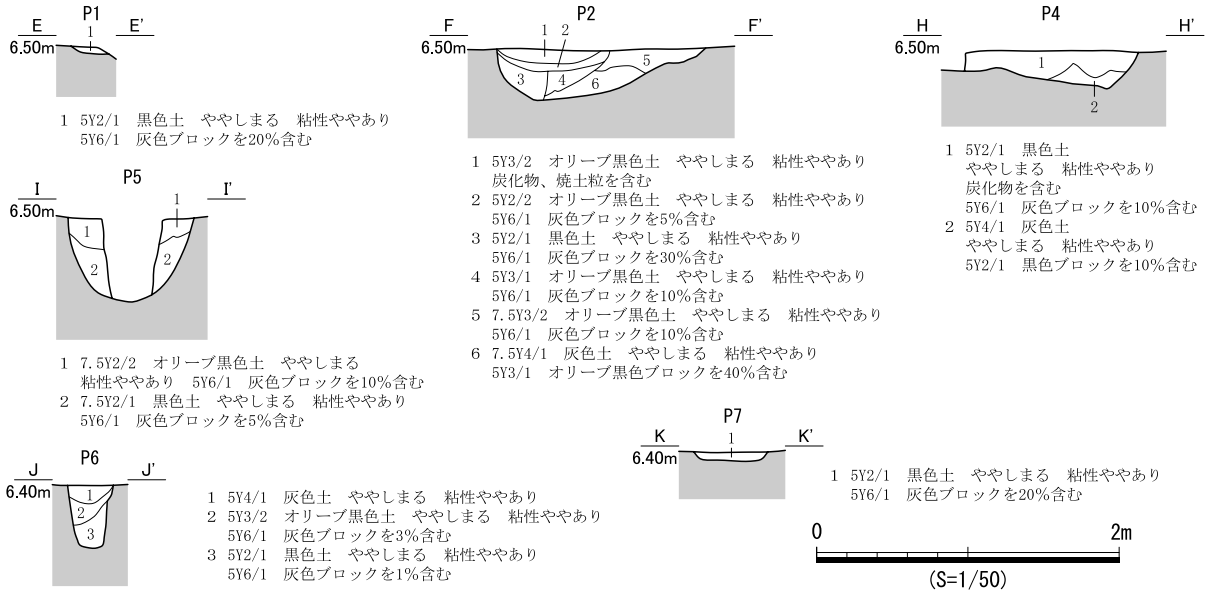


図 1774　SB487 遺構図（２）

多条沈線間には３帯の山形文を施文する。6090はⅣ期高坏脚部。脚部がなだらかに円錐状に開き、端部の接地する面は平坦面を形成する。器壁が厚く、現状では透孔は認められない。内面にはケズリ調整が認められる。外面には細かいミガキが施されるが、全体的にやや歪んでいる。6091はその他の加工材。実測図の上端を下にして出土した。分割材で、断面形は直角三角形から台形状を呈し、上端は粗い加工がなされ、三角形状に尖る。

時期　Ⅶ期～Ⅸ期のSH024に切られ、Ⅶ期のSB489を切ることと、出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

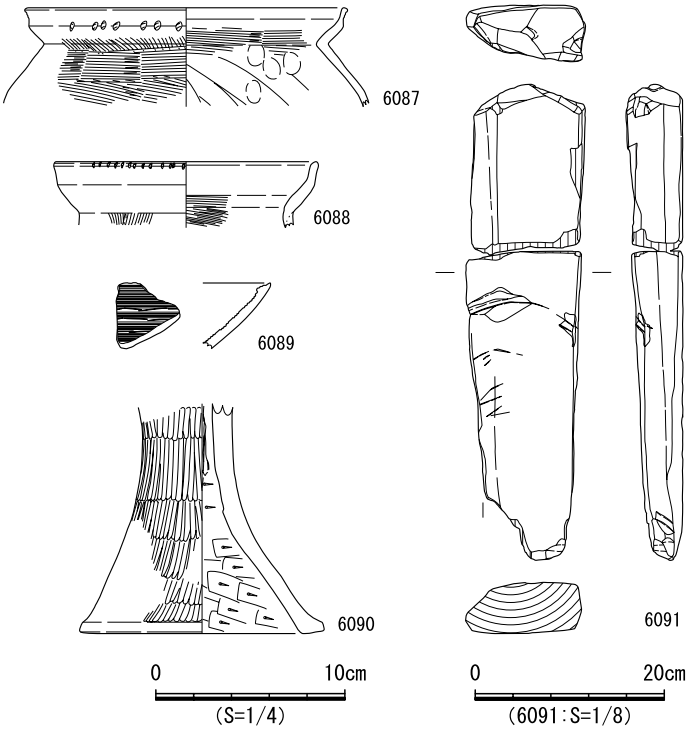


図 1775　SB487 遺物実測図

SB488（遺構：図 1776、遺物：図 1777）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、北側をSB487に、東側をSB489に切られる。本遺構付近は遺構の重複が著しく、本遺構の検出は困難であった。

形状　遺構の南辺しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　３層に分層した。上層は炭化物を含む。埋土中にブロック土が多く含まれていることから、人為堆積と考えられる。

床面　本遺構直下に方形周溝墓の周溝が巡っており、床面の認定も難しかった。床面は平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴を３基検出し、いずれも平面形は明瞭に確認できたが、掘形は浅く単層であり、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器1,274点、石器類４点、小穴から土器２点が出土した。出土土器の多くはⅤ期～Ⅶ期のものであるが、他の竪穴住居跡と比較するとⅤ期のものがやや目立つ。Ⅳ期の遺物は混入の可能性が高い。

出土遺物　6092はⅤ期～Ⅵ期壺Ｋ類。口縁部径10㎝弱の小型品である。直立気味の頸部から口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。内外面ともに丁寧なミガキ調整を施し、精緻品といえる。口縁部内面には、端部際と屈曲部側にそれぞれ直線文帯を配置し、その間にヘラで文様を加える。斜格子状、弧状、鋸歯状などの文様が混在し、規則的な施文ではない可能性がある。器形そのものの丁寧な作りとは対照的に、施文に関しては雑である。端部には細かな刺突を加える。6093は

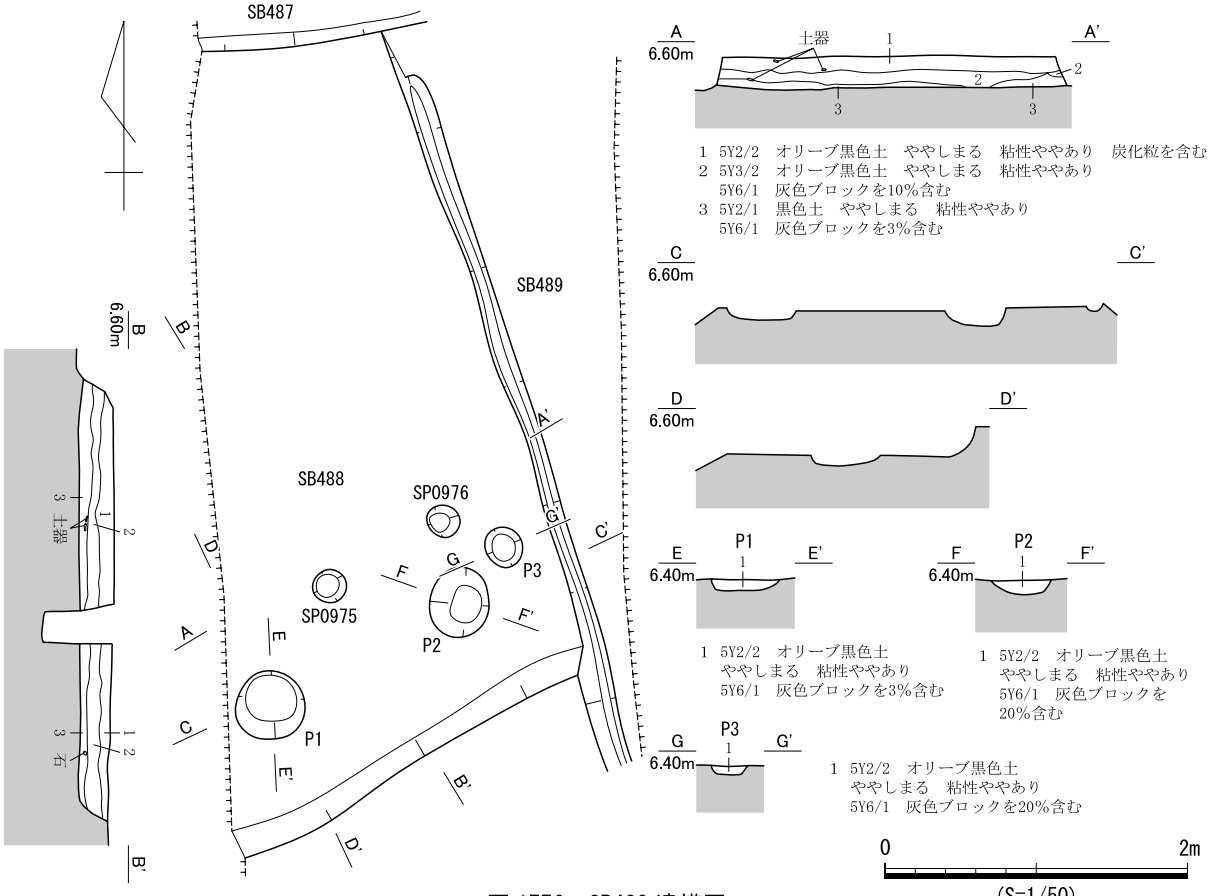


図 1776　SB488 遺構図

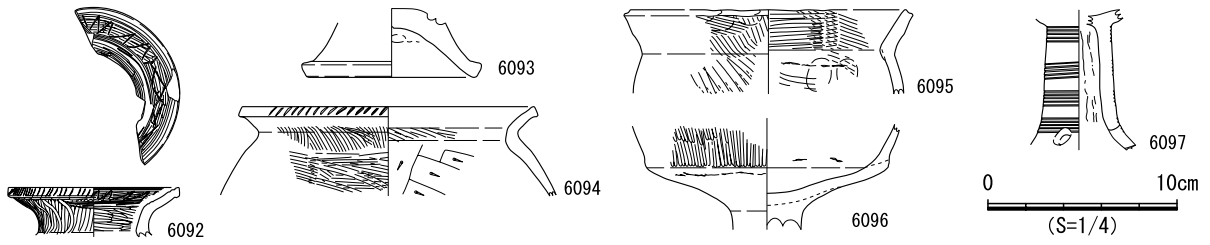


図 1777　SB488 遺物実測図

Ⅴ期壺。台付壺の脚部片で、裾部が強く外反し、端部には顕著な平坦面をもつ。6094はⅤ期甕B1b類。口縁部が短く外反し、端部に平坦面をもつ。端部には刺突を加える。内面にはケズリを施し、堅緻な作りの資料である。屈曲部にのみ煤が付着する。6095はⅦ期甕B2類。口縁部が短く屈曲し、端部は平坦となる。6096はⅤ期高坏A2類。坏部は浅い皿状となり、口縁部が短く直立する。6097はⅤ期高坏B2類。付根から透孔までは円柱状で、直線文帯を等間隔に４箇所に配する。透孔を３方向に配置し、透孔以下は外反する。

時期　Ⅶ期のSB487に切られるが、出土遺物の時期からⅤ期～Ⅶ期と考えられる。

SB489（**遺構：図1778、遺物：図1779**）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、東側は撹乱により失われている。北側はSB487に切られ、西側でSB488を切る。本遺構付近は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。撹乱壁面を精査して平面形の確定に努めたが、誤認している可能性もある。

形状　遺構の西辺しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。ブロック土が混入し層界の凹凸が顕著であることから、人為堆積と考えられる。

床面　床面の認定も困難であったが、壁沿いに色調の濃い黒色土を帯状に検出したため、壁溝と判断

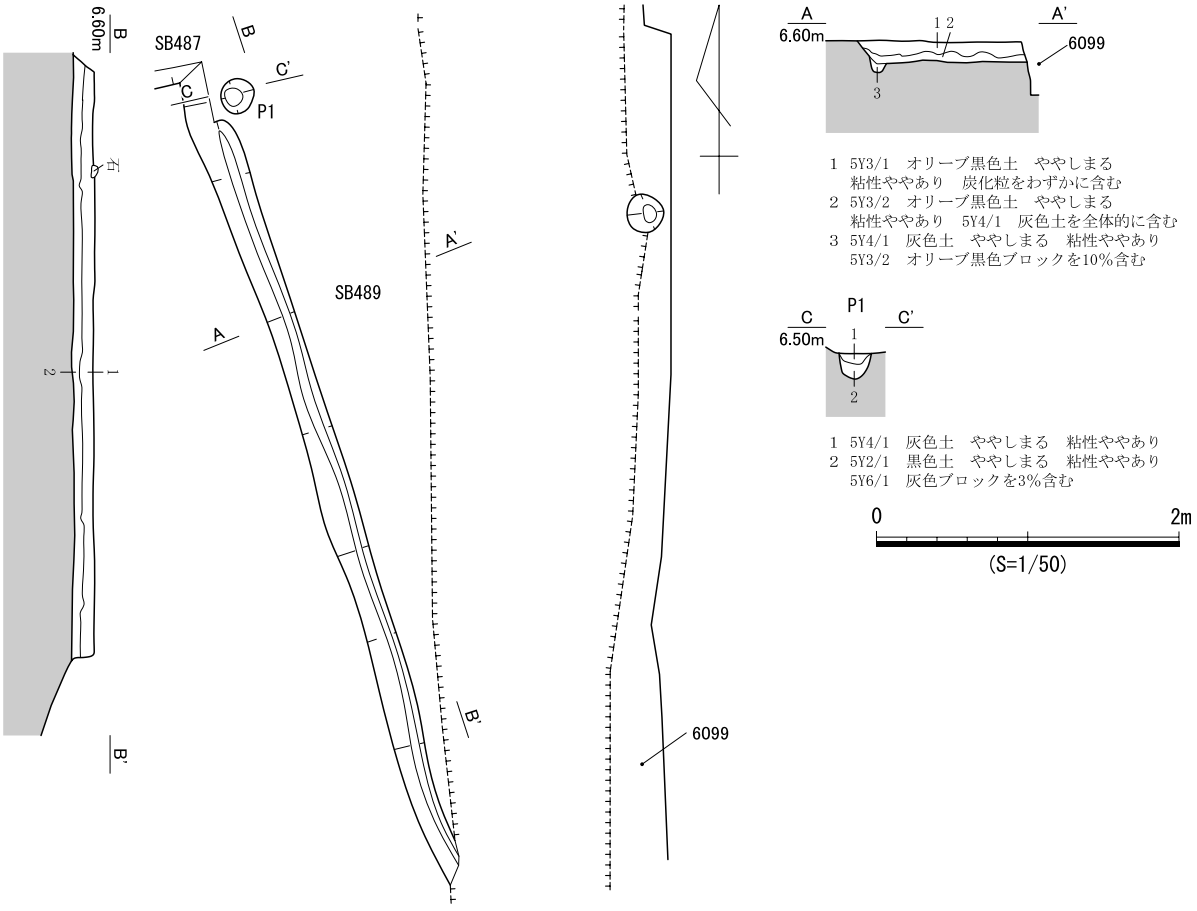


図1778　SB489遺構図

した。床面は平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。なお、床面では掘形の浅い小穴を１基検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器172点、壁溝から土器３点が出土した。住居の南側にて粘土塊とやや残りの良い土器片が出土した。出土土器はⅦ期のものが多く、Ⅰ期とⅣ期の土器片がわずかに出土したが、いずれも混入と考えられる。

出土遺物　6098はⅠ期壺。沈線文系の壺の可能性がある。6099はⅦ期高坏H2類。坏部は碗状を呈し、内外面ともにミガキ調整を施す。外面端部直下には多条沈線を施文する。

時期　Ⅶ期のSB487に切られるが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

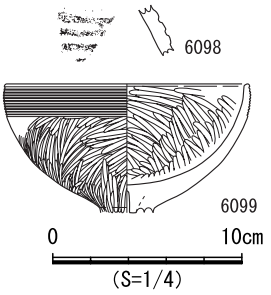


図 1779　SB489 遺物実測図

SB490（**遺構：図 1780、遺物：図 1781**）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、東側は撹乱により失われている。南側でSB491を切り、埋土上面でSH025を検出した。

形状　西辺と南辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。炭化粒とブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて１基の小穴とやや幅広の壁溝を検出した。小穴は浅く、壁溝は西壁中央付近で途切れている。

遺物出土状況　埋土中から土器64点、壁溝から土器43点、小穴から土器５点が出土した。埋土からの出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多いが、いずれも細片である。

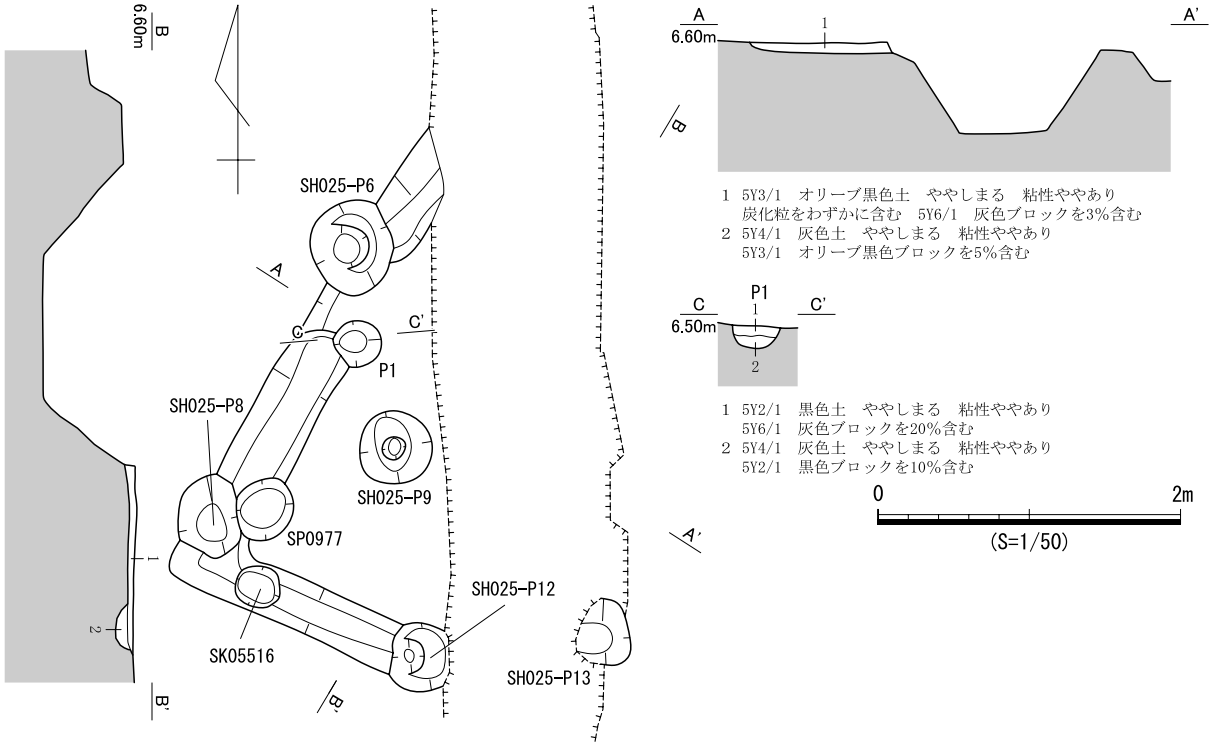


図 1780　SB490 遺構図

出土遺物　6100はⅦ期甕C2類。口縁部がくの字に屈曲し、やや内湾する。端部は平坦である。

時期　Ⅶ期のSB491を切るが、出土遺物の時期からⅦ期以降と考えられる。

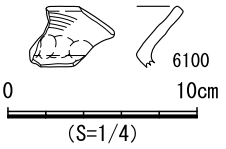


図1781　SB490遺物実測図

SB491（遺構：図1782、遺物：図1783）

検出状況　東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は撹乱により失われ、北東側をSB490に、南東側をSB492に切られている。本遺構周辺の遺構検出面の埋土は、全体的にⅤ層に灰色土が混入する土であり、平面形の確定が困難であった。

形状　遺構の北辺と南辺のわずかな範囲しか検出できていないが、両辺はほぼ平行することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　単層であり、ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　やや凹凸があり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面はブロック土を含む土で形成されており、南西側はそれを住居埋土と誤認して掘り過ぎてしまった。なお、この床面構成土は本遺構周辺に広く展開しており、SK05579として掘削した。つまり、SK05579の埋土は人為堆積であり、かつSB491の床面を構成する土であるといえる。床面では２基の小穴を検出したが、いずれ

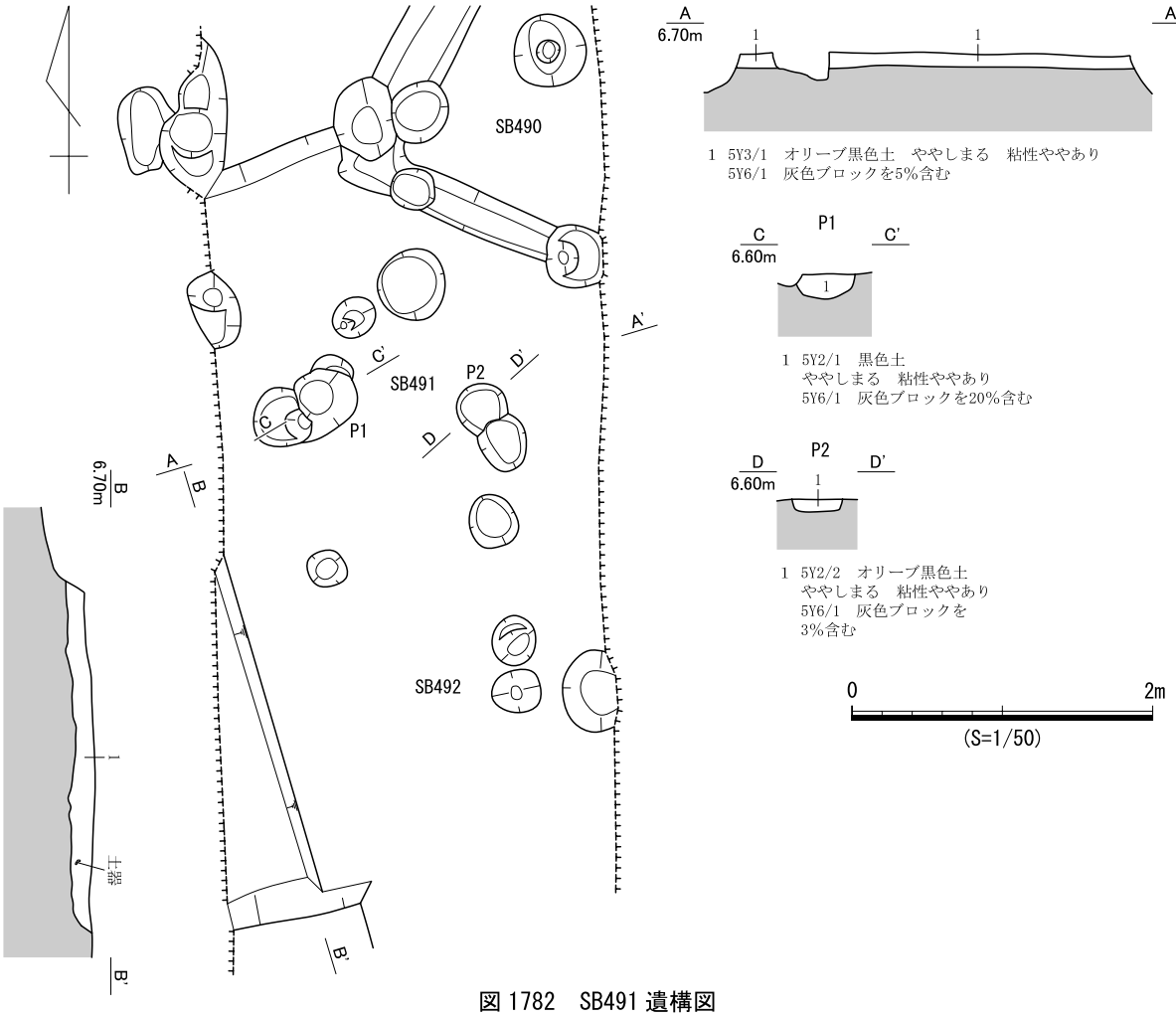


図1782　SB491遺構図

も掘形が浅く、単層である。

遺物出土状況　埋土中から土器266点、小穴から土器17点が出土した。埋土中の出土土器はⅦ期の遺物が多い。

出土遺物　6101、6102はⅦ期甕B3類。6101は内外面ともにナデ調整を施し、同様にナデによって凹凸のある平坦面を形成する。6102は口縁部がくの字に屈曲し、内外面ともに粗いハケ目が認められる。端部には平坦面を形成し、下端にはユビナデ痕が残る。6103はⅦ期鉢Ｂ類。口縁部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。6104はⅦ期高坏D3類。口縁部内面及び端部平坦面に多条沈線を施す。

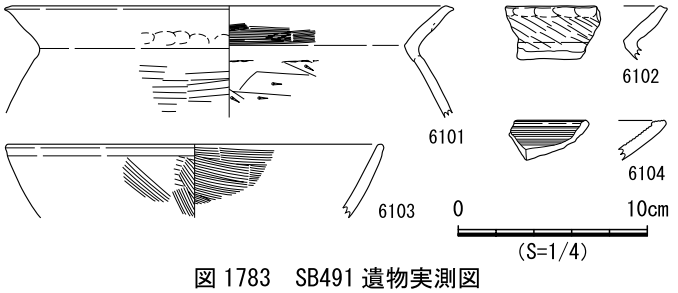


図 1783　SB491 遺物実測図

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

SB492（**遺構**：図 1784・1785、**遺物**：図 1786）

検出状況　東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置する。中央を撹乱により失われ、北側でSB491を切る。平面形は比較的明瞭であった。

形状　南北長約5.3ｍであり、柱穴配置から南北に長い長方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は西側がやや緩やかで、南北側が急である。

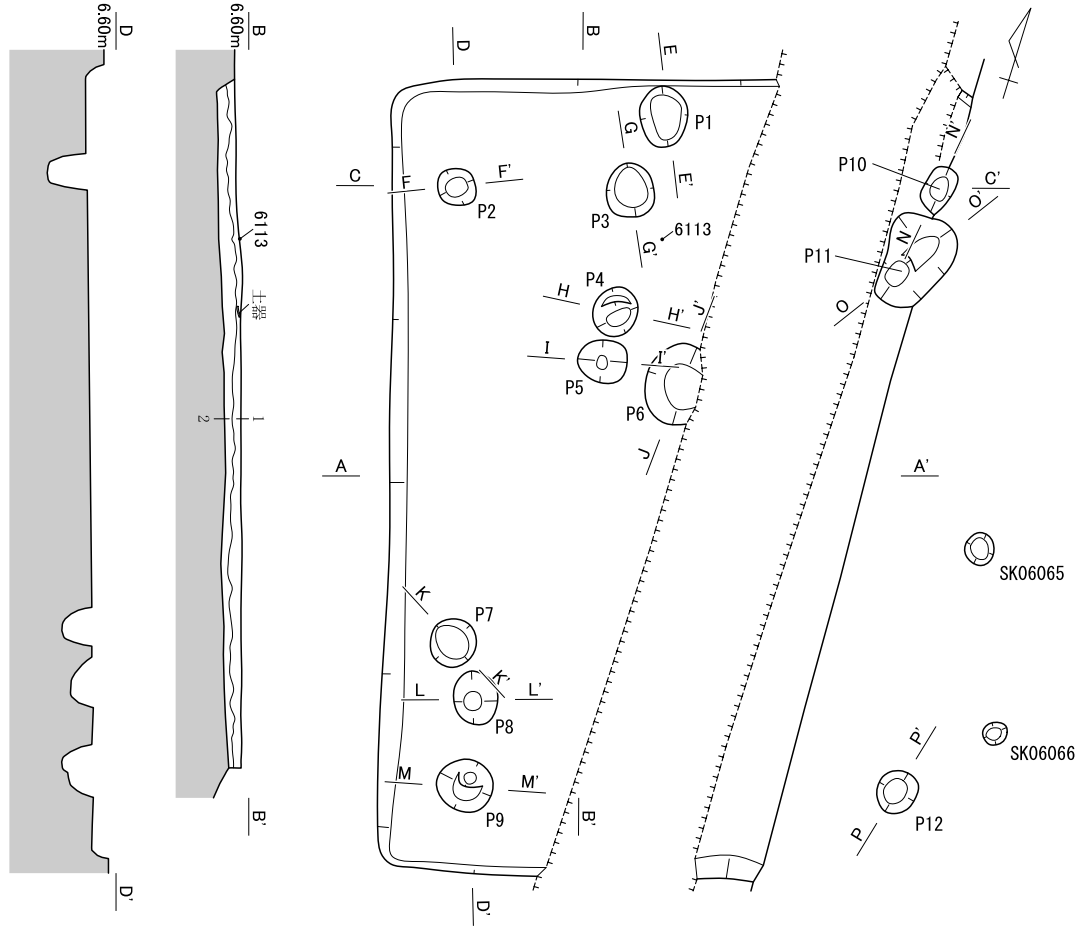
埋土　２層に分層した。層界の凹凸が顕著で、埋土中に炭化物やブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

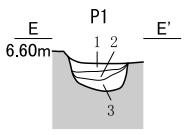
床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて12基の小穴を検出し、P4、P5、P11は土層断面で柱痕跡を確認した。また、P2は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。平面的な位置関係からP2、P9、P10、P12が柱穴と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器1,321点、石器類１点、小穴から土器106点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅣ期の土器片が混入している。なお、P7からⅦ期甕Ｄ類（6110）、P9からⅥ期～Ⅶ期甕Ａ類（6108）が出土した。

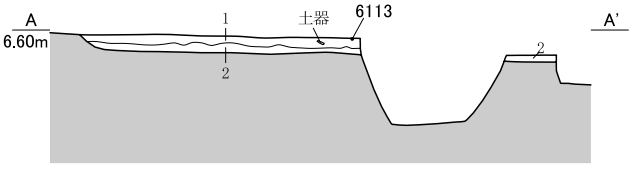
出土遺物　6105はⅣ期壺A1類。口縁部が屈曲して内傾し、１条の凹線が認められる。6106はⅣ期壺Ｈ類。斜格子文を施文した上に沈線が２条認められる。黒褐色を呈する胎土が特徴的である。6107はⅥ期～Ⅶ期甕脚部。脚部は完存し、やや内湾する。端部は接地面に対して平坦になるように形成され、粘土の一部が内側にはみ出している。6108はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部がくの字に屈曲し、端部はやや内湾して直立気味に立つ。6109はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈曲し、内面には粗いハケ目が認められる。外面及び端部平坦面は断続的なナデによって形成される。6110はⅦ期甕D2b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く外反する。6111はⅧ期甕D3類。口縁部が大きく外方に拡張され、端部も強く外反して開く。6112はⅦ期高坏C4d類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面には多条沈線を施文し、沈線間に山形文を２帯加える。6113は砥石。扁平な亜円礫の平坦面を砥面として利用し、割れた面に煤が付着している。

時期　出土遺物の時期はⅥ期～Ⅶ期であるが、Ⅶ期のSB491を切ることからⅦ期と考えられる。

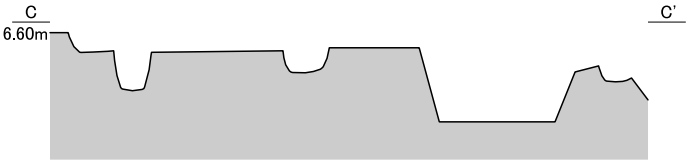


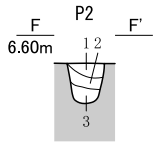


1 5Y3/2 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
炭化粒を含む
2 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
3 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
炭化粒を含む

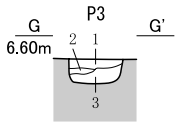


1 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1 灰色ブロックを3%含む 炭化粒をわずかに含む
2 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y6/1 灰色ブロックを20%含む

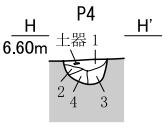




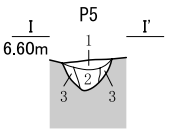
1 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
3 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり



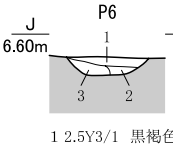
1 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1灰色ブロックを5%含む
2 5Y5/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
3 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり



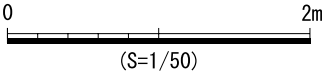
1 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
3 5Y2/1 黒色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y6/1灰色ブロックを10%含む
(柱痕跡)
4 5Y6/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
5Y3/1オリーブ黒色ブロックを
5%含む(掘形埋戻土)



1 5Y4/1 灰色土
ややしまる 粘性ややあり
2 5Y3/1 オリーブ黒色土
ややしまる 粘性ややあり
(柱痕跡)
3 5Y5/1 灰色土
ややしまる
粘性ややあり
5Y3/1オリーブ黒色
ブロックを20%含む
(掘形埋戻土)



1 2.5Y3/1 黒褐色土
ややしまる
粘性ややあり
2 2.5Y2/1 黒色土
ややしまる
粘性ややあり
2.5Y6/1 黄灰色
ブロックを1%含む
3 2.5Y5/1 黄灰色土
ややしまる
粘性ややあり
2.5Y2/1 黒色
ブロックを10%含む



(S=1/50)

図 1784　SB492 遺構図（１）

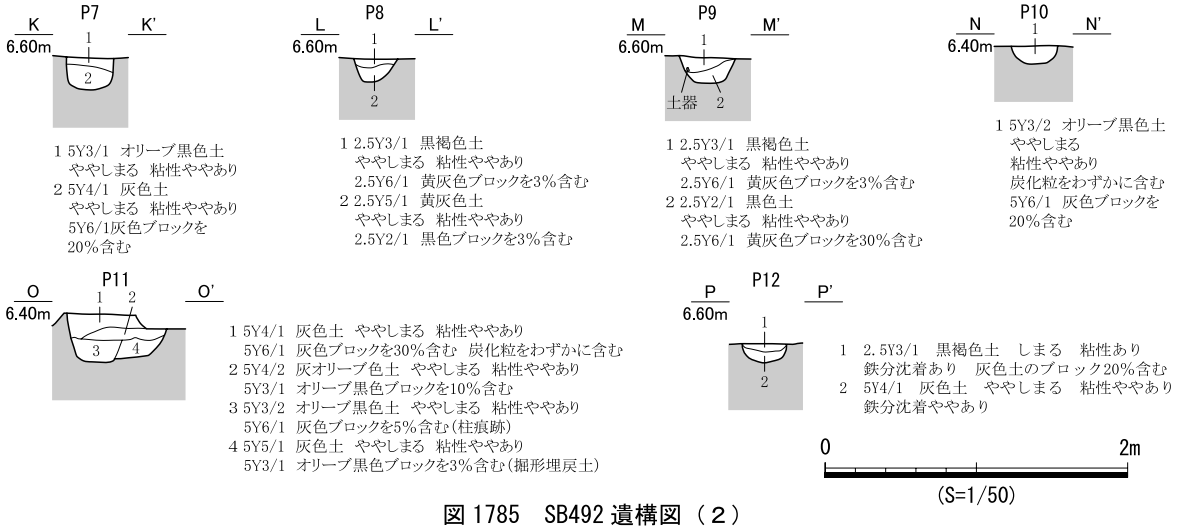


図 1785　SB492 遺構図（２）

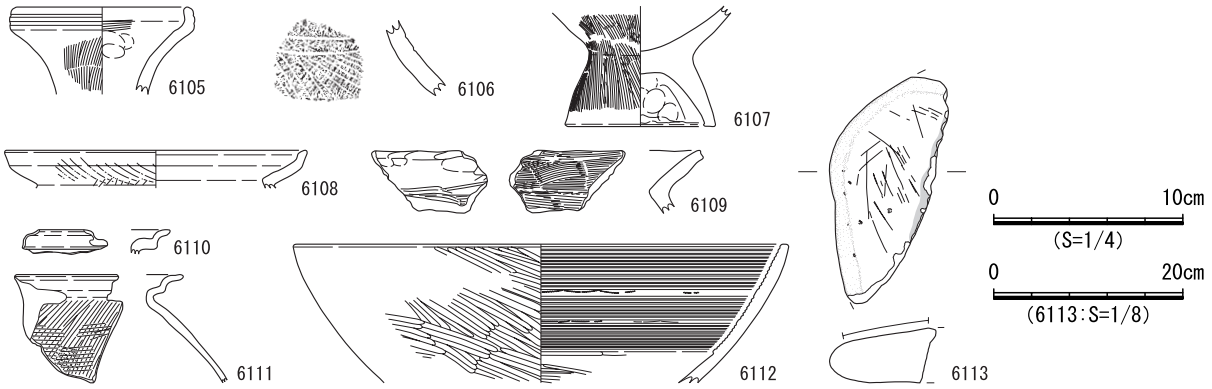


図 1786　SB492 遺物実測図

SB493（遺構：図 1787・1788、遺物：図 1789）

検出状況　東部西側南寄り竪穴住居跡密集域に位置し、遺構の大半は調査区域外へとのびている。平面形は、北西側と北東側は明瞭であったが、南東側は不明瞭であった。

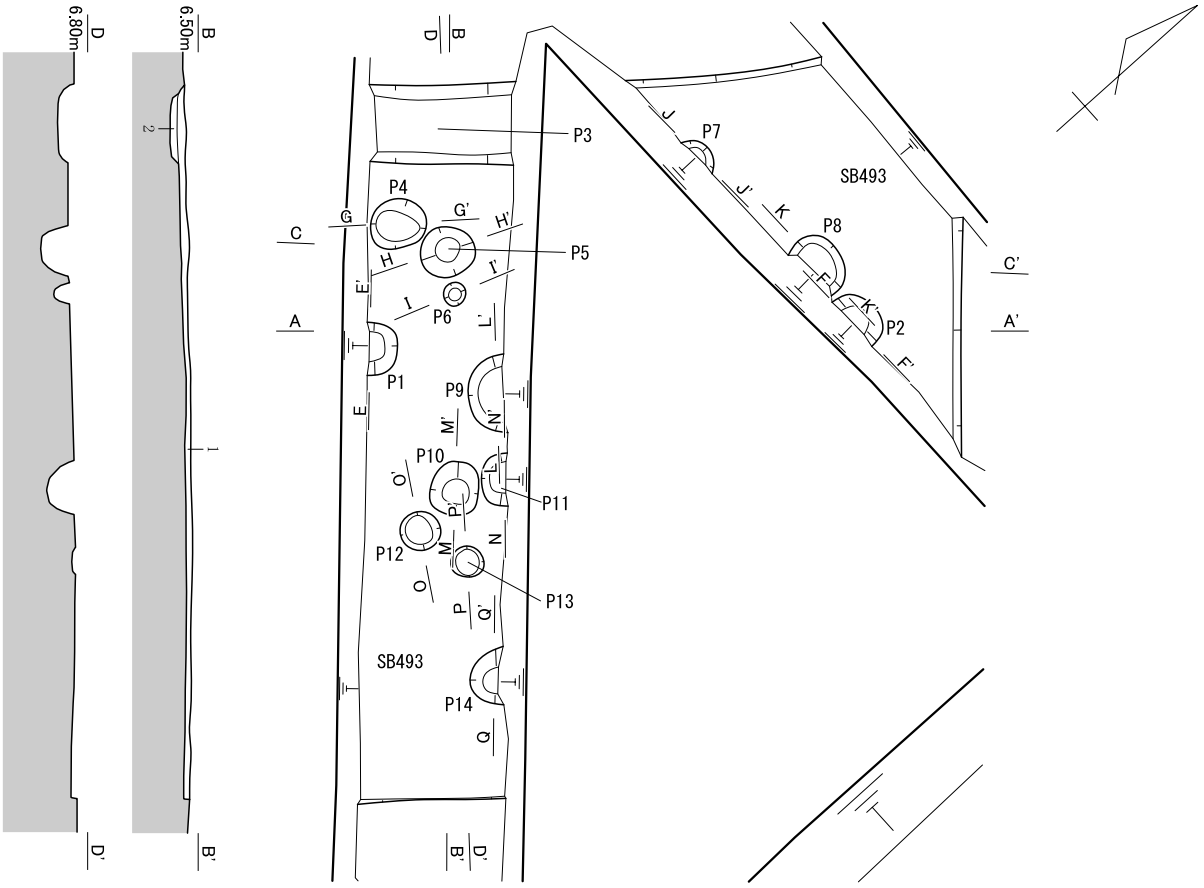
形状　北西－南東長約4.7ｍであり、方形を呈する。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

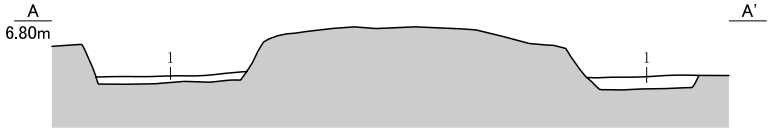
埋土　単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。住居の北側は、床面下に方形周溝墓の周溝が位置し、床面の認定が難しく若干掘りすぎてしまった。床面では小穴を14基確認し、そのうちP1のみ土層断面で柱痕跡を確認した。P1を柱穴と仮定するならば、柱痕跡は確認できていないものの位置的にP1に対応するP2も柱穴となる。なお、住居南西隅で検出したP3は平面形が明瞭であり、調査中は壁溝と考えていたが、他の壁面沿いでは確認できなかったため浅い土坑とした。

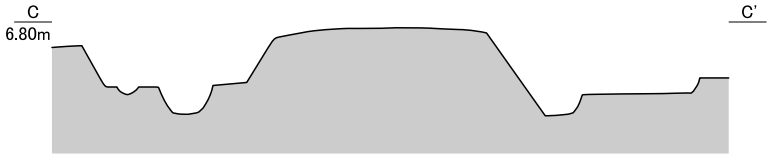
遺物出土状況　埋土中から土器404点、小穴から土器45点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

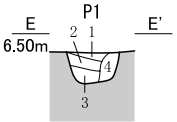
出土遺物　6114はⅥ期～Ⅶ期甕C2類。口縁部が外反し、端部付近でやや内湾する。器壁は厚く、端部には顕著な平坦面をもつ。6115はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚裾部が内湾し、外面に煤が付着する。6116はⅥ期～Ⅶ期高坏C3b類。口縁端部内面を肥厚し、その上に多条沈線を施文する。6117はⅥ期～Ⅶ期高坏C3c類。口縁部内面に多条沈線を施す。6118はⅦ期高坏の脚部。小型高坏脚部で穿孔が複数個所



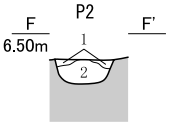


1　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり(P3埋土)

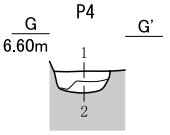




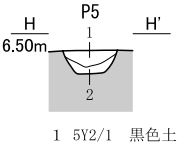
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
　(柱痕跡)
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
　(柱痕跡)
3　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを1%含む
　(柱痕跡)
4　5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
　(掘形埋戻土)



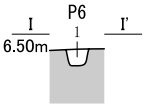
1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり



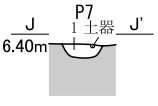
1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり



1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む



1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　10%含む



1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　3%含む

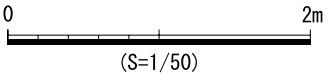


図 1787　SB493 遺構図（１）

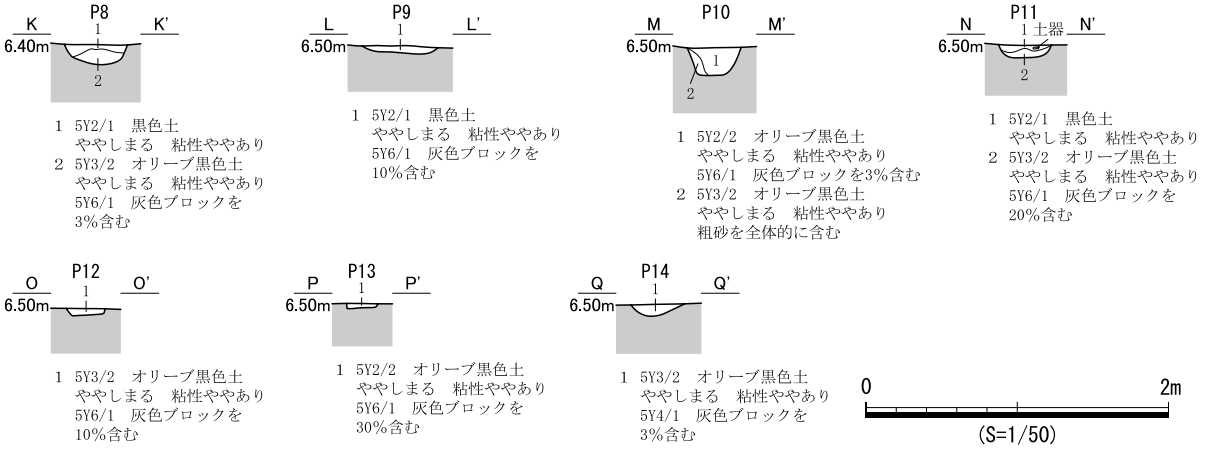


図 1788　SB493 遺構図（２）

認められる。残存部位が限られるために全容は不明だが、焼成前に形成されたと考えられる小孔が、現状では３方向、２段に確認できる。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

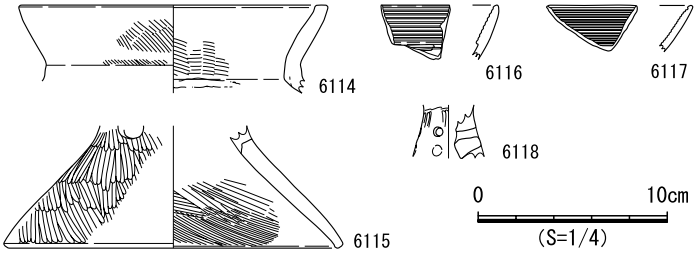


図 1789　SB493 遺物実測図

SB494（**遺構**：図 1790・1791、**遺物**：図 1792）

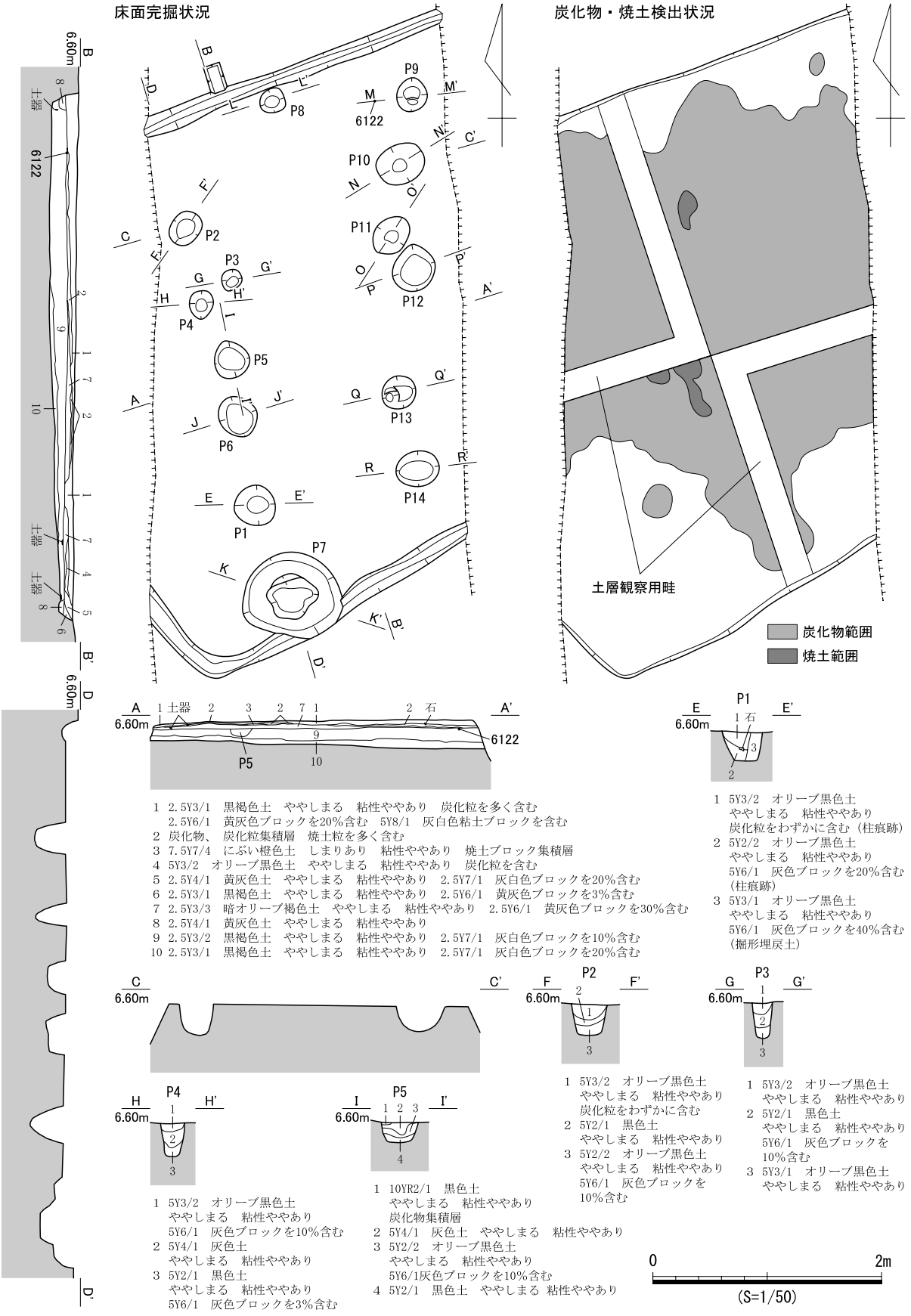
検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、東西両側を撹乱により失われている。平面形は不明瞭であったが、撹乱壁面を精査したところ、炭化物層が薄く帯状に堆積していることを確認し、その上下層の広がりを根拠に平面形を確定した。なお、検出時において、住居南側に白色粘土がブロック状に散在していた。

形状　南北長約4.5ｍである。北辺と南辺は平行せず不整方形を呈し、南西隅は鈍角気味に広がる。住居の北辺沿いの深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　９層に分層した。１～７層が覆土、９・10層が掘形埋土である。全体的にブロック土を多く含み、最上層（１層）と床面直上層（７層）が特に多い。２層は炭化物や炭化粒の集積層であり、北壁際と中央付近から南側を除いて全面に確認できた。２層にはわずかに炭化材も確認でき、焼土粒も含まれていた。炭化材は草本類が炭化したもので、その向きは不規則で編んであるようには見えなかった。その直下に焼土ブロック集積層である３層を確認し、炭化粒が含まれていた。炭化材の遺存状況は極めて悪いが、全体的に広がる炭化粒と焼土集積層の存在から、焼失家屋と判断した。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面にて小穴を14基検出し、およそ南北方向に列状に並んでいるように見える。小穴のうち、P1とP13は土層断面で柱痕跡を確認し、P1は位置的に柱穴と認定できるかもしれない。壁溝は残存している床面を全周しており、その掘形は深い。なお、P7は壁面に平坦面を有する穴であり、壁溝を切っている。炉跡は確認できなかった。

掘形　床面には明確な硬化面を確認できなかったが、床面を構成する土は灰色ブロック土を含んでいたため、整地していると判断した。貼床（整地土）は比較的厚く、ブロック土を含む。掘形底面から



A–A'
1 土器　2　3　2　7　1　2 石
9
10
P5

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化粒を多く含む
　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを20%含む　5Y8/1　灰白色粘土ブロックを含む
2　炭化物、炭化粒集積層　焼土粒を多く含む
3　7.5Y7/4　にぶい橙色土　しまりあり　粘性ややあり　焼土ブロック集積層
4　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　炭化粒を含む
5　2.5Y4/1　黄灰色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y7/1　灰白色ブロックを20%含む
6　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを3%含む
7　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを30%含む
8　2.5Y4/1　黄灰色土　ややしまる　粘性ややあり
9　2.5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y7/1　灰白色ブロックを10%含む
10　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　2.5Y7/1　灰白色ブロックを20%含む

E–E'　P1
1 石
3
2

1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む（柱痕跡）
2　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
　（柱痕跡）
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを40%含む
　（掘形埋戻土）

C–C'

H–H'　P4
1
2
3

1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
2　5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む

I–I'　P5
1 2 3
4

1　10YR2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　炭化物集積層
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1灰色ブロックを10%含む
4　5Y2/1　黒色土　ややしまる 粘性ややあり

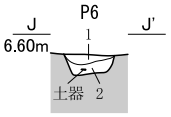
F–F'　P2
2
1
3

1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む
2　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　10%含む

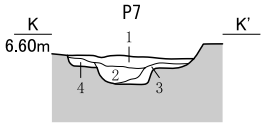
G–G'　P3
1
2
3

1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　10%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり

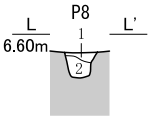
図 1790　SB494 遺構図（１）



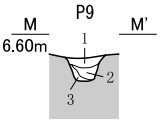
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
2　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　10%含む



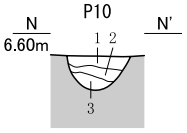
1　2.5Y3/1　黒褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを40%含む（柱痕跡）
3　5Y2/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む（柱痕跡）
4　5Y6/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを3%含む（掘形埋戻土）



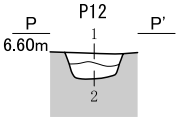
1　5Y2/1　黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　5%含む
2　5Y2/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　20%含む



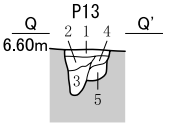
1　5Y4/1　灰色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを
　3%含む
2　5Y2/1　黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
3　2.5Y2/1　黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　炭化粒を含む



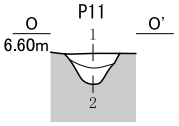
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
2　5Y2/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
3　2.5Y2/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり



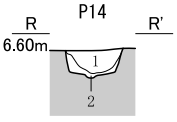
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
2　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む



1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり　炭化物を含む
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
2　5Y2/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む（柱痕跡）
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり（柱痕跡）
4　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　（掘形埋戻土）
5　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを20%含む
　（掘形埋戻土）

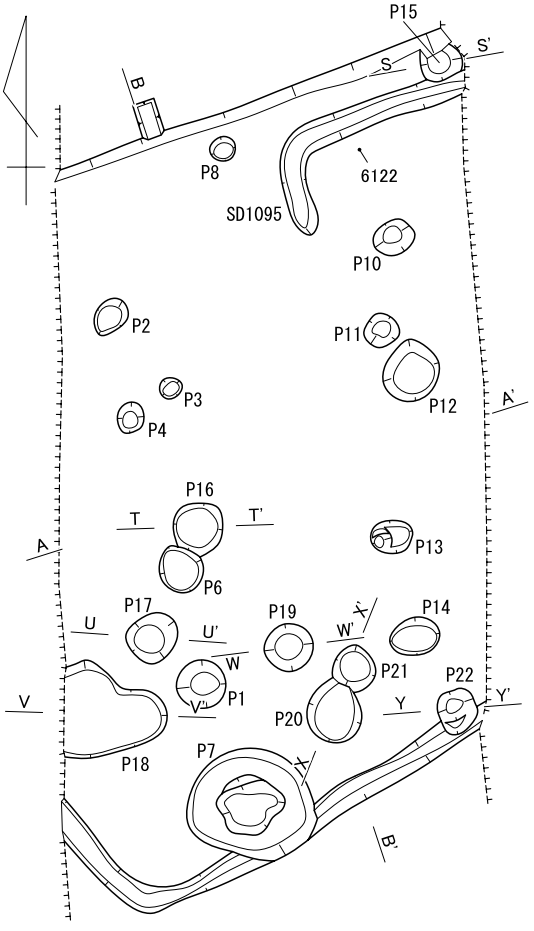


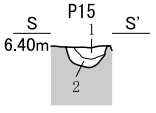
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む
2　5Y3/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり



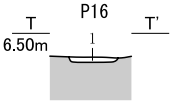
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり　炭化粒を含む
2　5Y2/1　黒色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む

掘形完掘状況

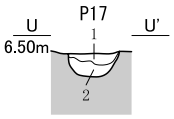




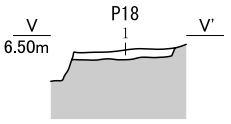
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
2　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y3/2オリーブ黒色ブロックを10%含む



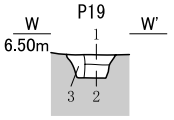
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y2/1　黒色ブロックを3%含む



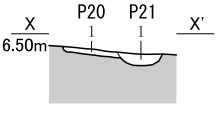
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1灰色ブロックを10%含む
2　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色ブロックを3%含む



1　5Y4/1　灰色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1灰色ブロックを30%含む

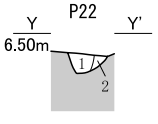


1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む（柱痕跡）
2　5Y2/1　黒色土
　やや しまる　粘性ややあり（柱痕跡）
3　5Y4/1　灰色土　やや しまる　粘性ややあり
　5Y3/2　オリーブ黒色ブロックを10%含む
　（掘形埋戻土）



P20
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを40%含む

P21
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む



1　5Y2/2　オリーブ黒色土
　やや しまる　粘性ややあり
　炭化粒を含む
2　5Y4/1　灰色土
　やや しまる　粘性ややあり

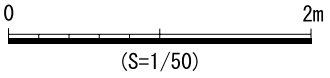


図 1791　SB494 遺構図（２）

は小穴を８基検出し、そのうちP19のみ土層断面で柱痕跡を確認した。また、北壁沿いで屈曲する細長い溝SD1095を検出したが、その性格は不明である。

遺物出土状況　住居埋土と掘形埋土から土器2,158点、石器類１点、小穴から土器167点が出土した。また、炭化材とともに炭化した種子や線刻土器（6121）なども出土している。埋土中の出土土器は、Ⅵ期～Ⅶ期のものが主体で、Ⅳ期の土器片もわずかに出土した。また、埋土上層ではⅨ期の高坏や甕が出土したが、混入の可能性がある。

出土遺物　6119はⅣ期壺Ｈ類。口縁部が大きく外反し、端部には顕著な平坦面を有する。端部にはヘラによって押圧を加え、凹凸を形成する。内面は剥落が著しいものの、外面はナデによって丁寧に器面調整が施される。頸部には細い沈線が１条認められるが、それ以下の状況は不明である。本器種の胴部片はこれまでにもわずかに確認されているが、口縁部が見つかるのは稀である。6120はⅣ期壺A2類。胴部上半に波状文及び直線文が交互に施文され、その上から縦方向の直線文が加えられる。6121はⅥ期～Ⅶ期壺G3a類。口縁部が内湾して立ち上がり、端部には顕著な平坦面をもつ。外面には細い線描によって円形の文様が描かれるが、その後のミガキによって、一部が途切れている。6122はⅥ期～Ⅶ期壺Ｋ類。小型の壺胴部には太く明瞭な沈線によって斜格子文が施文される。6123、6124はともにⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にはタタキを加える。胴部にはタタキ調整の後にハケによる調整が加えられる。6125はⅣ期甕A5類。低い脚台部がハの字に開く。胴部にはハケ調整が施されるが、脚部には調整痕は認められない。6126、6127はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が外反し、端部付近で内湾する。6128はⅥ期～Ⅶ期甕C1類。口縁部がわずかに内湾し、外面には煤が付着する。6129はⅦ期甕B4類。口縁部が外反して長く立ち上がる。端部はナデによってわずかに平坦面を形成する。6130はⅦ期甕D1b類。口縁部下段は強く外方に引き出され、上段は短く屈曲し、凹面を形成する。6131はⅦ期甕E3類。口縁部が外反し、胴部はほぼ球形状に丸くなり、低い脚部がつく。胴部外面からも輪積み痕が確認でき、形状を整える程度で丁寧な器面調整が施された形跡はない。口縁部を除い

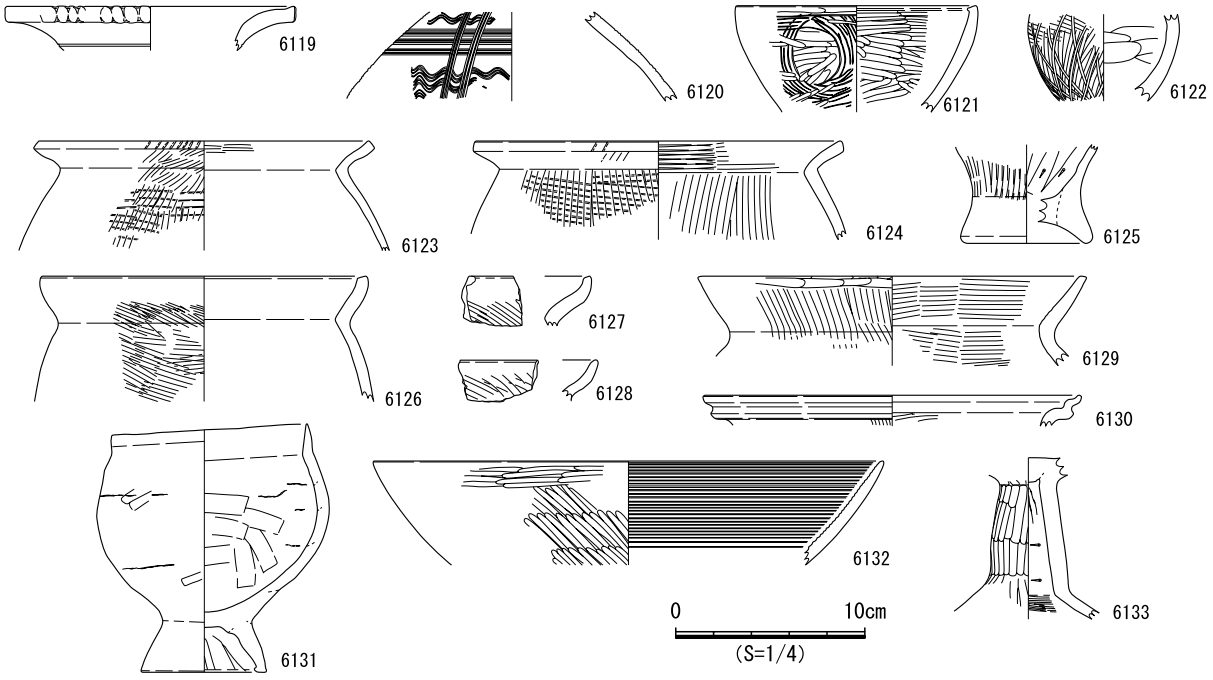


図1792　SB494遺物実測図

てほぼ完存するものの、全体的に粗雑な作りの資料である。6132はⅥ期～Ⅶ期高坏C2c類。口縁部が内湾し、内面には多条沈線を施文する。6133はⅨ期高坏。脚部が円錐状に開くが、中央部がわずかに膨らむ。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB495（**遺構**：図 1793、**遺物**：図 1794）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、中央と東側は撹乱により失われ、南北側は調査区域外へとのびている。平面形はやや不明瞭であったが、底面が平坦で小穴を検出したことから竪穴住居跡と判断した。

形状　北西辺の一部しか検出できていないため、形状は不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。なお、本遺構の東側に位置するSB496と主軸がほぼ一致するものの、床面の検出標高が異なるため、別遺構と判断した。

埋土　単層であり、円礫をわずかに含む。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴１基を検出したが、掘形は浅く、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器136点、小穴から土器４点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期のものが多い。本遺構はSZ181、SZ182、SZ184の周溝埋土上層に位置するためか、Ⅳ期の壺や甕の破片が混入している。

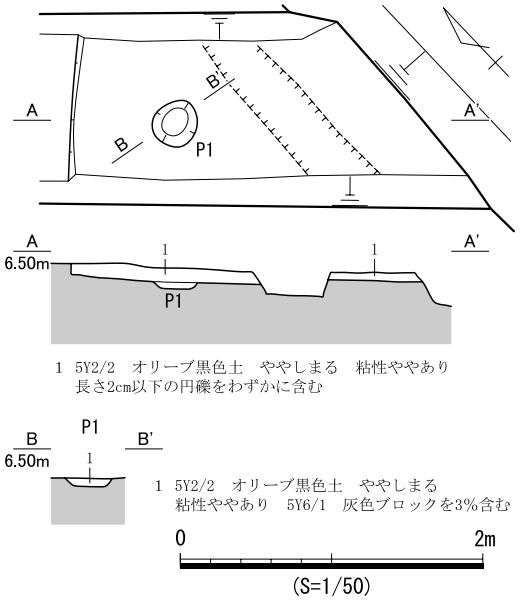


図 1793　SB495 遺構図

出土遺物　6134はⅥ期甕D1b類。屈曲部から口縁部下段が外方に引き出され、外面には刺突が認められる。6135はⅥ期高坏B3b類。口縁部が坏底部から強く外反し、内外面ともに煤が付着する。

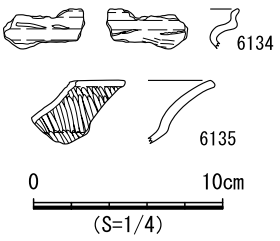


図 1794　SB495 遺物実測図

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期と考えられる。

SB496（**遺構**：図 1796、**遺物**：図 1795）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。東側でSB497を切り、北側はSK05526に、南側はSB498に切られる。平面形は不明瞭で、検出時には何度も精査を繰り返した。

形状　北東辺と南東辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。東辺はやや内側に反り気味で、深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。ブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。東壁面沿いで小穴を２基検出したが、いずれも浅く、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器73点、小穴から土器２点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期のものが多い。

出土遺物　6136はⅥ期～Ⅶ期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、わずかに外反する。端部は平坦となる。

時期　重複するSB497、SB498ともにⅥ期～Ⅶ期であることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

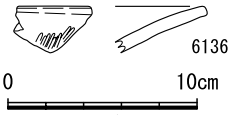


図 1795　SB496 遺物実測図

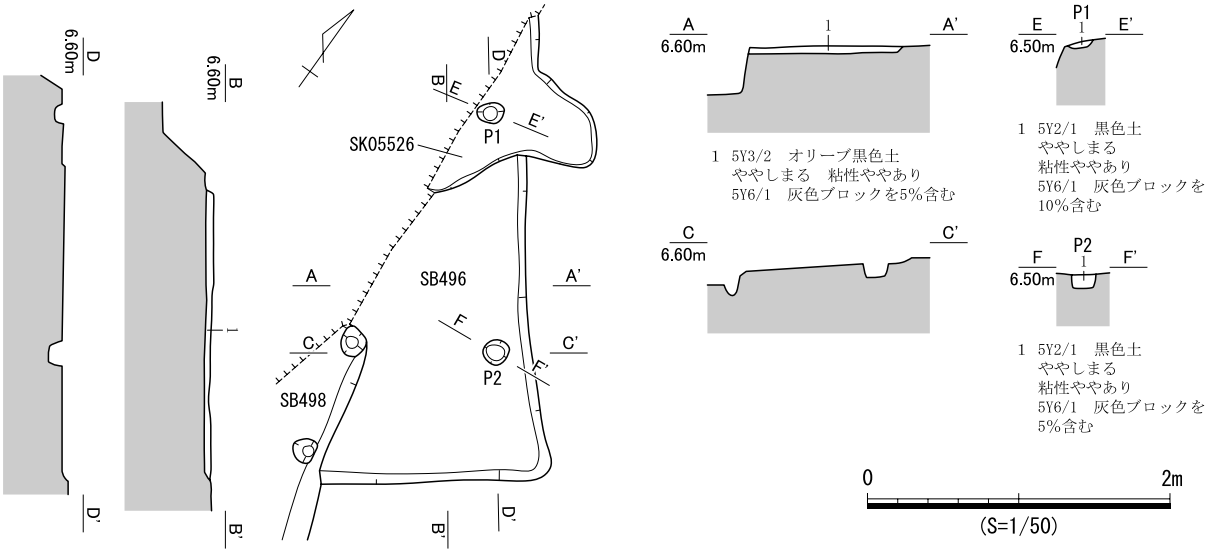


図 1796　SB496 遺構図

SB497（**遺構**：図 1797、**遺物**：図 1798）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、南側はSB501に、西側はSB496、SB498、SB500に切られる。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状　遺構の北西隅のみしか検出できていないが、およそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。ブロック土の混入が目立つことから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて５基の小穴を検出したが、いずれも浅く、柱穴と想定できる遺構は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器394点、小穴から土器18点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅣ期の土器片が混入している。

出土遺物　6137はⅥ期甕D1b類。端部に刺突を加える。6138はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁端部が内湾し、端部にはわずかな平坦面をもつ。6139はⅣ期高坏。口縁部が内湾し、肥厚する端部には平坦面を形成する。端部直下には３条の凹線が認められる。6140はⅥ期高坏C3b類。口縁端部を肥厚し、多条沈線を施文する。6141はⅦ期高坏Ｈ類。脚部が直線的に開き、端部には平坦面を形成する。外面には３条１組の多条沈線間に大振りの連孤文を配する。端部には外傾面を形成し、多条沈線を施す。6142はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｄ類。全形は不明だが、胴部は丸く形成され壺形を呈すると考えられる。

時期　Ⅴ～Ⅶ期のSB501とⅥ～Ⅶ期のSB496、SB498に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

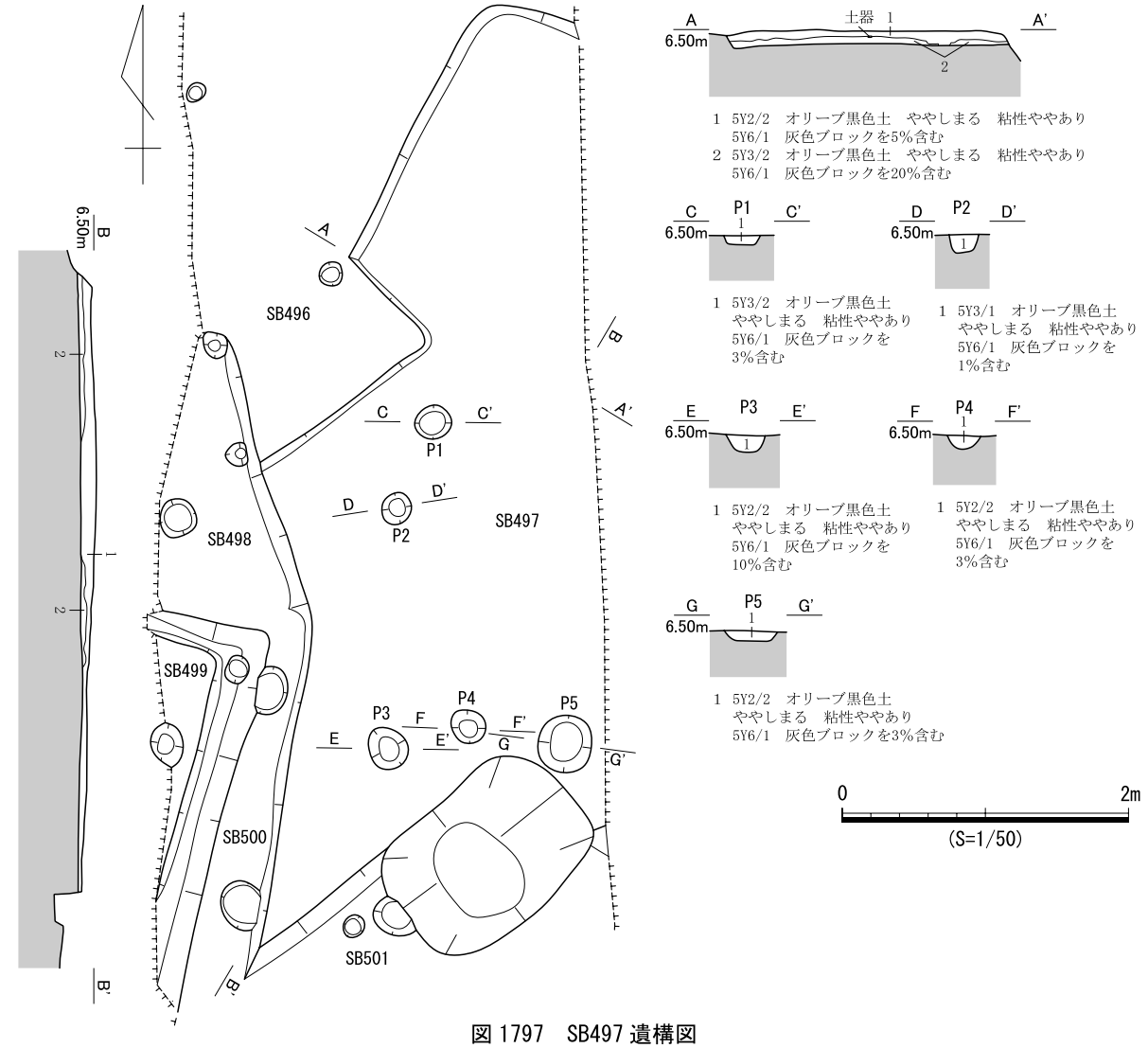


図 1797　SB497 遺構図

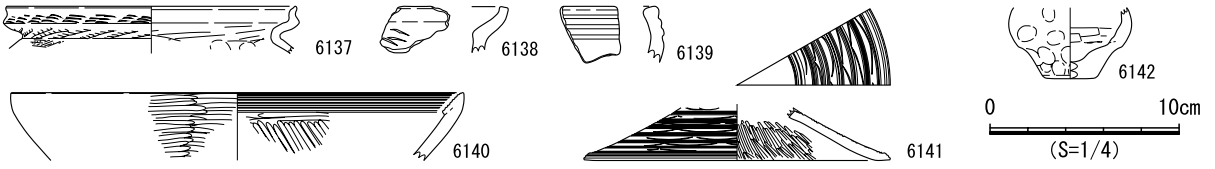


図 1798　SB497 遺物実測図

SB498（遺構：図 1799、遺物：図 1800）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。北側でSB496 を切り、南側でSB500 に切られる。平面形は比較的明瞭であった。

形状　遺構の大半が調査区域外に位置するため、形状は不明である。深さは約 0.1 ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。上層は炭化粒をわずかに含み、下層にはブロック土が混入する。層界の凹凸もみられることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面の認定は困難であり、小穴が明確に見える深さまで掘削したため、若干掘りすぎたかもしれない。床面上では小穴を３基検出

したが、柱穴といえるような穴は確認できなかった。なお、北端のP1は直径が小さいものの、深くて壁面がほぼ垂直であった。

遺物出土状況　埋土中から土器110点、石器類１点、小穴から土器９点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6143はⅦ期壺Ａ類。頸部直下に粘土を貼り付けて突帯を形成し、ナデによって調整を施した後に赤彩を施す。突帯下方には大振りの山形文が認められ、赤彩は認められない。6144はⅥ期～Ⅶ期鉢B2類。口縁部が直線的に外傾し、端部を肥厚して外面に粘土がはみ出る。6145はⅥ期～Ⅶ期鉢A3a類。口縁部がわずかに内湾し、外面にはわずかに煤が付着する。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

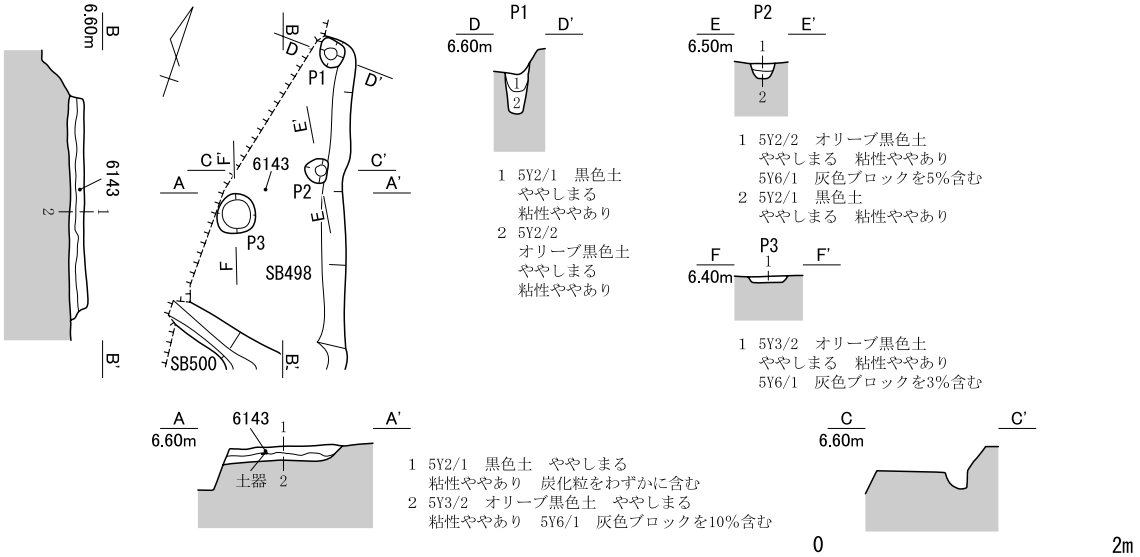


図 1799　SB498 遺構図

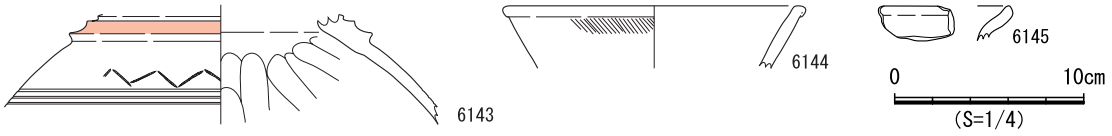


図 1800　SB498 遺物実測図

SB499（遺構：図 1802、遺物：図 1801）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。本遺構はSB500の床面で検出した遺構であり、平面形は明瞭であった。

形状　遺構の北辺と東辺しか検出できていないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層でき、下層にブロック土を含む。本遺構を切るように、ほぼ同じ方位でSB500が構築されていることから、本遺構は建て替えに伴い人為的に埋め戻されている可能性がある。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面では小穴１基と壁溝を検出した。小穴は掘形が浅く、壁溝は北辺沿いのものに比べて東辺沿いのものがやや幅広である。

遺物出土状況　埋土中から土器79点、石器類１点、壁溝から土器14点、小穴から土器３点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期の破片がわずかに混入している。なお、壁溝

からⅦ期高坏Ｃ類（6146）が出土した。

出土遺物　6146はⅦ期高坏C4c類。やや内湾する口縁部内面に多条沈線を施文する。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

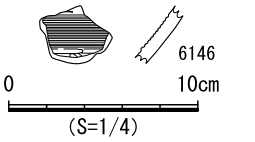


図 1801　SB499 遺物実測図

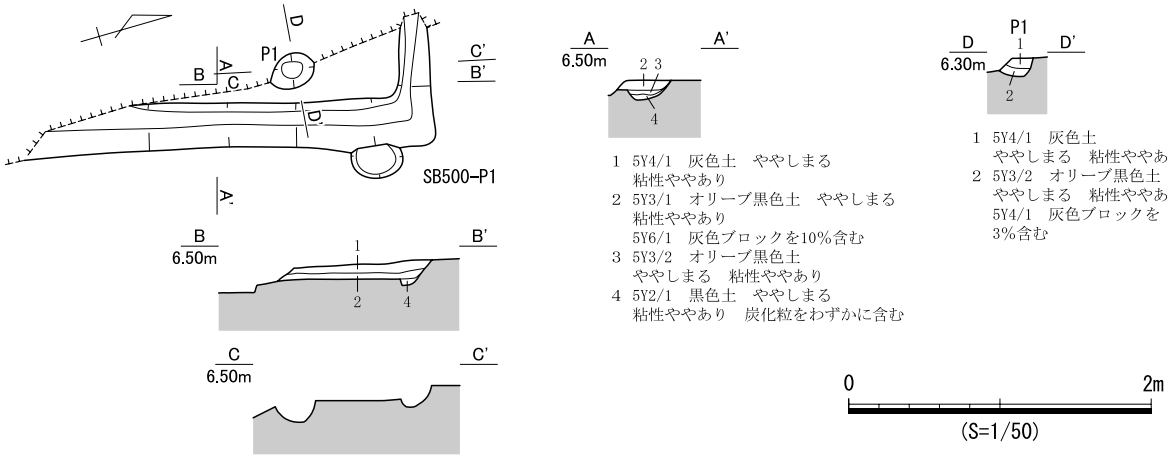


図 1802　SB499 遺構図

SB500（**遺構**：図 1803、**遺物**：図 1804）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われている。東側でSB501を切り、本遺構の床面でSB499を検出した。

形状　遺構の北東隅のみしか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。２層はブロック土を含むため整地土の可能性を検討したが、１層下では遺構を検出できず、２層下まで掘削した。埋土は人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて小穴３基を検出した。いずれも東辺に沿っており、掘形は浅く、柱穴と想定できる遺構はない。

遺物出土状況　埋土中から土器353点、小穴から土器５点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期、Ⅴ期、Ⅷ期の遺物がわずかに混入する。

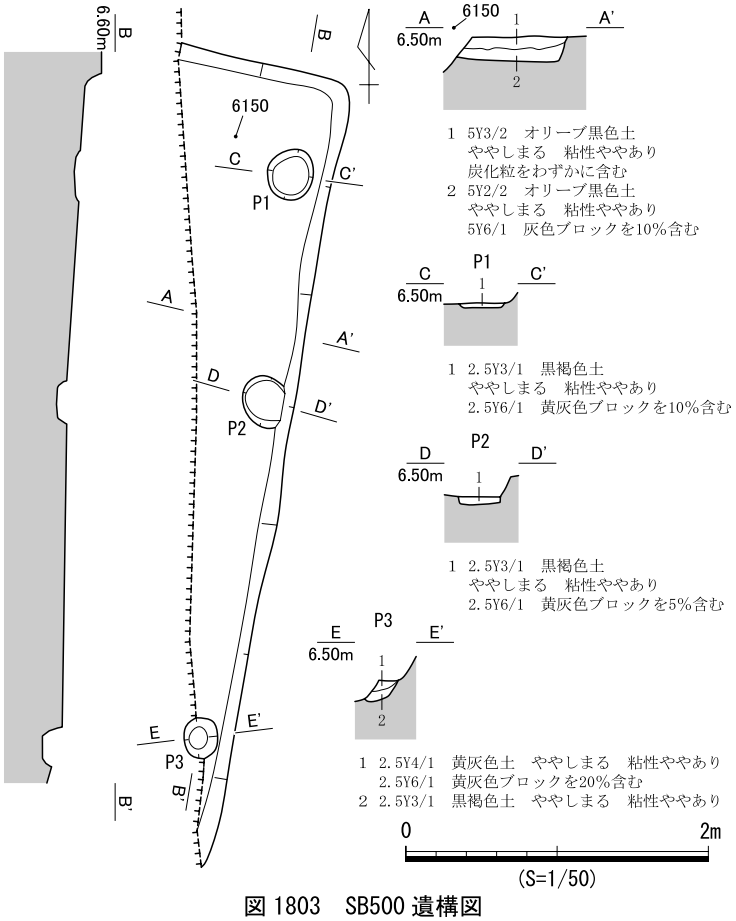


図 1803　SB500 遺構図

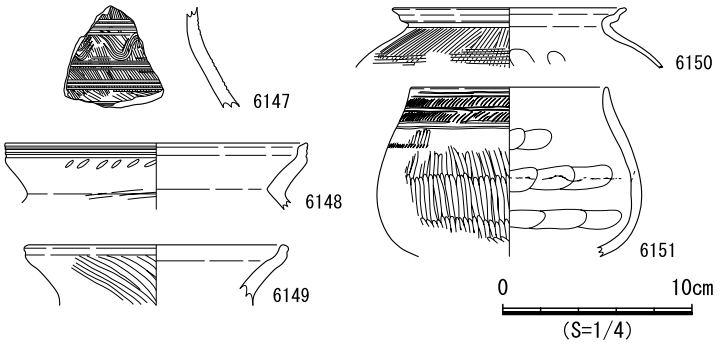


図 1804　SB500 遺物実測図

出土遺物　6147はⅡ期壺Ｂ類。直線文と波状文の組み合わせによって加飾される。6148はⅥ期甕Ａ3類。口縁部が外反し、端部付近が直立して受口状となる。端部には内傾する平坦面をわずかに形成する。外面端部直下には３条の沈線を施文し、その下方に刺突を加える。6149はⅥ期～Ⅶ期甕Ａ4類。口縁部が外反し、端部付近でわずかに内湾する。端部外面には擬凹線状の凹みが認められる。6150はⅧ期甕Ｄ類。口縁部の屈曲は弱く、大きく外方に開く。6151はⅤ期高坏I2類。坏部は碗状を呈し、口縁部が外反して直立する。端部直下に直線文とヘラによる刺突を２帯配す。

時期　Ⅶ期のSB499を切ることと、出土遺物の時期から、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

SB501（**遺構**：**図** 1805・1806、**遺物**：**図** 1807）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側と中央を撹乱により失われ、北西隅をSB500に、南側をSB502に切られている。平面形は比較的明瞭であった。

形状　北東辺と北西辺のみしか検出していないが、両辺がほぼ直角に屈曲することから方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。１層が覆土、２層が掘形埋土である。１層は炭化粒を含み、土器片が多い。ブロック土も混入していることから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。本遺構の下には複数の方形周溝墓の周溝が存在し、床面の認定に手間取ったが、小穴の検出面を床面とした。床面上にて５基の小穴を検出し、そのうち、P3～P5の掘形が深い。しかし、平面的な位置関係から柱穴の想定は難しい。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

掘形　床面では明確な硬化面を確認できなかったが、全体的に黒色土が広がっていたので貼床（整地土）と判断した。整地土はやや大きめの円礫をわずかに含んでおり、掘形底面にて小穴２基を検出した。P6は竪穴住居跡の北東隅に位置する隅丸方形を呈する土坑で、底面は緩やかに湾曲している。その埋土は２層に分層でき、層界の凹凸が著しいことから人為堆積と考えられる。本遺構の主軸は竪穴住居跡とほぼ一致するものの、本遺構に伴う遺構かどうかは定かでない。

遺物出土状況　埋土中から土器2,465点、石器類５点、小穴から土器243点、石器類１点が出土した。埋土中の土器は１層から散在して出土しており、Ⅴ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅱ期とⅣ期の遺物も混入している。住居跡の南辺付近では残りの良い高坏Ｂ類（6164）が口縁部を下にして出土し、その西側で被熱した赤鉄鉱が出土した。

出土遺物　6152はⅤ期壺。平底の底部で器壁が厚く、外側に突出する。6153はⅥ期～Ⅶ期壺A2類。口縁部が大きく外反し、端部をわずかに下方に拡張する。端部には複数の擬凹線を巡らせ、３個１対の円形浮文を３方向に配置する。内面は磨滅が著しく、文様や段の有無は不明である。頸部直下には直線文が認められる。6154はⅣ期甕Ｅ類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。指頭のユビナ

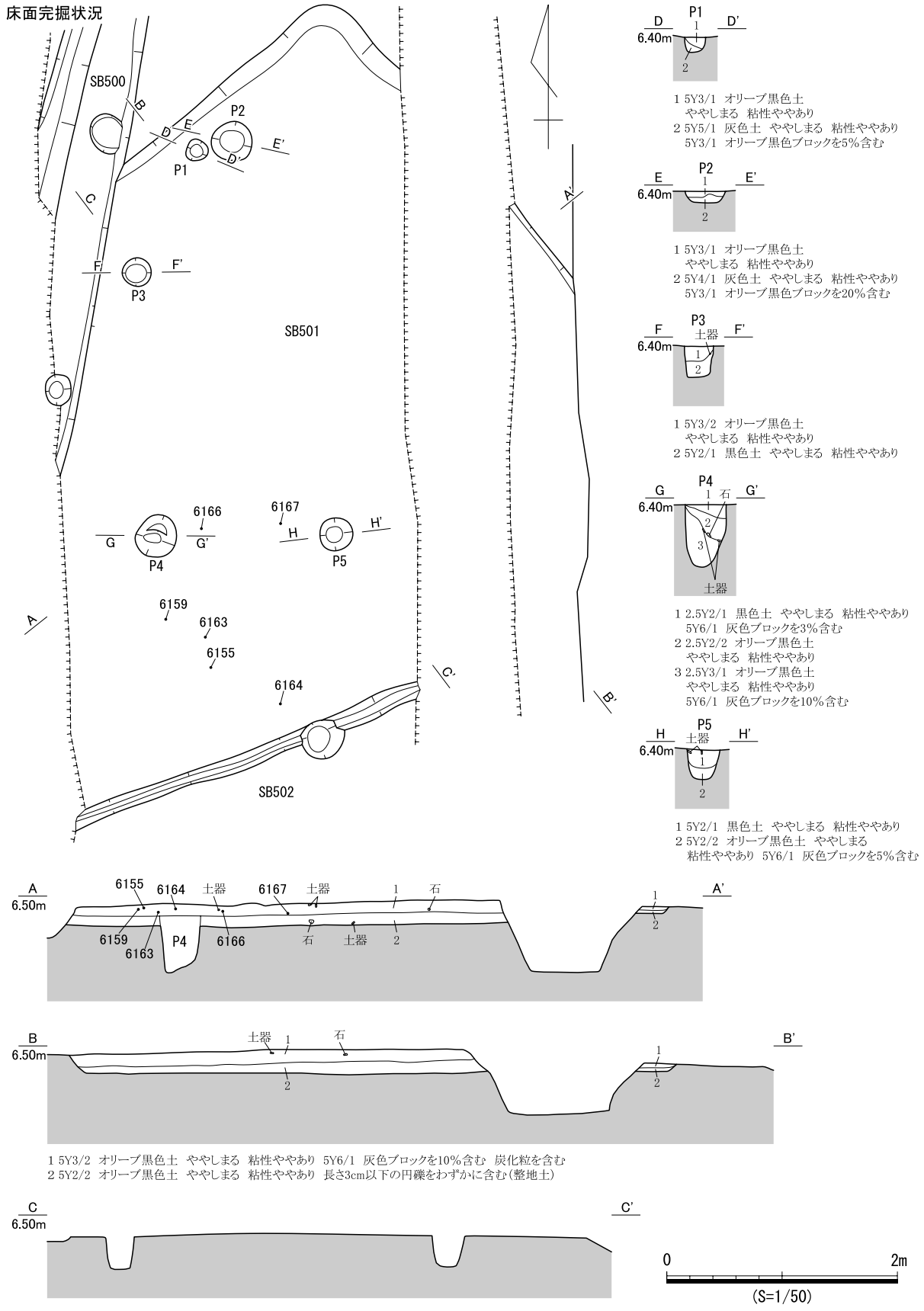


図 1805　SB501 遺構図（１）

デ痕、押圧痕が各所に残る。6155はⅥ期甕Ｅ類。口縁部が短く屈曲し、端部を丸くおさめる。ユビナデによる整形のため器面にはユビの凹凸が残り、粗雑な作りの印象を受ける。6156はⅣ期甕Ｄ類。口縁部が短く屈折し、端部を上下に拡張する。端部には凹線が認められる。6157はⅣ期甕Ｅ類。底部の中央に焼成後の穿孔が認められ、その周辺には不定方向のヘラケズリが認められる。6158はＶ期甕A2a類。口縁部が強いヨコナデとともに屈曲して直立し、屈曲部内面には顕著な凹面を形成する。端部には内傾する平坦面をもつが、口縁部外面及び胴部に加飾は認められない。6159はＶ期甕A2a類。口縁部が強いヨコナデによって短く明瞭に屈曲する。頸部には直立する部位が認められ、端部内面には顕著な平坦面を形成する。端部はつまみあげたようにやや尖り、下端には刺突を加える。胴部には直線文と波状文を施文する。6160はＶ期甕E1類。口縁部は短く外反し、端部には外傾する平坦面を形成する。最大径の位置は胴部中央から上方になり、底部に向けて細くなる。底部は突出して外側にも拡張される。6161はⅥ期～Ⅶ期甕Ｅ類。手捏ねによる小型の甕脚部で、各所にユビナデの痕跡が残る。6162はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲するが、上下段ともに大きく外方に開く。6163はⅥ期～Ⅶ期鉢A4c類。口縁部の立ち上がりが直線的で、端部にはわずかな平坦面をもつ。胴部径は口縁部径よりも

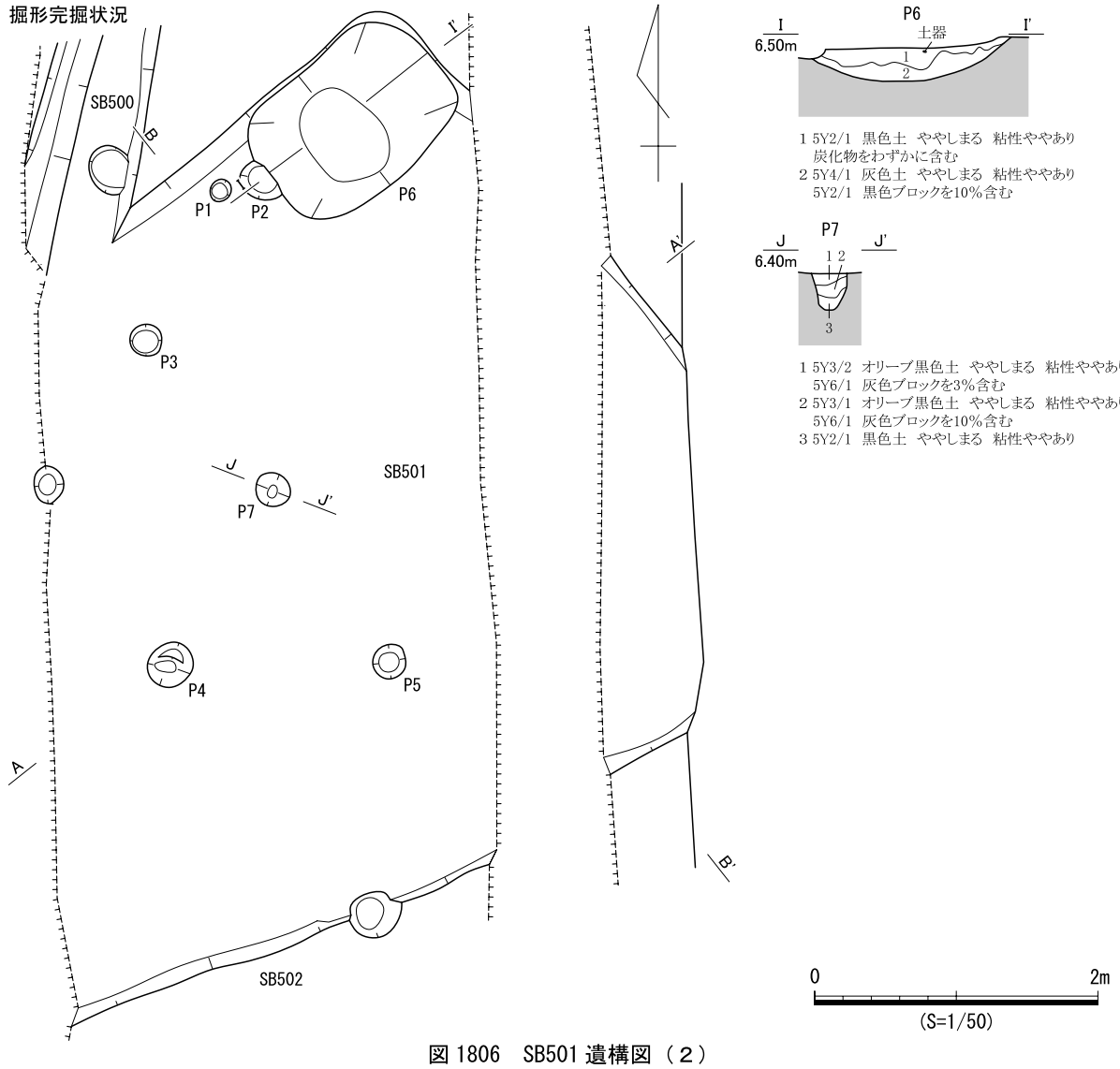


図 1806　SB501 遺構図（２）

大きくなり、器面に文様は認められない。6164はⅤ期高坏B3b類。坏部は浅い皿状を呈し、口縁部が短く強く外反する。内面の屈曲はやや不明瞭で、端部を丸くおさめる。屈曲部の外面には顕著な稜が形成される。内外面ともに丁寧なミガキによって器面調整を施している。6165はⅤ期高坏Ｂ類。中空の脚部が円錐状に開き、透孔付近を境に大きく外反する。6166はⅤ期高坏Ｂ類。坏底部から脚部が細く円錐状に伸び、裾部は外反して大きく開く。透孔は３方向に配置される。6167はⅤ期器台A1類。円柱状の脚部から受部が大きく開く。脚裾部は、３方向に配置された透孔を境として外反気味に大きく開き、端部にはわずかに平坦面が認められる。6168、6169はともにⅡ期壺A2類。6168は胴部片で、二枚貝による直線文が認められる。6169は頸部下方に6168と同様の直線文が認められる。

時期　Ⅶ期～Ⅷ期のSB500、Ⅶ期のSB502に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅶ期と考えられる。

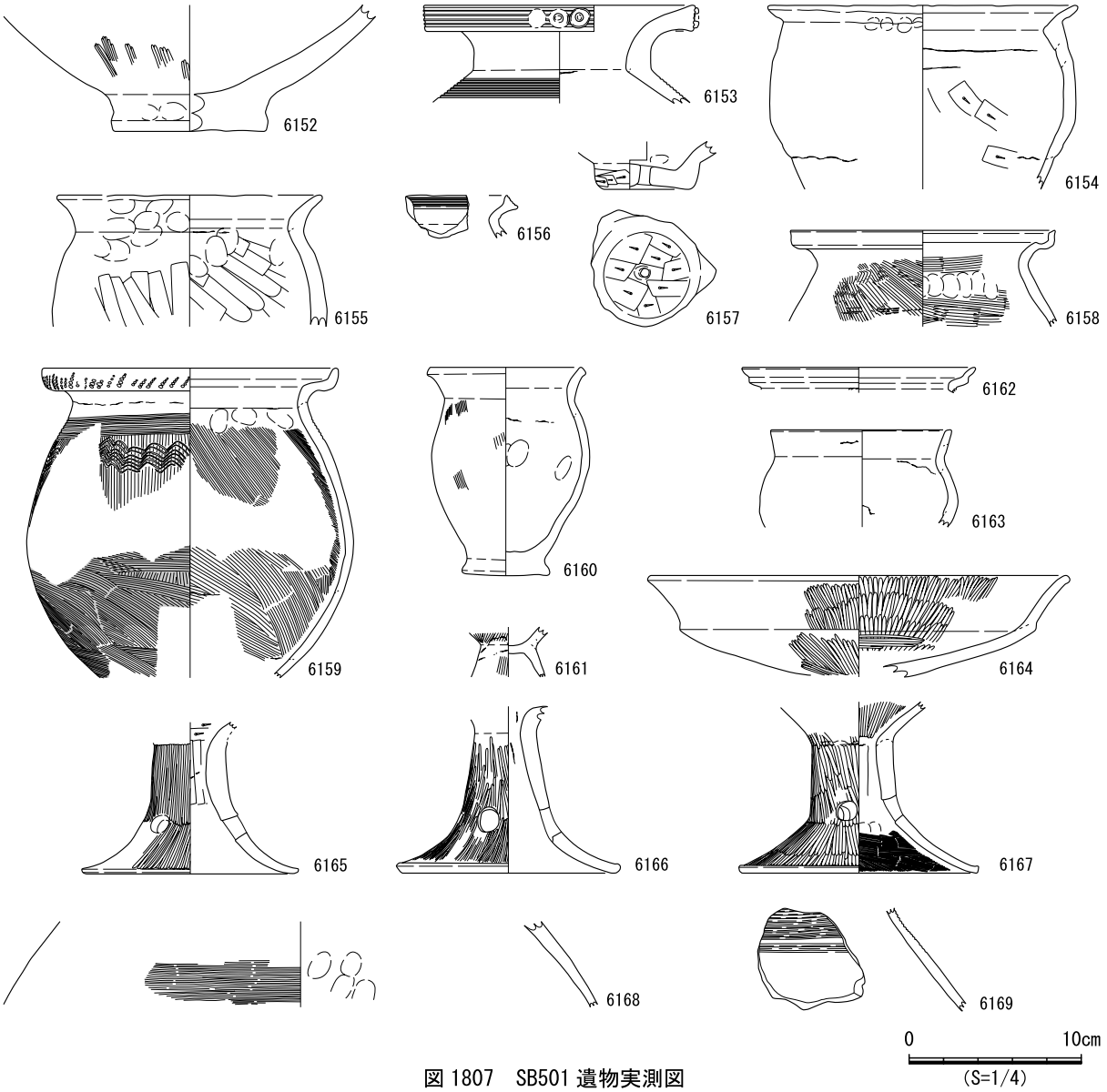


図 1807　SB501 遺物実測図

SB502（遺構：図 1808、遺物：図 1809）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側と中央は撹乱により失われ、北側でSB501を切り、南側でSB503に切られている。平面形は不明瞭で、東西両側の撹乱壁面を数回精査して平面形を確定した。

形状　遺構の北辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。北辺は直線的にのび、深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上層に炭化粒を含む。層界の凹凸がみられ、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床、炉跡は確認できなかった。床面上にて３基の小穴を検出したが、いずれも柱穴の推定は困難である。壁溝は北壁沿いで検出し、掘形底面は丸みを帯びている。

遺物出土状況　埋土中から土器1,236点、石器類１点、小穴から土器21点が出土した。床面の中央南東寄りで用途不明石製品（6179）が、中央北西寄りで直径約５㎝の赤鉄鉱が出土した。埋土中の出土遺物はⅦ期～Ⅷ期のものが多く、P2からⅦ期甕Ｂ類（6172）が出土した。

出土遺物　6170はⅦ期壺D3b類。口縁部が外反して大きく開き、端部付近でわずかに屈曲する。端部外面が直立し、直線文を施文する。6171はⅧ期壺。浅い胴部から口縁部が大きく開き、内湾して立ち上がる。6172はⅦ期甕E3類。口縁部が短く屈曲し、端部にはナデによる平坦面が形成される。

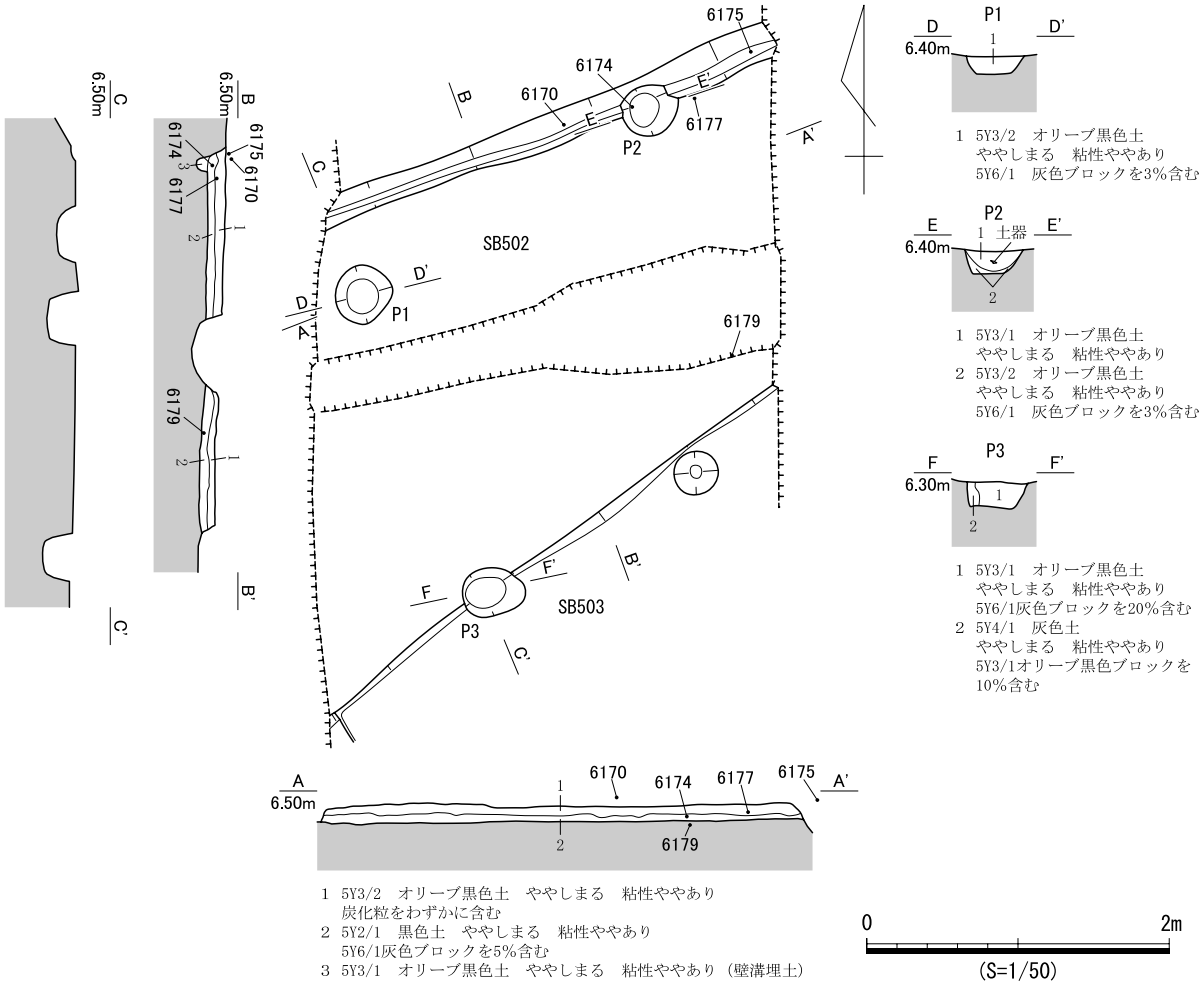


図 1808　SB502 遺構図

6173はⅦ期甕C1類。口縁部がゆるやかに外反し、端部付近でわずかに内湾する。端部内面には内傾面を形成して直線文を施文している。頸部直下には直線文を施文し、その下方にはクシによる刺突が認められる。6174はⅦ期甕。脚部が内湾し、外面には粗いハケ目が残る。6175はⅧ期甕Ｄ類。屈曲する口縁部が大きく開き、一部に打ち欠きが認められる。器壁の薄い胴部全面に粗いハケ目が残り、主に胴部下半に煤が付着する。最大径は胴部中央よりやや上方に位置し、肩部が強く張る。6176はⅦ期高坏C2c類。口縁部が内湾して立ち上がり、多条沈線を施す。6177、6178はともにⅧ期高坏。6177は坏底部にわずかに平坦面をもち、口縁部が内湾気味に立ち上がる。内面に段は認められないが、外面にはわずかに稜が認められる。脚部は付根が細く、円錐状に開く。6178は6177と酷似するが、やや大型で口縁部が大きく開く。6179は用途不明石製品。粘板岩製で、表面は研磨により整形され、断面方形を呈する。

時期　Ⅴ期～Ⅶ期のSB501を切り、Ⅶ期のSB503に切られる。また、P2からⅦ期の甕が出土していることからⅦ期と考える。なお、出土遺物にⅧ期のものが含まれるが、その頃が最終埋没時期と考える。

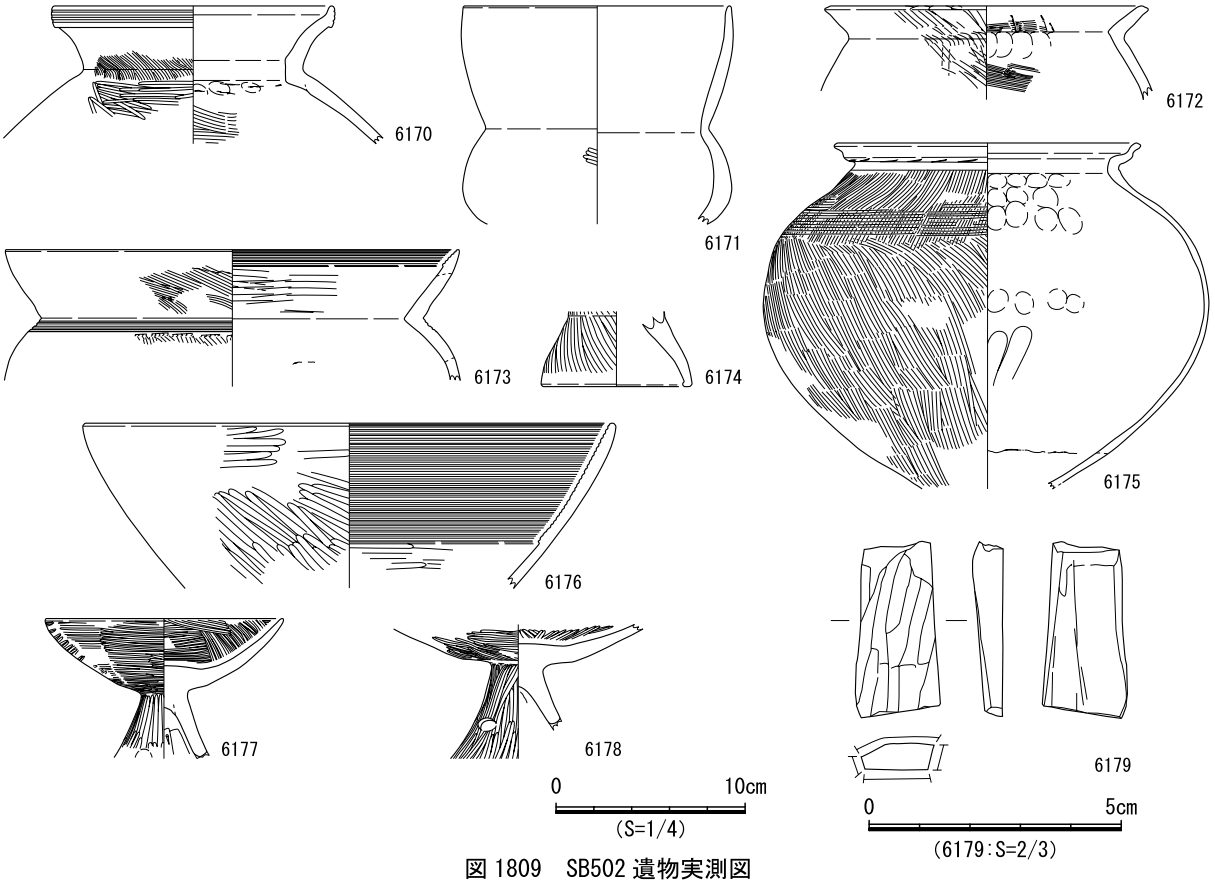
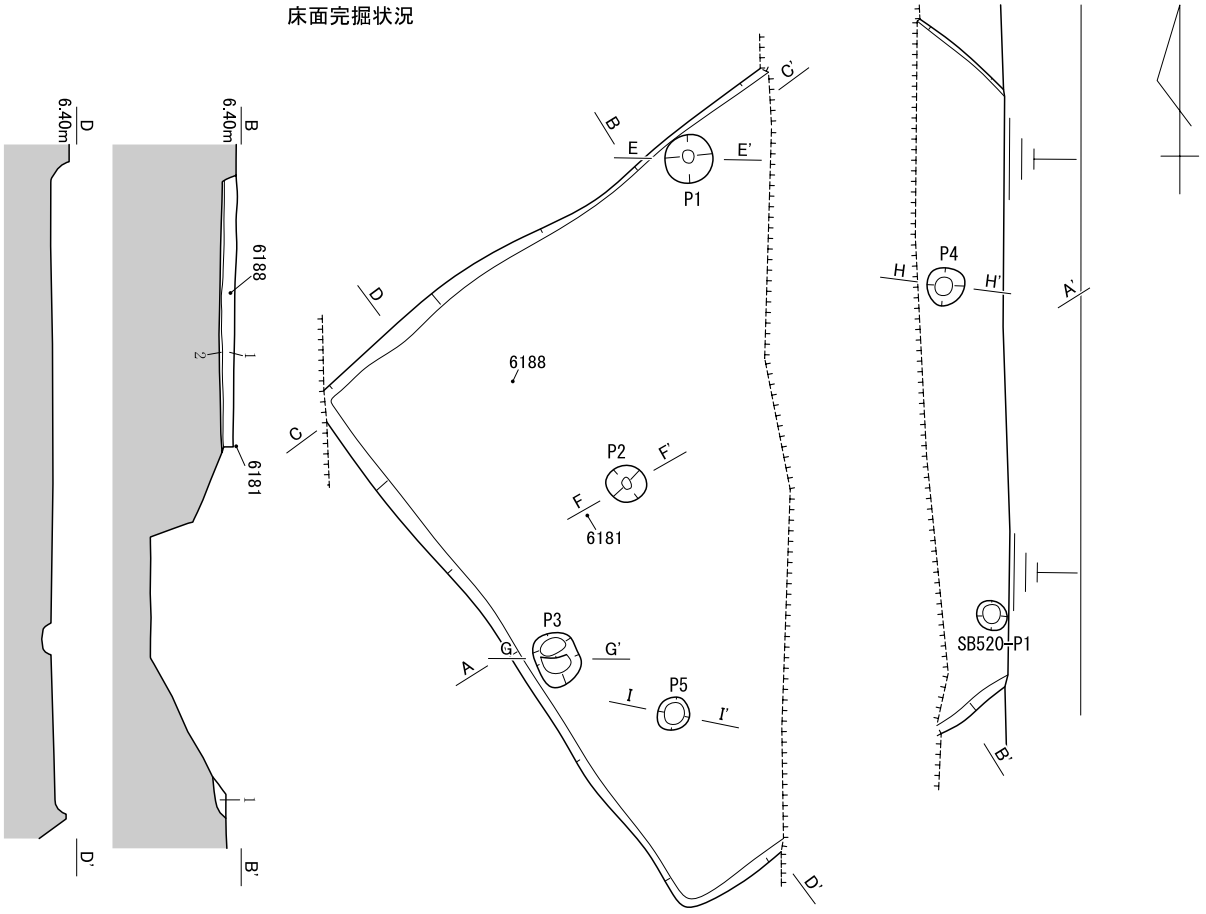


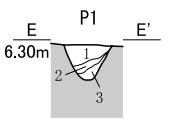
図 1809　SB502 遺物実測図

SB503（**遺構：図 1810・1811、遺物：図 1812**）

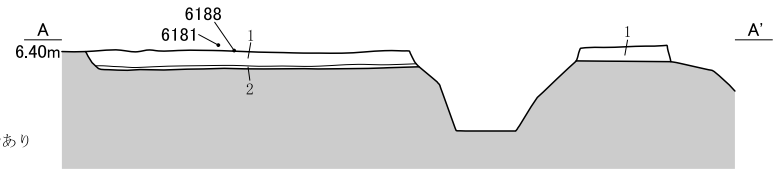
検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。中央は撹乱により失われ、西側でSB504を切り、底面でSB505を検出した。平面形は北西辺と南西辺が比較的明瞭であったが、南北の撹乱以東は不明瞭であった。

形状　北西－南東長約4.3ｍ、北東－南西長約4.9ｍであり、東辺がわずかに外側に開く不整長方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

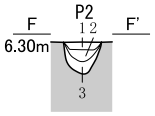




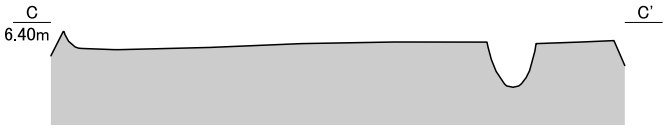
1　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む
2　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり

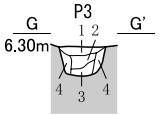


1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の円礫をわずかに含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む（整地土）

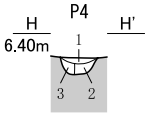


1　2.5Y5/1　黄灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
3　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを20%含む

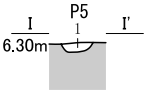




1　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む（柱痕跡）
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを10%含む（柱痕跡）
4　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む（掘形埋戻土）



1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　（柱痕跡）
3　5Y6/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1　オリーブ黒色ブロックを20%含む
　（掘形埋戻土）



1　2.5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを3%含む

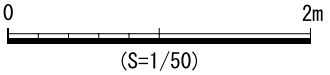


図 1810　SB503 遺構図（１）

埋土　２層に分層した。１層が覆土、２層が掘形埋土である。１層は小礫をわずかに含むが、ブロック土の混入は確認できなかった。

床面　平坦であり、床面には明確な硬化面を確認できなかったが、全体的にブロック土を含む黒色土が広がり、その上面で遺構を検出したので、貼床（整地土）と判断した。床面上にて６基の小穴を検出し、そのうちP3とP4は土層断面で柱痕跡を確認でき、P1とP2は掘形が比較的深い。柱穴の推定は困難だが、P2とP4の２本柱の可能性もある。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

掘形　貼床はとても薄く、それを掘削すると掘形底面で小穴を８基検出した。その多くは浅いが、P10とP12は深く、P12では土層断面で柱痕跡を確認し、その内部から砥石と高坏の脚部片が出土した。

遺物出土状況　埋土中から土器1,719点、石器類３点、小穴から土器179点、石器類１点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、P8からⅥ期～Ⅶ期の鉢Ｂ類（6183）、Ⅶ期の甕Ｄ類

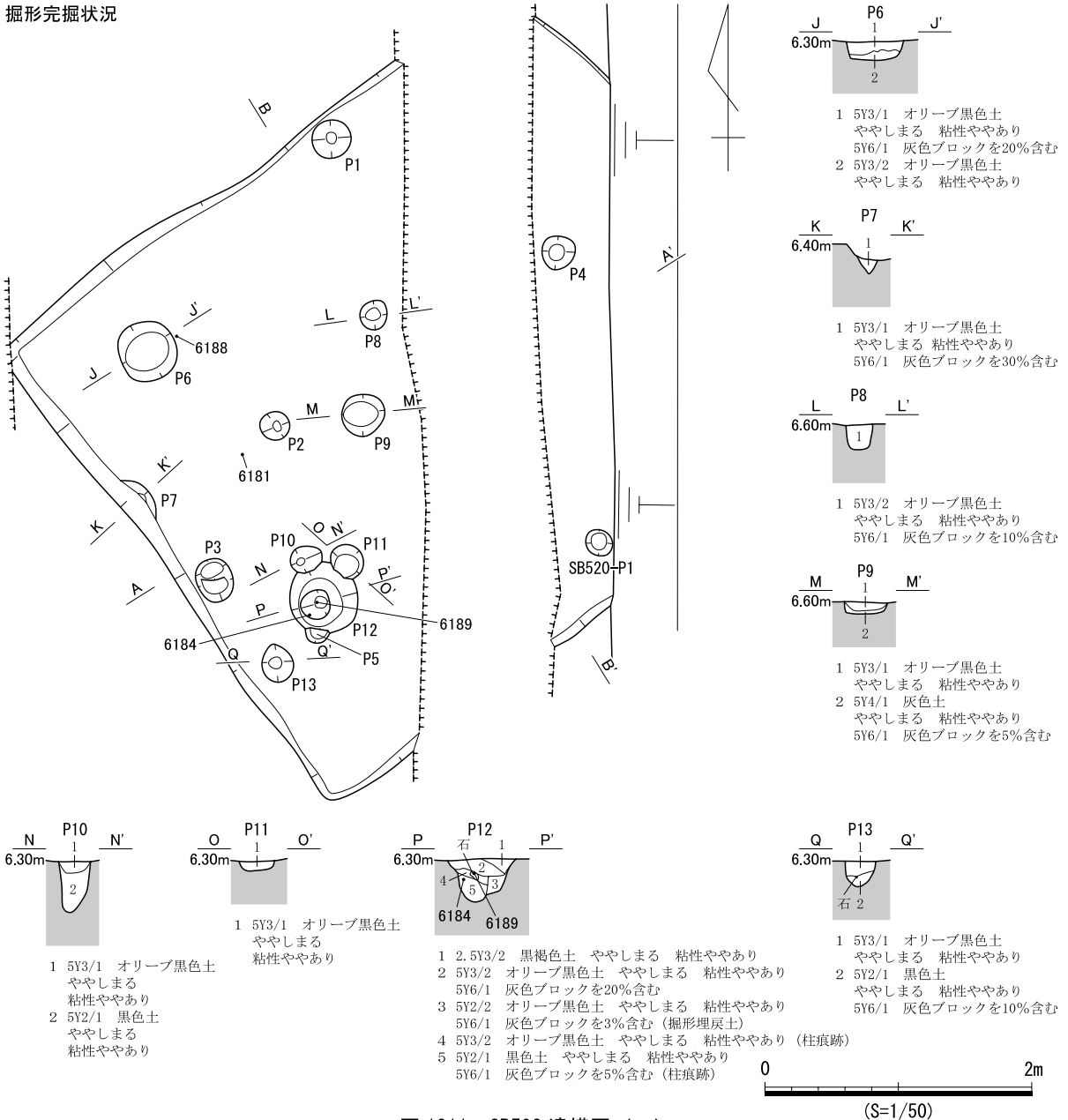


図 1811　SB503 遺構図（２）

(6182)、P12からⅥ期～Ⅶ期の高坏Ｃ類（6184）が出土した。

出土遺物　6180はⅣ期壺Ｈ類。斜め方向のハケ調整に上に強い沈線が認められる。6181はⅦ期壺G2a類。口径からかなりの大型品と考えられる。頸部の屈曲は弱く、口縁部が内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。6182はⅦ期甕D2a類。口縁部が明瞭に屈曲し、中段が垂直気味に立ち上がる。6183はⅥ期～Ⅶ期鉢B2類。口縁部が内湾し、端部には顕著な平坦面をもつ。外面はハケ及びナデ、内面はハケによる調整痕が認められる。6184はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。付根から脚部が円錐状に開き、２孔１対の透孔が認められる。6185～6187はいずれもⅦ期高坏G3c類。6185は口縁部で、端部から多条沈線、刺突文、直線文、山形文など、端部直下から様々な文様が認められる。6186は脚部で、精緻な文様が認められる。透孔下部から多条沈線、山形文、貼付突帯、刺突文など、種々の加飾が認められる。脚裾部は内湾傾向で、端部には平坦面をもち、そこに沈線を２条施文する。6187も脚部で、多条沈線の間に振り幅の小さい連弧文を加える。端部は平坦に形成し、上端に刺突を加える。6188はⅦ期高坏Ｇ類。脚部がわずかに円錐状に開き、透孔を境に大きく開く。裾部は内湾気味となり、端部には平坦面をもつ。6189は砥石。扁平な亜円礫の一面と砥面として利用しており、部分的に煤が付着している。

時期　出土遺物の時期はⅥ期～Ⅶ期であるが、Ⅶ期のSB504を切っていることからⅦ期と考えられる。

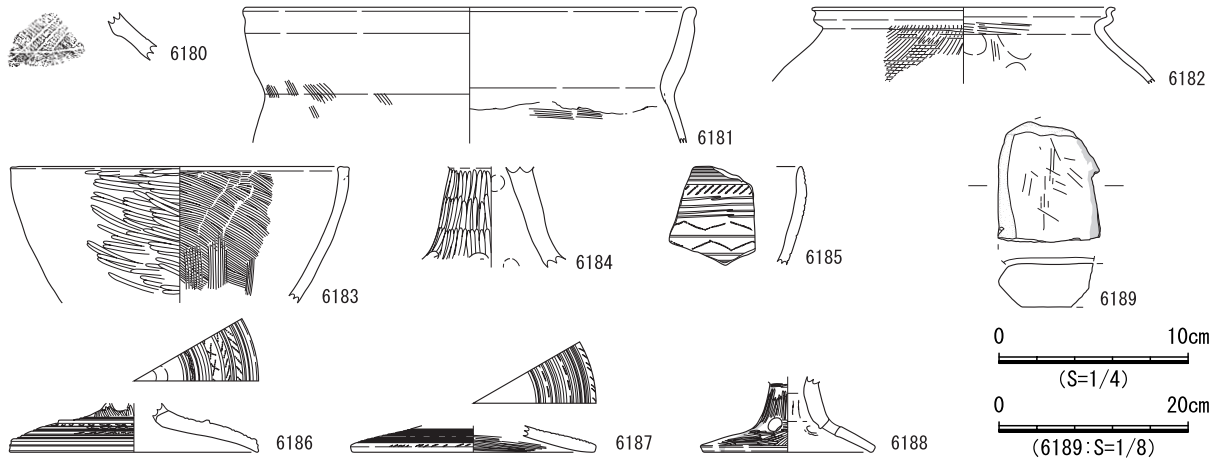


図 1812　SB503 遺物実測図

SB504（遺構：図 1813、遺物：図 1814）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われ、東側はSB503に切られ、南側でSB506を切り、底面でSB505を検出した。平面形は比較的明瞭で、検出面の土がブロック土を含んでいたことから床面である可能性を検討したが、小穴などの遺構が確認できなかったため埋土として掘削した。

形状　遺構の南辺のみしか検出できていないため、平面形は不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層で、炭化粒とブロック土を含み、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて５基の小穴を検出し、そのうちP2とP4は掘形が深く、いずれかが柱穴となるかもしれない。なお、SB503の掘形底面で検出した遺構の幾つかは、本遺構に所属する可能性もある。壁溝は南辺沿いで確認したが、掘形はとても

浅かった。

遺物出土状況　埋土中から土器292点、石器類１点、小穴から土器135点、壁溝から土器11点が出土した。また、P2の底面付近にて炭化物が出土した。

出土遺物　6190はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚部が内湾する。6191はⅦ期高坏C4b類。口縁端部に内傾面を形成し、そこに多条沈線を施文する。6192はⅦ期高坏G3b類。口縁部がわずかに内湾し、端部直下に多条沈線を施す。6193は刃器。素材とする縦長剥片の縁辺に、連続する細かい剥離を施している。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB506を切り、Ⅶ期のSB503に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

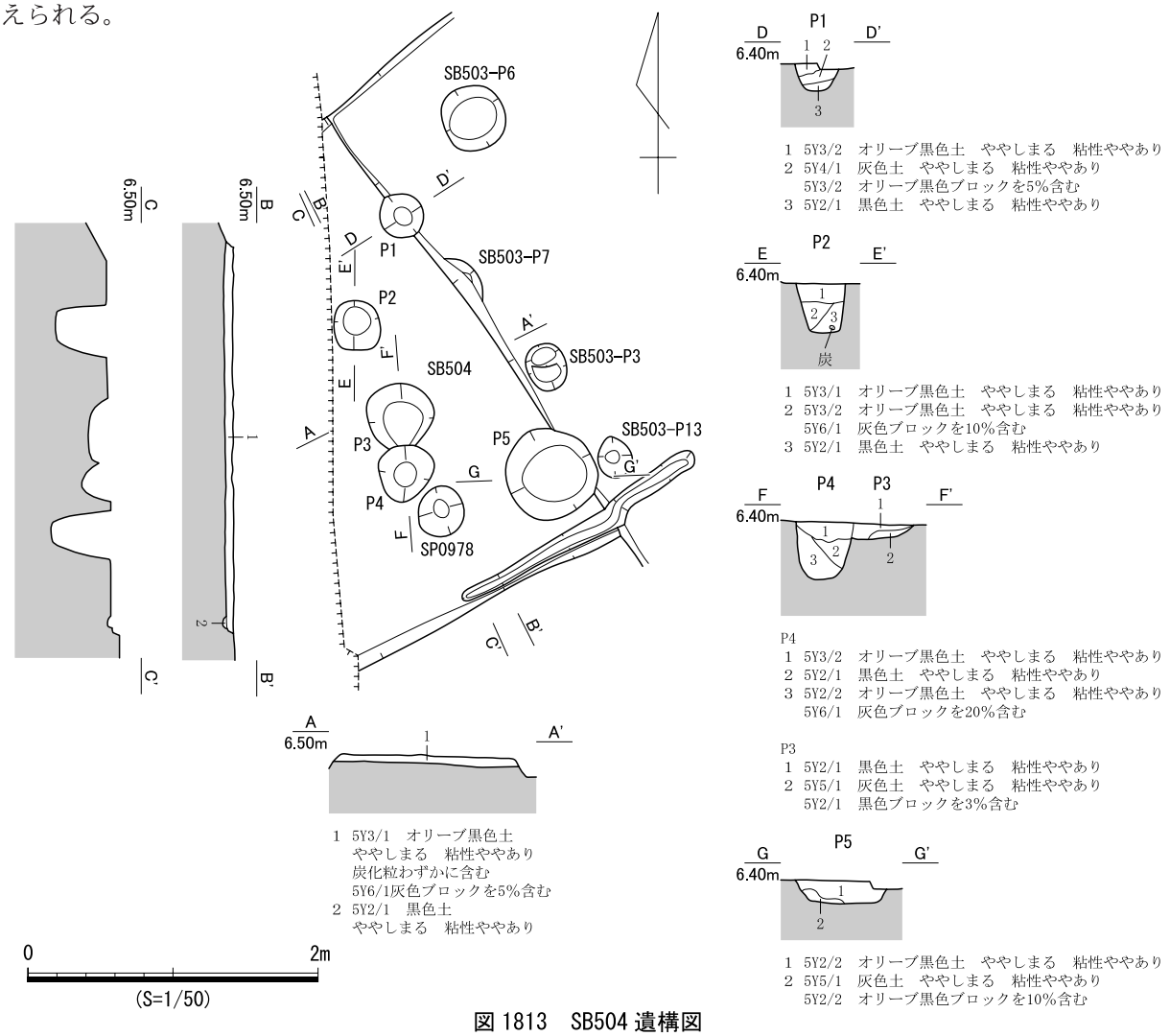


図 1813　SB504 遺構図

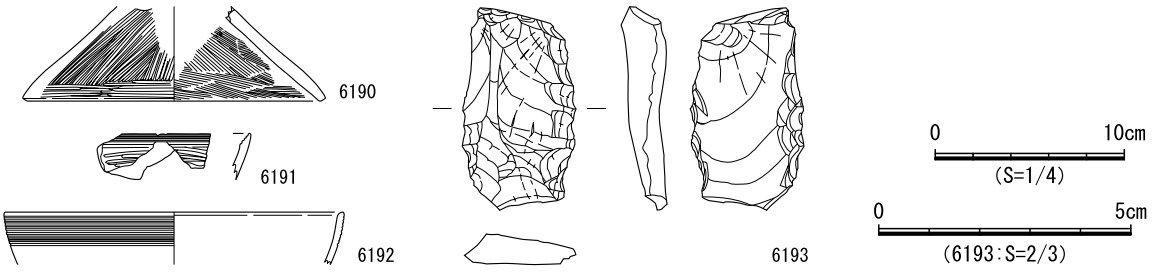


図 1814　SB504 遺物実測図

SB505（遺構：図 1815）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。本遺構はSB503とSB504の床面で検出し、埋土は確認できず、ほぼ直角に屈曲する壁溝２条を検出したために竪穴住居跡と判断した。

形状　南西辺と南東辺の壁溝のみしか確認できていないが、およそ方形を呈すると考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。本住居の床面に伴う遺構は、SB503・SB504の床面で確認した遺構のいずれかと考えられるが、特定する根拠が乏しい。しかし、P1のみ土層断面で柱痕跡を確認し、位置的に本遺構に伴う柱穴の可能性がある。また、当遺跡の竪穴住居跡は一辺４ｍ前後の規模が多く、本遺構も同規模とするならば、SB503-P8がP1に対応する柱穴になる可能性がある。

遺物出土状況　壁溝から土器５点、小穴（P1）から土器９点が出土したが、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅶ期のSB503とSB504より先行するため、本遺構の時期はⅦ期以前と考えられる。

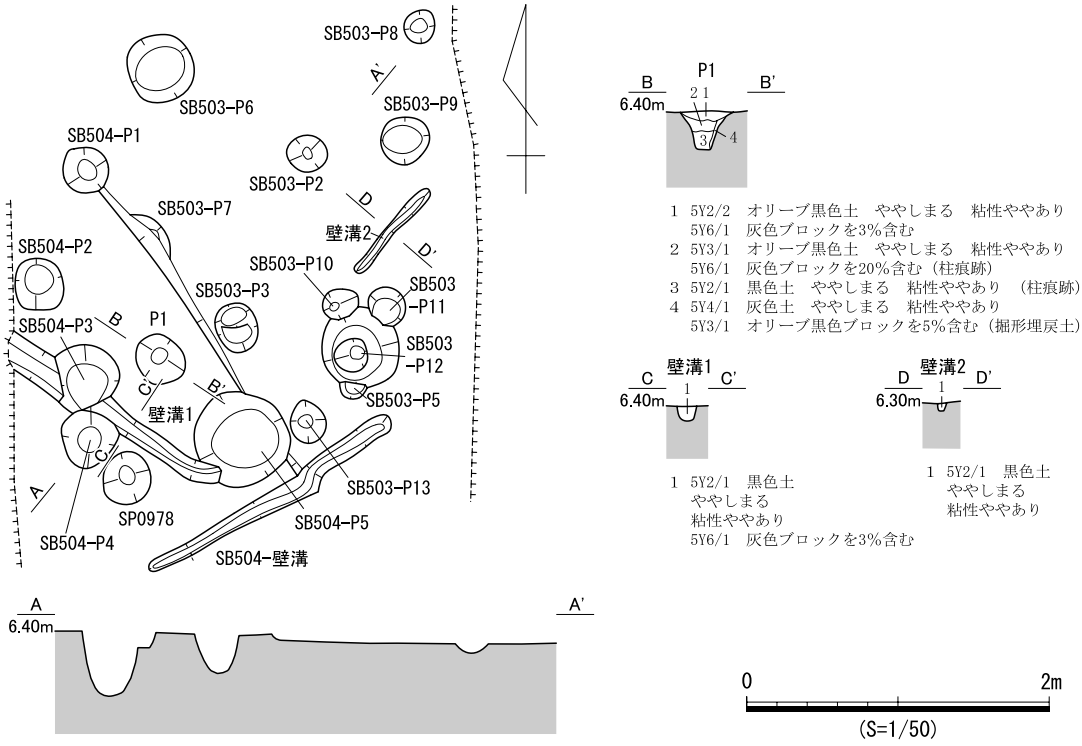


図 1815　SB505 遺構図

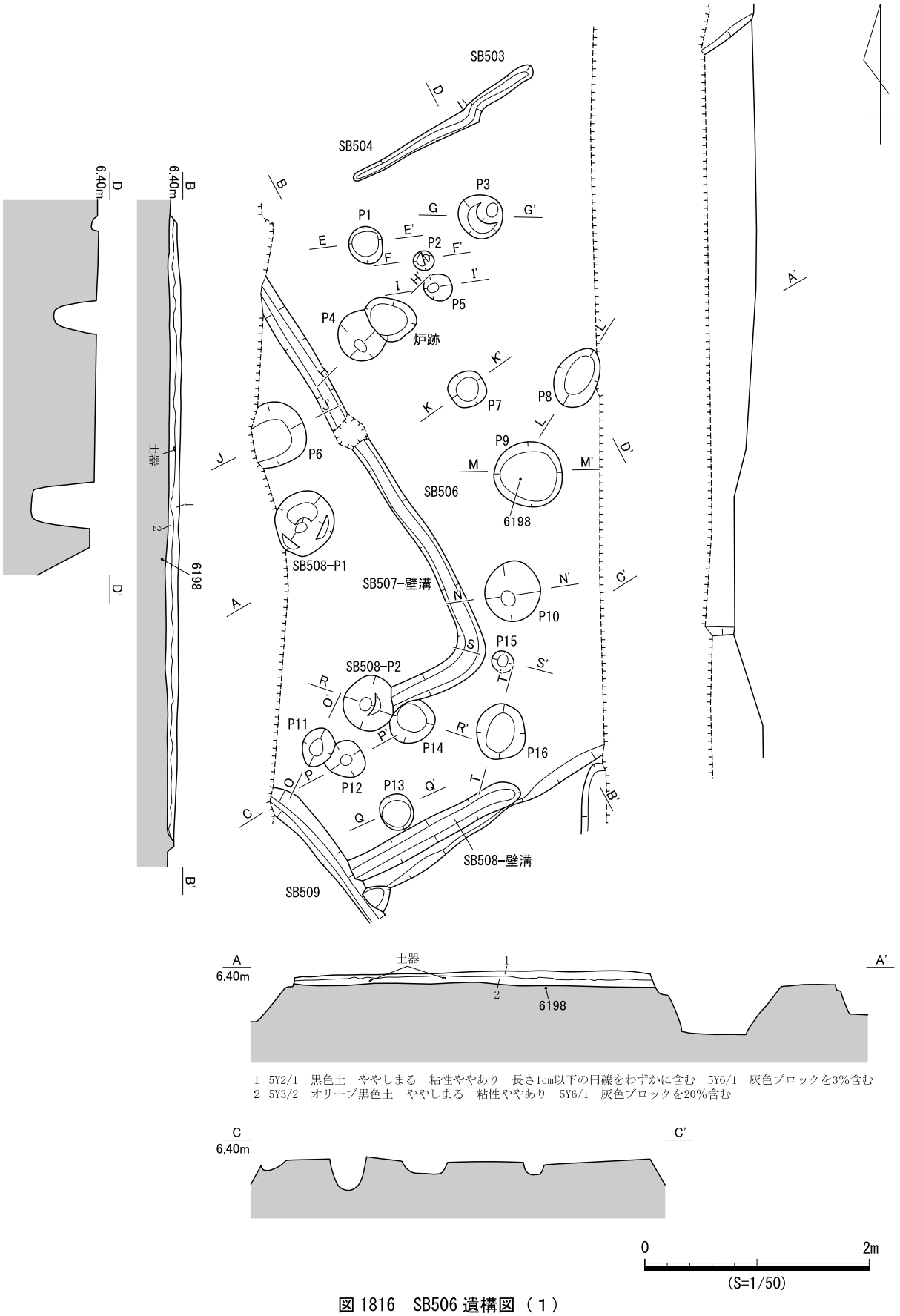
SB506（遺構：図 1816・1817、遺物：図 1818）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東西両側は撹乱により失われ、北側はSB503とSB504に切られ、南西側はSB509に切られる。本遺構の南辺は比較的明瞭に確認できた。

形状　南辺は直線的にのびるが、南辺しか検出していないため、形状は不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。層界に凹凸がみられ、いずれの層もブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）は確認できず、床面にて小穴を18基検出した。しかし、本遺構の床面ではSB507とSB508も検出しており、18基のうちには両遺構に属する穴も含まれている。この



1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　長さ1cm以下の円礫をわずかに含む　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む
2　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む

図 1816　SB506 遺構図（１）

うち、平面形が明瞭に確認できた16基を本遺構に属する遺構と判断した。しかし、SB508-P2と本遺構のP14は検出時に重複関係を誤認している可能性がある。16基の小穴のうち、P8とP11では柱痕跡を断面で確認でき、P3、P5、P10などは掘形の深い穴である。また、P10では拳大の粘土塊が２層中から出土した。平面的な位置関係から、P3とP11が柱穴の可能性がある。炉跡は、本遺構検出時に北西

図 1817　SB506 遺構図（２）

から中央付近にかけての焼土が部分的にみえていた。焼土の厚さは約１㎝で、遺構を掘削すると南東側が深くなり、南東端では土坑底面で焼土を確認できた。なお、本遺構に伴う壁溝は確認できていない。

遺物出土状況　埋土中から土器2,795点、石器類３点、小穴から土器239点、炉跡から土器２点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期とⅤ期の土器片もわずかに出土した。また、P3、P4、P5、P9からもⅥ期～Ⅶ期の遺物が出土した。

出土遺物　6194はⅥ期～Ⅶ期壺H2b類。口縁端部が内湾して端部を尖らせ、直下に沈線を２条施文する。6195、6196はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。6195は口縁部が外反し、端部付近で屈曲して直立する。端部内面にはナデによると考えられる凹面がわずかに認められ、外面には刺突を加える。6196は口縁部が屈曲して受口状となり、端部には顕著な平坦面をもつ。6197はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が短く外反し、端部付近でわずかに屈曲する。端部はほぼ直立して尖り、直下には刺突を加える。頸部直下に直線文が認められる。6198はⅦ期甕E2類。口縁部が短く屈曲し、端部を尖らせる。最大径は胴部中央からやや下がり、胴部形状はやや下膨れ気味である。短い脚部が内湾気味に開き、接地面は平坦である。器面に文様は認められず、ハケによる調整痕が認められる。6199はⅦ期甕D2b類。屈曲する口縁部が上下段ともに強く屈曲する。6200はⅦ期甕Ｄ類。器壁の薄い脚部がわずかに内湾して開き、端部内面には粘土の折り返しが認められる。6201はⅥ期高坏G3b類。坏底部は平坦であるが、口縁部との段は不明瞭である。口縁部が外傾して開き、わずかに内湾傾向を示す。端部付近は直立するように内湾し、直立気味の部位にのみ多条沈線を施す。器面全体にミガキ調整が認められる。6202は

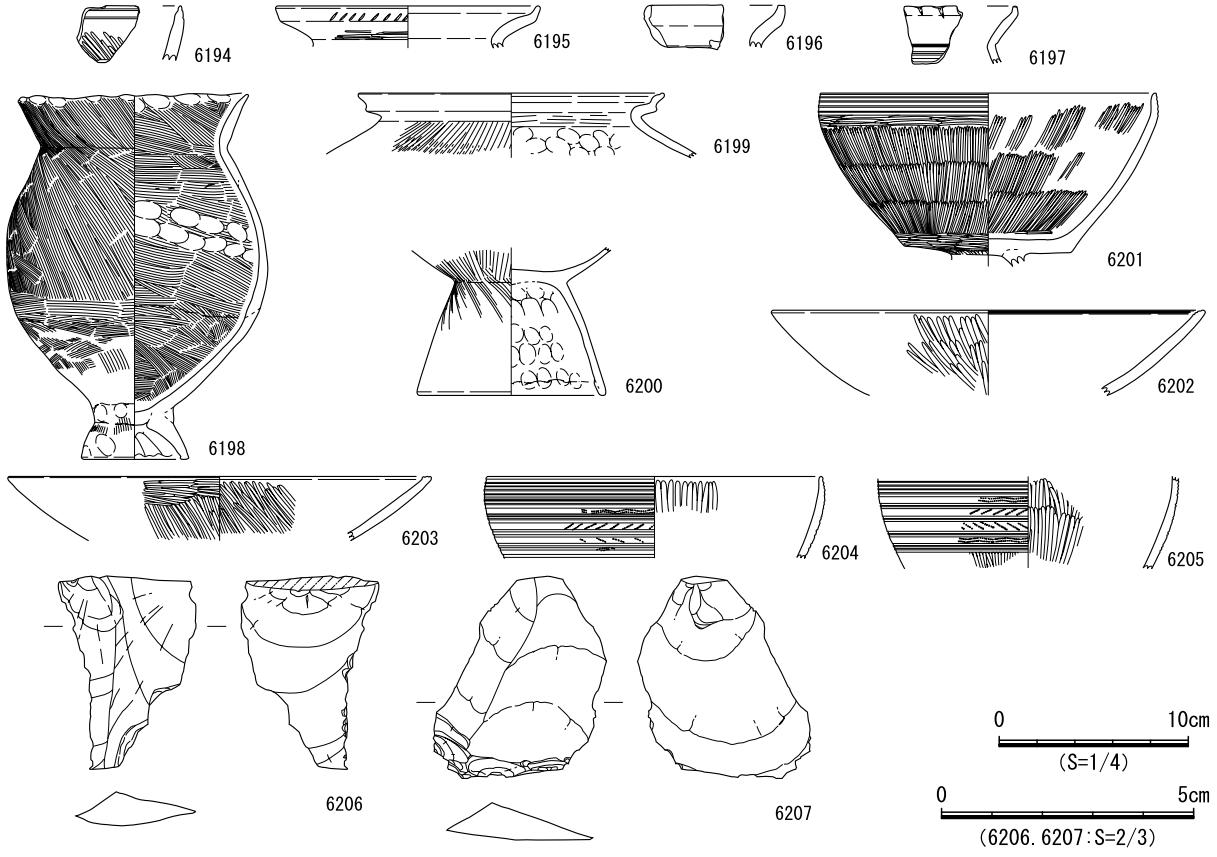


図 1818　SB506 遺物実測図

Ⅶ期高坏D2類。口縁部が皿状に開き、端部には内傾面を形成してその部位のみ多条沈線を施文する。6203はⅦ期高坏D2類。口縁端部に内傾する平坦面をわずかに形成し、そこに沈線を施文する。6204、6205はⅦ期高坏G3c類。6204は口縁部が内湾し、端部直下から多条沈線が施文される。その間に二重山形文、刺突文を加える。6205は口縁部がわずかに内湾し、外面には精緻な文様が認められる。多条沈線の間にクシ状工具による二重山形文、刺突文を規則的に配置する。6206、6207はMF。いずれも泥岩製で、素材となる縦長剥片の一側縁に細かい剥離が認められる。

時期　Ⅶ期のSB503、SB504に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB507（遺構：図1819）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB506床面においてほぼ直角に曲がる細長い溝を検出したため、竪穴住居跡の壁溝と判断した。なお、壁溝はSB508-P2に切られていると判断したが、検出時に重複関係を誤認した可能性が高い。

形状　遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上では３基の小穴を確認したが、これらが本遺構に伴うものか、SB506に伴うものかは定かでない。SB508-P1は土層断面で柱痕跡を確認でき、SB507-P1は直径が小さいものの、深くてほぼ垂直に掘り込まれている。SB508-P1は位置的にSB508の柱穴となる可能性が高いため、SB507-P1を本遺構の柱穴と考えた。壁溝は検出面で明瞭に確認できたものの、掘形は浅く、SB508-P2より西側では確認できなかった。

遺物出土状況　壁溝から土器34点が出土した。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　SB506より先行することから、Ⅵ期～Ⅶ期以前と考えられる。

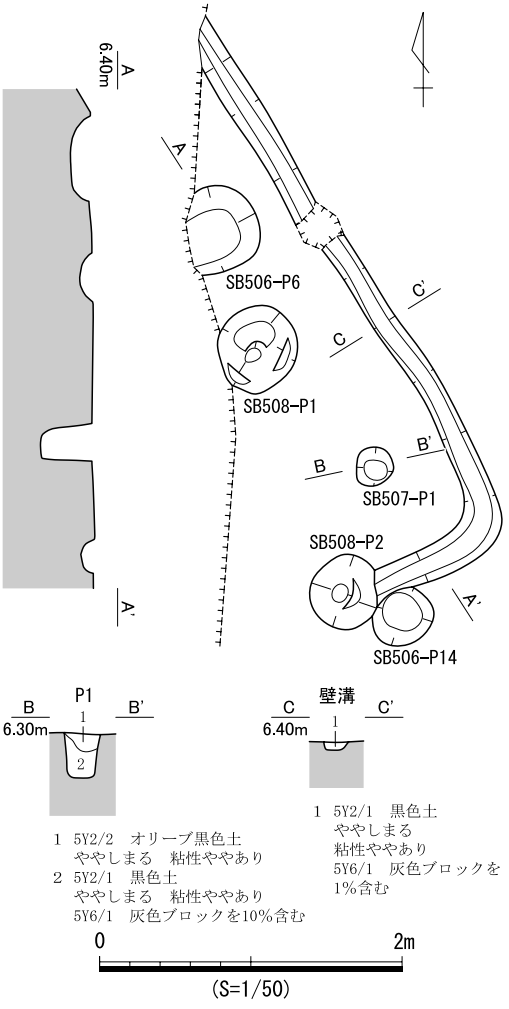


図1819　SB507遺構図

SB508（遺構：図1820、遺物：図1821）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、西側は撹乱により失われ、南西側でSB509に切られる。本遺構の壁溝はSB506床面で検出し、その内部にはブロック土を含む貼床（整地土）が広がっていた。しかし、貼床上面の遺構の平面形がとても不明瞭で判然としないため、若干掘り下げて小穴等を検出した。

形状　住居の東半分のみの検出であるが、北西－南東長約4.3ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満で、壁面もほとんど遺存していない。

埋土　住居埋土は確認できず、掘形埋土をわずかに確認したのみである。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて小穴を12基検出した。本遺構の床面はSB506、SB507とほぼ同じ高さであり、12基のうちには両遺構に属する穴が含まれ、遺構の重複関係等からP1～P5を本遺構に属するものと判断した。P1、P2、P4は柱痕跡を土層断面で確認でき、P1とP2は柱痕跡と掘形の形状が類似し、平面的な位置関係から本遺構の柱穴と考えた。なお、壁溝は南壁沿いと東壁沿いの南側で確認できた。壁溝の平面形は明瞭であったが、掘形は浅く、住居の南東隅で途切れている。炉跡は確認できなかった。

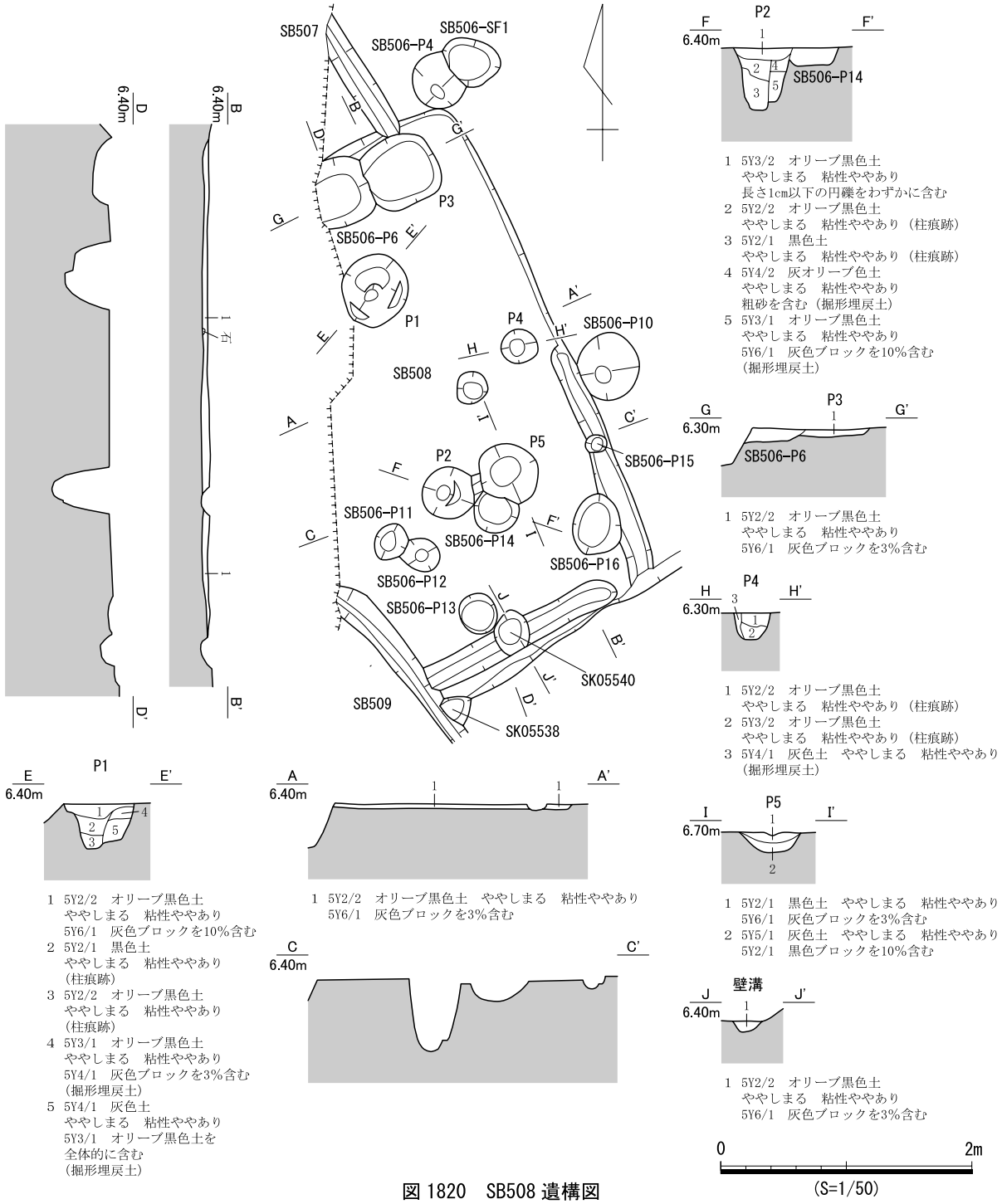


図 1820　SB508 遺構図

遺物出土状況　埋土中から土器93点、壁溝から土器16点、小穴から土器111点が出土した。このうち、P2からは59点の土器片が出土している。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期とⅧ期のものがわずかに混入している。

出土遺物　6208はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が屈曲し、外面に刺突を加える。6209はⅧ期甕Ｄ類。屈曲する口縁部が大きく外方に開く。6210はⅦ期高坏D5類。口縁部が浅く皿状に開き、口縁部には内傾する平坦面を形成する。そこから内面にかけて多条沈線を施文し、その間に連弧文を加える。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB509に切られるが、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

図 1821　SB508 遺物実測図

SB509（遺構：図 1823、遺物：図 1822）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、北側でSB508、東側でSB511を切り、南側はSB512に切られる。平面形は比較的明瞭であった。

形状　遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。１層が覆土、３層が壁溝埋土及び掘形埋土である。覆土は円礫やブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上にて３基の小穴と壁溝を検出した。小穴のうちP1とP3では柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1が柱穴と考えられる。壁溝は検出した範囲では壁面に沿って全周している。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形　壁溝周辺部のみ約0.5ｍの幅でオリーブ黒色土が残っていたため、竪穴住居跡の掘形と認識し、掘削した。その結果、掘形底面にてさらに細長い溝状遺構を４条（壁溝２～５）検出した。壁溝５はSB512底面で検出し、いずれの遺構にもブロック土の混入が少なかった。なお、竪穴住居跡の中央部では整地痕跡を確認できなかった。幅約0.5ｍの掘形底面では４条の溝の他に６基の小穴を検出し、P6では柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　埋土中から土器358点、石器類１点、壁溝から土器72点、掘形から土器84点、小穴から土器76点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期のものが多く、小穴からはⅤ期～Ⅶ期の高坏や壺が出土している。

出土遺物　6211はⅤ期～Ⅵ期壺A1類。口縁部が外反し、端部付近で屈曲して開く。端部を上下にわずかに拡張し、外面には擬凹線が認められる。6212はⅤ期～Ⅵ期高坏B3b類。坏底部から口縁部が大きく外反する。6213はⅦ期高坏C3c類。内湾する口縁部内面には多条沈線を施文する。6214はⅦ期高坏D5類。口縁部内面に多条沈線、連弧文が認められる。6215はⅥ期～Ⅶ期手焙り形土器。覆部の端部小片で、胴部との接合部にあたる。端部には幅広の平坦面をもち、沈線が認められる。

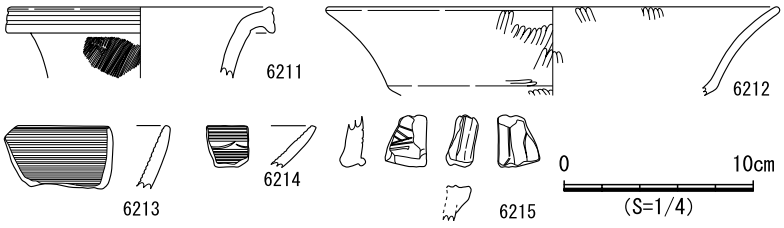
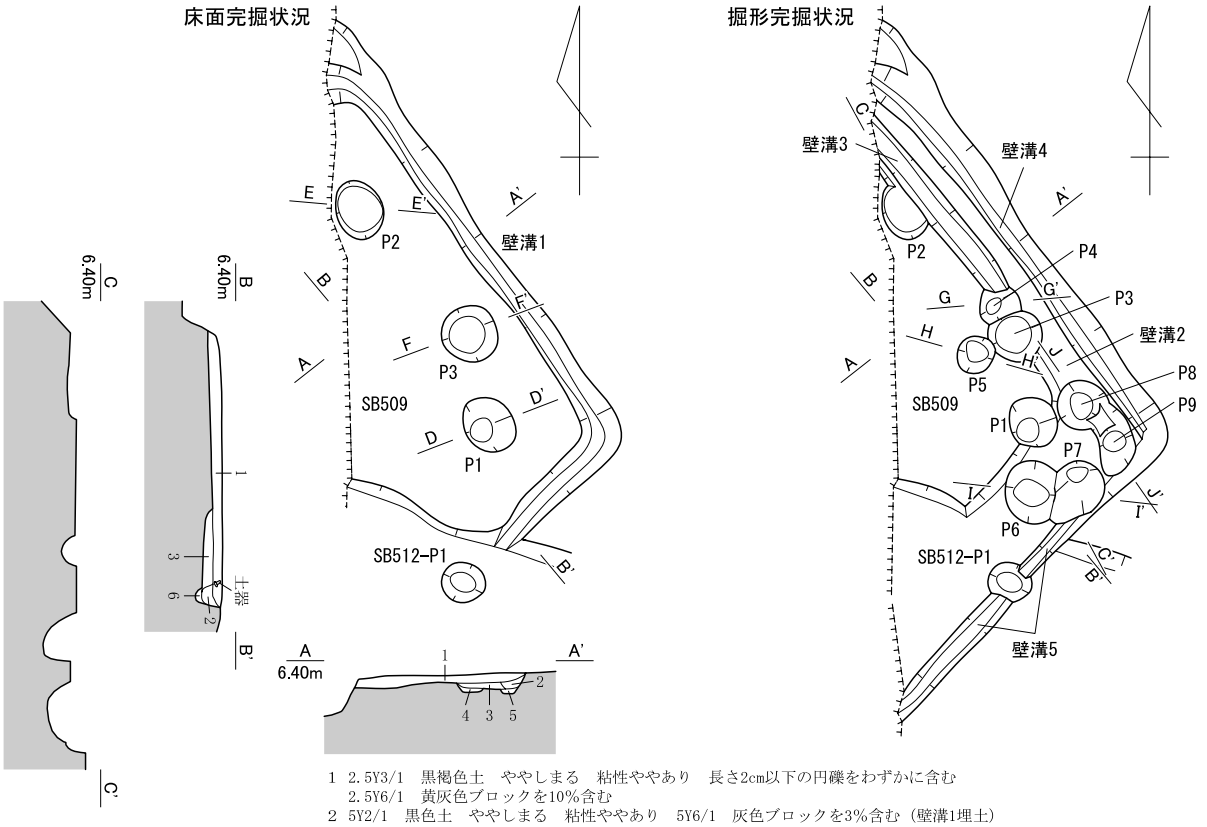
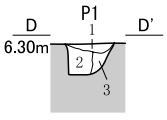


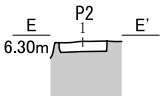
図 1822　SB509 遺物実測図



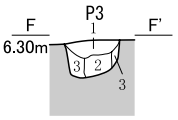
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　長さ2cm以下の円礫をわずかに含む
　2.5Y6/1　黄灰色ブロックを10%含む
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む（壁溝1埋土）
3　5Y2/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　長さ1cm以下の円礫をわずかに含む（壁溝2埋土）
4　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり（壁溝3埋土）
5　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む（壁溝4埋土）
6　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり（壁溝5埋土）



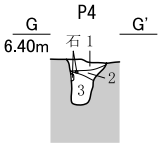
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む
2　5Y5/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ2cm以下の円礫を含む（柱痕跡）
3　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　（掘形埋戻土）



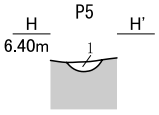
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを3%含む



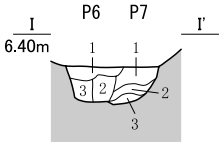
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む
2　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　炭化粒をわずかに含む（柱痕跡）
3　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　（掘形埋戻土）



1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを5%含む

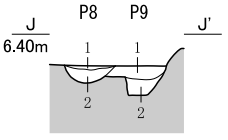


1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1灰色ブロックを10%含む



P6
1　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y3/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　長さ1cm以下の円礫を含む

P7
1　5Y3/2　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　砂礫を多く含む



P8
1　5Y3/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1灰色ブロックを5%含む

P9
1　5Y2/2　オリーブ黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y6/1　灰色ブロックを20%含む
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり

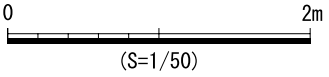


図 1823　SB509 遺構図

外面には文様が描かれるが、小片のため全容は不明である。

時期　小穴の出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB510（**遺構**：図 1824、**遺物**：図 1825）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側は撹乱により失われ、SB509、SB512に切られ、東側でSB513を切る。周辺遺構との重複が著しく、平面形は不明瞭であった。

形状　遺構の東辺と南辺しか検出できていないが、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満で、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層であり、円礫をわずかに含む。ブロック土の混入は確認できなかったものの、時期的に近似する遺構の重複が著しいことから、埋土は人為堆積の可能性が高い。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面の基盤層は砂質シルトであり、床面上の遺構検出は不明瞭であった。床面上にて４基の小穴を検出したが、柱痕跡を確認できる遺構はなく、その性格は不明である。また、壁溝は東辺と南東隅で検出した。

遺物出土状況　埋土中から土器91点、壁溝から土器６点、小穴から土器34点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅣ期の土器片が混入する。

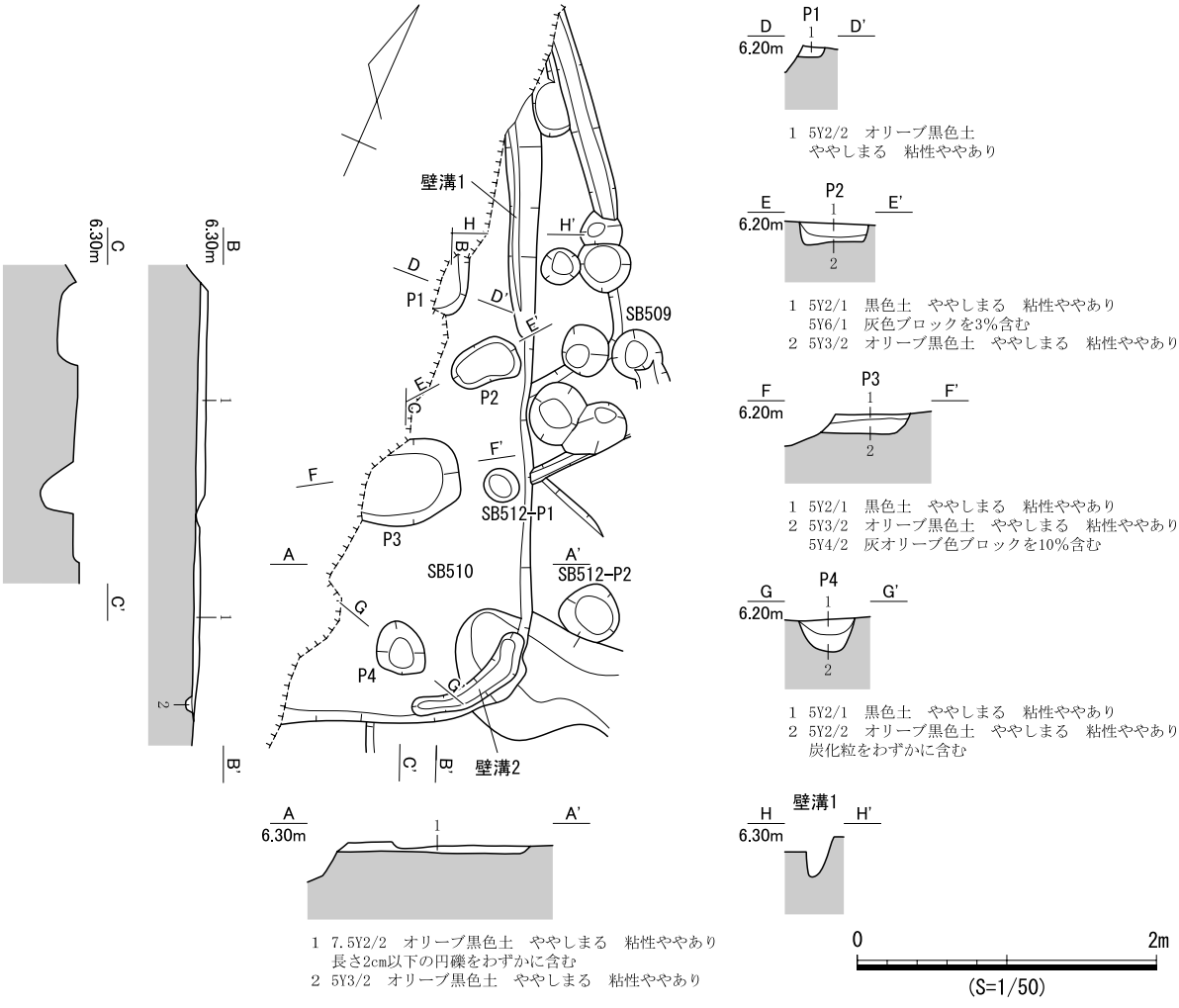


図 1824　SB510 遺構図

出土遺物　6216はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が短く外反し、端部がわずか屈曲して外面に平坦面を形成する。端部は尖り気味となり、外面には刺突を加える。頸部には太い沈線が１条認められる。6217はⅥ期～Ⅶ期鉢A3a類。口縁部が短く外反し、端部上端が拡張され、尖り気味である。

時期　Ⅵ期～Ⅷ期のSB509、SB512に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

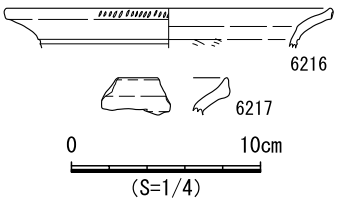


図 1825　SB510 遺物実測図

SB511（**遺構：図 1826・1828、遺物：図 1827**）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置し、08_9地点と11_5地点にて検出した。中央を撹乱により失われており、平面形は比較的明瞭であった。西側はSB509に、南西側はSB512に、南東側はSD1153に、それぞれ切られている。

形状　南側は定かでないものの、およそ方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　08_9地点では検出時に床面の遺構が見えていたが、11_5地点ではわずかに埋土を確認できた。埋土は単層であり、ブロック土と小円礫を含むことから、人為堆積と考えられる。

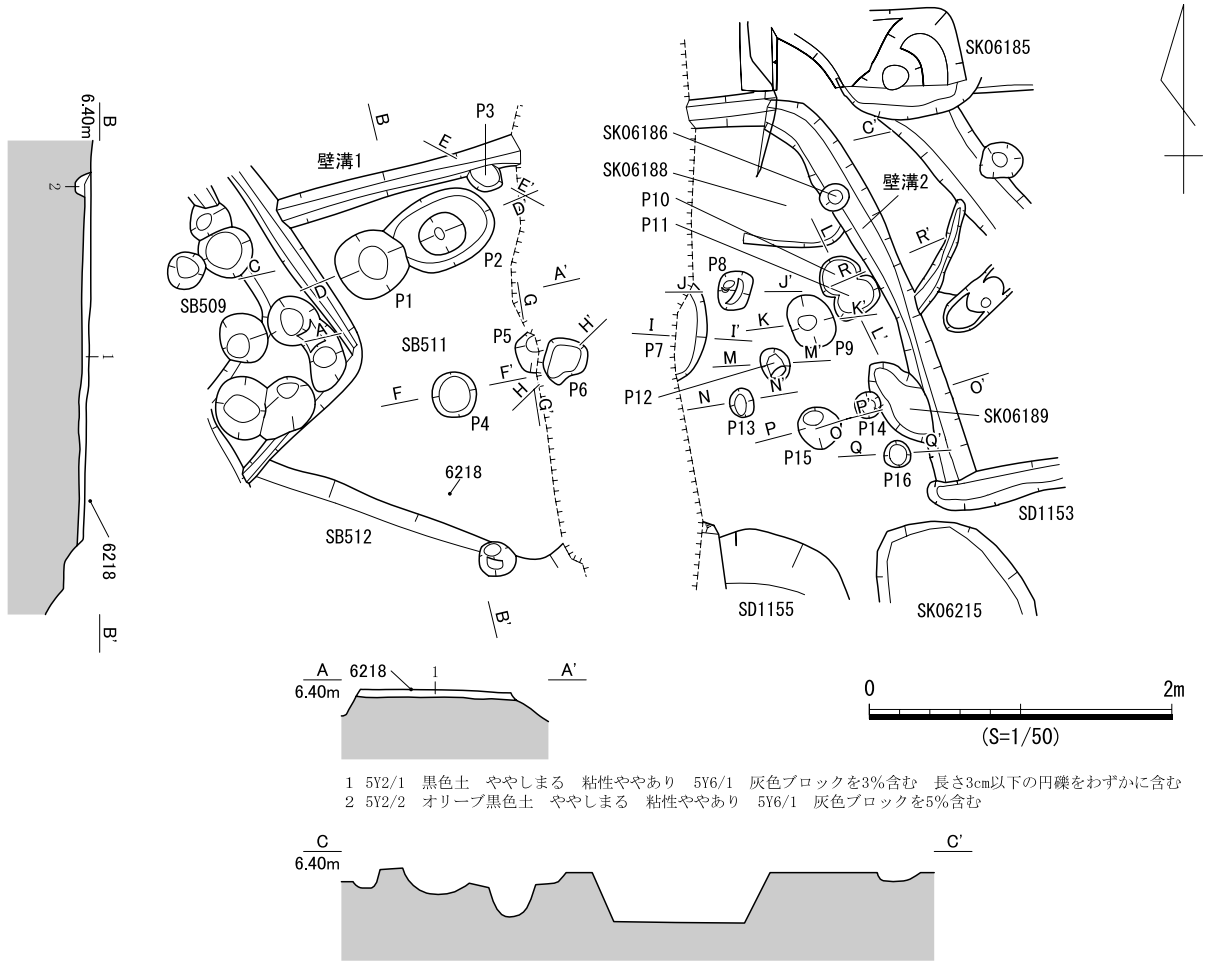


図 1826　SB511 遺構図（１）

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できず、床面にて小穴を16基検出した。柱痕跡をP2、P9、P15で確認したが、柱穴の認定は困難である。なお、壁溝は検出した範囲内を全周している。

遺物出土状況　埋土中から土器209点、小穴から土器181点、壁溝から土器25点が出土した。埋土中の出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期の土器片もわずかに混入する。壁溝からⅥ期～Ⅶ期の手捏ね土器が複数出土した。

出土遺物　6218はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部は矮小で、口縁部が開き気味に立ち上がる。坏底部中央には小さな穿孔が認められる。6219、6220はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｃ類。口縁部が直線的に外傾して開く。内面にはユビナデ痕が明瞭に残り、端部は外面にわずかに粘土がはみ出す。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB509とⅥ期～Ⅷ期のSB512に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

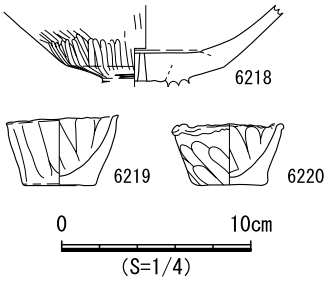


図 1827　SB511 遺物実測図

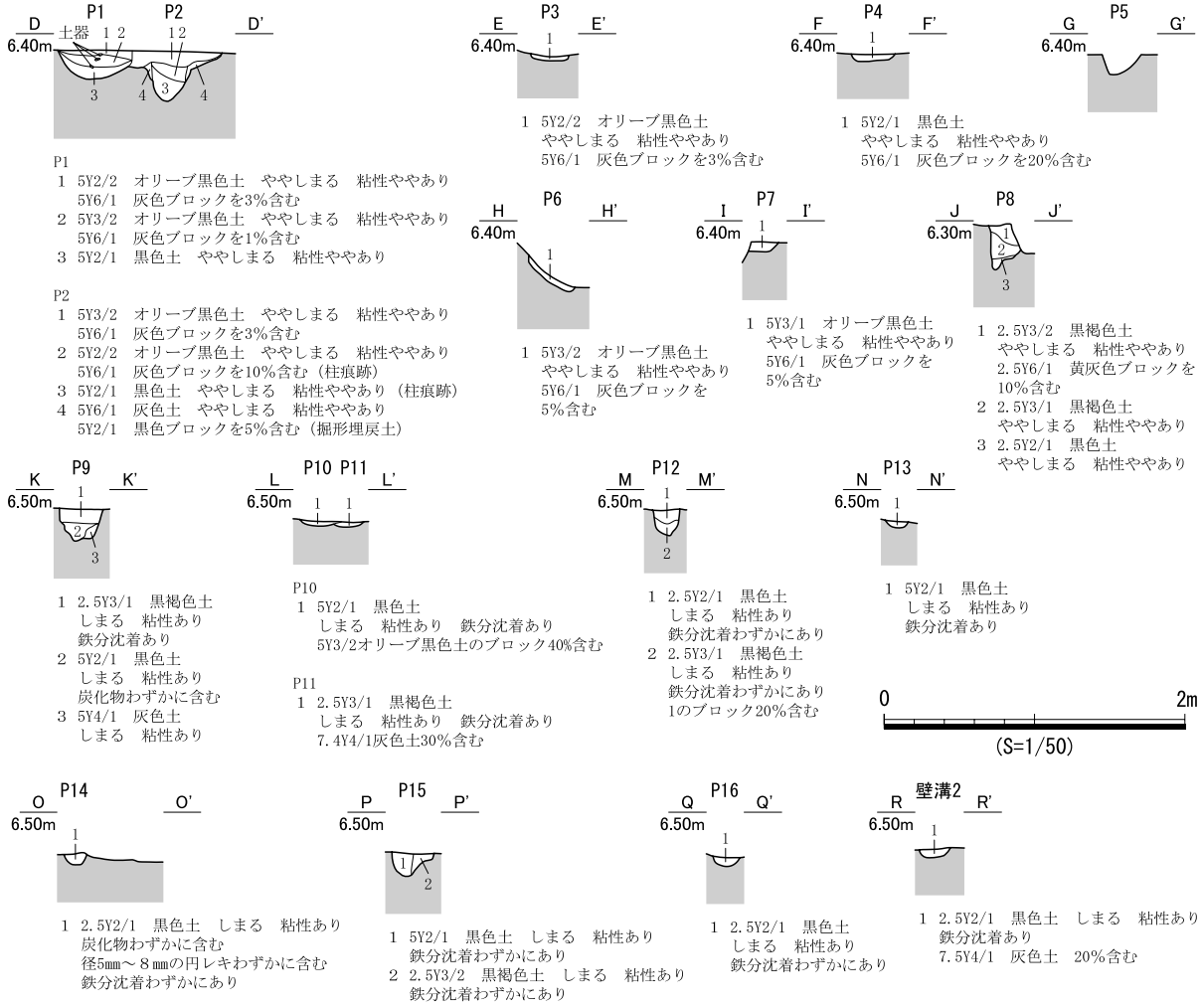


図 1828　SB511 遺構図（２）

SB512（**遺構**：図1829、**遺物**：図1830）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。東側をSK05587に、南側をSK05588とSD1103に切られ、平面形は不明瞭であった。

形状　北辺と東辺を検出し、両辺が直角気味な位置関係にあることから方形を呈すると考えられる。

深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。ほぼ水平堆積であり、下層は炭化粒をわずかに含んでいた。北壁沿いでは、床面からやや上位レベルで、29㎝×20㎝の範囲で焼土塊を検出した。その全体形はU字状を呈し、厚さは約５～10㎜と薄い。また、東壁沿いでは、床面からやや上位で、１～５㎝程度の粘性の高い褐色粘土塊がまとまって出土した。焼土塊や褐色粘土塊の検出した標高値がほぼ同じであることから、本来は床面が１層と２層の層界付近であった可能性もあるが、遺構はすべて２層下で検出した。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、壁溝は確認できず、床面にて６基の小穴を検出した。このうち、

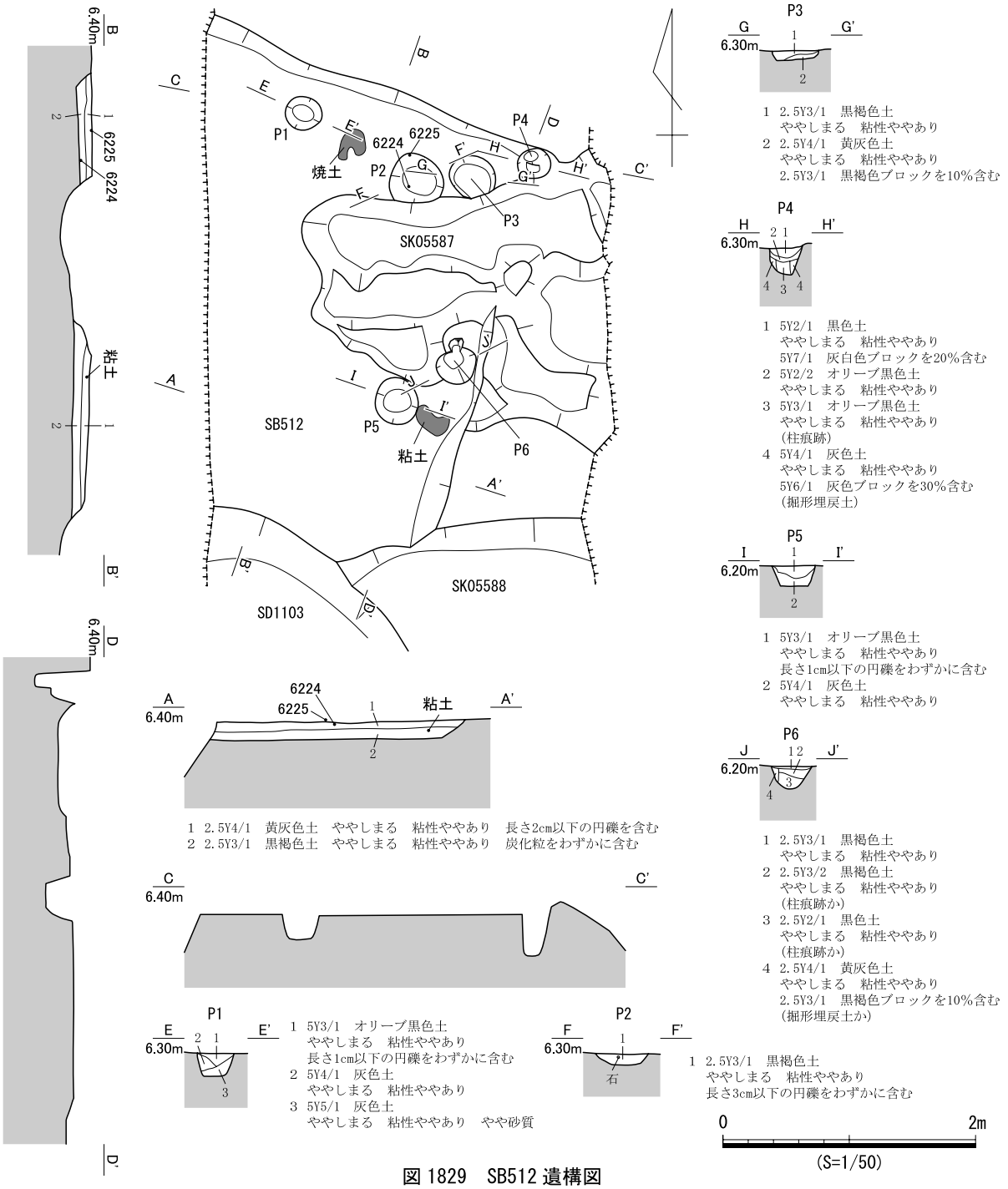


図 1829　SB512 遺構図

P4とP6は柱痕跡を確認したが、いずれも壁際に位置するため住居の柱穴である可能性は低い。

遺物出土状況　埋土中から土器1,201点、石器類１点、小穴から土器98点が出土した。埋土中の出土土器はⅣ期～Ⅷ期のものまで含まれるが、Ⅳ期とⅧ期のものは混入と考えられる。

出土遺物　6221はⅣ期壺A2類。口縁部には凹線が認められ、以下には斜位の刺突文が方向を変えて３帯施文される。6222はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、平坦に仕上げた端部には下端にタタキが認められる。胴部は横方向のタタキの後に縦方向のハケ調整を施す。6223はⅥ期甕D1b類。屈曲する口縁部下段は外方に開くが、上段は直立気味に立ち上がる。外面には刺突を加える。6224はⅦ期高坏C4c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。6225はⅧ期高坏。坏底部に平坦面は認められず、段をもたずに口縁部がゆるやかに立ち上がる。外面の稜は痕跡程度に残る。端部には内傾する平坦面を形成し、内外面ともに丁寧なミガキを施す。内外面ともに弧状の煤が付着するが、接合部位で煤が途切れ、断面に煤が付着する。破損してから煤が付着した可能性が高い。

時期　Ⅶ期のSK05588に切られることと出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

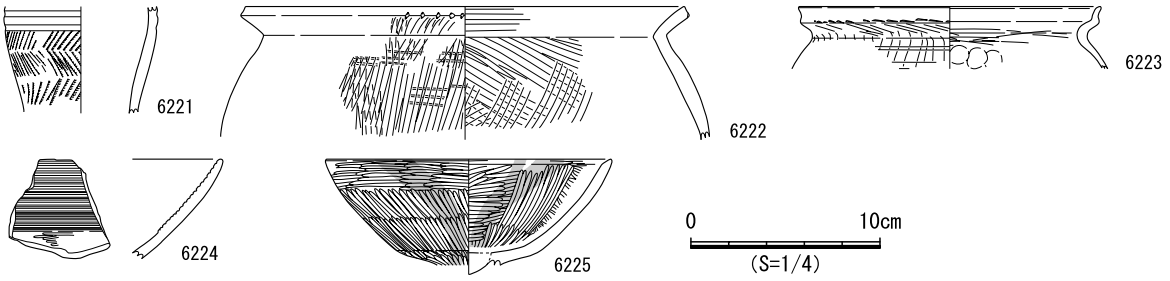


図1830　SB512遺物実測図

SB513（遺構：図1831）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。SB511底面で検出し、北側をSB509に、西側をSB510に、南側をSB512とSK05587に切られている。

形状　東辺のわずかな範囲しか検出できておらず、不明である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　２層に分層した。上下層ともにブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面では新たに遺構を確認できなかったが、重複するSB509、SB510、SB512などの底面で検出した小穴のいずれかは本遺構に伴う可能性がある。そのため、本遺構を竪穴住居跡と判断した。

遺物出土状況　埋土中から土器47点が出土した。出土土器のうち時期が判明する破片はⅣ期、Ⅵ

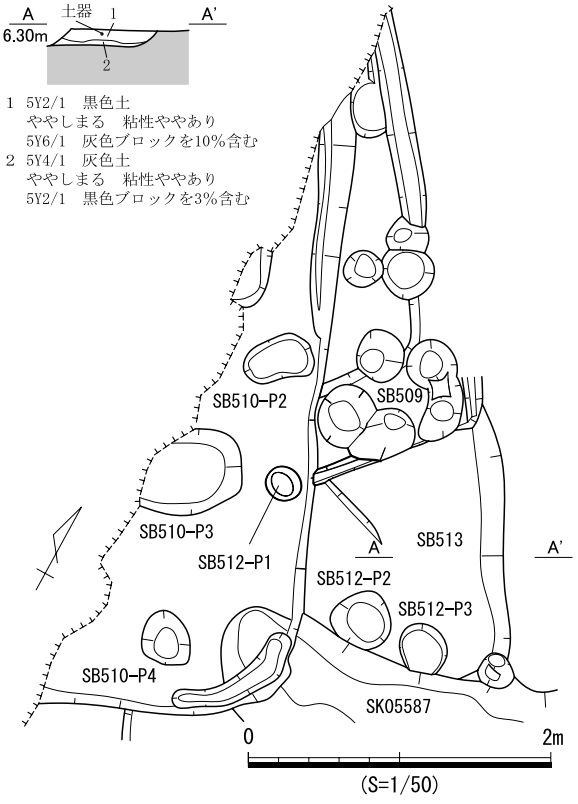


図1831　SB513遺構図

期、Ⅶ期のものがあるが、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB509～SB512に切られるが、出土遺物の時期からそれ以前と考えられる。

SB514（遺構：図1832）

検出状況　東部西側南寄りに位置し、SD1103掘削後に検出した。検出面ではすでに壁溝が見えており、埋土は削平されたと考えられる。壁溝はSK05564、SK05566に切られている。

形状　壁溝の配置から不整方形を呈すると考えられ、壁溝１と壁溝２の主軸方位が若干ずれていることから、建て替えがなされた可能性がある。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。検出面にて４基の小穴を検出し、P1のみ掘形が深いことから柱穴の可能性がある。壁溝は途切れているが、深さがとても浅いことから上部が削平されていると考えられる。

遺物出土状況　壁溝から土器８点、小穴から土器14点、石器類１点が出土したが、いずれも小片であり図示していない。

時期　出土遺物が少なく、遺構の重複関係からも時期を言及できないため、不明である。

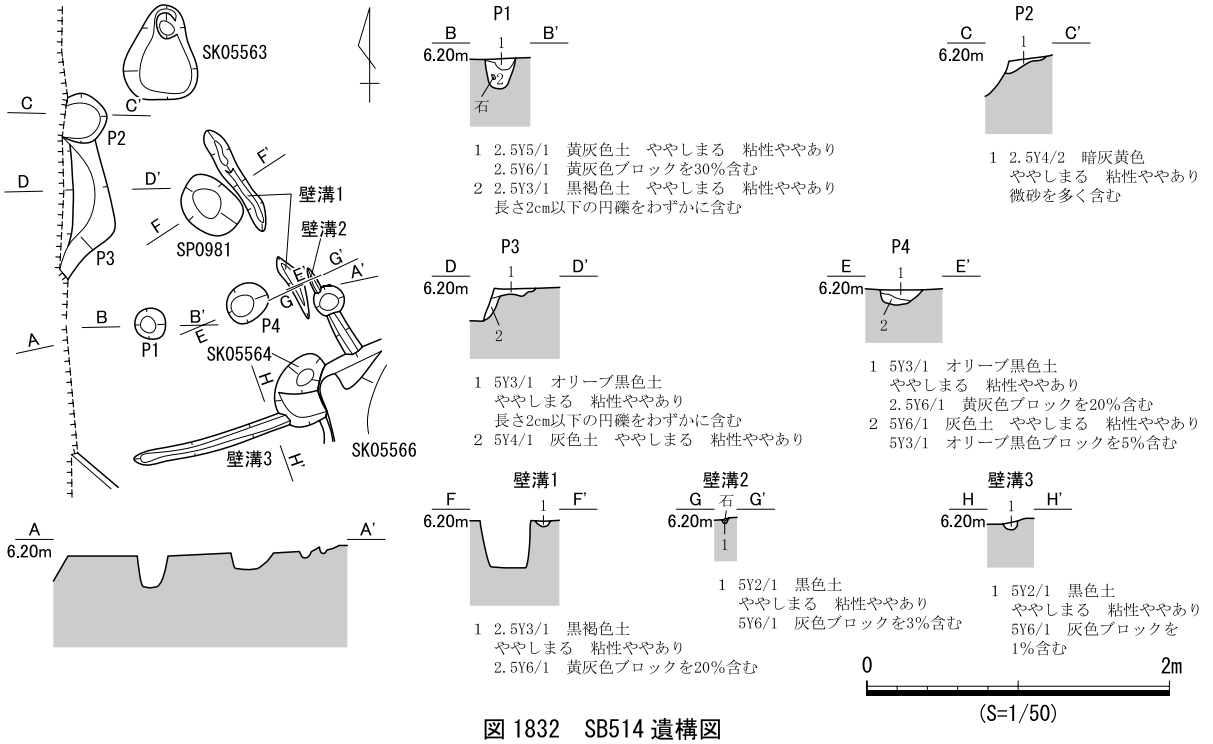


図1832　SB514遺構図

SB515（遺構：図1834、遺物：図1833）

検出状況　東部西側南寄りに位置し、西側をSK05589とSD1103に切られている。本遺構付近の遺構検出面は微砂～シルト質土であり、上層からの多数の踏み込みが見られたため、平面形は不明瞭であった。

形状　西側を削平されているため形状は不明であるが、北東隅部は丸みを帯びている。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜も不明瞭である。

埋土　単層であり、ブロック土が混入していることから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できず、床面にて小穴を３基検出した。そのうちP1は掘形が深く、P3は最下層に炭化粒を含むが、住居の全形が不明であるため、その性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器22点、小穴から土器19点が出土した。

出土遺物　6226はⅦ期高坏G3c類。脚部が扁平に開き、外面に多条沈線を施文し、その間に連弧文を２帯加え、端部には刺突を加える。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

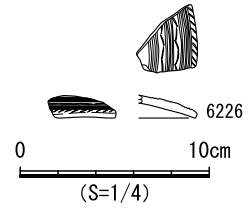


図 1833　SB515 遺物実測図

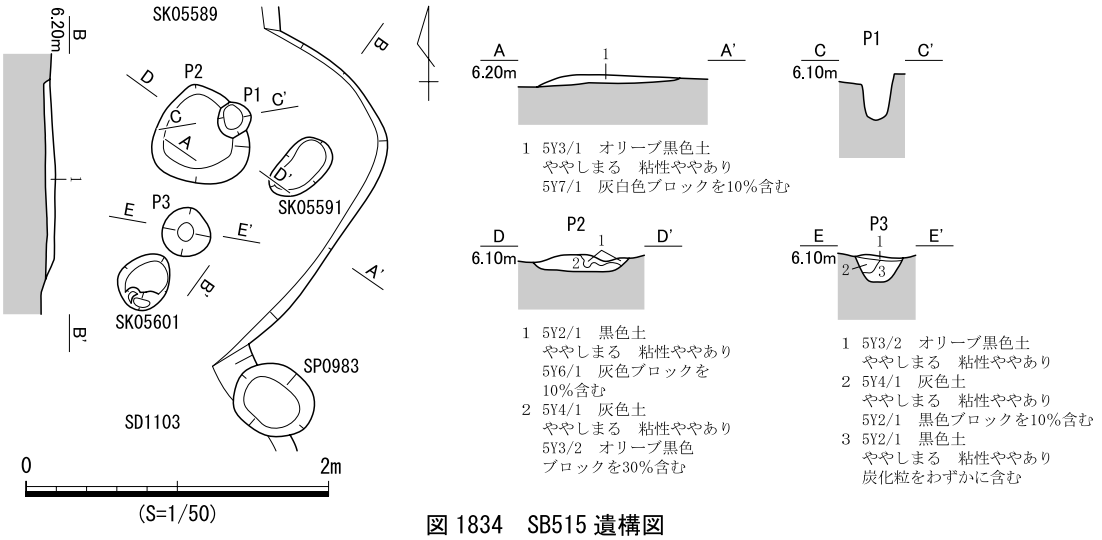


図 1834　SB515 遺構図

SB516（遺構：図 1836、遺物：図 1835）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出したが、平面形はやや不明瞭であった。南西隅部を土坑SK05801に切られ、SZ178を切る。

形状　東側の半分以上が調査区域外となるうえ、南側をSK05801に切られるため、全形は不明である。確認範囲から方形を呈すると考えられ、北西隅部は丸みを帯び、北辺と西辺はそれぞれ直線的である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。大半の埋土は黒褐色土であるが、その成因は不明である。

床面　ほぼ平坦で、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上にて８基の小穴を確認した。柱痕跡は確認できなかったが、平面的な位置関係からP1とP2が柱穴と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器316点、小穴から土器28点が出土した。埋土中からの出土土器はⅦ期のものが多く、他にⅣ期の小片がわずかに混入する。

出土遺物　6227はⅦ期壺A3類。口縁部を上方に拡張し、内面には羽状文を施文する。端部には擬凹線が認められ、３条１組の棒状浮文が施される。端部には、棒状浮文上面も加えて全面に赤色顔料が塗布される。6228はⅦ期高坏C4d類。口縁部内面に多条沈線を施文し、その間に、現状では山形文を２帯加える。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

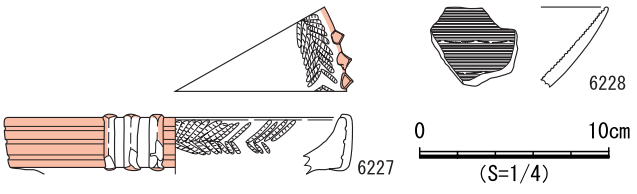


図 1835　SB516 遺物実測図

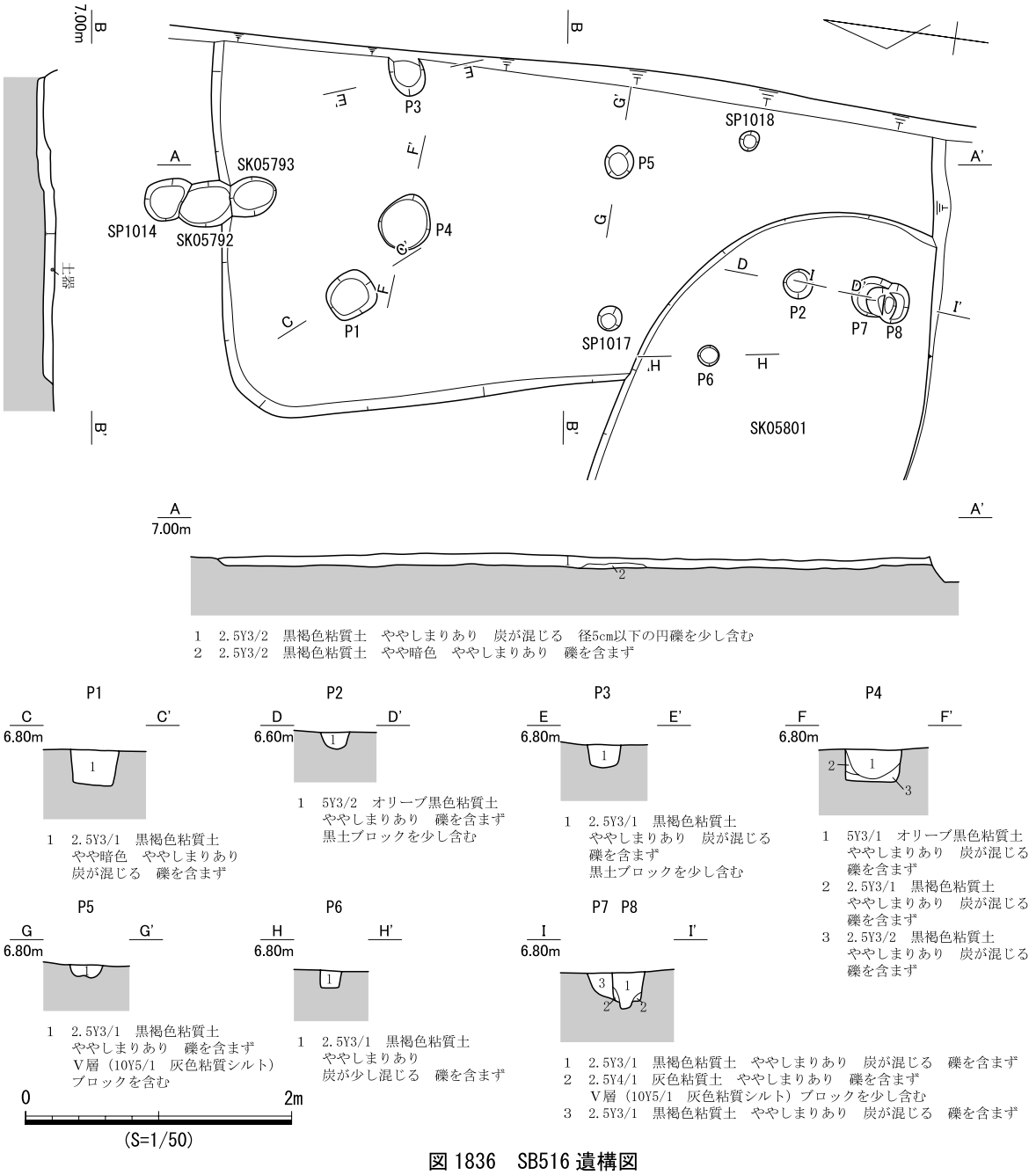


図 1836　SB516 遺構図

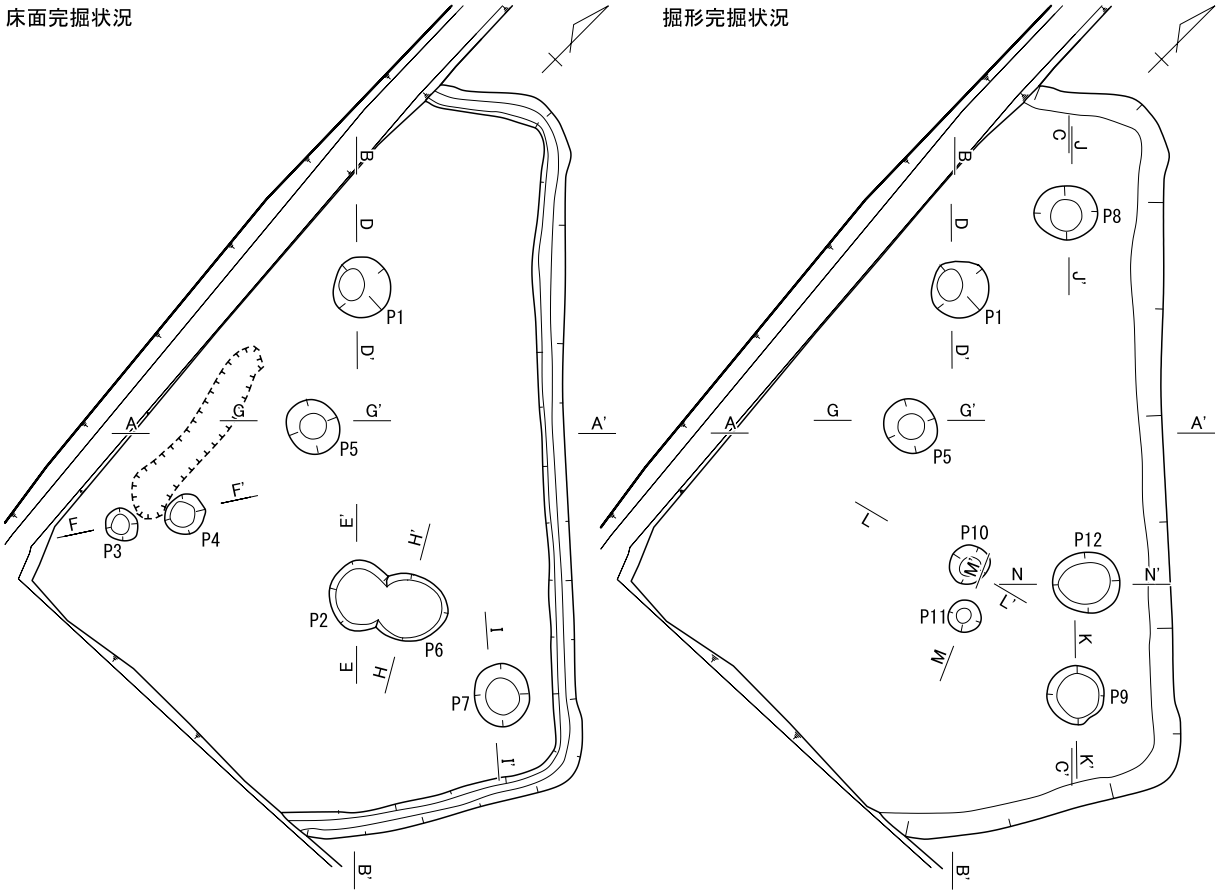
SB517（遺構：図 1837・1838、遺物：図 1839）

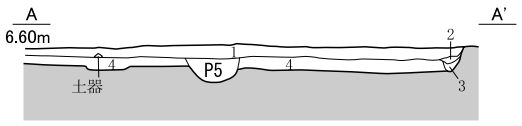
検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。炭化物や土器片を多く含む黒褐色土の範囲を平面形として検出した。東隅部でSK06082を切り、南西側に撹乱があり、やや不明瞭であった。

形状　隣接調査区との空閑地があり、北東部のみを検出した。そのため全形は明らかではないが、北西－南東長約5.0ｍの方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

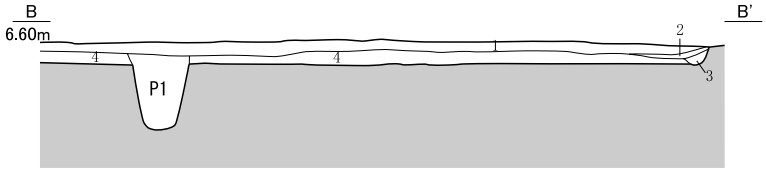
埋土　３層に分層した。土層図の１・２層が覆土、４層が掘形埋土である。覆土は炭化物や土器片を含み、ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦で、貼床（整地土）があり、部分的に硬化面を確認した。床面上では、小穴７基と壁溝を検出した。小穴の大半は浅いが、P1のみ深くて土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関

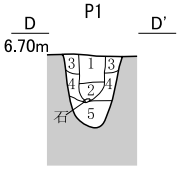




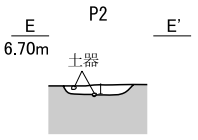
1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり Ⅴ層ブロックを含む 土器片わずかに含む
炭化物散在してわずかに含む 鉄分沈着あり
2 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む 鉄分沈着わずかにあり
3 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む 灰色土のブロックわずかに含む
4 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物上部にわずかに含む
灰色土のブロック散在して20%含む



1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり Ⅴ層ブロックを含む 炭化物散在してわずかに含む
土器片(細かい)わずかに含む 鉄分沈着あり
2 2.5Y3/1 黒褐色土(やや明るい) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む
灰色土のブロック10%含む 鉄分沈着わずかにあり
3 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物わずかに含む 灰色土のブロック40%含む
4 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い) しまる 粘性あり 炭化物上部にわずかに含む
灰色土のブロック散在して20%含む



1 2.5Y3/1 黒褐色土(やや暗い)
しまる 粘性ややあり 炭化物含む
鉄分沈着あり 土器細片わずかに含む
2 5Y3/1 オリーブ黒色土(灰色に近い)
ややしまる 粘性ややあり 下部石あり
3 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり
鉄分沈着わずかにあり
4 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性なし
土器片わずかに含む
5 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり



1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あり
土器片含む 炭化物わずかに含む

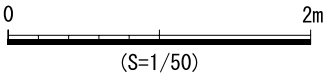


図 1837　SB517 遺構図（１）

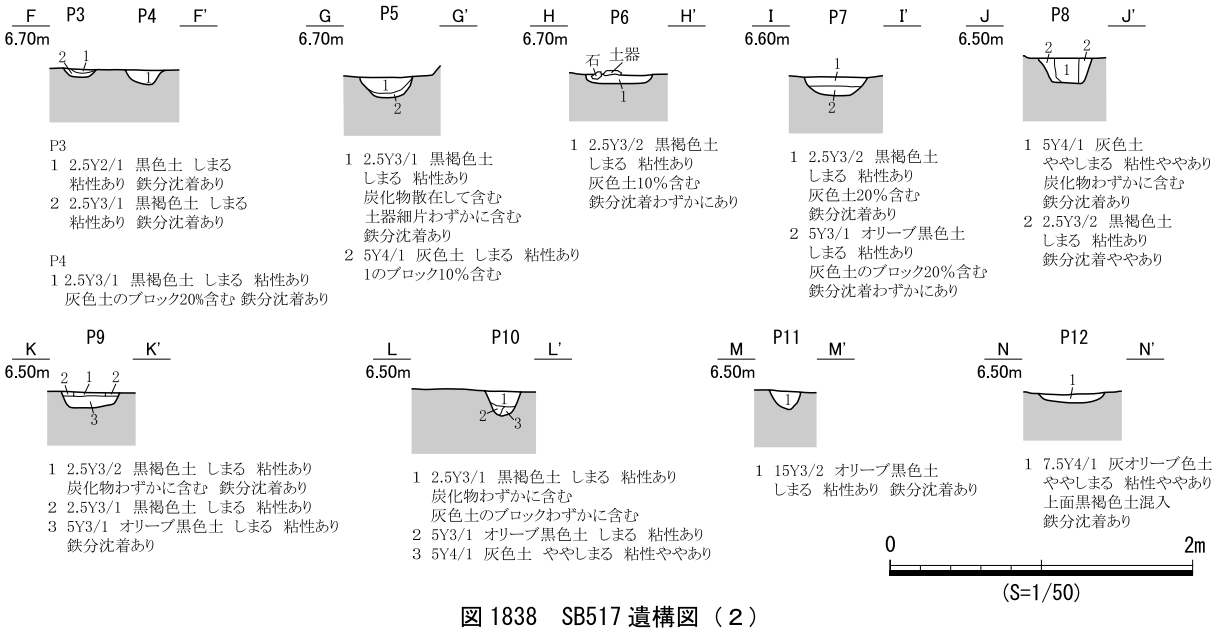


図 1838　SB517 遺構図（２）

係からP1とP2が柱穴と考えられる。なお、壁溝は検出範囲において全周し、幅・深さともにほぼ一定である。炉跡は確認できなかった。

掘形　比較的浅く埋土は単層で、灰色ブロック土が混入する。掘形底面は平坦で、小穴を５基検出した。そのうちP8では、土層断面で柱痕跡を確認した。床面では検出できなかったものの、平面的な位置関係から、P8とP9は、P1とP2に先行する段階において柱穴であった可能性もある。そのため本住居は、規模の拡張を行わずに床面を成形し、柱穴の位置をずらして再構築している可能性がある。

遺物出土状況　覆土と掘形埋土から土器705点、石器類４点、床面の小穴から土器63点、石器類２点、壁溝から土器８点、石器類１点が散在して出土した。また、掘形底面の小穴から土器７点、石器類１点が出土した。出土土器はⅥ期のものが多く、P6からⅤ期～Ⅵ期の壺Ａ類（6229）が出土した。

出土遺物　6229はⅤ期～Ⅵ期壺A3類。口縁部が外反し、内面には顕著な段を形成する。端部を下方に拡張し、擬凹線を施文した上に、３本１組の棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面にはヘラによる羽状文を4.5帯配し、内外面ともに赤彩を施す。6230は砥石。表面の砥面には線状痕が残り、裏面は剥離している。

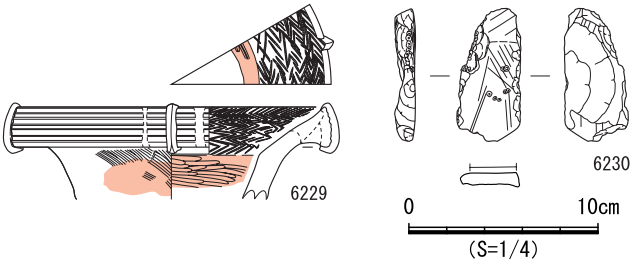


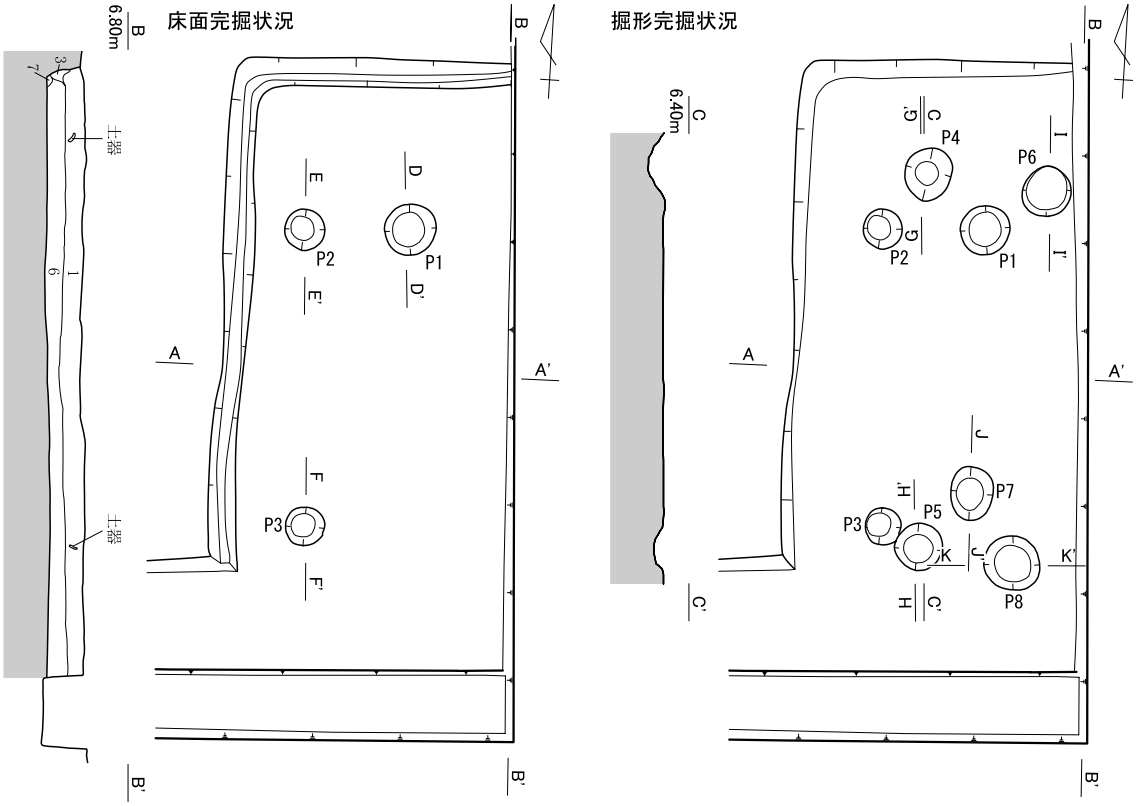
図 1839　SB517 遺物実測図

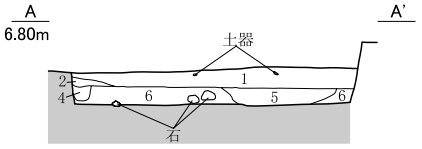
時期　出土遺物の時期と、Ⅰ期のSK06082を切ることから、Ⅵ期と考えられる。

SB518（遺構：図 1840、遺物：図 1841）

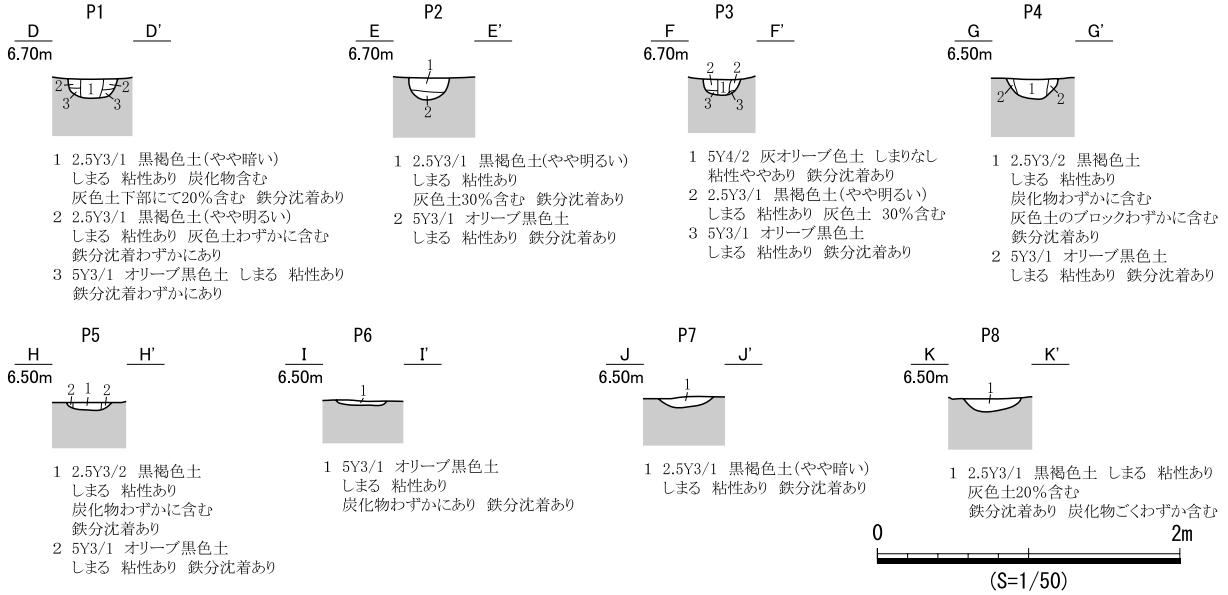
検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。炭化物や土器片を多く含む黒褐色土の範囲を平面形として検出し、その範囲内には長さ約10㎝の角礫や亜円礫も含まれていた。西側でSK06082を切る。

形状　北辺と西辺のみを検出したため、規模は不明である。両辺とも直線的にのび、隅部はほぼ直角





1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり　土器片散在して含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　炭化物わずかに含む　灰色土のブロック10%含む　鉄分沈着わずかにあり
3　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　炭化物わずかに含む　灰色土のブロック10%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　炭化物散在して含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり　炭化物をやや多く含む
6　2.5Y3/2　黒褐色土　しまる　粘性あり　炭化物わずかに含む　灰色土のブロック散在して含む
　オリーブ黒色土のブロック20%含む　鉄分沈着わずかにあり
7　5Y4/1　灰色土　しまる　粘性あり



P1
1　2.5Y3/1　黒褐色土(やや暗い)
　しまる　粘性あり　炭化物含む
　灰色土下部にて20%含む　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土(やや明るい)
　しまる　粘性あり　灰色土わずかに含む
　鉄分沈着わずかにあり
3　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまる　粘性あり
　鉄分沈着わずかにあり

P2
1　2.5Y3/1　黒褐色土(やや明るい)
　しまる　粘性あり
　灰色土30%含む　鉄分沈着あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり

P3
1　5Y4/2　灰オリーブ色土　しまりなし
　粘性ややあり　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土(やや明るい)
　しまる　粘性あり　灰色土　30%含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり

P4
1　2.5Y3/2　黒褐色土
　しまる　粘性あり
　炭化物わずかに含む
　灰色土のブロックわずかに含む
　鉄分沈着あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり

P5
1　2.5Y3/2　黒褐色土
　しまる　粘性あり
　炭化物わずかに含む
　鉄分沈着あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり

P6
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまる　粘性あり
　炭化物わずかにあり　鉄分沈着あり

P7
1　2.5Y3/1　黒褐色土(やや暗い)
　しまる　粘性あり　鉄分沈着あり

P8
1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性あり
　灰色土20%含む
　鉄分沈着あり　炭化物ごくわずか含む

図 1840　SB518 遺構図

に屈曲することから、方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　５層に分層した。土層図の１・２層が覆土、５～７層が掘形埋土である。覆土には炭化物や土器片とともにブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）がある。底面上では小穴３基と壁溝を検出した。小穴のうち、P1とP3では土層断面で柱痕跡を確認したが、平面的な位置関係から、P2とP3が柱穴と考えられる。なお、壁溝は検出範囲において全周し、幅・深さともにほぼ一定である。炉跡は確認できなかった。

掘形　埋土の多くは単層で、オリーブ黒色及び灰色ブロック土が混入する。掘形底面は平坦で、小穴を５基検出した。そのうち、P4とP5では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。床面では検出できなかったものの、P2とP3に先行する段階において柱穴であった可能性もある。そのため本遺構は、規模の拡張を行わずに床面を成形し、柱穴の位置をずらして再構築している可能性がある。

遺物出土状況　覆土と掘形埋土から土器944点、石器類２点、床面の小穴から土器15点、石器類２点、壁溝から土器56点が出土した。また、掘形底面の小穴から土器14点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅰ期とⅣ期の土器がわずかに混入している。

出土遺物　6231はⅣ期壺Ｈ類。斜格子文帯を挟んで直線文帯を配し、無文帯にはナデ調整が認められる。6232はⅥ期～Ⅶ期壺。底部がやや突出する。6233はⅦ期壺Ａ類。胴部上半には、複数の直線文と大振りの山形文が交互に施文され、最下部の直線文下には刺突を加える。直線文帯を除いた山形文周辺及び刺突以下の無文帯に赤彩を施す。6234はⅣ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部にタタキを加える。胴部には右下がり方向のタタキ調整を施した後、左下がり方向に粗いハケ調整を施す。6235はⅣ期甕Ａ類。底部に穿孔が認められる。6236はⅤ期～Ⅵ期甕A1類。口縁部が屈曲し、端部にかけて内傾する。内面にはナデによる凹面が形成され、外面にはヘラによる刺突を加える。6237はⅥ期高坏C3a類。内外面ともに丁寧なミガキを施す。6238はⅦ期高坏C4d類。内面に多条沈線を施し、その間に山形文を配する。6239は砥石。砥面は２面残るが、それ以外は割れている。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

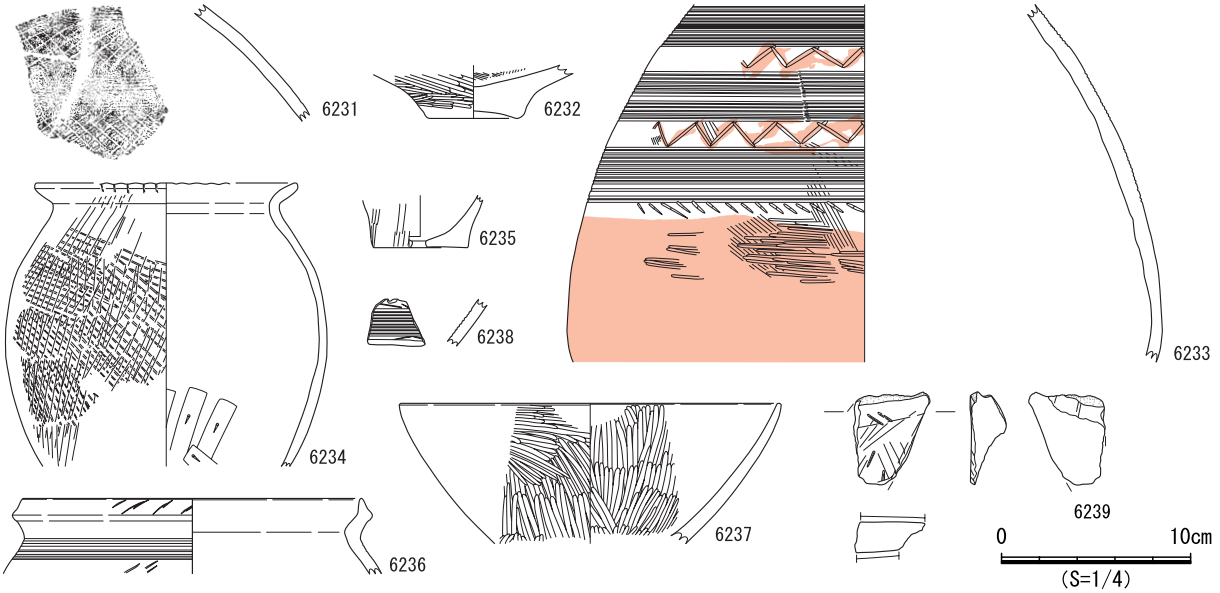


図 1841　SB518 遺物実測図

SB519（遺構：図 1842・1843、遺物：図 1844）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側は調査区域外に位置し、南西辺から南東辺にかけて複数の土坑に切られている。北側の平面形は明瞭であったが、他は遺構の重複が著しく不明瞭であった。

形状　東側が調査区域外に位置するがおよそ方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。埋土中に砂質土ブロックを含むことから、人為堆積と考えられる。

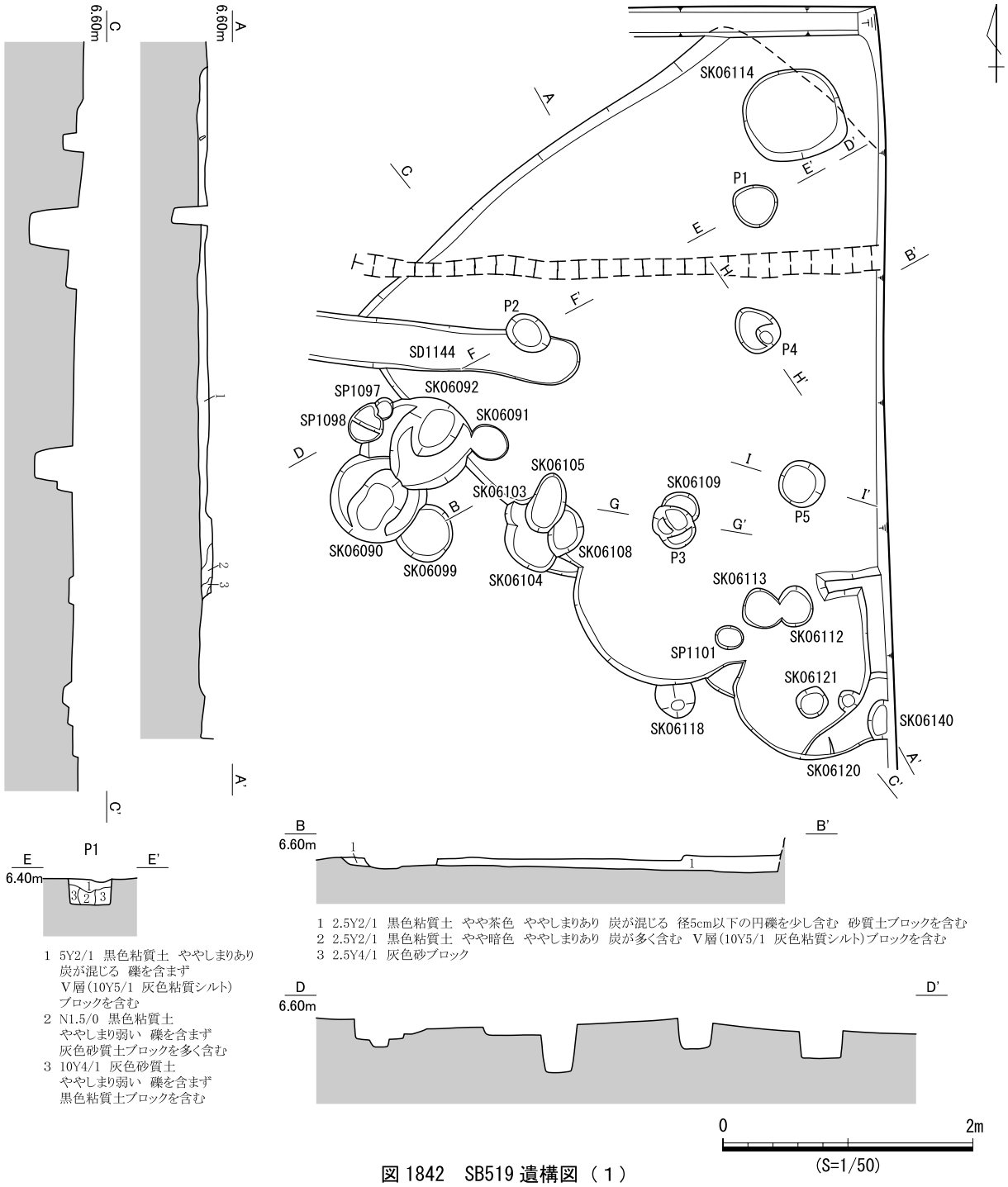


図 1842　SB519 遺構図（１）

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を５基検出した。このうち、P1とP2は土層断面でほぼ垂直にのびる柱痕跡を確認し、P4では底面に円形の窪みを確認した。また、P3は掘形が深く、P5は単層で掘形がやや浅い。このような形状や土層に加えて、平面的な位置関係からP1～P3を柱穴と考えた。

遺物出土状況　埋土中から土器843点、小穴から土器103点が出土した。埋土中の土器片は散在した状態で出土し、Ⅶ期の土器が多く、Ⅳ期の土器片がわずかに出土した。

出土遺物　6240はⅣ期壺Ｃ類。頸部には斜格子文が認められ、それ以下はハケによる調整痕が残る。6241はⅦ期壺B3類。口縁部が外反し、端部を丸く収める。6242はⅣ期甕A2類。口縁部が短く屈曲し、端部が肥厚する。平坦に仕上げられた端部には凹線が１条認められ、下端にはタタキが認められる。6243はⅣ期甕A3類。口縁部が強く屈曲して直立し、端部や外面にタタキが認められる。6244はⅥ期～Ⅶ期甕。短い脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6245はⅦ期甕B3類。口縁部が長く外反し、内外面には粗いハケ調整痕が残る。端部はナデによって平坦面が形成され、作りがやや雑である。6246はⅦ期高坏D5類。浅く内湾する口縁部内面には多条沈線を施し、その間に貝による連弧文帯を配する。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

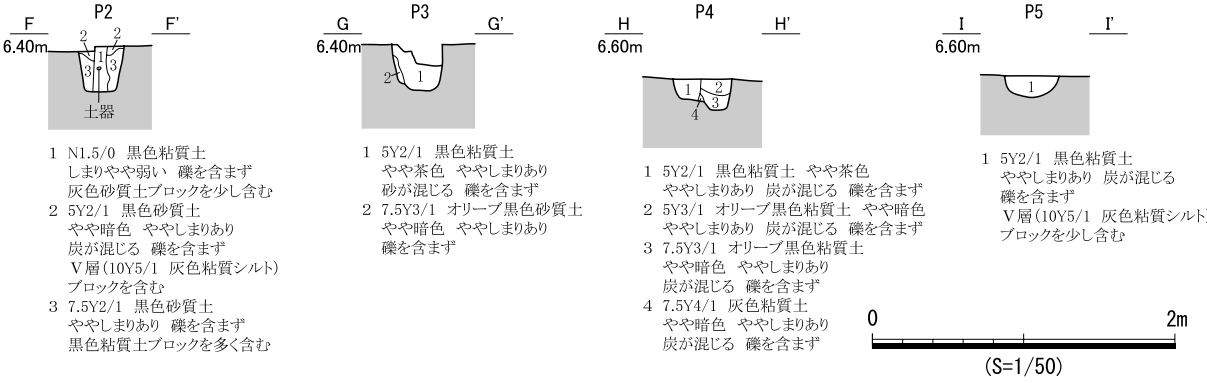


図 1843　SB519 遺構図（２）

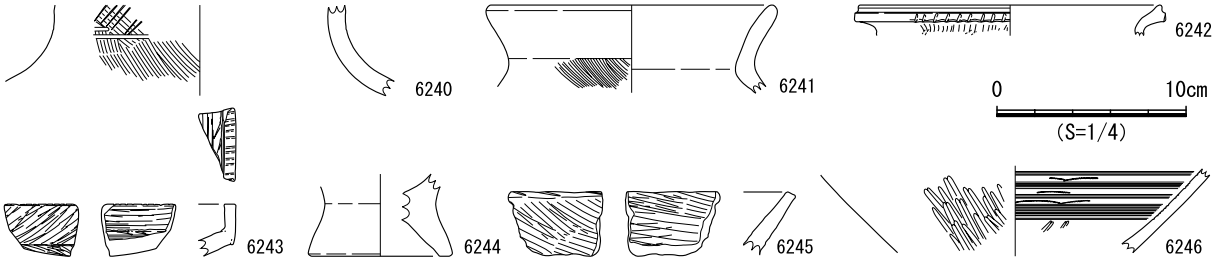
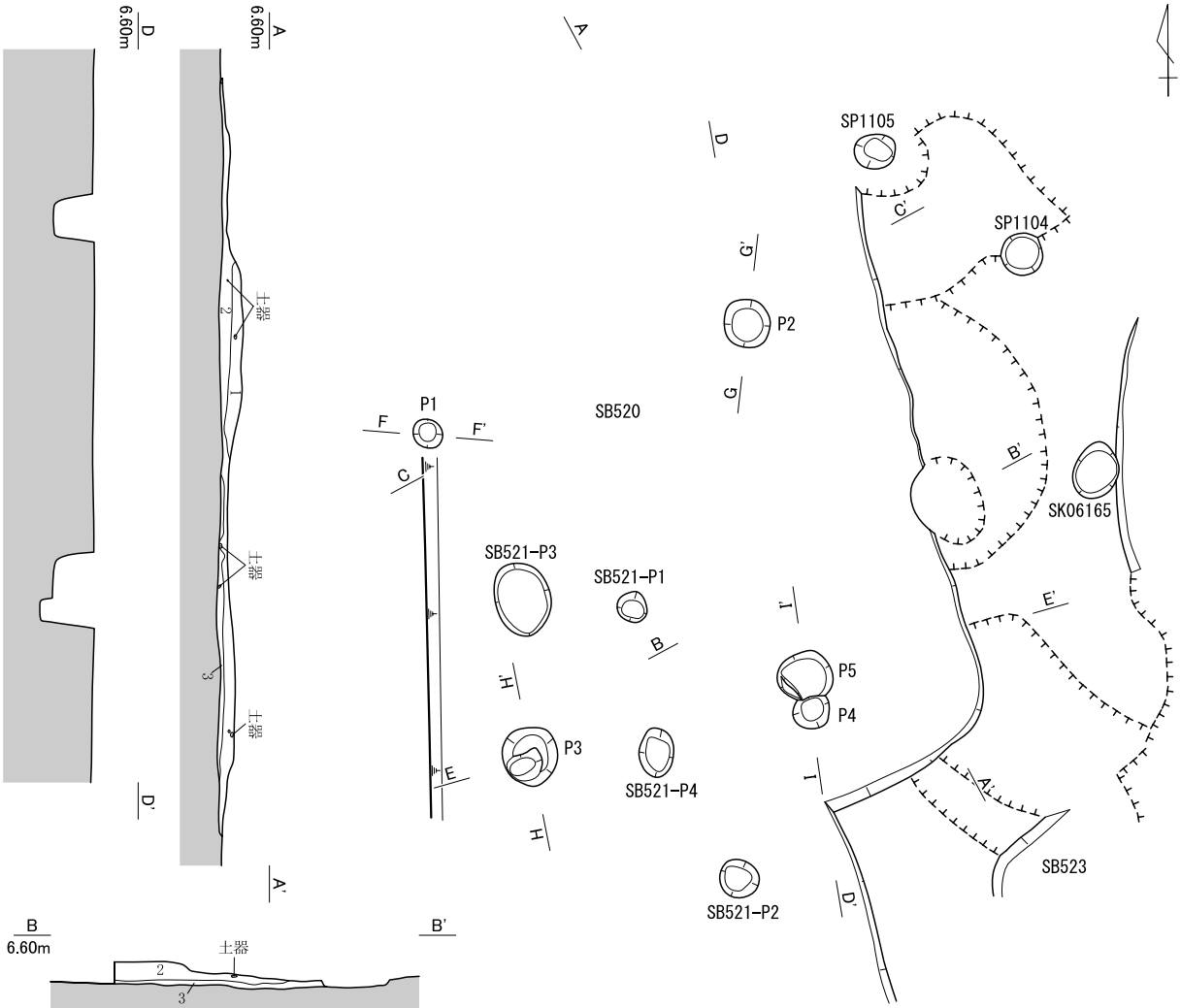


図 1844　SB519 遺物実測図

SB520（**遺構：図 1845、遺物：図 1846**）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。西側は撹乱により失われ、東側上面にも撹乱があった。また、南西側をSB521に切られ、南東側でSB522を切る。なお、平面形は不明瞭であった。

形状　全形は不明であるが、東辺は直線的にのび、隅部はほぼ直角に屈曲することと、柱穴の配置状況から、全形はおよそ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、東壁面の傾斜はほぼ垂直



1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり 炭が混じる 径3cm以下の円礫を少し含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず 炭が混じる
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず 炭が混じる
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

1 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり
2.5Y5/1 黄灰色ブロックを20%含む

1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3 10Y4/1 灰色細砂
4 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
5 5Y2/1 黒色粘質土 やや茶色 ややしまりあり
炭が多く混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
6 7.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり
砂が混じる 礫を含まず

1 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず

1 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 しまり弱い
炭が混じる 礫を含まず

0　2m
(S=1/50)

図 1845　SB520 遺構図

である。

埋土　３層に分層した。どの層にも炭が含まれ、ブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を５基検出した。このうち、P3のみ断面形が三角形を呈するが、他は逆台形を呈し、壁面の傾斜はほぼ垂直である。柱痕跡は確認できなかったが、小穴の形状や平面的な位置関係からP1～P4（もしくはP1～P3、P5）が柱穴と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から土器1,600点、木製品２点、小穴から土器37点が出土した。埋土中の遺物は散在して出土し、Ⅵ期～Ⅶ期の土器が多い。

出土遺物　6247はⅥ期～Ⅶ期壺A3類。口縁部が外反し、端部を上下両方に拡張する。内面は顕著な段をもって屈曲し、段は粘土を貼付して形成する。端部外面には沈線が１条認められ、内面の加飾は外側から羽状文、円形刺突文、直線文の順に配置される。6248はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がやや内湾し、接地面を平坦に仕上げる。6249はⅦ期高坏G3c類。脚部が扁平に開き、端部付近を多条沈線と山形文で加飾する。脚裾端部には平坦面をもち、沈線を施す。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB522を切り、Ⅶ期のSB521に切られることと、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

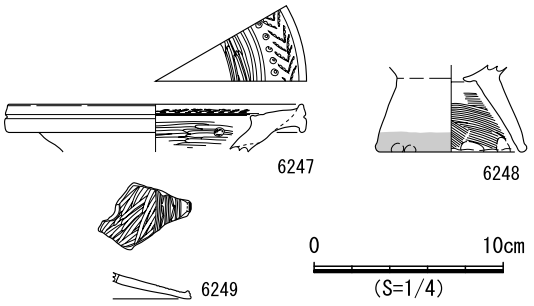


図1846　SB520遺物実測図

SB521（**遺構**：図1847、**遺物**：図1848）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。西約半分は調査区域外にあり、東側から南側にかけてSB520とSB522、SB524を切る。本遺構周辺は多くの遺構が重複しており、土壌化の進行もあって平面形は不明瞭であった。

形状　東辺はやや外側に膨らみ、南辺はほぼ直線的にのびる。西側約半分が調査区域外に位置するが、北東隅と南東隅がほぼ直角に屈曲することから、南北長約5.0ｍの方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は北壁がやや緩く、東壁と南壁は急である。

埋土　５層に分層した。全体的にＶ層ブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。なお、３層上面では焼土の可能性がある赤色を呈する面を確認した。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面はＶ層ブロックが多く含まれており、床面よりやや下がった位置で小穴５基と壁溝を検出した。このうち、P3以外の４基は掘形が深く、P5では土層断面で柱痕跡を確認し、底面は南側が深く落ち込んだ。床面における平面的な位置や小穴の形状、深さなどからP1とP2が柱穴の可能性がある。壁溝は南壁に沿って検出した。幅約0.3ｍ～0.4ｍとやや広く、埋土中にブロック土が含まれる。

遺物出土状況　埋土中から土器2,263点、小穴から土器38点、壁溝から土器93点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、壁溝内では比較的残りの良い遺物（6251、6254）がまとまって横位で出土した。土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅳ期のものがわずかに混入する。

出土遺物　6250はⅣ期壺Ｃ類。口縁部が大きく外反し、端部を上下にわずかに拡張して顕著な平坦面を形成する。口縁部内面にはヘラ状工具による刺突を施し、その内側に振り幅の小さい波状文を施文する。6251はⅥ期～Ⅶ期壺Ａ3類。口縁部が外反し、端部を上下に拡張する。内面には粘土を貼付して顕著な段をもち、屈曲して端部に至る。端部側から羽状文、円形刺突文、擬凹線の順に施文し、更に赤彩を加えて加飾する。羽状文は、刺突文の方向を変えて３帯認められ、円形刺突文の間隔は一定しない。擬凹線は２条認められる。口縁端部及び頸部には直線文が認められる。6252はⅥ期～Ⅶ期壺Ｂ1類。口縁部が大きく外反し、端部には平坦面を形成する。頸部は直立気味である。6253はⅥ期器台Ｂ3類。受部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。6254はⅥ期器台Ｂ3類。受部は大きく開く。受部直下の脚部にはわずかに直立する部位が認められ、以下は円錐状に開く。透孔を３方向に配置し、透孔

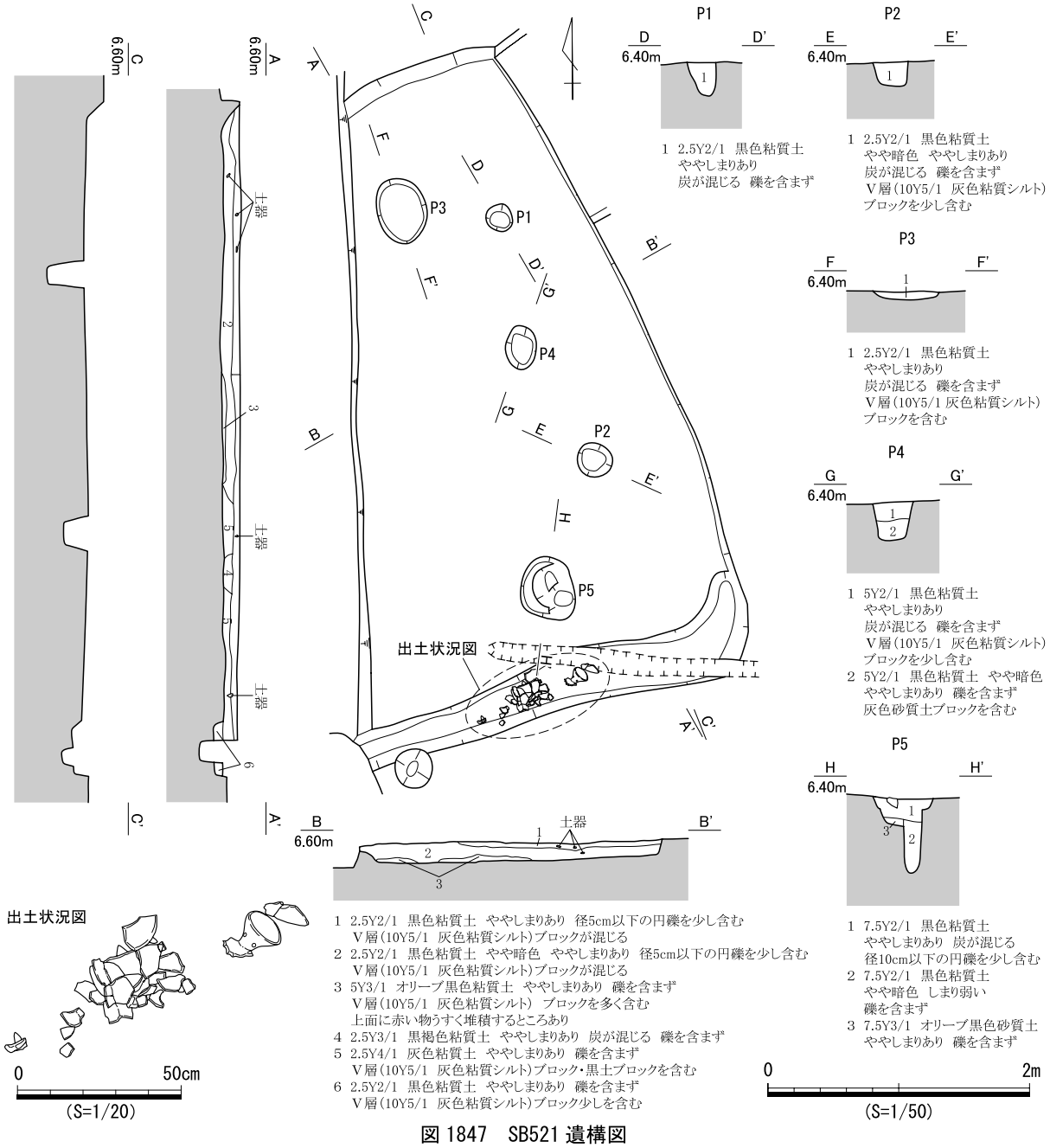


図 1847　SB521 遺構図

以下はわずかに内湾する。

時期　出土遺物はⅥ期～Ⅶ期のものが多いが、Ⅶ期のSB524を切ることからⅦ期と考えられる。

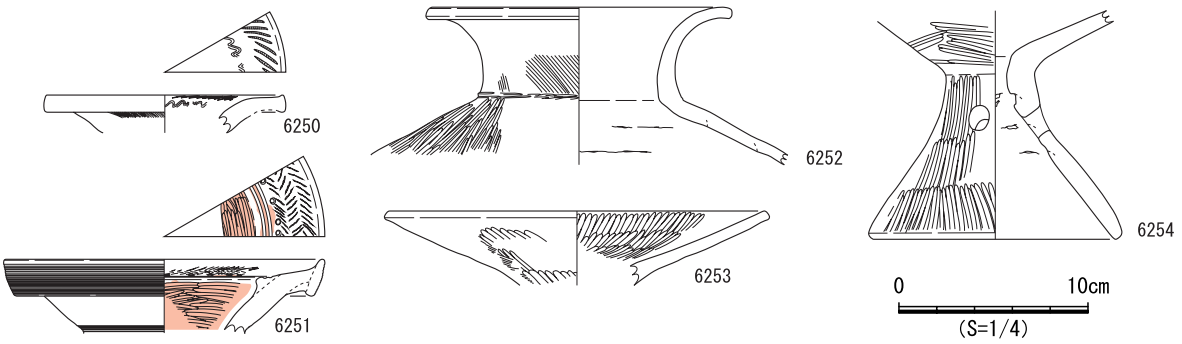
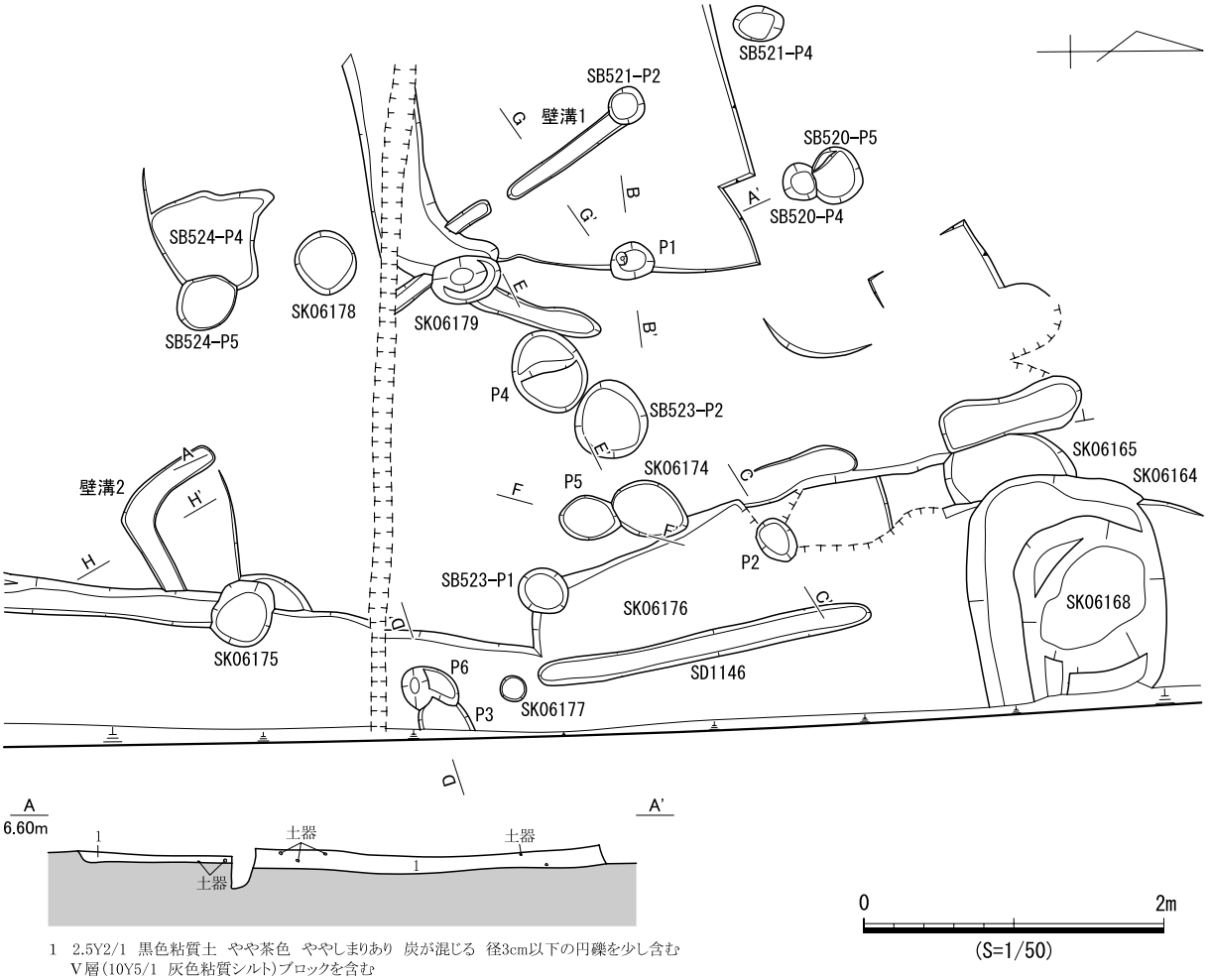


図 1848　SB521 遺物実測図

SB522（**遺構**：図 1849・1850、**遺物**：図 1851）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。上部をSB520、SB521、SB523、SB524等に切られていることから平面形を明確に把握することができず、各遺構の底面にて本遺構の壁溝を確認した。なお、埋土は部分的にしか残存しておらず、東側は調査区域外へのびている。

形状　上部が削平され、東側が調査区域外へのびているため定かではないが、壁溝の平面形からおよ



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
　V層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む

図 1849　SB522 遺構図（１）

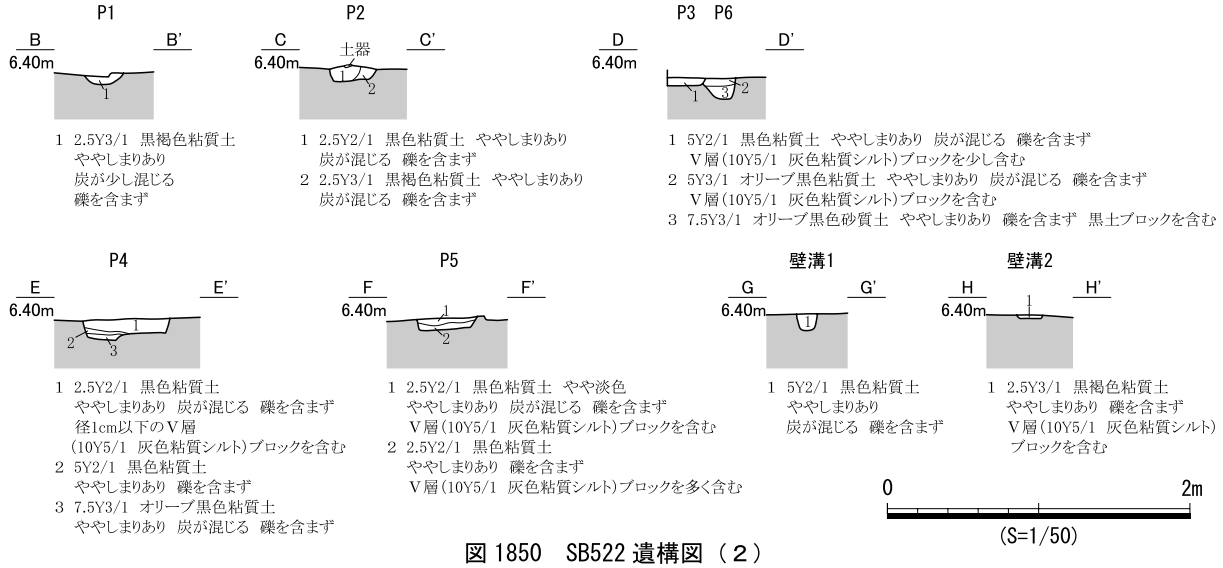


図 1850　SB522 遺構図（２）

そ方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、残存している壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。炭や円礫を含み、ブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上では小穴を６基と壁溝を検出した。P1～P6はいずれも掘形が浅く、埋土は１層～３層に分層したが、柱痕跡は確認できなかった。平面的な位置関係からP1～P3が柱穴と考えられる。壁溝は西溝が深く、南溝は浅い。

遺物出土状況　埋土中から土器335点、小穴から土器18点、壁溝から土器12点が出土した。なお、埋土中の土器片は散在した状態で出土し、時期的にはⅥ期～Ⅶ期のものが多い。なお、P2からⅦ期高坏（6257）が出土した。

出土遺物　6255はⅥ期～Ⅶ期壺Ｂ類。底部はやや突出し、その外面には木葉痕が認められる。6256はⅥ期～Ⅶ期高坏C4a類。口縁部が直線的に開き、端部を丸くおさめる。6257はⅦ期高坏C4b類。口縁部が直線的に開き、端部付近でわずかに内湾する。端部には内傾する平坦面をわずかに形成して、２条の沈線を加える。

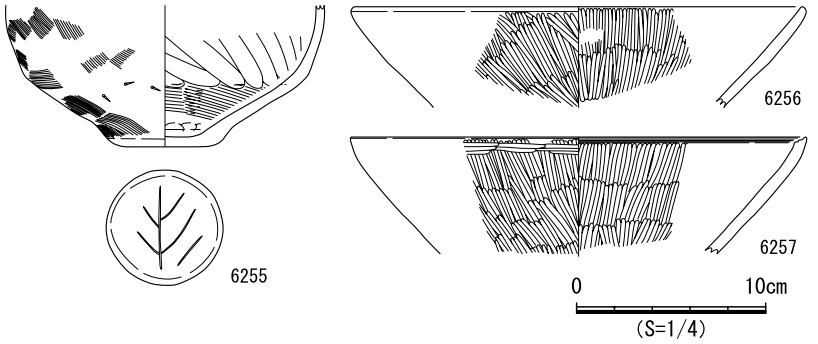


図 1851　SB522 遺物実測図

時期　P2からⅦ期の土器が出土したが、周辺の竪穴住居跡との重複関係では本遺構が最も先行するため、Ⅵ期～Ⅶ期と考える。

SB523（遺構：図 1852、遺物：図 1853）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側の半分以上は調査区域外に位置し、西側でSB522を切り、北側でSK06168に切られる。平面形は不明瞭であった。

形状　半分以上が調査区域外に位置するため、平面形は不明である。北西隅は丸みを帯びており、深

さは0.1ｍ未満で、残存している壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　単層で、炭と直径３㎝以下の円礫をわずかに含む。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴を２基検出した。P1は単層、P2は３層に分層したが、柱痕跡は確認できず、いずれも掘形は浅い。そのため、性格は不明である。

遺物出土状況　埋土中から土器711点、小穴から土器26点が出土した。埋土中の土器は散在して出土し、北西隅の床面上にて残りの良い高坏Ｇ類（6262）が内面を上にして出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6258はⅦ期壺G2b類。口縁部が直立し、端部直下に多条沈線を施文する。内外面に煤が付着する。6259はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がハの字に開き、わずかに内湾する。6260はⅦ期甕E3類。口縁部が短く外反し、端部にはナデによって平坦面を形成する。頸部内面は屈曲が強く、屈曲部の外面には粘土を充填してわずかながら直立する部位を形成する。6261はⅥ期～Ⅶ期鉢A2類。口縁部が短く外反し、端部先端で短く屈曲して受口状を呈する。外面は直立し、端部は尖る。6262はⅥ期高坏G3b類。平坦な坏底部から口縁部が直線的に外傾して開き、端部を丸くおさめる。口縁部直下にのみ多条沈線が認められ、坏底部に段は認められない。6263はⅦ期高坏G3c類の脚裾部。端部には顕著な平坦面をもつ。外面には多条沈線及び刺突文を交互に配し、端部平坦面には沈線のみを施文する。端部上端にも刺突を加え、精緻なつくりの資料である。6264はⅥ期～Ⅶ期器台B2a類。受部がやや内湾し、

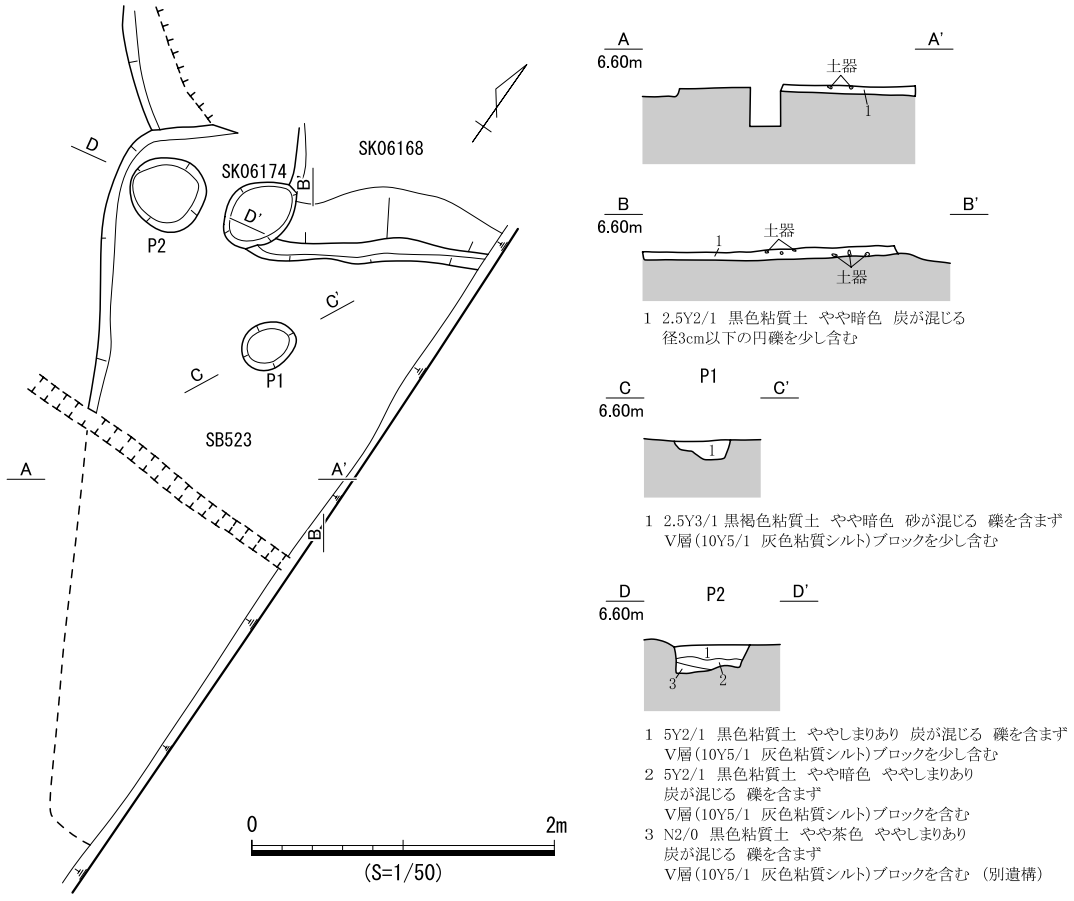


図 1852　SB523 遺構図

わずかに上下に拡張した端部には顕著な平坦面が認められ、そこに沈線を加える。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB522を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

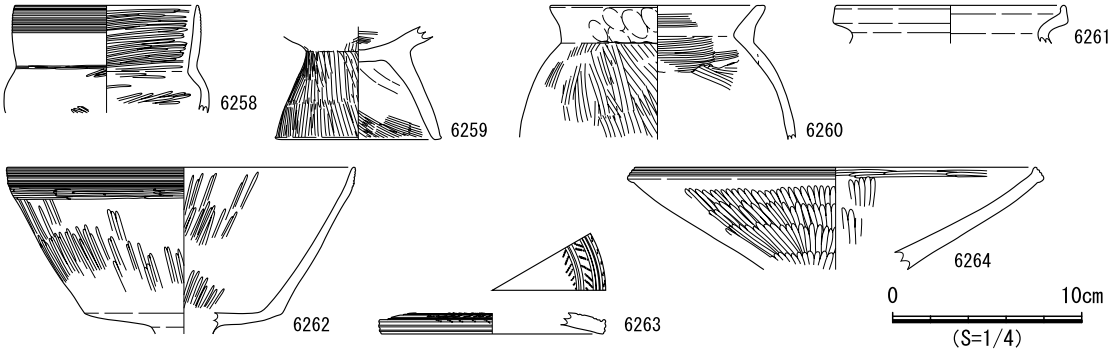


図 1853　SB523 遺物実測図

SB524（遺構：図 1854、遺物：図 1855）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。南側と西側は調査区域外に位置し、北側でSB521に、西側でSK06172などに切られ、東側でSB522を切る。本遺構周辺は多くの遺構が重複し、土壌化の進行もあって平面形は不明瞭であった。なお、検出時において銅鏃１点が出土した。

形状　東辺は直線的にのびるが、南側と西側が調査区域外に位置し、北側をSB521に切られるため、形状は不明である。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土　４層に分層した。ほぼ水平堆積であり、上下層とも炭を含む。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡、壁溝は確認できなかった。床面上では小穴８基を検出した。しかし、いずれも掘形は浅く、埋土は１層～２層である。また、柱痕跡が確認できなかったことから柱穴の推定は困難である。

遺物出土状況　埋土中から土器1,665点、銅鏃１点、小穴から土器300点が出土した。小穴ではP5とP8からの出土が多く、埋土中からは散在した状態で多くの土器片が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、P5からⅦ期甕Ｃ類（6270）が出土した。

出土遺物　6265はⅦ期壺Ｃ類。口縁部が直立気味に立ち上がり、端部には顕著な平坦面を形成する。6266はⅦ期壺。口縁部を欠損するが、頸部にはやや直立する部位が認められる。胴部は球形を呈すると考えられ、器面にはハケによる調整を施す。6267はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。頸部には直立する部位がはっきり認められ、口縁部が受口状に屈曲する。端部付近は直立気味で、端部を丸くおさめる。頸部に直立部位を形成するために、頸部外面から粘土を充填した痕跡が認められる。6268はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がやや内湾する。6269はⅦ期甕B4類。口縁部がやや長く立ち上がり、外反して端部を丸くおさめる。胴部の最大径は中央より下がった位置となり、やや下膨れ気味となる。文様は認められず、粗いハケ調整を施すのみとなる。底部は低脚で、ハの字に開く。6270はⅦ期甕C1類。口縁部が内湾し、端部をナデによって尖らせる。内面には端部直下に肥厚部を形成して沈線を施す。6271はⅦ期甕Ｅ類。脚部はやや短く、ハの字状に開き、接地面を平坦に仕上げる。6272はⅥ期～Ⅶ期甕A2類。口縁部が短く外反し、端部付近で屈曲して受口状となる。6273はⅥ期～Ⅶ期鉢A4類。口縁部は直線的に開き、端部がわずかに内湾し、頸部直下には明瞭な直線文が認められる。6274はⅤ期高坏B3a類。坏底部から口縁部が大きく外反し、平坦に仕上げた端部には擬凹線状のわずかな凹みが認められる。口縁部

は内面の屈曲は認められないが、外面の屈曲する稜は突帯状となり、きわめて明瞭である。6275はⅦ期高坏Ｃ類。脚裾部がやや内湾する。6276はⅦ期高坏C2c類。口縁部がやや内湾し、内面に多条沈線を施文する。6277は銅鏃。有茎鏃で、鏃身は膨をもつ長三角形を呈する。基部には鋳型段階のバリが一部に残る。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB522を切ることと、小穴出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

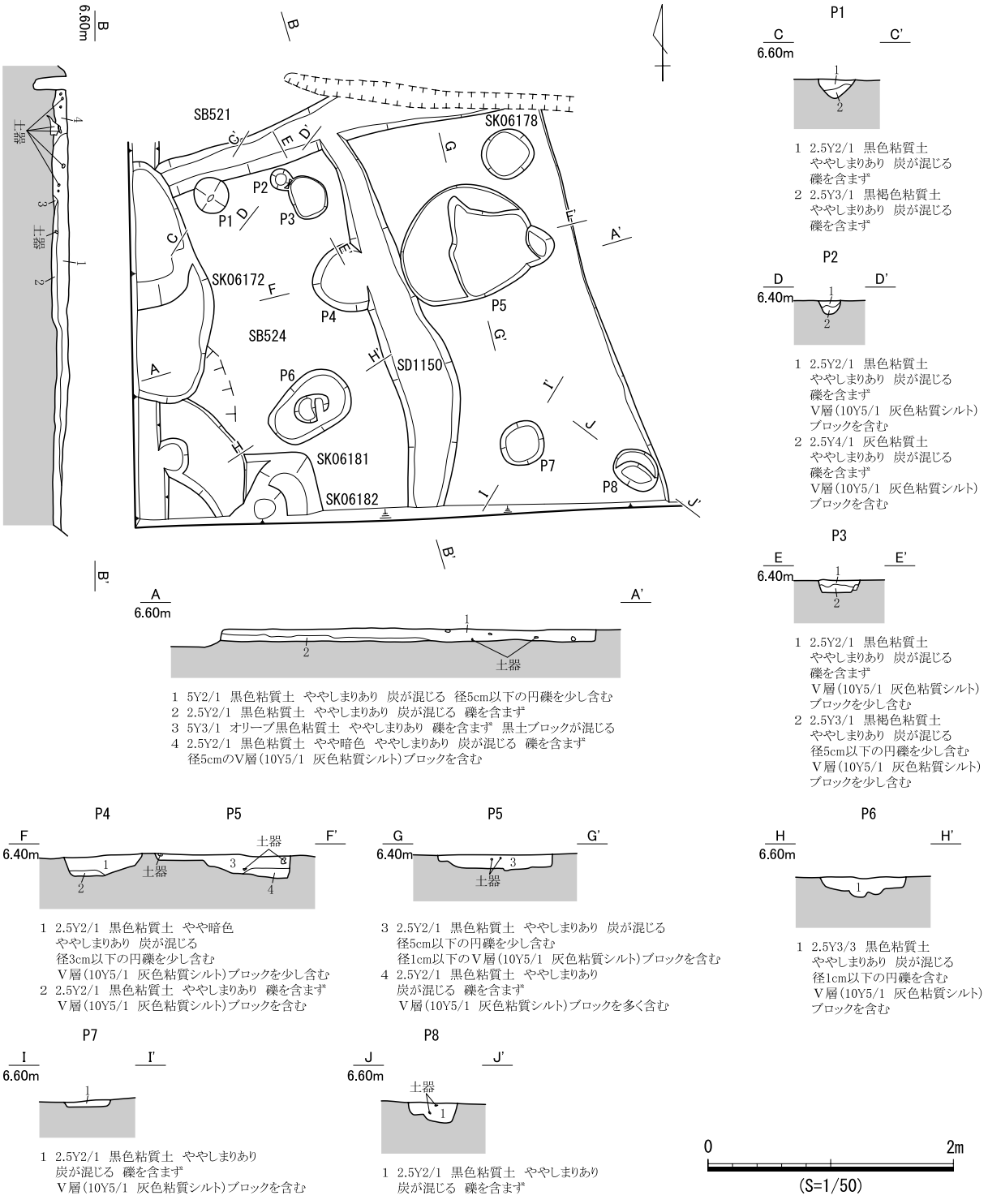


図 1854　SB524 遺構図

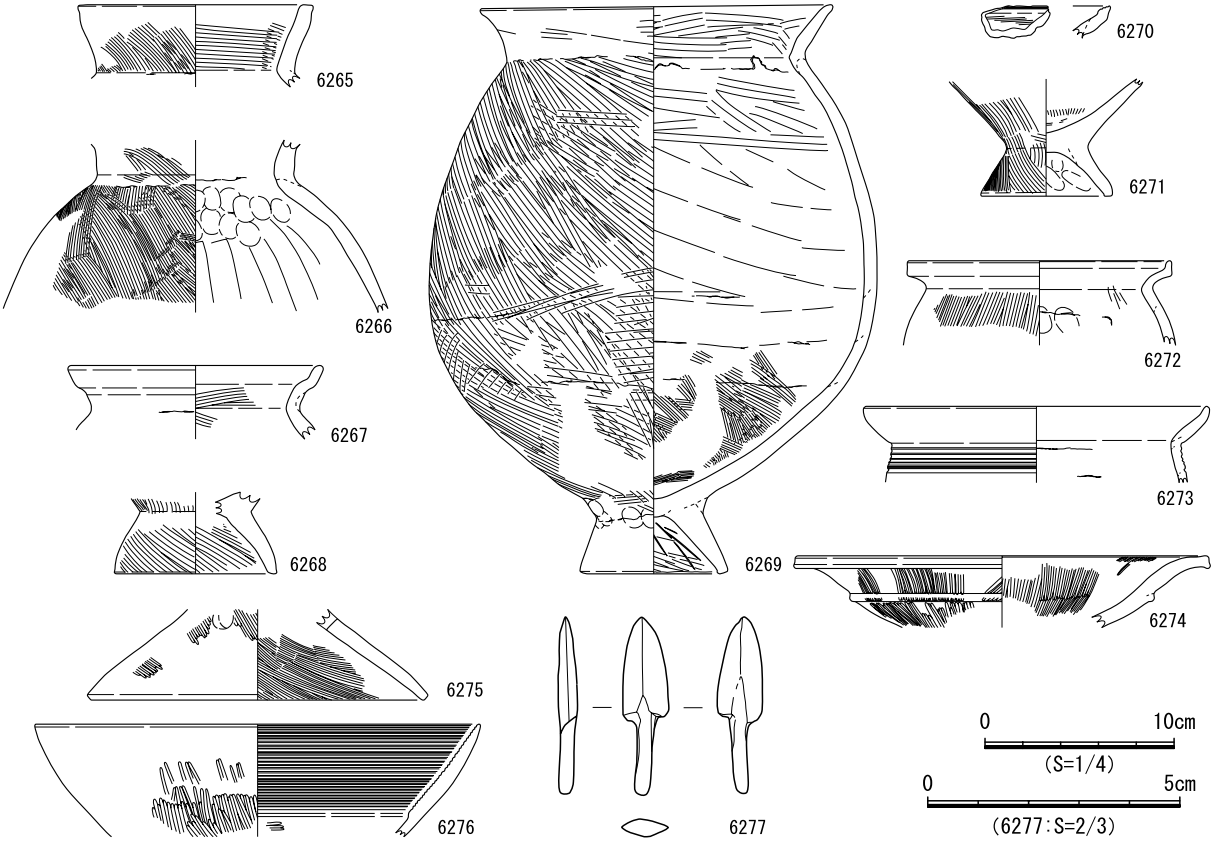


図 1855　SB524 遺物実測図

SB525（遺構：図 1856、遺物：図 1857）

検出状況　東部西側南寄りの遺構が密集する範囲に位置する。東側の半分以上は調査区域外に位置し、西側でSK06175に、北側でSK06176に切られる。平面形は不明瞭であった。

形状　東半分以上が調査区域外に位置するが、西壁が直線的にのび、南西隅はほぼ直角に屈曲することから、方形を呈すると考えられる。南北長約5.8ｍ以上、深さ約0.2ｍであり、確認できた壁面の傾斜は急である。

埋土　北側では３層、南側では２層に分層した。なお、土層図C-C'、D-D'の１層は覆土、３層は掘形埋土である。覆土中には炭が多く含まれ、わずかに材として残存しているものもあった。また、ブロック土の混入が認められることから人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、南側で貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴は確認できず、壁溝のみ検出した。壁溝の埋土は単層でブロック土を含み、底面が平坦で壁面の傾斜は急である。

遺物出土状況　埋土中から土器537点、壁溝から土器４点が出土した。なお、埋土中の土器片は散在した状態で出土し、Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6278はⅦ期壺A5類。口縁部が短く外反して立ち上がり、端部を下方に拡張し、外面に擬凹線を施文する。6279はⅥ期～Ⅶ期甕C1類。口縁部が内湾し、端部をナデによって尖らせ、外面には沈線を施文する。6280はⅦ期高坏C3c類。口縁部が内湾し、内面には多条沈線を施文する。6281はⅦ期高坏C4b類。口縁部がやや肥厚して内傾面を形成し、多条沈線を施文する。

時期　出土遺物の時期から、Ⅶ期と考えられる。

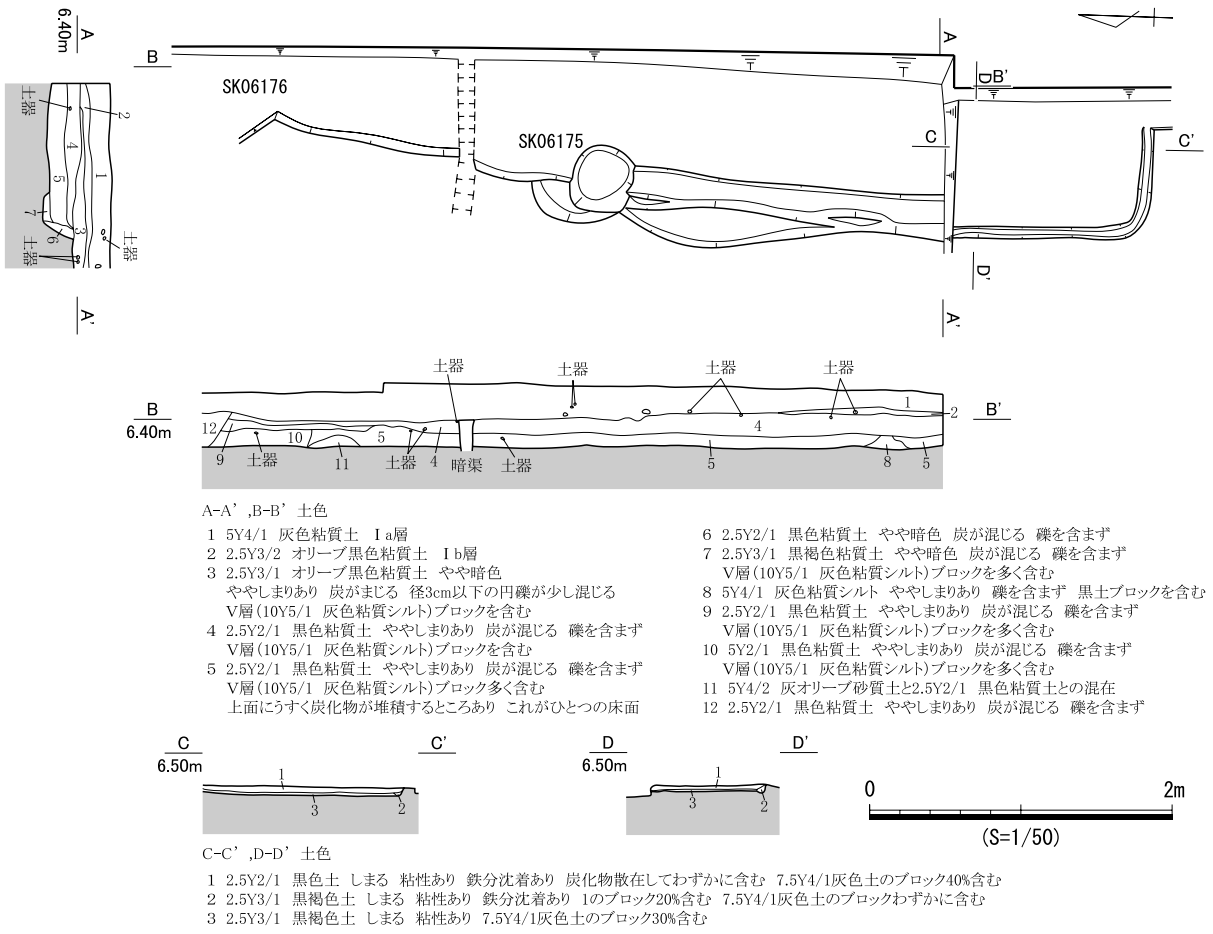


図 1856　SB525 遺構図

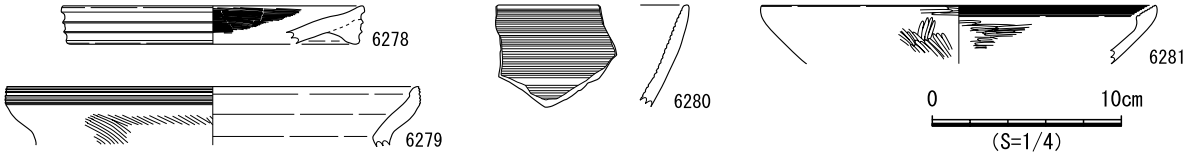


図 1857　SB525 遺物実測図

SB526（**遺構**：**図** 1858）

検出状況　東部西側南寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。遺物包含層掘削後、幅約0.1ｍの溝を２条検出し、それらがほぼ直角をなす位置関係になるため、竪穴住居跡の壁溝とした。検出した溝は隅部が確認できず、断続的であった。なお、北側はSB525に切られる。

形状　東側半分ほどが調査区域外になるため全形は不明であるが、およそ方形を呈すると考えられる。また、壁溝はつながっていないため、隅部の状況は不明である。

床面　平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。直角をなす位置関係にある壁溝の内側で、小穴を５基検出した。そのうち、P1、P2、P5は掘形が深く、P1とP5では土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置関係から、P1とP2が柱穴と考えられる。

遺物出土状況　小穴から土器19点、壁溝から土器28点が出土した。しかし、いずれも細片であり、図示していない。

時期　Ⅶ期のSB525に切られるため、Ⅶ期以前と考えられる。

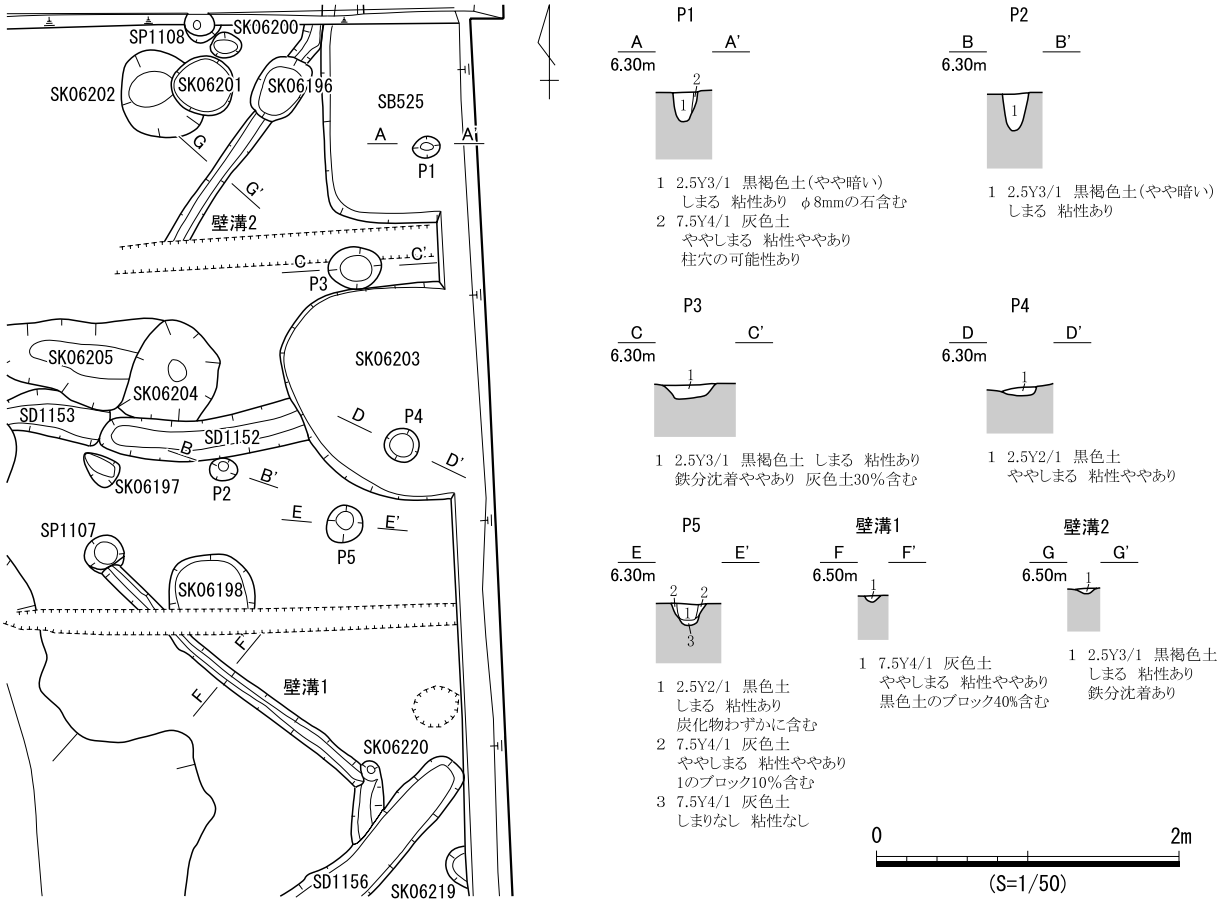


図 1858　SB526 遺構図

SB527（遺構：図 1859、遺物：図 1860）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面及び撹乱底面において検出し、平面形は不明瞭であった。竪穴住居跡の東側を検出したが、西側の隣接する調査区では確認できなかった。

形状　南北長約 4.0 ｍの隅丸方形を呈し、各辺は直線的である。深さは約 0.1 ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。炭をわずかに含み、壁溝にはブロック土が混入している。

床面　ほぼ平坦で、貼床（整地

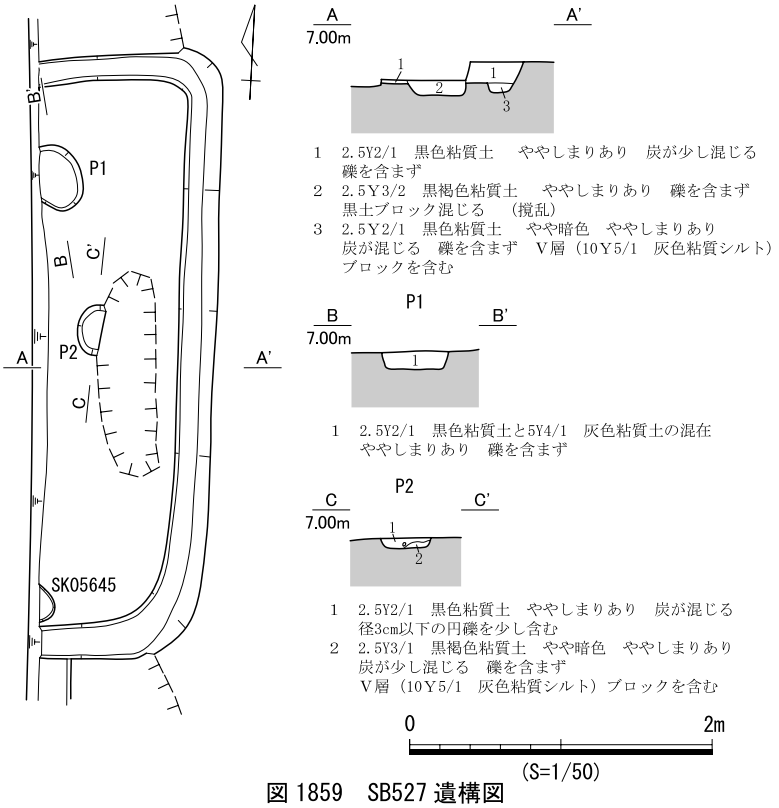


図 1859　SB527 遺構図

土)、炉跡は確認できなかった。床面にて壁溝及び２基の小穴を検出した。壁溝は確認した範囲では途切れることなく全周しており、底面はほぼ平坦である。P1は浅いものの、北東隅部との位置関係から柱穴の可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から土器242点、小穴から土器４点、壁溝から土器20点が出土した。埋土中の出土土器はⅤ期～Ⅶ期の細片が多く、わずかにⅠ期の遠賀川系土器片が含まれる。また、P1からⅤ期の壺Ａ類（6282）の口縁部片が出土した。

出土遺物　6282はⅤ期壺A1a類。口縁端部を下方に拡張する。端部には擬凹線が認められ、内面には羽状文を施文する。

時期　P1出土遺物の時期からⅤ期と考えられ、Ⅶ期には埋没したと考えられる。

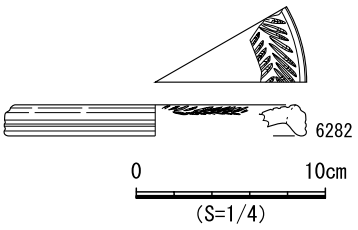


図 1860　SB527 遺物実測図

SB528（**遺構：図 1861、遺物：図 1862**）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出し、平面形は明瞭であった。竪穴住居跡の東側を検出したが、西側の隣接する調査区では確認できなかった。

形状　南北長約4.4ｍで隅丸方形状を呈する。北東隅に比べて南東隅は丸みが顕著であり、東辺はほぼ直線的にのびる。深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　５層に分層した。１～３層が覆土、４・５が掘形埋土である。覆土には炭化物が混入しているものの、その成因は不明である。

床面　ほぼ平坦で、灰色土ブロックを含む面を床面とした。床面にて４基の小穴を検出し、そのうちP1、P2、P4は掘形が深く、壁面の傾斜も急である。平面的な位置関係からP1とP2が柱穴の可能性がある。なお、壁溝及び炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器389点、小穴から土器３点が出土した。土器の時期はⅥ期～Ⅶ期である。

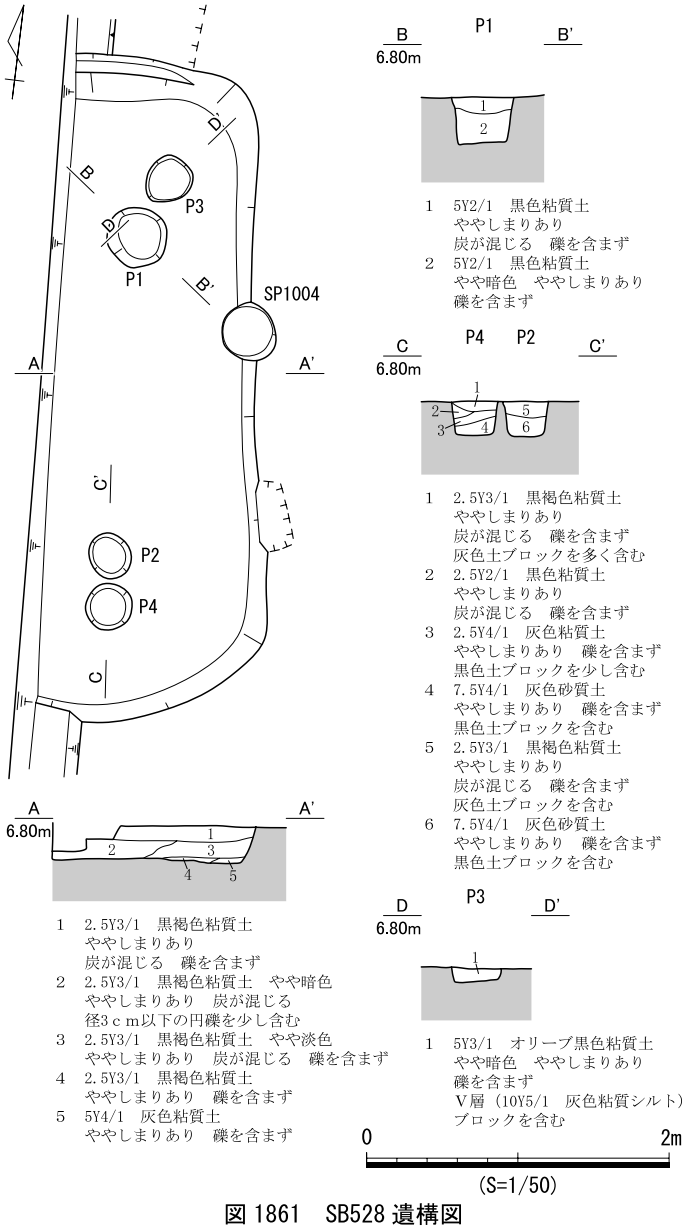


図 1861　SB528 遺構図

出土遺物　6283はⅥ期～Ⅶ期鉢Ｅ類。胴部は丸みを帯び、口縁部は緩やかに外反する。

時期　Ⅲ期～Ⅳ期のSZ175を切っていることと出土遺物の時期から、Ⅳ期～Ⅶ期と考えられる。

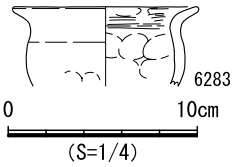
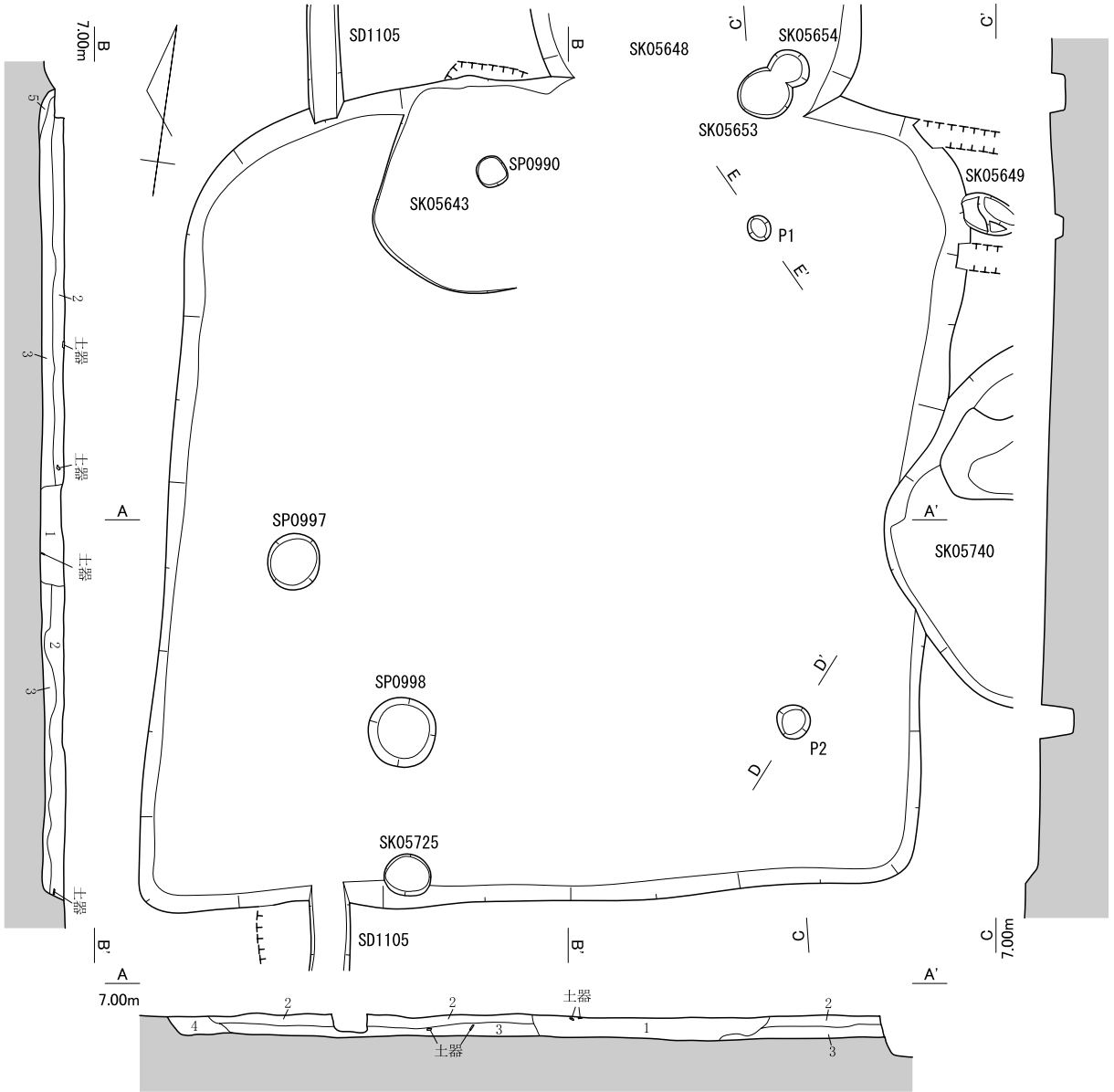


図 1862　SB528 遺物実測図

SB529（遺構：図 1863、遺物：図 1864）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側はSK05643、SK05648などに、東側はSK05649、



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややシルト質　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　やや砂質　ややしまりあり　炭が混じる　径1cm以下の円礫を少し含む　黒色土ブロックを含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土　ややしまりあり　炭が混じる　径1cm以下の円礫を少し含む　黒色土ブロックを含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
5　2.5Y3/1　黒褐色砂質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず

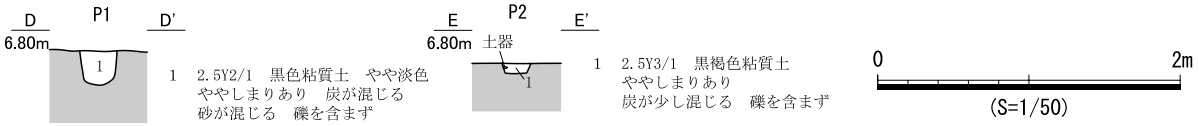


図 1863　SB529 遺構図

SK05740などに切られ、他遺構との重複が著しく平面形は不明瞭であった。

形状　南北長約6.0ｍ、東西長約5.7ｍの不整隅丸方形を呈する。北側の隅部は丸みが顕著であり、各辺は北辺を除いてほぼ直線的にのびている。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　５層に分層した。埋土全体に炭化物の混入が認められ、北壁から西壁にかけては壁面沿いに斜めの堆積がある。また、全体的にブロック土が混入することから人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であるが、貼床（整地土）は確認できず、床面にて２基の小穴を検出した。小穴の埋土はいずれも単層であるが、P2よりもP1が深く、P1は壁面の傾斜も急である。底面の標高に差があるものの、平面的な位置関係からP1とP2は柱穴の可能性がある。なお、壁溝及び炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器2,137点、小穴から土器２点が出土した。埋土中の土器は細片が目立ち、時期的にはⅦ期のものが多いが、わずかにⅠ期の遠賀川系土器や、Ⅳ期の壺、甕片が含まれている。

出土遺物　6284はⅥ～Ⅶ期壺胴部。やや不明瞭ながら、数条の線刻が認められる。6285はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈曲し、尖り気味の端部をユビナデで形成する。6286はⅦ期甕Ｅ類脚部。小型の脚部が直線的に開く。6287はⅦ期高坏G3類脚部。付根から裾部まで脚部が強く開き、透孔は単孔を３方向に配置する。6288はⅦ期高坏G3c類脚部。裾部が扁平に開き、端部には平坦面をもつ。外面に多条沈線が認められ、端部には二枚貝による刺突文、多条沈線間には二枚貝による二重連孤文を２帯施文する。6289はⅠ期遠賀川系土器の壺。木葉文もしくは連弧文と考えられる文様が認められる。

時期　遺構の重複関係から時期は言及できないが、出土遺物の時期からⅦ期と考えられる。

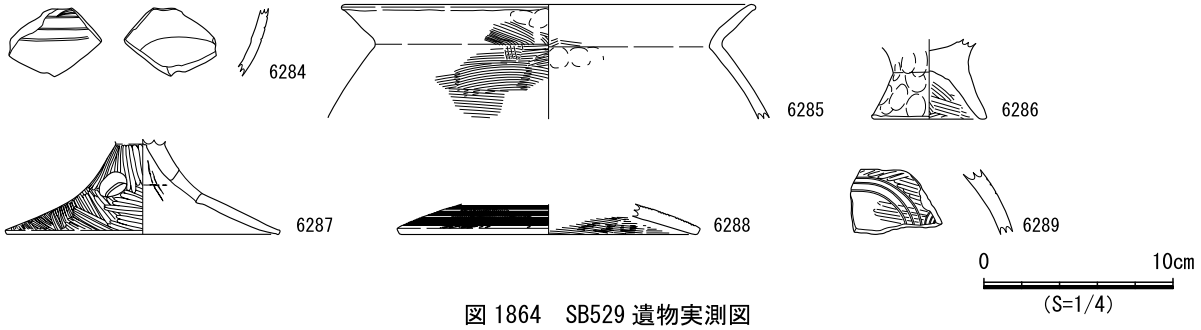


図1864　SB529遺物実測図

SB530（**遺構：図1865**）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。北側をSK05631など、西側をSB529など、南側をSK05720などに切られるように、他遺構との重複が著しく平面形は不明瞭であった。

形状　規模は不明であるが、確認できた範囲から平面形は方形の可能性が高い。東辺は直線的で、南東隅はほぼ直角に屈曲している。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜はやや急である。

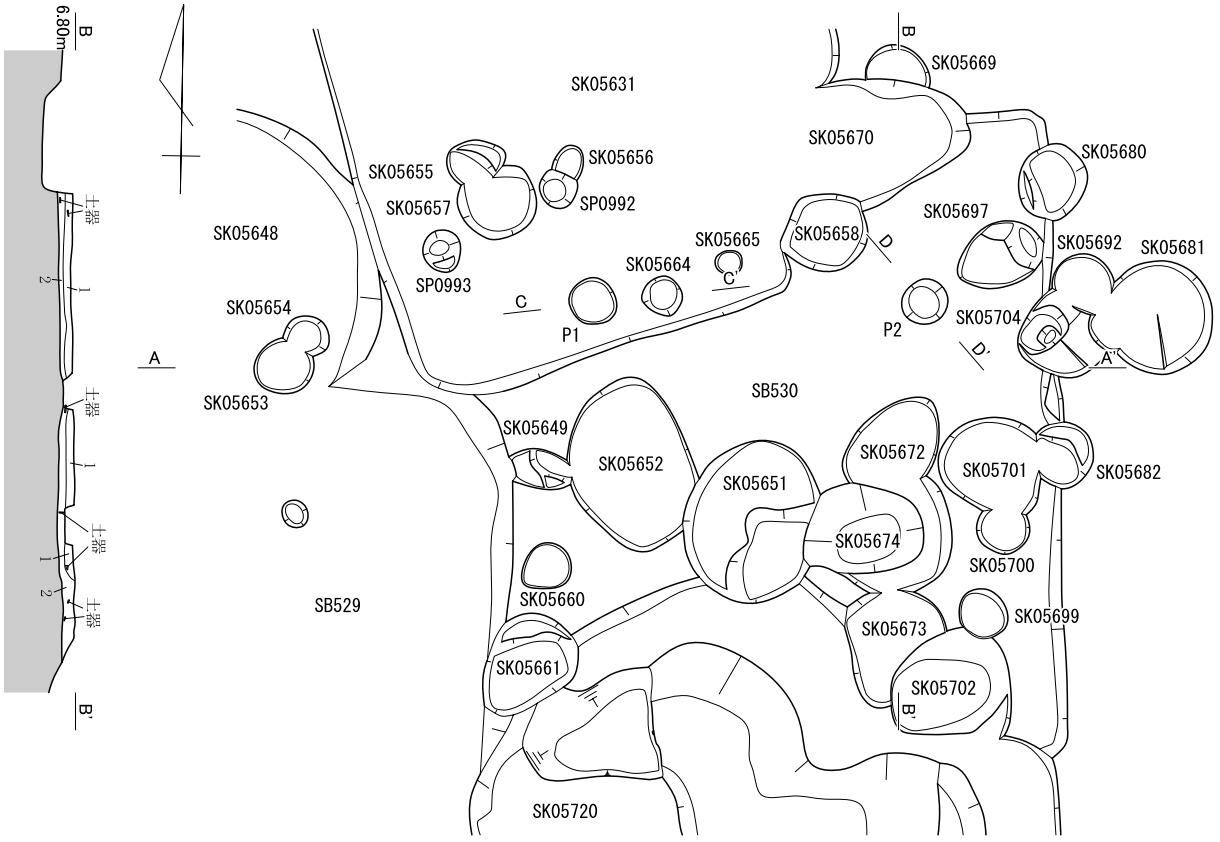
埋土　４層に分層した。埋土中央が窪む堆積であるが、ブロック土が混入していることや、遺構の重複が著しいことから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、壁溝、炉跡を確認することはできなかった。床面と同じ標高で多くの小穴を検出したが、掘形の形状及び埋土の状況からP1とP2が柱穴と考えられる。

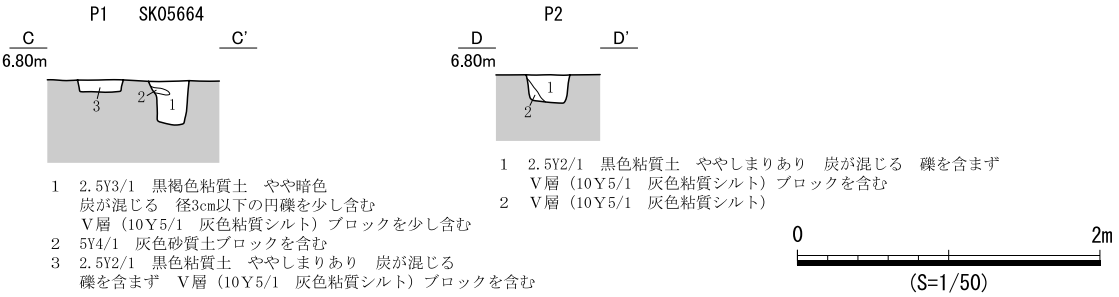
遺物出土状況　埋土中から土器1,498点、石器類１点、小穴から土器73点が出土した。土器の時期は

Ⅵ期～Ⅶ期であるが、いずれも細片であり図示していない。

時期　出土遺物からの言及は困難であるが、Ⅶ期のSB529に切られることからそれ以前と考えられる。



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　鉄分沈着あり
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　鉄分沈着が多い
4　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　鉄分沈着が多い（SK05631埋土）



1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色
炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを少し含む
2　5Y4/1　灰色砂質土ブロックを含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
礫を含まず　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む

1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
2　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）

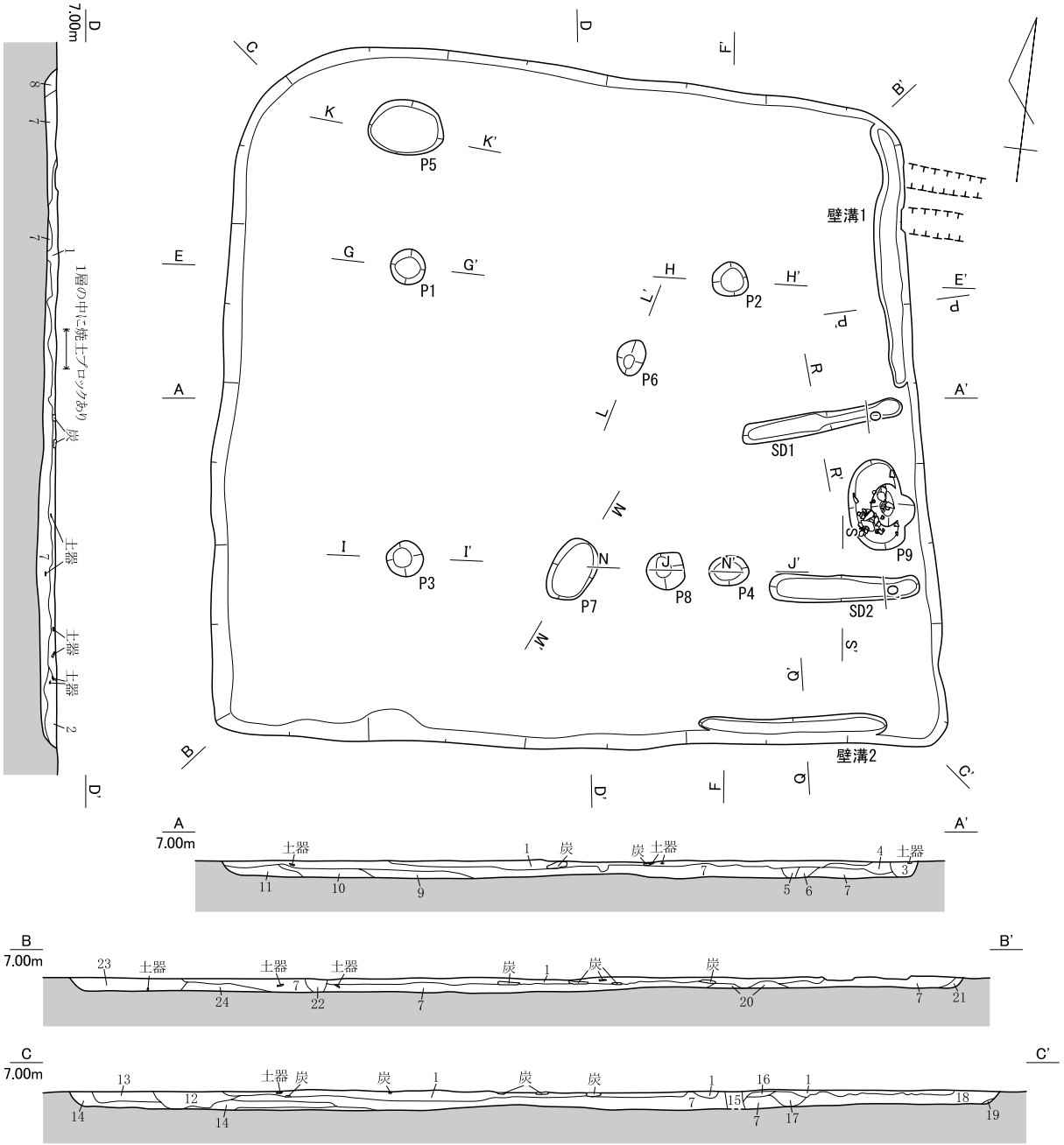
0　2m
(S=1/50)

図1865　SB530遺構図

SB531（**遺構**：図1866～1868、**遺物**：図1869）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出し、平面形は比較的明瞭であった。本遺構は、埋土全体から炭化物が出土し焼土や炭化材も確認できたことから、焼失家屋と考えられる。

形状　南北長約5.3ｍ、東西長約5.3ｍの不整隅丸方形を呈する。西辺はやや蛇行しており、北東隅



1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
炭化材と炭化物を多く含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
細かい炭化物を多く含む
3 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
細かい炭化物を多く含む
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
4 2.5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
礫を含まず 細かい炭化物を含む
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
5 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が多く混じる 礫を含まず
細かいⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
6 5Y4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む
7 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
8 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
径1cm以下のⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
9 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
10 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が少し混じる 礫40を含まずpar 2
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
11 5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む
12 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
13 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
14 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
15 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず 柱痕跡か？
16 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 固くしまる 炭焼土粒が混じる
礫を含まず （上面被熱か？）
17 10Y4/1 灰色砂質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
黒土ブロックを含む
18 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
19 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
20 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
21 7.5Y4/1 灰色砂質土 ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず 黒土ブロックを含む
22 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
23 2.5Y3/1 黒褐色粘質土２ やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる
径3cm以下の円礫を少し含む
24 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず

0　2m
(S=1/50)

図 1866　SB531 遺構図（１）

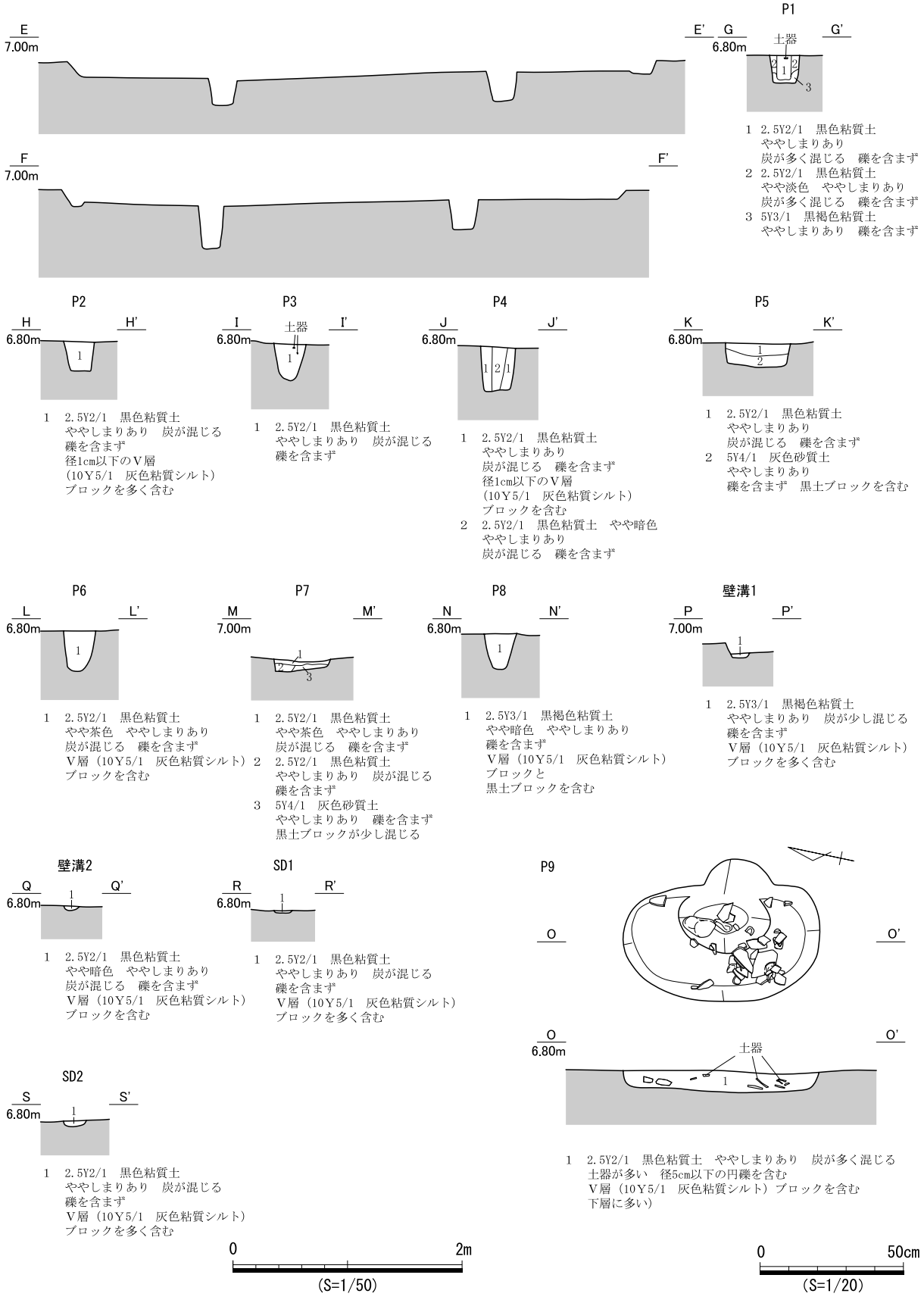


図 1867　SB531 遺構図（２）

部と北西隅部は丸みを帯び、南東隅部は鋭角気味である。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　24層に分層した。面的な広がりが確認できる埋土は１層と７層である。埋土上層には焼土ブロックが、埋土全体には炭化物が認められる。住居中央付近では床面よりやや上位で炭化材が面的に広がっており、材の遺存状態は良くないものの、材の方向は中央から放射状となって出土したものが目立つ。樹種同定の結果、炭化材の多くはクリもしくはその可能性のある材であった（第６章第７節参照）。また、炭化材を含む７層にはブロック土の混入が認められる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面にて９基の小穴と壁溝、溝などを確認した。平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられ、そのうちP1とP4では土層断面で柱痕跡を確認した。東壁と南壁沿いでは溝状の浅い遺構を確認し、壁溝の一部と判断した。SD1とSD2は浅い溝状遺構で、P9はSD1とSD2の間にある小穴である。P9の検出時の平面形は明瞭で、底面は凹凸がある。土器がまとまって出土し、土器とともに亜円礫も出土した。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器3,315点、石器類１点、種子類１点、小穴から土器218点、壁溝から土器13点、SD3とSD4から土器７点が出土した。住居の北西隅部では、床面直上においてⅥ期～Ⅶ期の壺Ｄ類（6296）が逆位で出土した。また、P9の中央やや南寄りから台付甕の脚部片が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅧ期～Ⅸ期のものも出土したが、混入と考えられる。

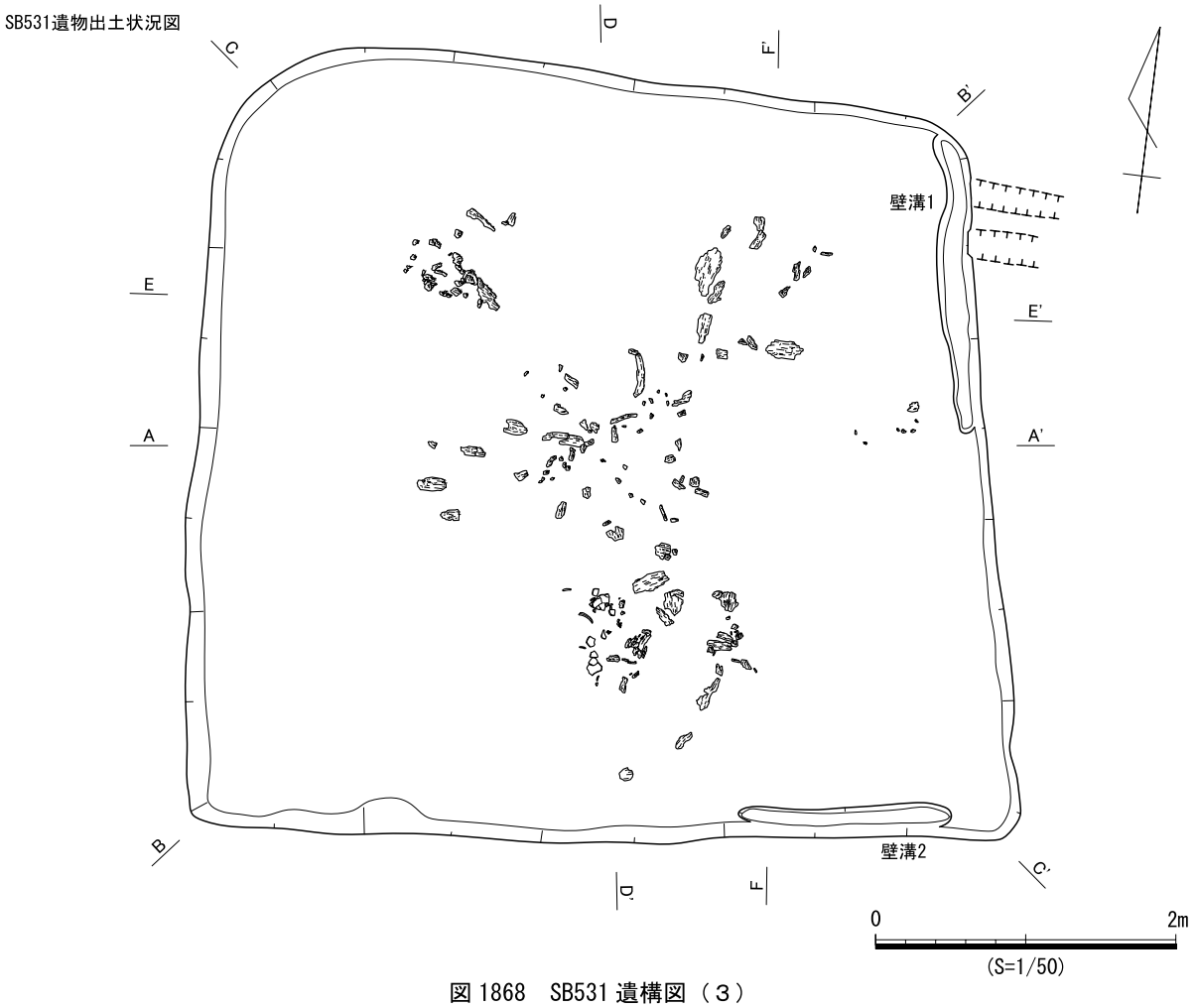


図 1868　SB531 遺構図（３）

出土遺物　6290はⅣ期壺。胴部下半にはハケ目が残り、煤が付着する。内面にはナデ及びケズリが認められる。6291はⅥ期～Ⅶ期壺A5類。口縁部が外反し端部を下方に大きく拡張する。端部には顕著な平坦面を形成して、直線文を施文する。胴部にはミガキが認められる。6292はⅧ期壺。口縁部が内湾し、端部を下方に大きく拡張する。口縁部内面には貝による羽状文３帯とその内側に円形刺突文を施文すし、外面には羽状文及び刺突文が認められる。6293はⅥ期～Ⅶ期壺Ａ類。胴部上半に貼付突帯を４帯形成し、その上下に山形文を１帯ずつ施文する。その下方には刺突文が認められる。6294、6295はⅥ期～Ⅶ期壺。6294は胴部が丸く球形を呈し、器面はハケ調整を基本とする。胴部上半には格子状の線刻が認められるものの、明確な規則性にしたがって描かれたものとは考えにくい。内面にはハケ後ナデ調整を施す。底部は平底で突出する。6295は胴部に沈線が４条認められる。6296はⅥ期～Ⅶ期壺D3a類。頸部がなだらかに外反して立ち上がり、口縁部が強く外反する。端部が強く屈折して

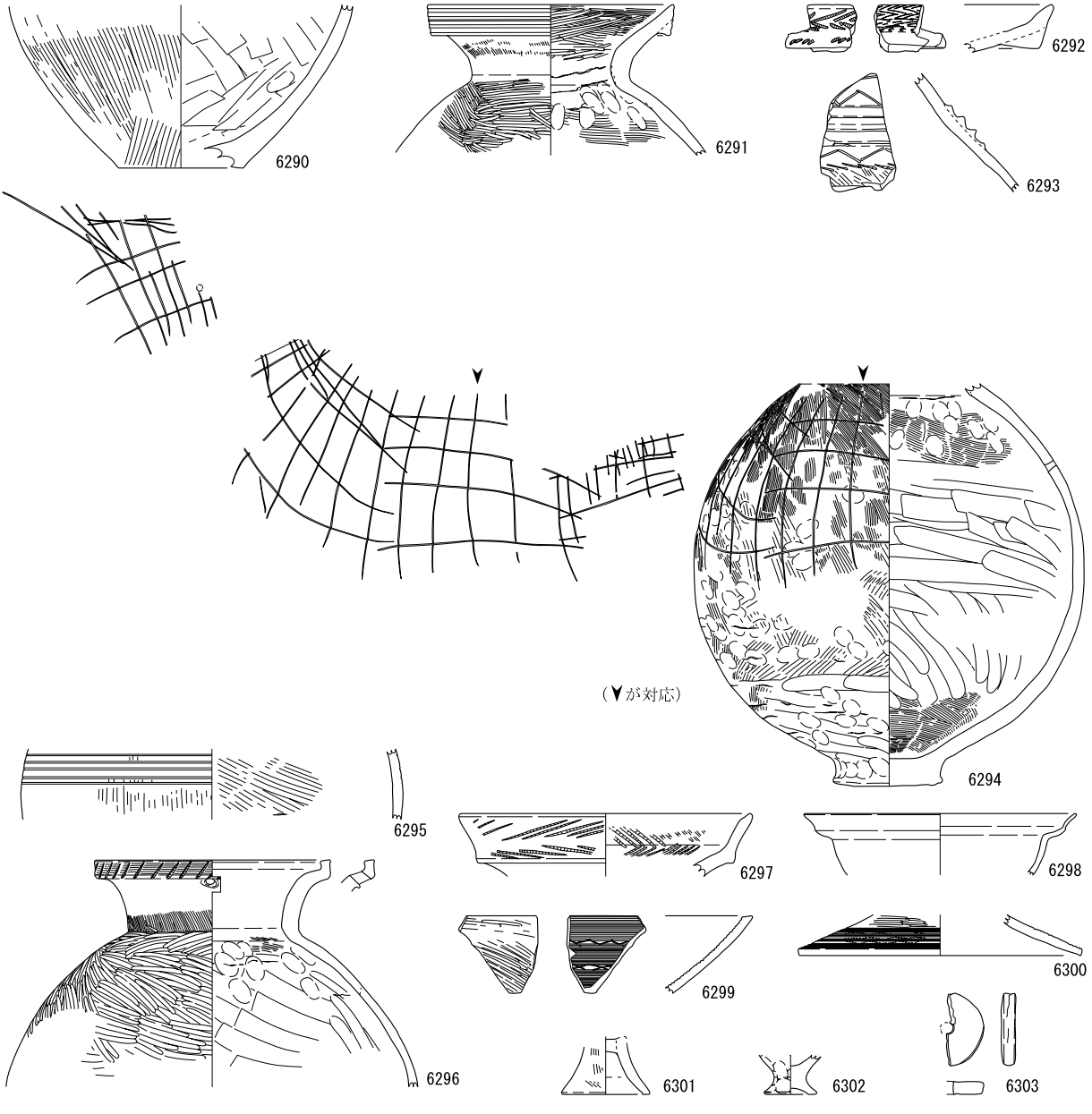


図 1869　SB531 遺物実測図

直立し、顕著な平坦面を形成する。外面には刺突文が認められる。口縁部内面には焼成前穿孔が１孔認められる。胴部外面にはハケ後ミガキ調整が認められる。6297はⅨ期壺。柳ケ坪型壺で、口縁部内面及び端部に羽状文が認められる。6298はⅨ期鉢。口縁部下段が外反し、屈曲して上段がさらに強く外反する。外面に一部煤が付着する。6299はⅥ期～Ⅶ期高坏D4類。口縁部が大きく開き、端部に顕著な平坦面を形成する。内面には多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文１帯及びヘラによる菱形文１帯を加える。6300はⅦ期高坏G3c類。脚裾部が平坦に開き、端部に平坦面を形成する。裾部上面には多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文３帯を加える。6301、6302はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｅ類。6301は高坏脚部を模したと考えられ、裾部が外反する。6302の脚部は短く、大きく開く。6303は土製品。円盤状を呈し、中心に穿孔が認められる。胎土・調整からⅤ期～Ⅶ期の可能性がある。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB532（**遺構：図 1870、遺物：図 1871**）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、南側は調査区域外にのびる。SD1107とSK05746に切られ、北側でSB533を切る。平面形は不明瞭であった。

形状　東西長約4.2ｍの不整方形を呈する。各辺ともに直線的にのびるが、北西隅部は大きく湾曲している。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

埋土　２層に分層した。いずれもブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面にて５基の小穴を検出し、そのうちP1では柱痕跡を確認した。底面の標高に差があり、掘形とややずれているが、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器2,695点、石器類１点、小穴から土器149点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅧ期～Ⅸ期のものも出土した。住居南側では土器がまとまって出土し、P3検出面にて壺Ｊ類（6306）と甕Ｅ類（6310）が横位で、高坏坏部（6316）が正位で出土した。また、P3から鉢Ｂ類（6314）が出土した。

出土遺物　6304はⅥ期～Ⅶ期壺A5類。口縁部が内湾し、端部付近を肥厚して上下に拡張する。口縁部内面には羽状文を施文し、端部には擬凹線が認められる。6305はⅥ期～Ⅶ期壺。頸部直下には直線文を施文し、その下方に山形文状の刺突文が認められる。胴部は球形を呈し、底部は平底でやや突出する。器面調整はミガキを基本とし、内外面ともに部分的に煤が付着し、破断面にも煤が付着する。6306はⅥ期～Ⅶ期壺J1類。口縁部が短く外傾し、やや内湾する。胴部最大径は上方に位置して肩部が張り、底部は平底である。外面は全面にミガキ調整を施す。器面の一部に煤が付着する。6307はⅦ期壺Ａ類。胴部上半に幅広の直線文を２帯施文し、その間に山形文が認められる。6308はⅥ期甕D1a類。口縁部の屈曲が明瞭で、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6309はⅥ期～Ⅶ期甕Ｄ類。器面には粗いハケ目が残る。6310はⅥ期～Ⅶ期甕E5類。口縁部が短く内湾し、端部を丸くおさめる。胴部最大径は上方に位置して肩部が張り、脚部がハの字に開く。器面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。6311はⅦ期甕B3類。口縁部がくの字に屈折し、口縁部が直線的に外傾する。頸部には口縁部形成時の貼付痕が認められ、端部には断続的なナデによる平坦面を形

成する。外面にはハケ調整を施し、一部に煤が付着する。6312はⅧ期甕Ｄ類脚部。器壁が薄く、器面にはハケ目が残り、煤が付着する。脚部がハの字に開き、端部を折り返す。6313はⅨ期甕。口縁部がわずかに屈曲し、大きく外方に開く。頸部には沈線を１条施文する。6314はⅥ期～Ⅶ期鉢Ｂ類。口縁部がやや内湾し、端部には平坦面を形成する、器面には粗いハケ目が残る。6315はⅦ期高坏Ｄ類。脚部が付け根から円錐状に開き、裾部がやや内湾する。脚部中位に透孔が認められ、２孔１対で２方向に配置される。6316はⅦ期～Ⅷ期高坏。平坦な坏底部から口縁部が直線的に外傾し、端部がやや内湾する。内面の段、外面の稜ともに明瞭に残り、内外面ともに丁寧なミガキ調整を加える。坏底部は矮小で、口径の３分の１以下である。6317はⅦ期～Ⅷ期高坏D5類。口縁部が浅く直線的に開き、外面に

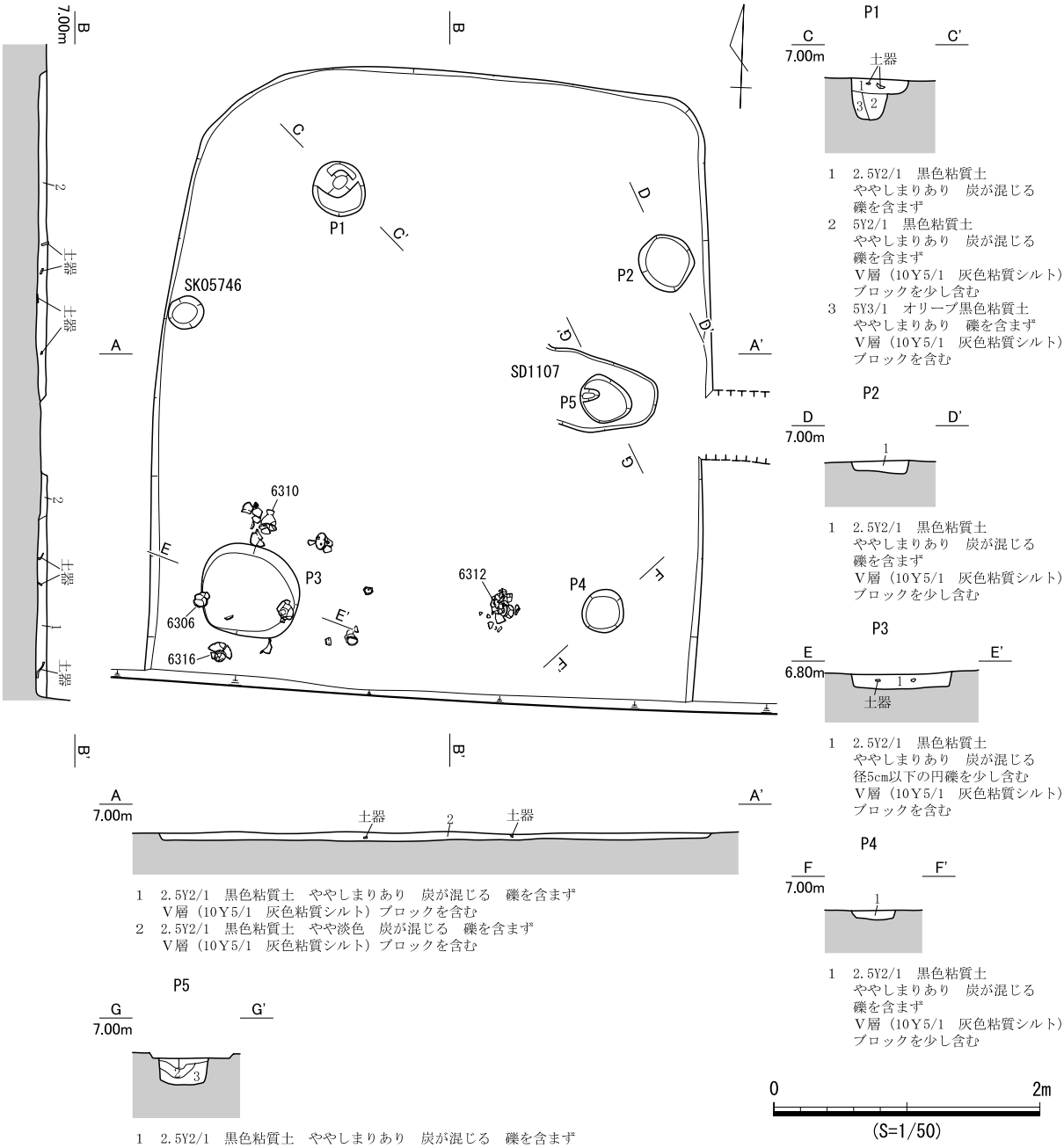


図 1870　SB532 遺構図

はミガキ調整を施す。内面には多条沈線を施文し、その間にヘラによる連弧文が認められるが、器面の摩耗が著しく、文様は不明瞭である。

時期　出土遺物の多くはⅥ期～Ⅷ期であり、P3からもほぼ同時期の遺物が出土した。Ⅵ期～Ⅶ期のSB533を切ることから、Ⅶ期～Ⅷ期と考えられる。

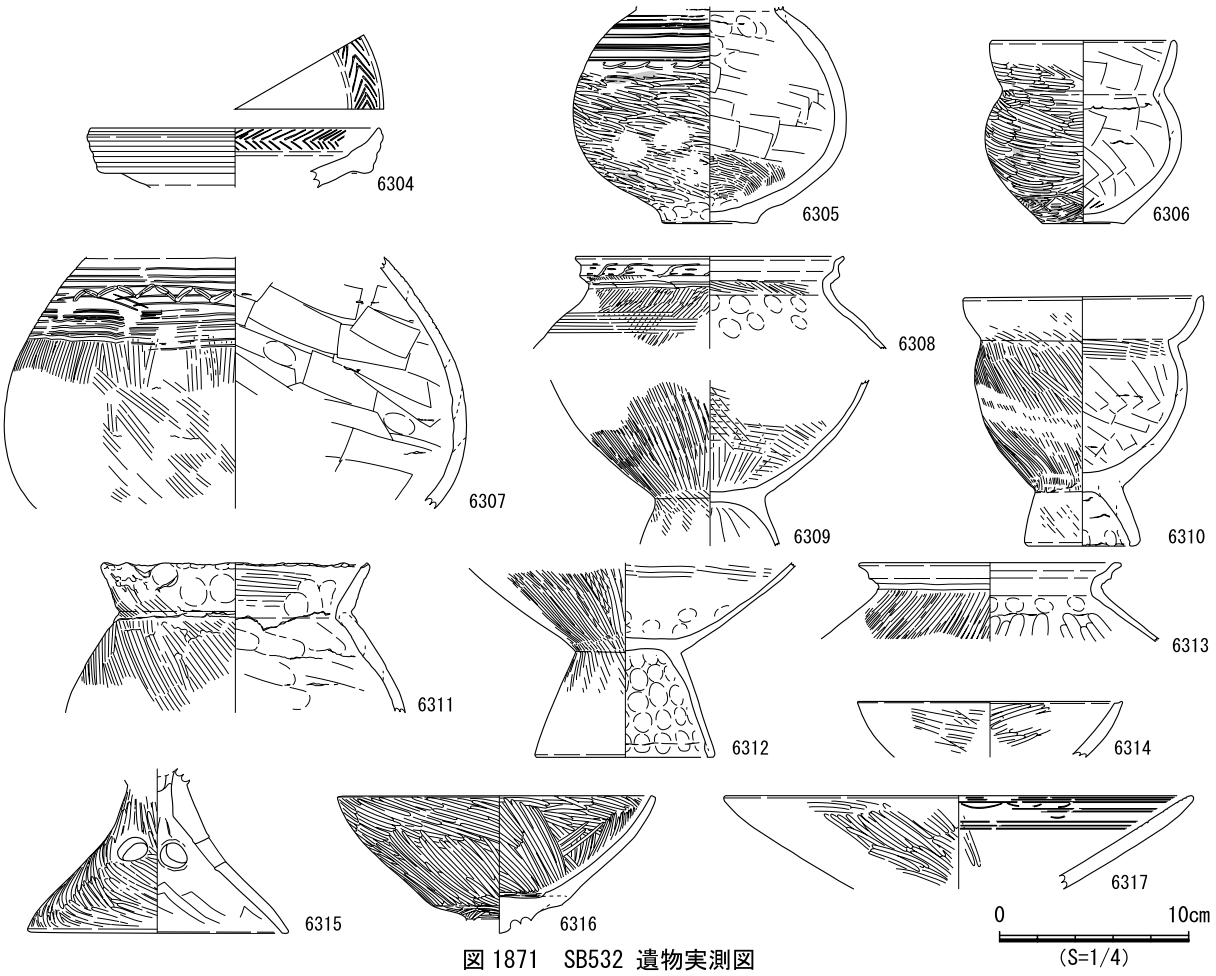


図 1871　SB532 遺物実測図

SB533（**遺構**：図 1872、**遺物**：図 1873）

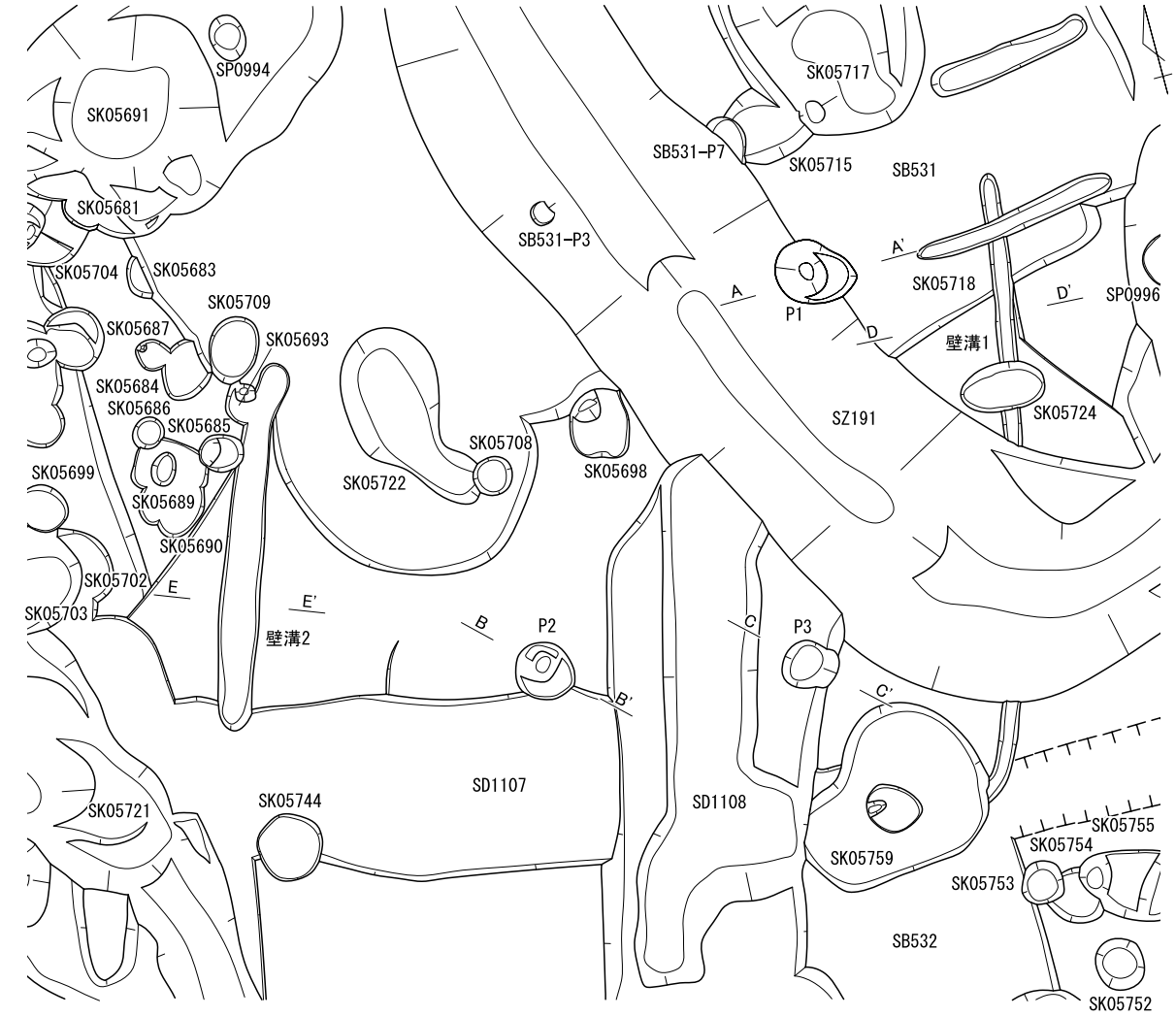
検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。南北方向に直線的にのびる溝２条（壁溝１、２）を検出し、その内側に柱穴を確認したため、竪穴住居跡と判断した。検出面において壁溝が見えており、埋土は削平されたと考えられる。北東側をSB531に、南東側をSB532に切られている。

形状　南北辺は確認できていないが、東西２条の壁溝の配置から、隅丸方形状と考えられる。なお、壁溝間の距離は約5.2ｍである。

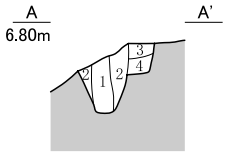
床面　壁溝間において３基の小穴を検出した。いずれも掘形が深く、壁面の傾斜は急であり、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。また、P1とP2では柱痕跡を確認した。なお、貼床（整地土）と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　柱穴から土器41点、壁溝から土器７点が出土した。いずれもⅥ期～Ⅶ期の小片である。

出土遺物　6318はⅦ期壺H2b類。口縁部外面に多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文、刺突文を加える。内外面ともにミガキ調整を施す。6319はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁端部が強く内湾し、

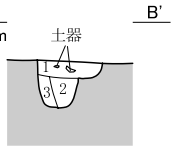


P1



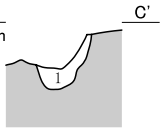
1　2.5Y2/1　黒色粘質土
　　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色
　　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
4　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）

P2



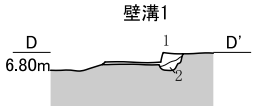
1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　　炭が混じる　礫を含まず
2　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　　炭が混じる　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）
　　ブロックを少し含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
　　ややしまりあり　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む

P3



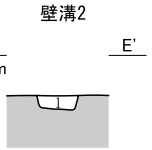
1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色
　　ややしまりあり
　　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）
　　ブロックを少し含む

壁溝1



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
　　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを含む
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
　　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを多く含む

壁溝2



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり
　　炭が混じる　礫を含まず
　　Ⅴ層（10Y5/1　灰色粘質シルト）ブロックを多く含む

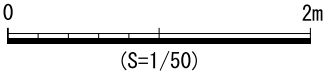


図 1872　SB533 遺構図

端部は尖り気味である。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB531に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

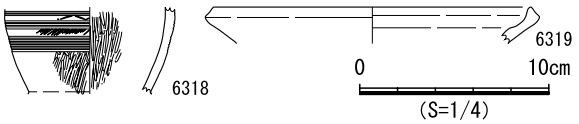


図 1873　SB533 遺物実測図

SB534（**遺構：図 1874～1876、遺物：図 1877**）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、北側が調査区域外にある。Ⅴ層上面における検出であり、遺構の重複が著しいため平面形が不明瞭であった。北東側でSB536に、中央東寄りで

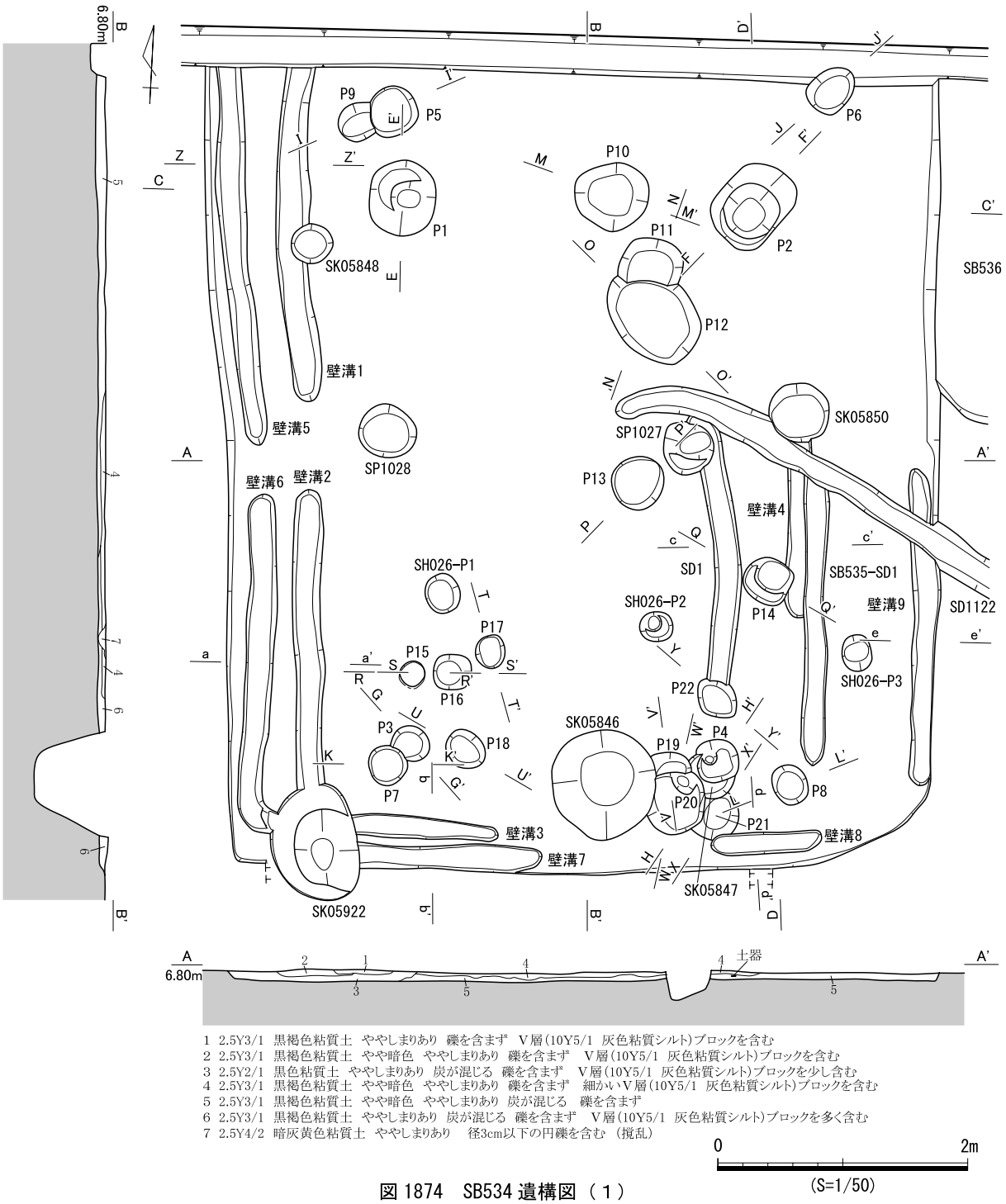
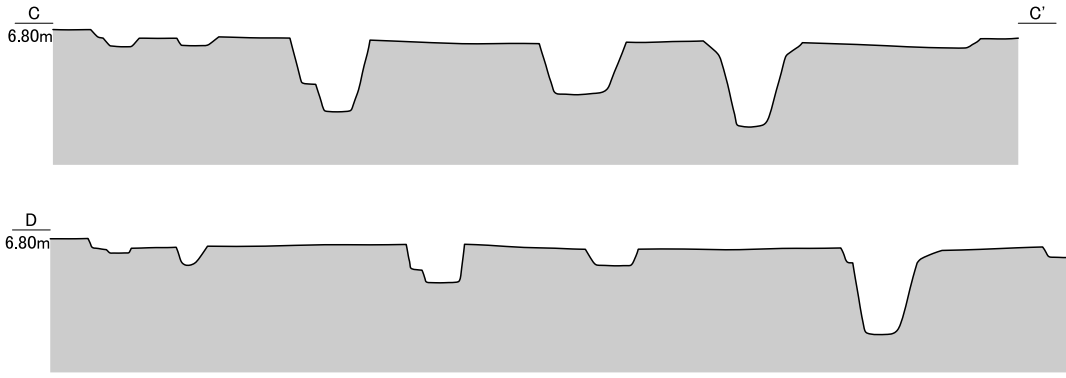
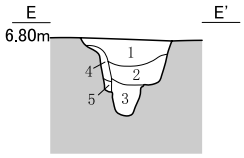


図 1874　SB534 遺構図（１）

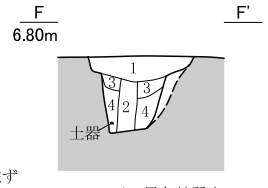


P1



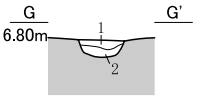
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 しまり弱い 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4 5Y3/2 オリーブ黒色砂質土 ややしまりあり 礫を含まず
5 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P2



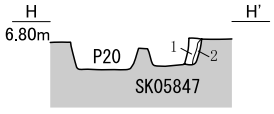
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 5Y2/1 黒色粘質土 しまりが弱い 礫を含まず
3 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
4 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
砂質土ブロックを多く含む

P3



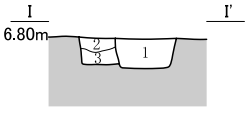
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が少し混じる
礫を含まず
径1cm以下のＶ層
(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む
2 5Y4/1 灰色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
黒褐色土ブロックを含む

P4



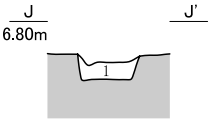
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む
2 5Y4/1 灰色砂質土
ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを少し含む

P9　P5



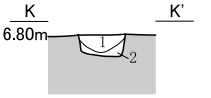
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色
ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
3 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず

P6



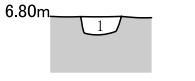
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が少し混じる
礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む

P7



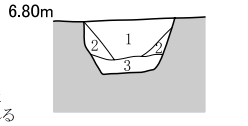
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを少し含む
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む

P8



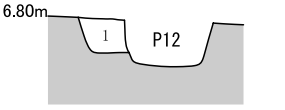
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず

P10



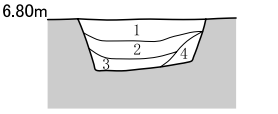
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 しまり弱い 礫を含まず
砂質土ブロックを含む

P11



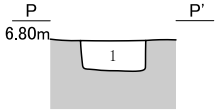
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む

P12



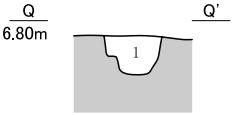
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
上部にＶ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
しまり弱い 炭が少し混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを少し含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 しまり弱い
炭が少し混じる 礫を含まず
砂質土ブロックを含む
4 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを含む

P13



1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
上部にＶ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P14



1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
Ｖ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

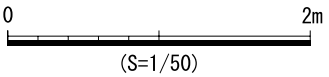


図 1875　SB534 遺構図（２）

SD1122に、南西側でSK05922に切られ、南側でSB535を切る。

形状　東西長約5.2ｍで、南北に長い長方形を呈する。確認できた３辺は直線的で、南西隅部はほぼ直角であるが、南東隅部は丸みを帯びる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　７層に分層した。埋土中にブロック土の混入が多く、層界の凹凸もみられるため人為堆積と考えられる。なお、埋土掘削中に北西部の床面近くで炭化物の広がりを確認した。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上で小穴22基と壁溝を含む溝状

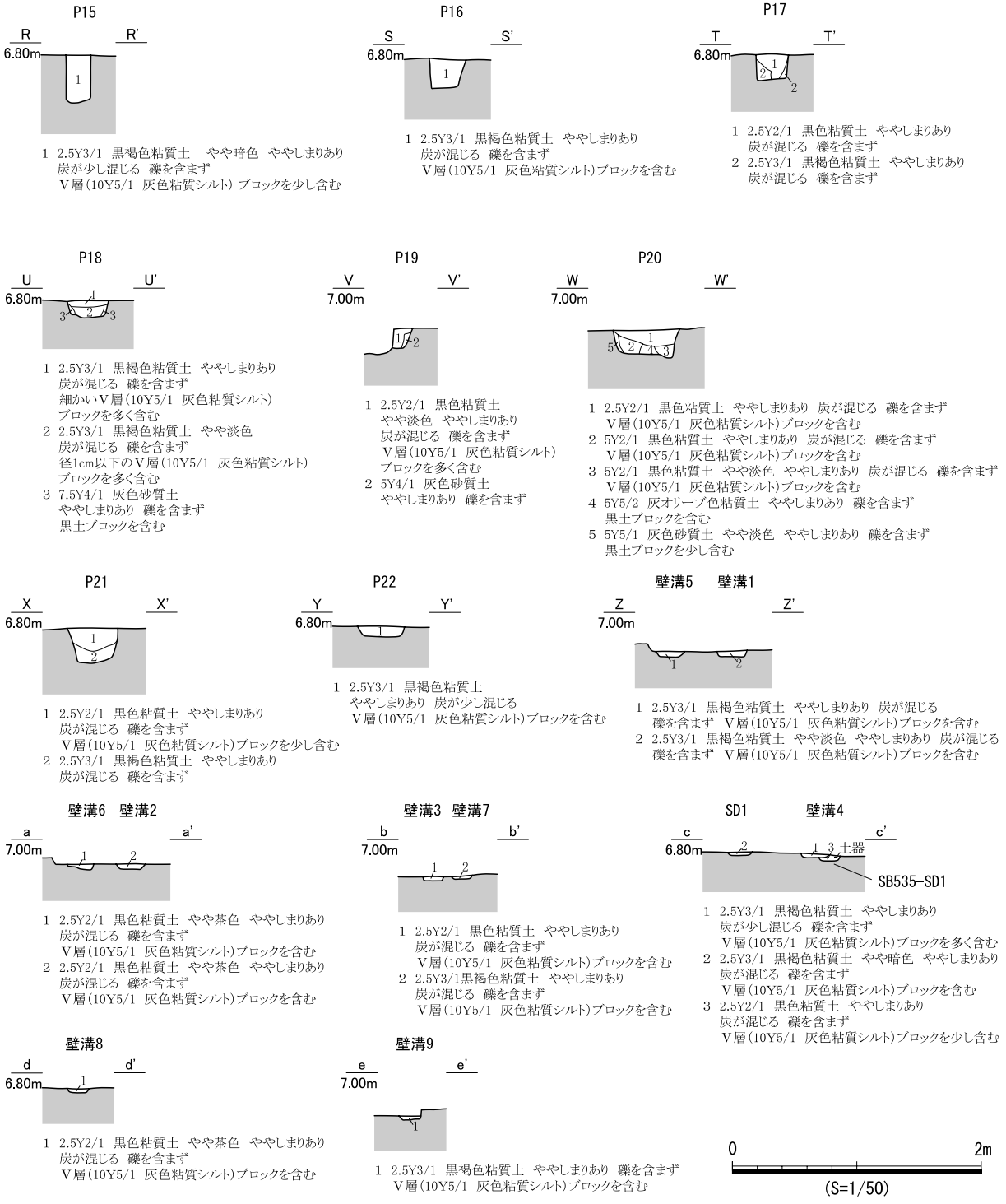


図 1876　SB534 遺構図（３）

遺構10条を検出した。壁溝が二重になることから建て替えがあったと考えられ、柱穴P7がP3を切ることから、柱穴は内側から外側へ拡張されたと考える。壁溝も同様の変更があったとして、内側の壁溝２が古いと判断した。平面的な位置関係からP1～P4を建て替え前、P5～P8を建替え後の住居跡の柱穴と考えた。また、残りの15基の小穴の一部は、重複するSB535に所属する可能性もある。壁溝については、内側の壁溝１～壁溝４を建て替え前、外側の壁溝５～壁溝９を建て替え後とした。SD1は間仕切り溝の可能性が考えられる。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器1,182点、小穴から土器297点、壁溝やSD1から土器38点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが主体であり、少量ながらⅧ期以降の遺物も出土した。なお、P18からⅥ期～Ⅶ期の甕Ａ類（6323）、P21からⅦ期の甕Ｄ類（6325）が出土した。

出土遺物　6320はⅥ期～Ⅶ期壺Ａ類。口縁部が強く外反する。口縁端部下面には剥離痕が認められることから、端部を下方に拡張していた可能性が高い。6321はⅦ期壺Ａ類。胴部上半に直線文が２帯認められ、その間に大振りの山形文を施文する。山形文の文様に合わせて赤彩を施す。6322はⅧ期～Ⅸ期壺。口縁部が外反する。外面には段を形成して二重口縁状を呈し、間隔をあけて羽状文を施文する。6323はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。端部には顕著な平坦面を形成する。6324はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部がくの字に屈折し、端部が屈曲してほぼ直立する。6325はⅦ期甕D2b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く屈曲する。6326は偏平な円盤状の土製品であるが、蓋である可能性が高い。胎土・調整からⅤ期～Ⅶ期の可能性がある。

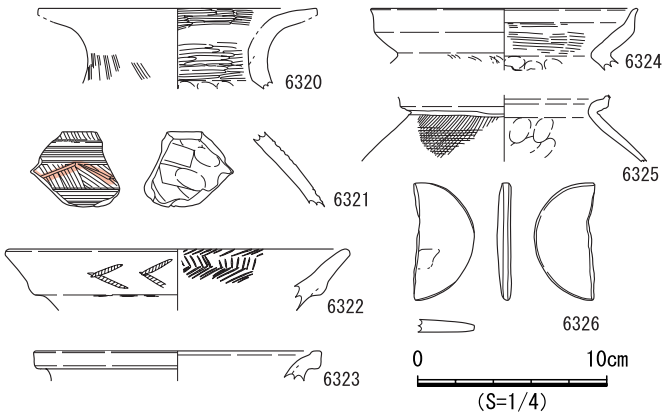


図 1877　SB534 遺物実測図

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB536に切られるが、小穴出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

SB535（遺構：図 1878）

検出状況　東部西側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、大半をSB534に切られる。Ⅴ層上面において検出したが、平面形は不明瞭であった。

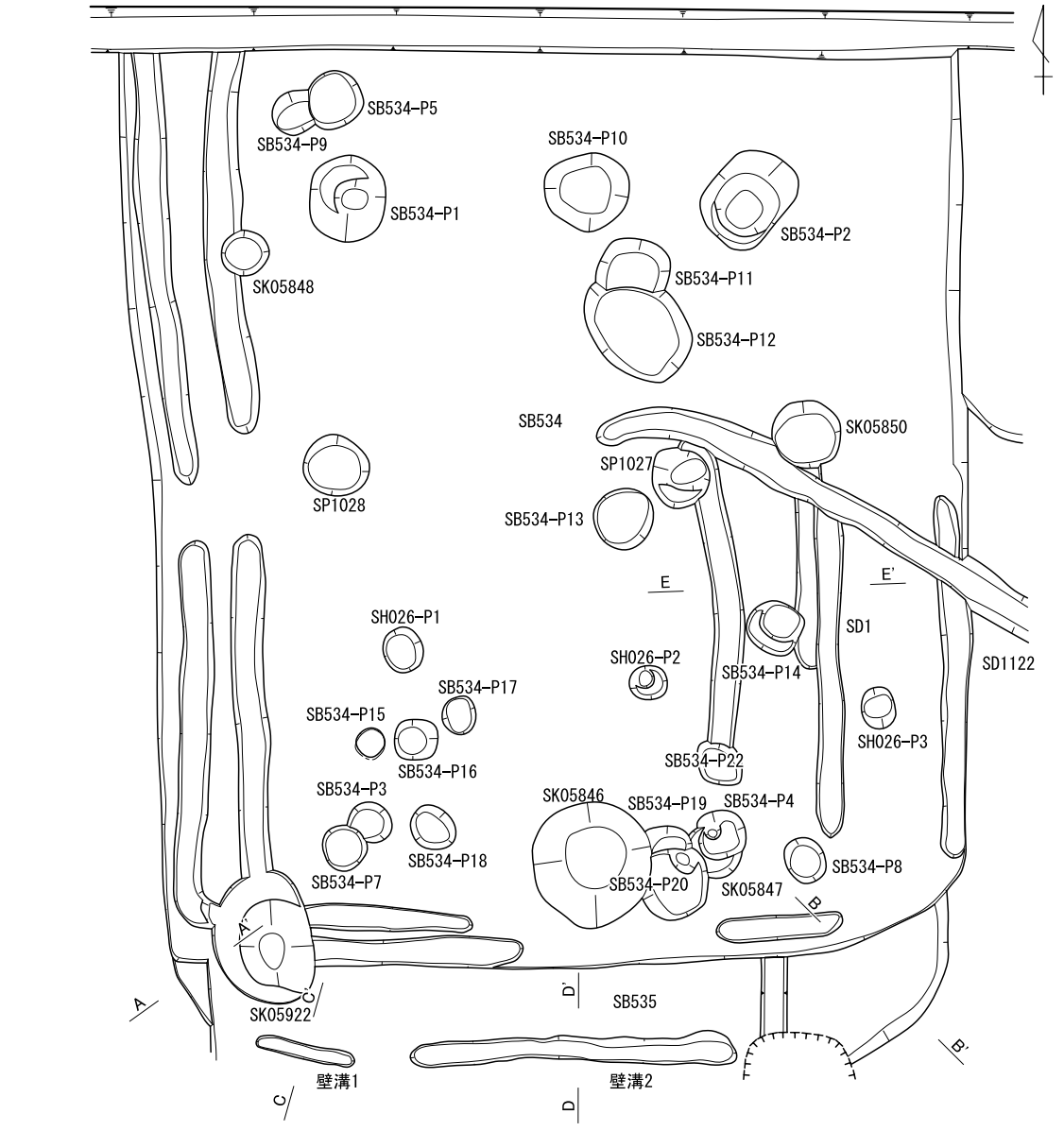
形状　確認範囲はわずかだが、丸みを帯びた南東隅部と南西隅部を確認したことから、全形は隅丸方形もしくは隅丸長方形と考えられる。南辺は２条の壁溝（壁溝1、壁溝2）に沿うと考えられ、ほぼ直線である。

埋土　２層に分層した。南東隅部と南西隅部では埋土の様相が異なり、南西隅部にはブロック土の混入が認められる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）、炉跡は確認できなかった。床面上にて小穴は検出できず、２条の壁溝を確認したのみである。他にも、本遺構を切っているSB534の埋土下層から、壁溝の可能性がある溝状遺構（SD1）を確認した。

遺物出土状況　埋土中から土器10点、壁溝から土器８点が出土した。大半がⅥ期～Ⅶ期の小片だが、わずかにⅤ期のものも出土している。しかし、いずれも細片であり図示していない。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB534に切られることから、それ以前と考えられる。



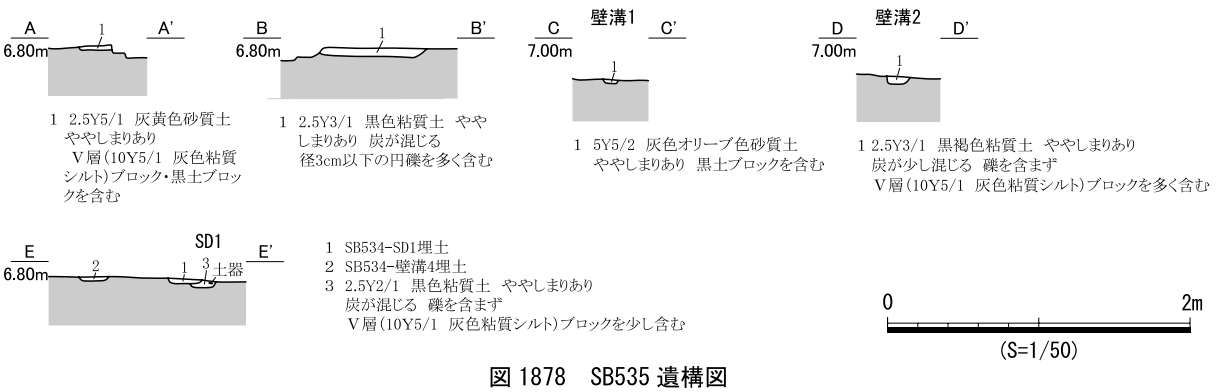


図 1878　SB535 遺構図

SB536（遺構：図 1879、遺物：図 1880）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、西側でSB534を切る。Ｖ層上面における検出であるが、遺構の重複のため平面形は不明瞭であった。なお、埋土上面でSF003を検出した。

形状　半分以上が調査区域外となるため、平面形は不明である。南東辺は直線的であるが、南西辺は中央がやや外側に膨らみ、隅部はやや丸みを帯びている。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。埋土全体にブロック土の混入が多く、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上で７基の小穴を確認し、そのうち、P1、P5、P6はやや深く、壁面がほぼ垂直である。平面的な位置関係から、P1が柱穴と考えられる。また、P7は東西に長い楕円形の穴で、底面東側にて土器がまとまって出土した。なお、壁溝、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器572点、石器類１点、小穴から土器60点が出土した。南西隅でⅥ期

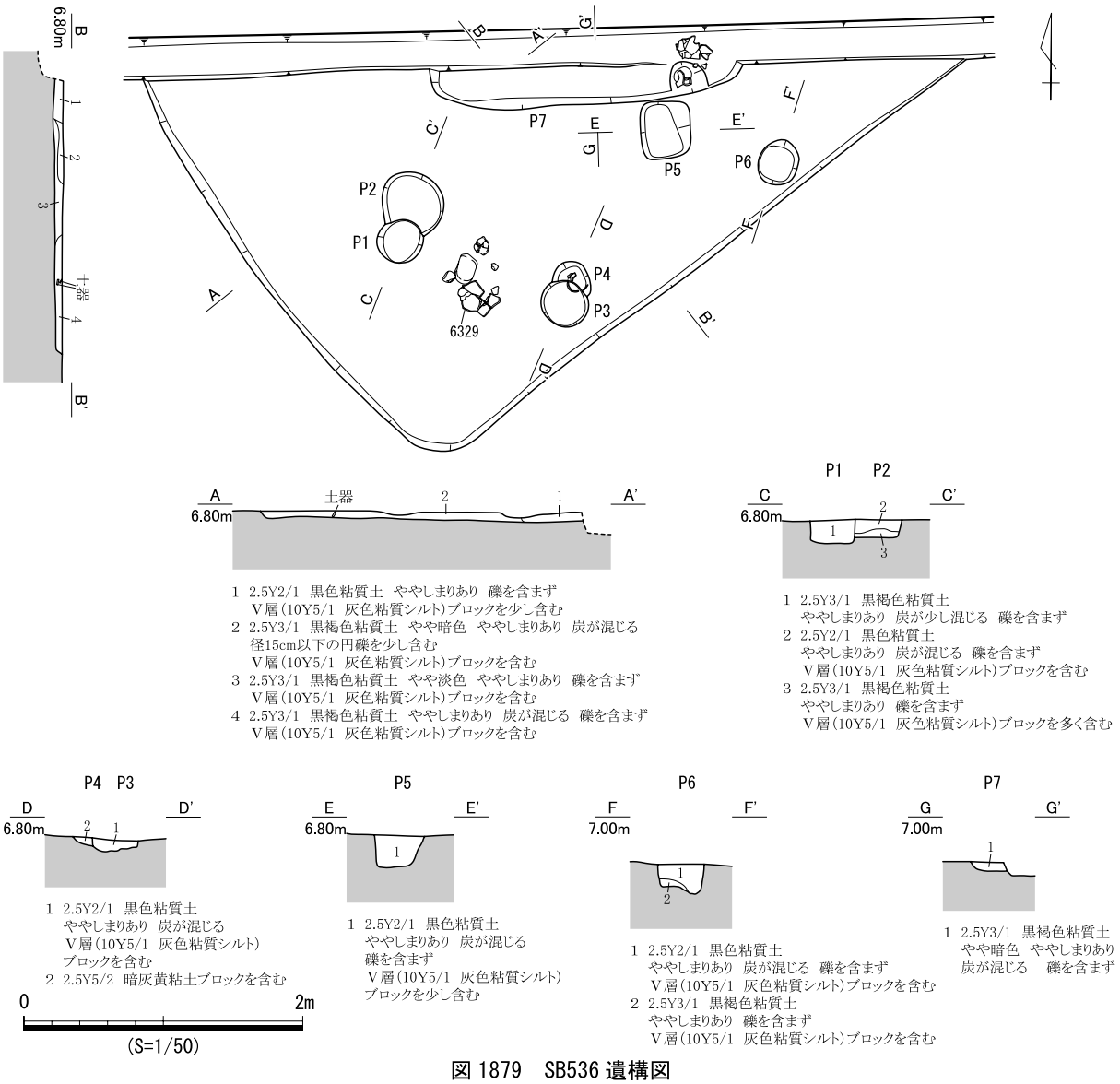


図 1879　SB536 遺構図

～Ⅶ期の甕（6329）とともに砥石（6331）が正位で出土した。また、埋土中からヒスイ製の勾玉（6332）も出土した。埋土中の土器は散在して出土し、Ⅵ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6327はⅥ期～Ⅶ期壺。胴部内面には粗いハケ目が残る。外面にはハケ及びナデによる調整を加えるものの、輪積み痕が明瞭に残るなど雑な作りである。底部はやや小さく、中央が大きく窪む。6328はⅥ期～Ⅶ期壺A5類。口縁部を下方に大きく拡張し、内面には羽状文、端部平坦面には擬凹線を施文する。端部には赤彩を施す。6329はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部が強く外反して端部を丸くおさめ、外面には煤が付着する。6330はⅥ期～Ⅶ期高坏C3c類。口縁部が内湾し、肥厚する内面に多条沈線が認められる。6331は砥石。扁平な円礫の表裏面を砥面として使用し、大きく窪んでいる。側面には多数の敲打痕が残り、表面下方に幅約0.6㎝の溝状の窪みがある。6332はヒスイ製の玉類。不整形を呈し、穿孔の断面形は円錐状である。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB534を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

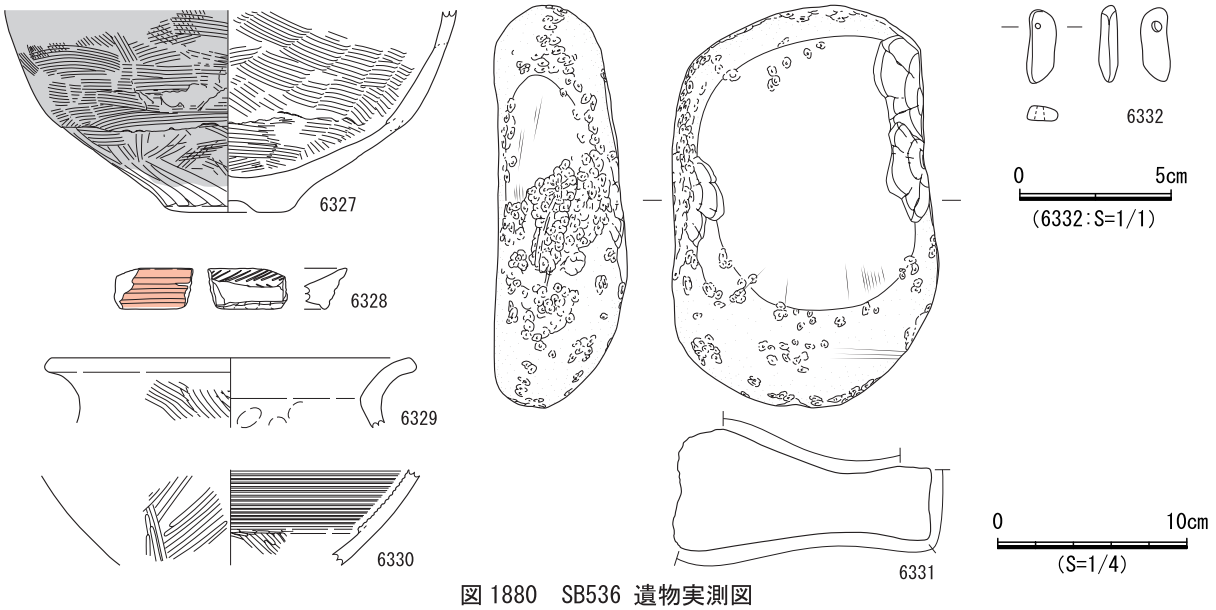


図1880　SB536 遺物実測図

SB537（遺構：図1881・1882、遺物：図1883～1885）

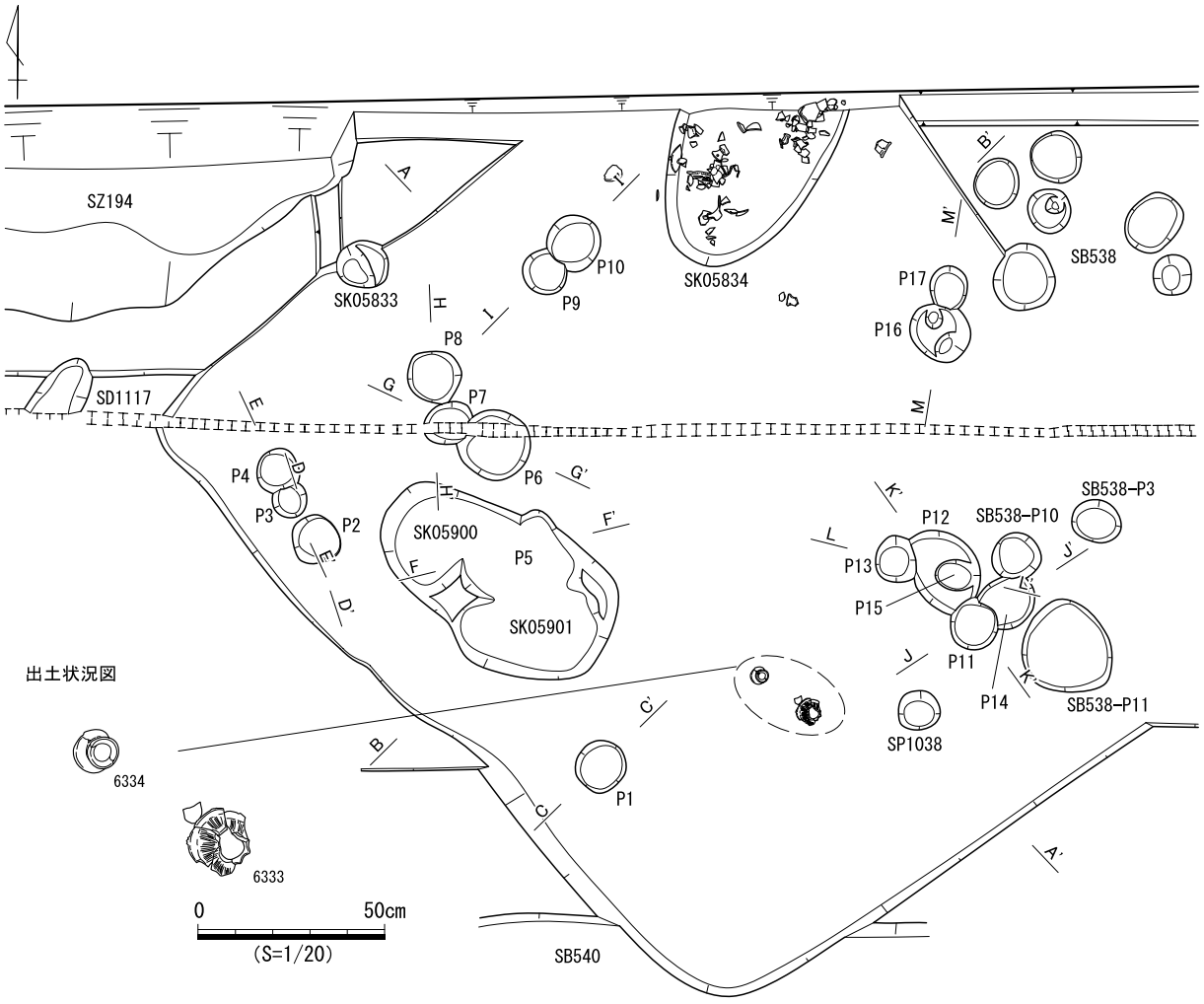
検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、SB538とSB540に切られる。本遺構周辺は、複数の竪穴住居及び方形周溝墓の溝が重複し、平面形は不明瞭であった。なお、底面でSK05384を検出したが、遺物の出土状況から、SK05384は本遺構より後出する可能性が高い。

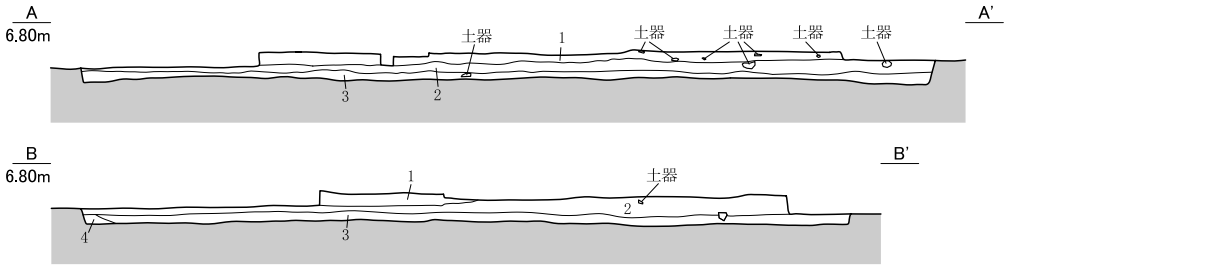
形状　北西－南東長約5.6ｍ、北東－南西長約5.1ｍで、東西方向にやや長い不整方形を呈する。南東辺は直線的だが、南西及び北西辺はやや蛇行する。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層し、埋土全体に炭化物が混入する。また、中層以下にブロック土を含むことから、人為堆積と考えられる。

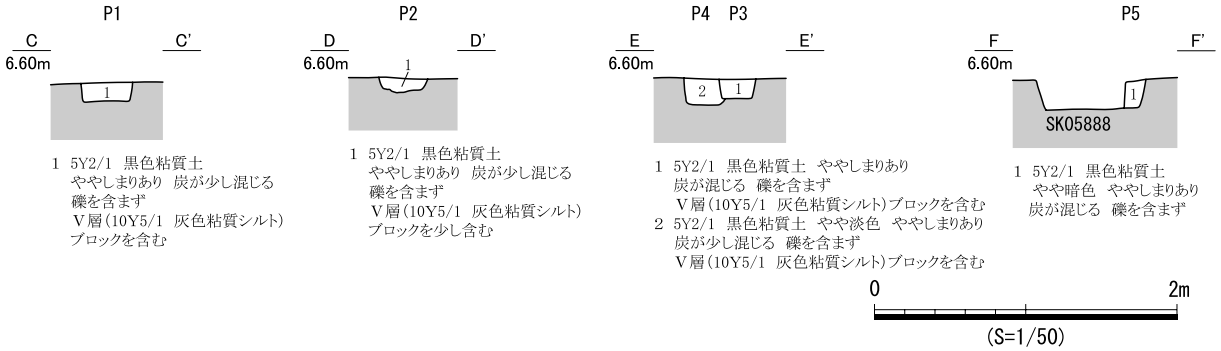
床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて17基の小穴を検出した。いずれも土層断面で柱痕跡は確認できなかったが、P13とP16は他の小穴よりも深く、壁面の傾斜も急である。しかし、平面的な位置関係から柱穴を想定するのは困難である。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器6,457点、炭化材・炭化物１点、石器類８点、小穴から土器96点が出





1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　土器の量が多い　径5cm以下の円礫を少し含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　径5cm以下の円礫を少し含む　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　径5cm以下の円礫を少し含む　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む



P1
1　5Y2/1　黒色粘質土
ややしまりあり　炭が少し混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P2
1　5Y2/1　黒色粘質土
ややしまりあり　炭が少し混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロックを少し含む

P4　P3
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり
炭が少し混じる　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む

P5
1　5Y2/1　黒色粘質土
やや暗色　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず

図 1881　SB537 遺構図（１）

土した。中央南寄りの床面上ではⅤ期の壺Ｊ類（6334）が口縁部を上にしてほぼ完形で出土し、その横からⅤ期の壺Ａ類（6333）の口縁部片が出土した。土器はⅤ期～Ⅶ期のものが多く、わずかにⅧ期やⅨ期のものが混入する。なお、SK05834出土遺物との接合は確認できなかった。

出土遺物　6333～6346は壺。6333はⅤ期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を下方に拡張して平坦面を形成する。口縁部内面には、端部際に刺突文を施文し、その内側に円形刺突文を配する。端部平坦面にはクシによる羽状文を施文し、３条１組の棒状浮文を複数個所に貼付する。内面にはミガキ調整を施し、外面にはナデ、ハケを施す。頸部には貼付突帯が認められる。頸部の突帯直下に直線文、波状文が認められる。6334はⅤ期壺J1類。口縁部が短く直線的にハの字に開き、端部に顕著な平坦面を形成する。底部を欠損するが、胴部最大径の肩部が強く張る。胴部下半の一部に煤が付着する。6335、6336はⅤ期壺Ｋ類。6335は頸部が長く直立し、口縁部が外反する。端部際の内外面にはナデによるわずかな凹面が認められ、端部には外傾する平坦面を強いナデによって平坦に仕上げる。6336は口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して端部に顕著な平坦面を形成する。端部には擬凹線が認められ、その上に円形浮文を貼付する。端部及び口縁部外面は、被熱のためか赤色化している。胎土から生駒西麓産の可能性がある。6337はⅤ期壺。脚部がハの字に開き、裾部が外反する。6338はⅤ期～Ⅵ期壺Ａ類。胴部上半に刺突文帯と直線文帯が交互に施文される。6339はⅤ期～Ⅵ期壺A1a類。口縁部が直線的に外傾し、端部を下方に拡張して顕著な平坦面を形成する。口縁部内面には、端部側からクシによる羽状文２帯、直線文帯、クシによる羽状文２帯の順に施文される。端部には擬凹線を施文し、２本１組の縦位の棒状浮文を貼付する。6340はⅤ期～Ⅵ期壺B2a類。頸部が胴部から直立気味に立ち上がり、口縁部が大きく外反して端部に顕著な平坦面を形成する。6341はⅤ期～Ⅵ期壺。底部は小さく、

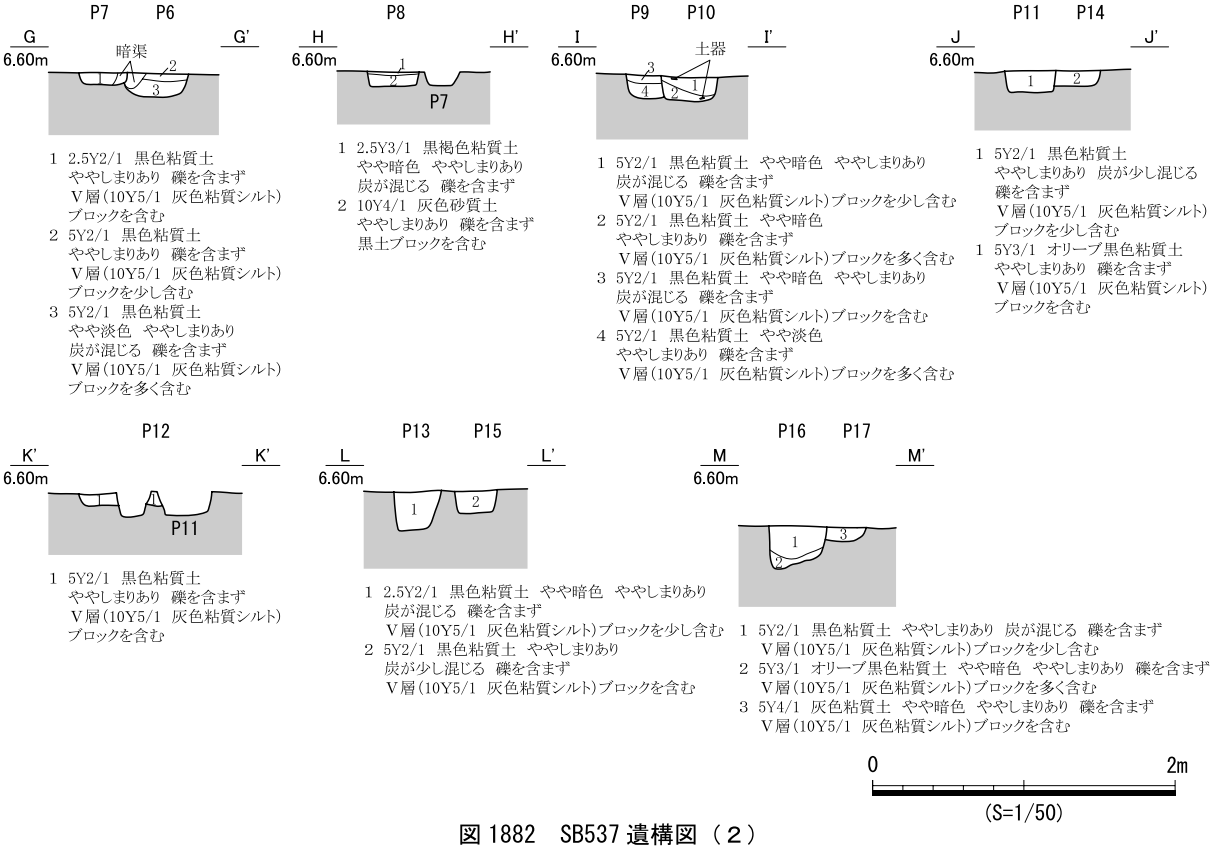


図 1882　SB537 遺構図（２）

中央に窪みが認められる。胴部下半は直線的に外傾し、最大径の肩部が強く屈曲する。6342はⅥ期～Ⅶ期壺B2a類。口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面を形成する。6343はⅥ期～Ⅶ期壺Ｂ類。底部は平底で、胴部下半の外面には粗いハケ目が残り、一部に煤が付着する。内面にはハケ後ナデを施し、輪積み痕が残る。6344はⅥ期～Ⅶ期壺H3類。口縁部が直線的に外傾し、端部付近がやや内湾する。6345、6346はⅥ期～Ⅶ期壺。6345は底部が一部残存し、胴部外面にはミガキ調整を施し、内面には粗いハケ目が残る。6346は底部が平底で、外面は磨耗が進行しているため、文様や器面調整については不明である。内面にはハケ及びナデ痕が認められる。

6347～6368は甕。6347はⅣ期甕Ｄ類。口縁部が短く外反し、端部を外方に拡張して顕著な平坦面を形成する。平坦面上には３条の凹線が認められる。頸部には刺突文を施文し、外面には一部に煤が付着する。6348はⅤ期甕A1類。口縁部が外反し、端部が屈曲してほぼ直立する。外面には刺突を加え、頸部には直線文が認められる。6349、6350はⅤ期甕A2a類。頸部が直立気味で、口縁端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面には刺突を加える。6350は頸部以下に直線文を施文し、それ以下に刺突文が認められる。6351はⅤ期甕A2b類。口縁部が外反し、端部が短く屈曲して直立する。端部下端には刺突を加え、頸部以下には直線文、刺突文が認められる。6352はⅤ期甕Ａ類。頸部直下にクシによる直線文、その下方にやや雑な波状文が認められる。6353、6354はⅤ期甕B1b類。口縁部が短く外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。6353は胴部に文様は認められず、外面はハケ調整を基本とする。内面にはナデ及びケズリが認められ、底部は平底で穿孔が認められる。胴部最大径は上から３分の１ほどの上方に位置し、肩部が張る。外面には煤が付着する。6354は頸部直下に刺突文を施文し、それ以下にはハケ目が残る。内面にはケズリが認められる。6355はⅤ期甕A2a類。口縁部が外反し、端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面には刺突を加える。頸部には直線文、下方に刺突文が認められる。6356はⅤ期甕A2b類。口縁部が外反し、端部がナデとともに屈曲してほぼ直立する。端部にはわずかに平坦面を形成し、外面には刺突を加える。頸部以下には幅広の直線文及び刺突文が認められ、一部に煤が付着する。6357はⅤ期～Ⅵ期甕A3類。口縁部が外反し、端部がやや屈曲して内湾する。外面には刺突を加え、頸部には直線文が認められる。6358はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が短く外反し、端部には強い平坦面を形成して沈線状となる。内外面ともにナデ調整を施し、外面には煤が付着する。6359はⅥ期～Ⅶ期甕A2b類。口縁部が大きく外反し、端部がナデによって短く屈曲する。端部には平坦面を形成し、外面にも直立する平坦面を形成する。頸部がやや肥厚する。6360はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部がくの字に屈折し、端部付近が内湾する。胴部外面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。6361はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部がくの字に屈折し、端部付近がナデによって強く屈曲する。端部はほぼ直立して受口状を呈し、わずかな平坦面を形成する。胴部に文様は認められず粗いハケが残り、煤が付着する。脚部がハの字に開き、接地面が平坦である。6362、6363はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。内外面ともにハケ調整を施す。胴部外面には煤が付着する。6362は口縁部がくの字に屈折し、長く開いて端部に平坦面を形成する。6363は口縁部がなだらかに外反し、端部に平坦面を形成する。6364、6365はⅥ期～Ⅶ期甕B4類。口縁部が比較的長く屈折外反し、端部を丸くおさめる。6364は胴部外面に粗いハケ目が残り、煤が付着する。内面にはケズリが認められる。胎土には比較的大きい砂粒が認められる。6366はⅥ期～Ⅶ期甕E4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。外面には一部に煤が付着する。6367はⅦ期甕E3類。

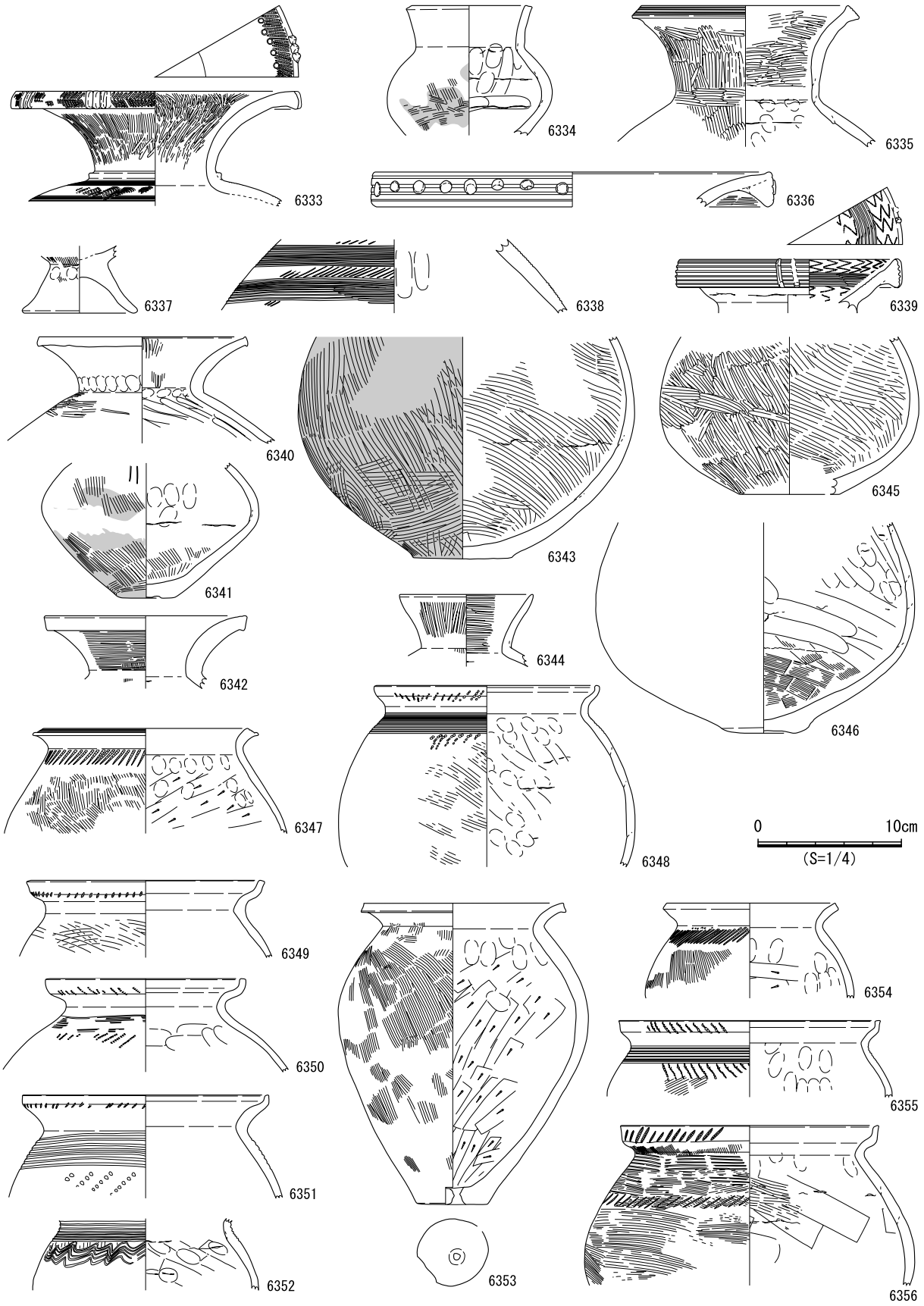


図 1883　SB537 遺物実測図（１）

口縁部がくの字に屈折し、直線的に外傾する。端部には断続的なナデによるわずかな平坦面を形成する。胴部形状は球形に近く、外面にはハケを施し、煤が付着する。6368はⅧ期甕D3類。口縁部の屈曲は形骸化し、外方に大きく開く。口縁部外面には煤が付着する。

6369～6371は鉢。6369はⅤ期～Ⅵ期鉢A3a類。頸部の屈曲はゆるやかで口縁部が外反し、端部をつまみあげるように尖らせる。外面には平坦面を形成し、下端には刺突を加える。端部以下には幅広の直線文帯を施文し、その下方に刺突文が認められる。胴部下半に煤が付着する。6370はⅤ期～Ⅵ期鉢B1類。胴部は外傾し、口縁部は内湾して直立気味となる。内面は板ナデ、外面にはナデ調整を施し、外面には煤が付着する。6371はⅧ期～Ⅸ期鉢。口縁部が外反し、中段が屈折して二重口縁を形成する。

6372～6388は高坏。6372、6373はⅤ期高坏Ｂ類。付根から脚部が円錐状に開く。6372は裾部がやや内湾し、透孔を３方向に配置する。一部に煤が付着する。6373は裾部がやや強く外反する。6374、6375はⅤ期高坏B3b類。ともに坏底部から口縁部が大きく外反し、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。6375の口縁部は一部が歪む。6376はⅤ期～Ⅵ期高坏I2類。口縁部が内湾し、端部が直立気味である。内面はナデ、外面にはミガキが認められる。外面には、一部に煤が強く付着する。6377はⅥ期高坏Ｃ類。脚裾部が大きく開き、やや内湾する。外面にはミガキが認められる。6378はⅥ期～Ⅶ期高坏C3c類。口縁部がわずかに内湾し、端部付近が内湾して直立する。内面には多条沈線が認められる。6379はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。坏底部は中央部がやや高くなり、明瞭な段をもって口縁部が外傾して開く。脚部が付根から円錐状に開き、透孔が認められる。6380はⅥ期～Ⅶ期高坏G3b類。坏底部から口縁部が外傾し、端部付近が内湾してほぼ直立する。端部を丸くおさめ、外面には多条沈線が認められる。脚部は低く、付根から円錐状に開く。透孔は３方向に配置され、それ以下で裾部が大きく開く。内面の段、外面の稜ともに明瞭に残り、内外面ともに丁寧なミガキ調整を施す。6381はⅦ期高坏C4b類。口縁部が直線的に外傾して開き、端部付近がやや内湾する。端部には内傾する平坦面を形成し、多条沈線が認められる。内外面ともにミガキ調整を施す。6382～6385はⅦ期高坏C4d類。6382は、口縁部内面の多条沈線間にヘラによる山形文を２帯、クシによる羽状文を１帯加える。6383、6384は口縁部内面の多条沈線間に、ヘラによる山形文を２帯加える。6385は、口縁部内面の多条沈線間に、やや大型の円形刺突文を１帯加える。6386はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部は平坦で、付根から脚部が円錐状に開く。２孔１対の透孔を２方向に配置して脚裾部が大きく開き、やや内湾する。6387はⅦ期高坏G3c類。口縁部外面に多条沈線を施文し、その間にクシによる刺突文を３帯加える。6388はⅨ期高坏。坏底部から口縁部が直線的に外傾する。外面の稜は明瞭に残るが、内面の段は不明瞭である。

6389～6391は器台。6389はⅤ期器台A1類。口縁部がなだらかに外反し、端部をわずかに上下に拡張して顕著な平坦面を形成する。6390、6391はⅥ期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部に平坦面をもつ。6390は脚部が柱状に直立し、裾部が大きく外反する。透孔は３方向に配置され、脚部下方に位置する。全面にミガキ調整を施す。

6392は砥石。大半は割れているが、３面の砥面が確認できる。

時期　床面直上からⅤ期の遺物が出土しているが、Ⅵ期～Ⅷ期のSB538とⅨ期のSB540に切られることと、埋土全体の出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅶ期と考えられる。

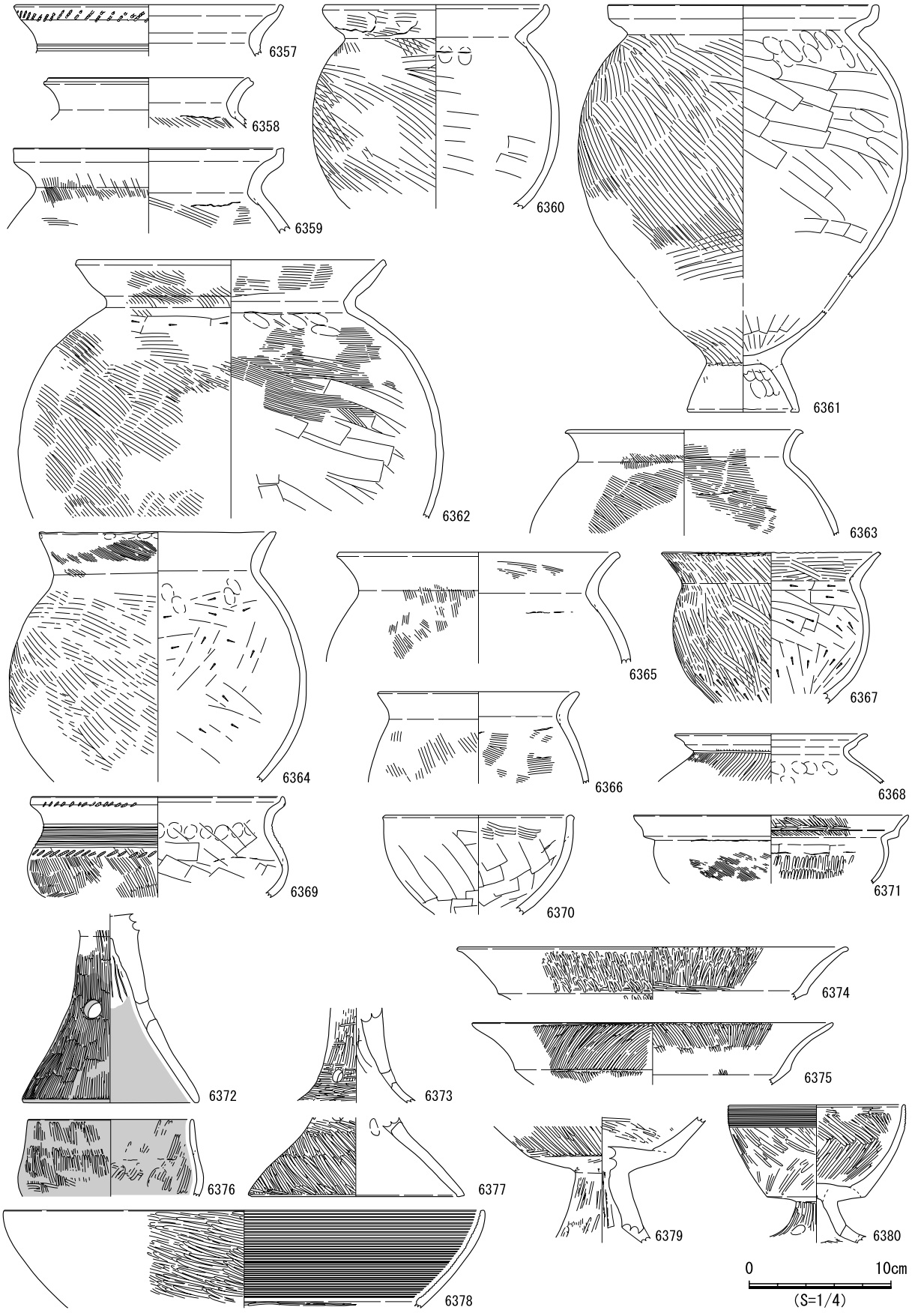


図 1884　SB537 遺物実測図（２）

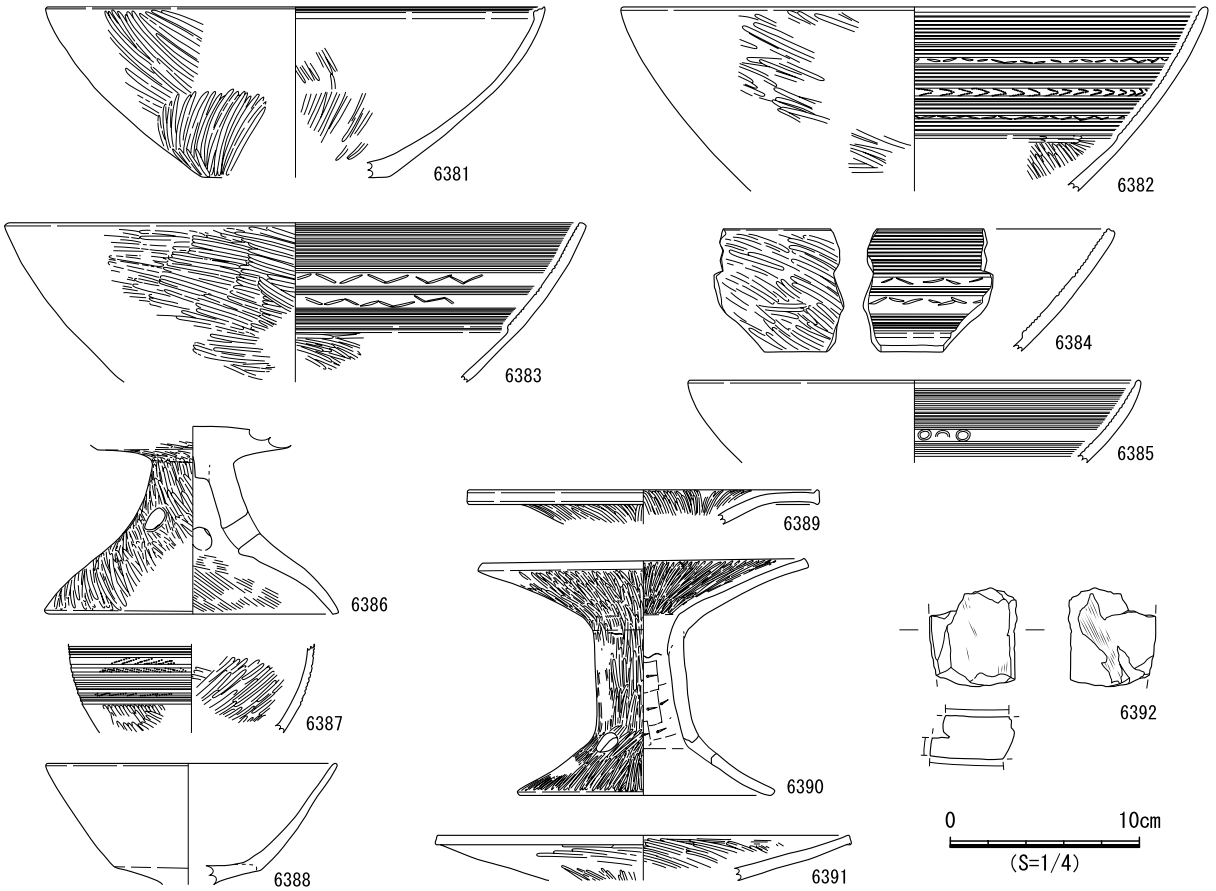


図 1885　SB537 遺物実測図（３）

SB538（遺構：図 1886・1887、遺物：図 1888）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外にのびる。Ｖ層上面において検出し、平面形は不明瞭であった。東側をSB539に、南側をSK05903に切られ、西側でSB537を切る。

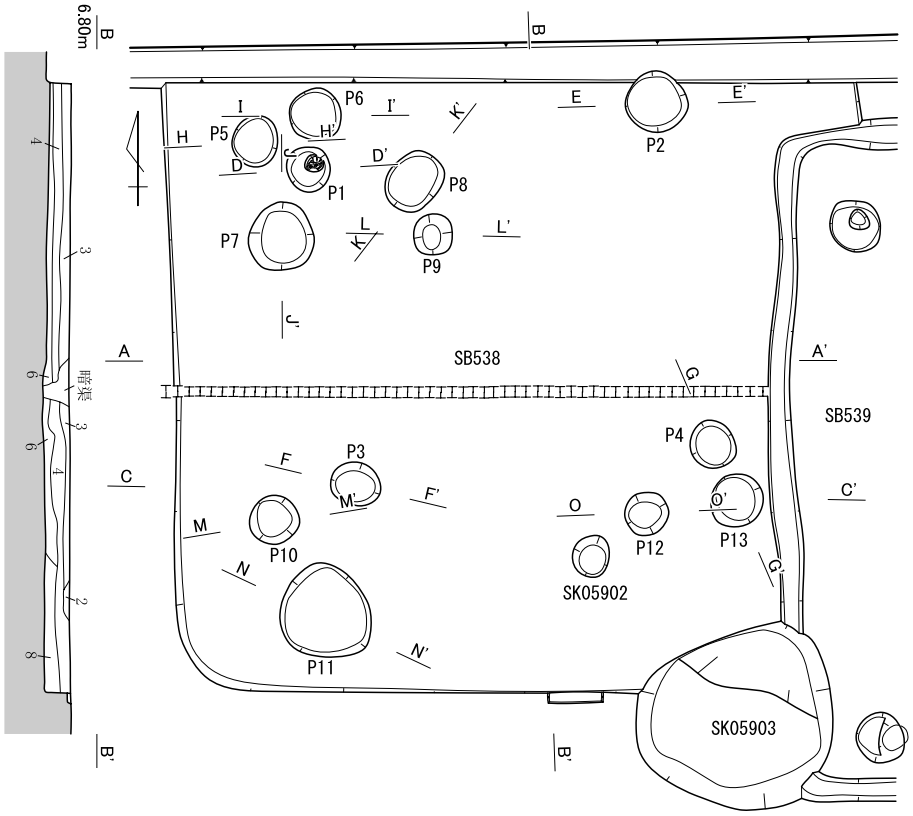
形状　東西長約4.6ｍの隅丸方形を呈し、西辺と南辺は直線的にのびている。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は垂直に近い。

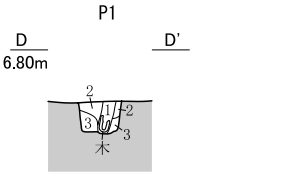
埋土　10層に分層した。全体的に炭化物が混じり、住居の南西側の床面上の堆積土（８～10層）にブロック土が混入する。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて13基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1～P4の４基を柱穴と考えた。P1には柱根が残存しており、P4は0.36ｍと深いが、P2とP3は浅い。この４基を柱穴とした場合、平面形の方位と柱筋の方位とがずれており、平面形を誤認したか、あるいは平面形を確認できなかった別の竪穴住居に伴う柱穴の可能性がある。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

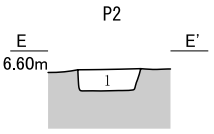
遺物出土状況　埋土中から土器564点、小穴等から土器40点、木製品１点が出土した。出土土器はⅦ期のものが多く、P1出土の柱根（6397）は先端がわずかに東へ傾いていた。

出土遺物　6393はⅥ期～Ⅶ期壺G2a類。口縁部が内湾して長く立ち上がり、内外面ともに丁寧なミガキを施す。6394はⅥ期～Ⅶ期壺Ｋ類。口縁部がわずかに外傾し、長く直線的に立ち上がる。胴部との境界には貼付突帯を形成し、胴部にはミガキが認められる。6395はⅦ期壺D3b類。口縁部がな

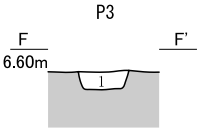




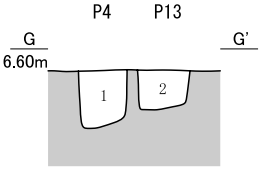
1　5Y2/1　黒色粘質土
　やや暗色　ややしまりあり
　礫を含まず　柱根あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
　やや暗色　ややしまりあり
　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む
3　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
　やや粘性あり　ややしまりあり
　礫を含まず



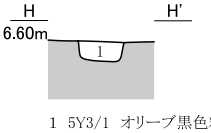
1　2.5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　炭が混じる
　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む



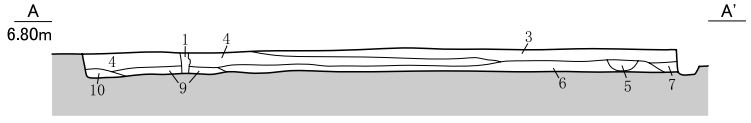
1　2.5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む



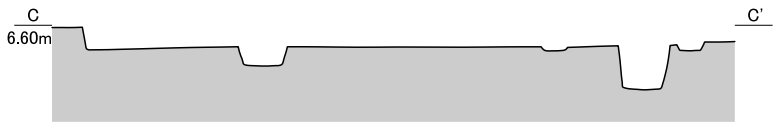
1　5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　礫を含まず
2　2.5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり
　炭が少し混じる　礫を含まず

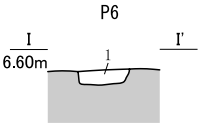


1　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
　やや暗色　ややしまりあり
　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む

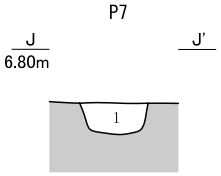


1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず（植物痕？）
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　礫を含まず
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
4　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
7　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
8　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
9　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
10　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む

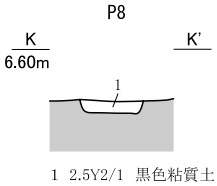




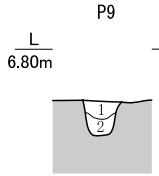
1　5Y2/1　黒色粘質土
　やや淡色　ややしまりあり
　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む



1　5Y2/1　黒色粘質土
　やや明色　ややしまりあり
　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む



1　2.5Y2/1　黒色粘質土
　やや暗色　ややしまりあり
　炭が少し混じる　礫を含まず
　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを少し含む



1　5Y2/1　黒色粘質土
　やや明色　ややしまりあり　礫を含まず
2　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
　ややしまりあり　礫を含まず

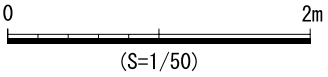


図 1886　SB538 遺構図（１）

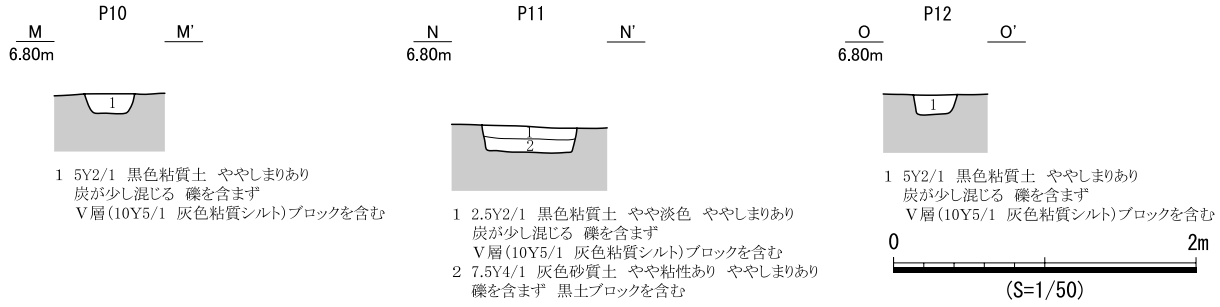


図 1887　SB538 遺構図（２）

だらかに外反し、端部が屈曲して直立する。端部には平坦面を形成し、外面には直線文が認められる。6396はⅧ期甕D3類。口縁部の屈曲が形骸化して大きく開き、外面には煤が付着する。6397は柱根。底面は４方向から粗く削り出し、やや丸みを帯びている。側面には樹皮がわずかに残存している。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB539に切られ、Ⅴ期～Ⅶ期のSB537を切るが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

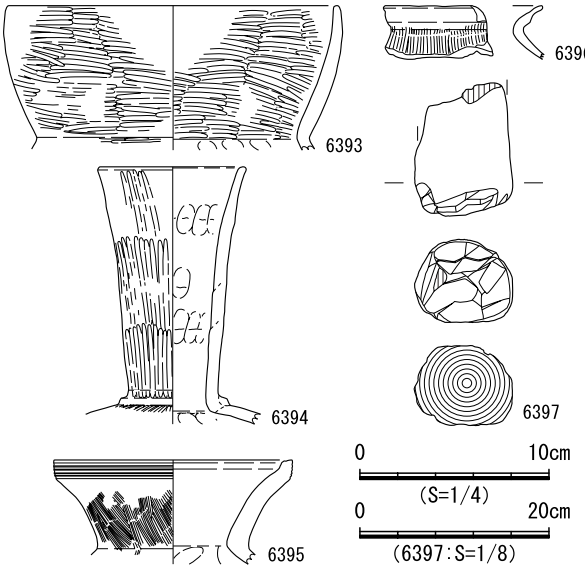


図 1888　SB538 遺物実測図

SB539（遺構：図 1889・1890、遺物：図 1891）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出し、平面形は比較的明瞭であった。西側でSB538を切る。

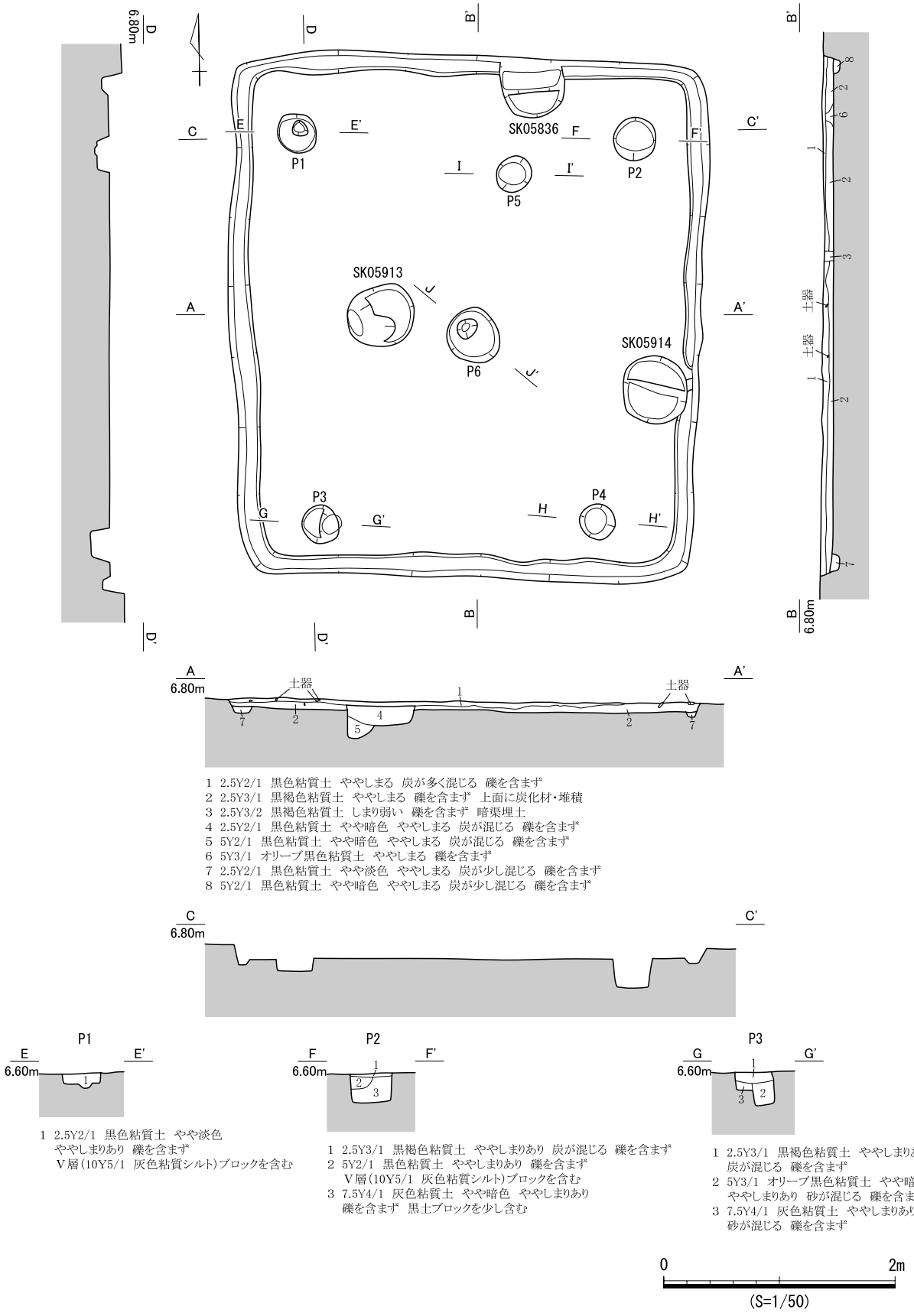
形状　南北長約4.5ｍ、東西長約4.1ｍの、南北にやや長い隅丸方形を呈する。四辺ともわずかに蛇行しているが、それぞれがほぼ直角に屈曲し、全体的には方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層したが、大半は１層と２層である。中央が窪む堆積で、１層下方にて藁状の炭化物が面的に広がっていた。散在した状態ではなく、まとまりが認められることから、埋土中への混入ではなく、原位置を保っていると考えられる。また、炭化物直下に直径約0.4ｍの範囲で、硬化した焼土域を確認した。竪穴住居廃絶後の埋没途中で、窪地状になった地形を利用して火を使用した痕跡と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）と炉跡は確認できなかった。床面上にて６基の小穴を確認し、平面的な位置関係からP1～P4の４基を柱穴と考えた。そのうち、P1とP3では底面で柱当たりを確認し、P3とP4では土層断面で柱痕跡を確認した。また、ほぼ中央に位置するP6でも柱痕跡を確認した。壁溝は幅約0.2ｍで、東側はわずかに途切れるものの、それ以外は全周する。

遺物出土状況　埋土中から土器2,313点、石器類４点、小穴等から土器34点、壁溝から土器57点が出土した。土器の大半はⅣ期～Ⅶ期のもので、P5からⅥ期～Ⅶ期の甕（6404）が出土した。

出土遺物　6398はⅥ期～Ⅶ期壺A3類。口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して平坦面を形成



1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまる 炭が多く混じる 礫を含まず
2 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまる 礫を含まず 上面に炭化材・堆積
3 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 しまり弱い 礫を含まず 暗渠埋土
4 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 炭が混じる 礫を含まず
5 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 炭が混じる 礫を含まず
6 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 ややしまる 礫を含まず
7 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまる 炭が少し混じる 礫を含まず
8 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまる 炭が少し混じる 礫を含まず

P1
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや淡色 ややしまりあり 礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P2
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 7.5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを少し含む

P3
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 砂が混じる 礫を含まず
3 7.5Y4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 砂が混じる 礫を含まず

0　2m
(S=1/50)

図 1889　SB539 遺構図（１）

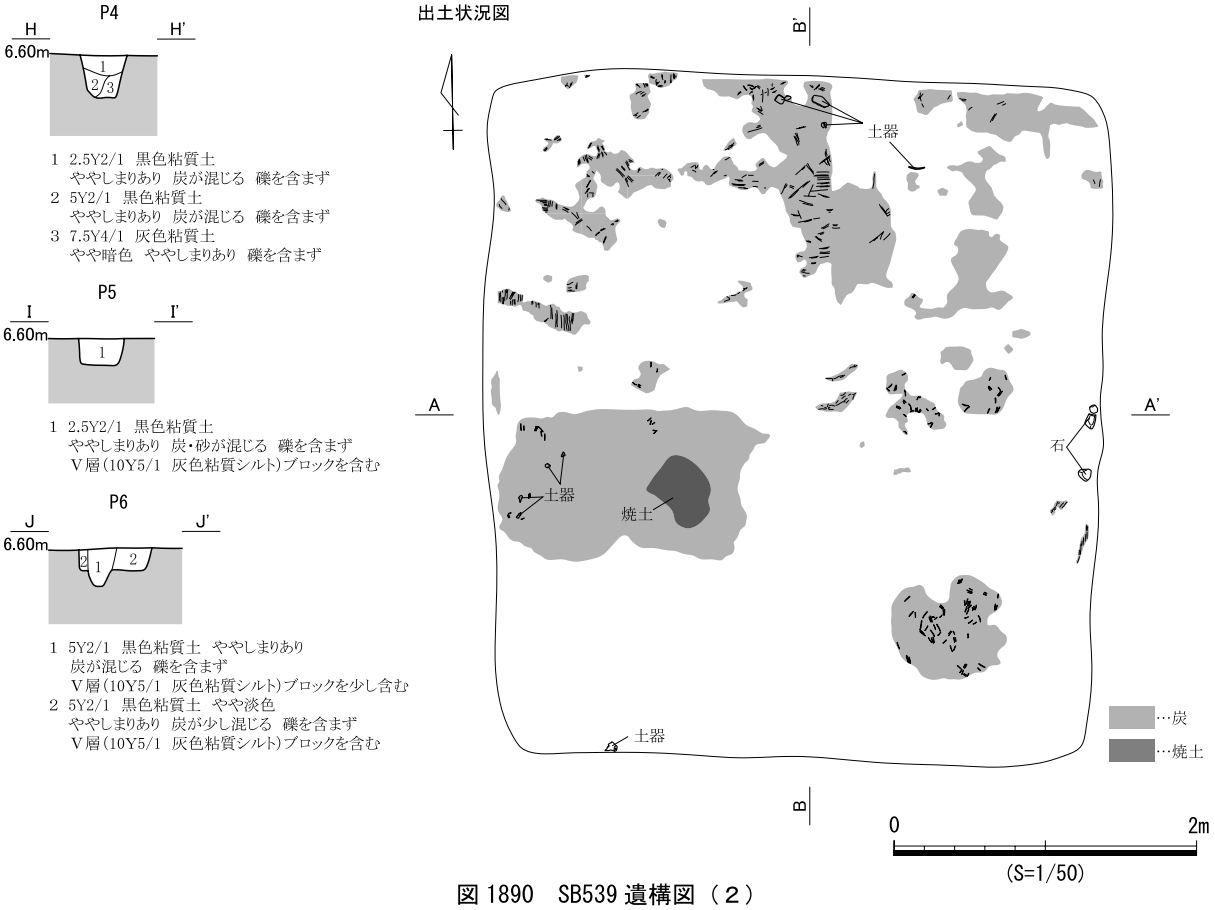


図 1890　SB539 遺構図（２）

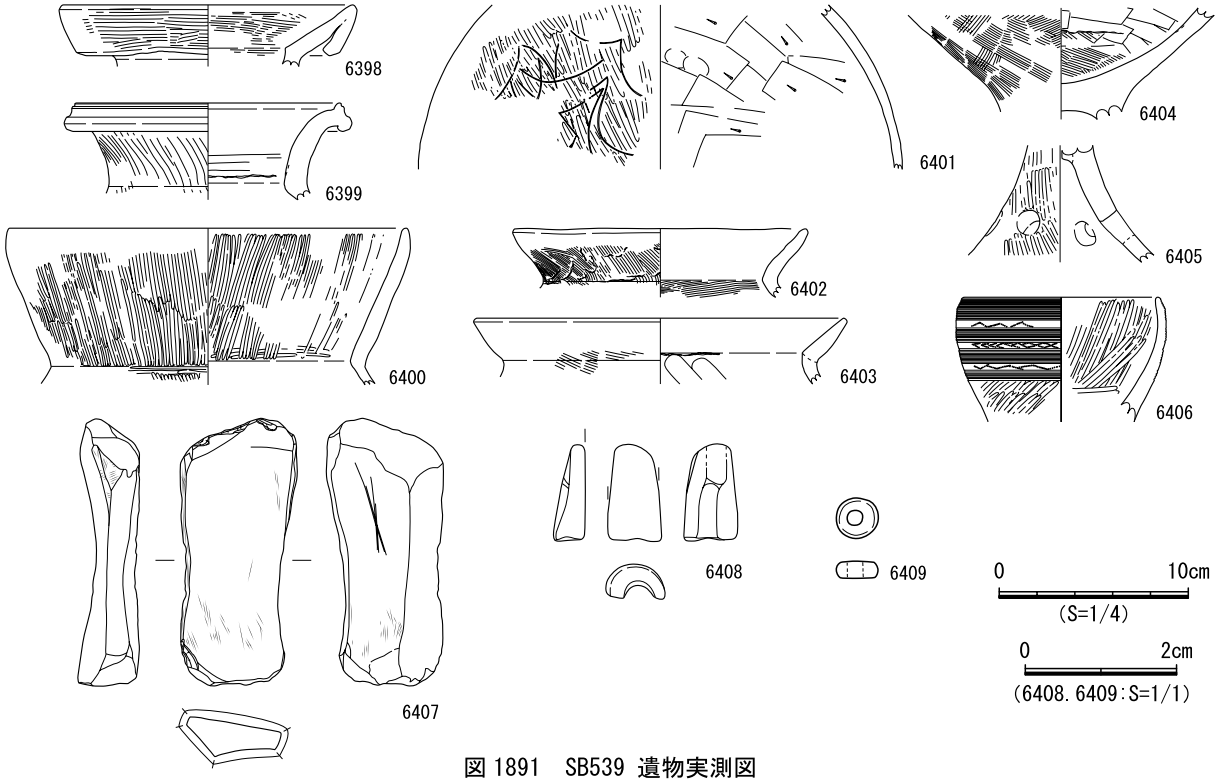


図 1891　SB539 遺物実測図

する。口縁部内面、端部ともにハケ調整を施す。6399はⅥ期～Ⅶ期壺B2a類。口縁部が強く外反し、端部を上下に拡張して沈線を施文する。6400はⅥ期～Ⅶ期壺G2a類。口縁部が外傾して長く立ち上がり、端部付近が内湾する。6401はⅥ期～Ⅶ期壺。器面にはミガキ調整を施し、弧状の線刻が多数認められる。6402はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が屈折し、端部付近がわずかに内湾する。内面はナデ調整を施すが、外面の作りは雑である。6403はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部がくの字に屈折し、端部を丸くおさめる。6404はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部を欠損する。外面にはハケ、内面にはハケ後ナデを施す。外面に弧状の煤が付着する。6405はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚部が付根から円錐状に開き、２孔１対の透孔を２方向に配置する。6406はⅦ期壺H2b類。口縁部が外傾して立ち上がり、端部付近が内湾する。口縁部外面の中位のやや下まで多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文を２帯加える。もう一つの文様帯は、クシによる羽状文と対向山形文が同じ文様帯に施文される。6407は砥石。凝灰岩製で、中央で割れている。砥面は平滑で、上下端部の面には凹凸が認められる。6408は管玉。縦方向にほぼ半分に割れており、磨滅が著しい。6409は丸玉。断面形は扁平で、厚さ2.5㎜を測る。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB538を切るが、埋土やP5出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

SB540（**遺構：図1892・1893、遺物：図1894**）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。平面形が不明瞭であったため、排水溝壁面を利用して埋土を確認した。北側でSB537を切っており、南側は調査区域外に及ぶ。

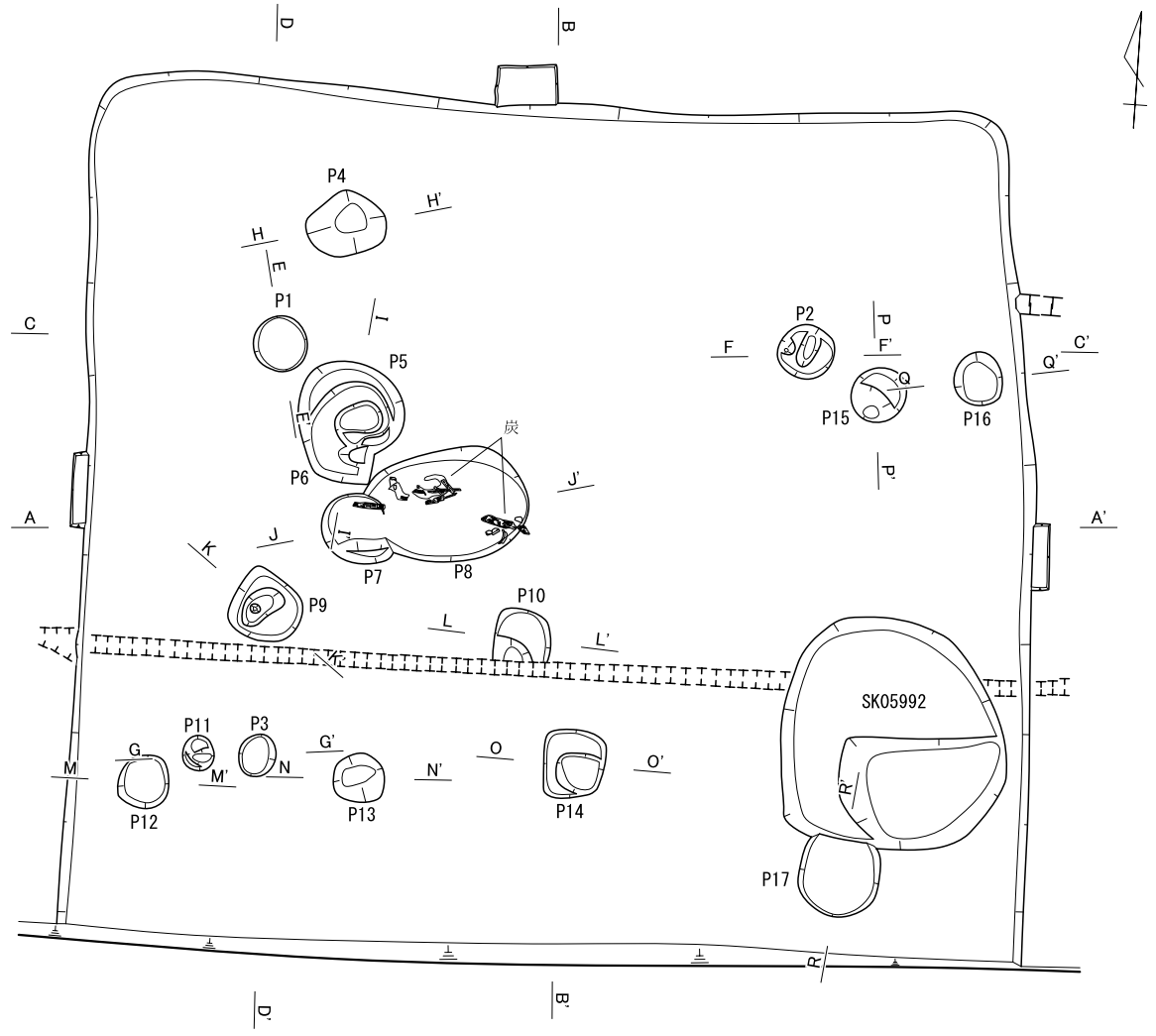
形状　東西長約6.3ｍで、隅丸方形を呈すると考えられる。各辺は直線的にのび、深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　18層に分層した。西壁沿いでブロック土を含む土が斜めに堆積している。また、全体的にブロック土の混入が多く、層界の凹凸も認められることから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて17基の小穴を確認し、そのうち、P5、P9、P14では土層断面で柱痕跡を確認した。また、P11は掘形が深く、壁面の傾斜がほぼ垂直である。これらのいずれかが柱穴の可能性もあるが、平面的な位置関係からP1～P3の３基を柱穴と考えた。なお、中央付近にて床面から少し浮いた高さで炭化材が出土したが、炉跡は確認できなかった。また、壁溝も確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器8,376点、石器類２点、小穴から土器239点が出土した。Ⅴ期～Ⅷ期の土器片が散在して出土し、少量ながらⅣ期のものも出土した。また、P1からⅤ期～Ⅵ期高坏脚部（6435）が、P5、P7、P9からⅨ期甕（6430～6432）が出土した。

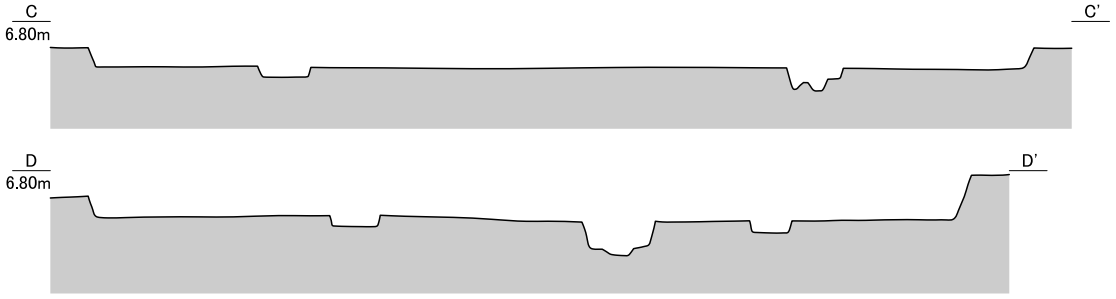
出土遺物　6410はⅥ期～Ⅶ期壺B2a類。口縁部が屈曲して外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。6411はⅥ期～Ⅶ期壺F1類。口縁部が短く、直立気味である。6412はⅤ期甕A2a類。口縁部が外反し、端部が強いナデとともに屈曲して直立する。端部に内傾面を形成し、端部下端には刺突を加える。胴部外面には全面にハケ調整を施し、その上から胴部上半には直線文と波状文を交互に間を開けて２回ずつ施文する。内面にはケズリが認められる。6413～6415はⅤ期甕A2b類。6413は口縁部が外反し、端部が屈曲してつまみあげたように端部が尖る。端部には外傾する平坦面を形成し、下端に刺突を加える。頸部直下には幅広の直線文帯を施文し、その下方に刺突文が認められる。器面には粗いハケ目が残り、煤が付着する。内面にはケズリが認められる。6414は口縁部が大きく外反し、端部が屈曲



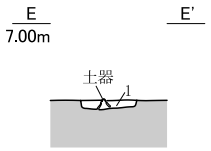
1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　土器が多い　礫を含まず
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
4　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
5　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　黒土ブロックを含む
7　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
8　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
9　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず
10　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　径3cm以下の円礫を少し含む
11　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず　径1cm以下のＶ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
12　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
13　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや淡色　ややしまりあり　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
14　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
15　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず　Ｖ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む　(14層より少し暗色)
16　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
17　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず　径2cm以下のＶ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
18　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が少し混じる　礫を含まず

0　2m
(S=1/50)

図 1892　SB540 遺構図（１）

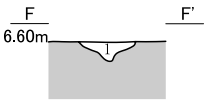


P1



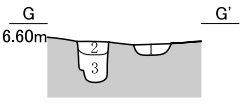
1 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P2



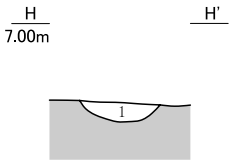
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P11　P3



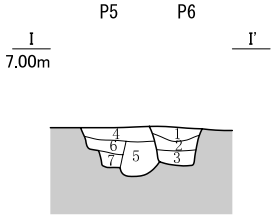
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
10Y5/1 灰色粘質土ブロックを含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
3 5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず

P4



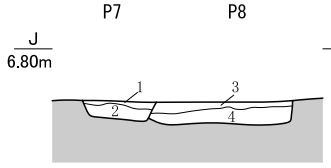
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P5　P6



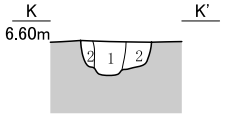
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや茶色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
4 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
5 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまり弱い 炭が少し混じる 礫を含まず
6 10Y4/1 灰色細砂 ややしまりあり 礫を含まず 黒土ブロックを含む
7 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまり弱い 礫を含まず

P7　P8



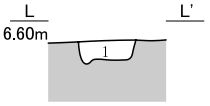
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
3 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
4 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

P9



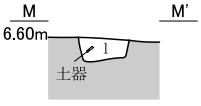
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

P10



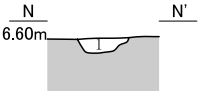
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを少し含む

P12



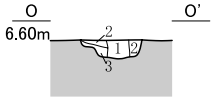
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
径3cm以下のⅤ層
(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを少し含む

P13



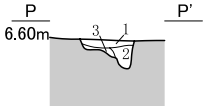
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P14



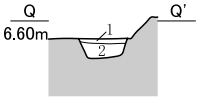
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む
3 7.5Y4/1 灰色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず 黒土ブロックを含む

P15



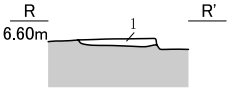
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
2 5Y4/1 灰色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
3 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P16



1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む
2 5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P17



1 5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

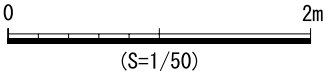


図 1893　SB540 遺構図（２）

して端部に顕著な平坦面を形成する。端部下端には刺突を加える。6415は口縁部が短く外反し、端部がナデとともに屈曲して比較的長く直立する。端部には平坦面を形成し、端部下端には刺突を加える。胴部外面には全面にハケ調整を施し、その上から胴部上半には直線文と波状文を交互に２回ずつ施文する。最下段の波状文が胴部最大径部にあたる。6416はⅤ期～Ⅵ期甕A2a類。口縁部が短く外反し、端部が強く屈曲して直立する。端部には内傾する平坦面を形成する。頸部下方に直線文を２帯施文

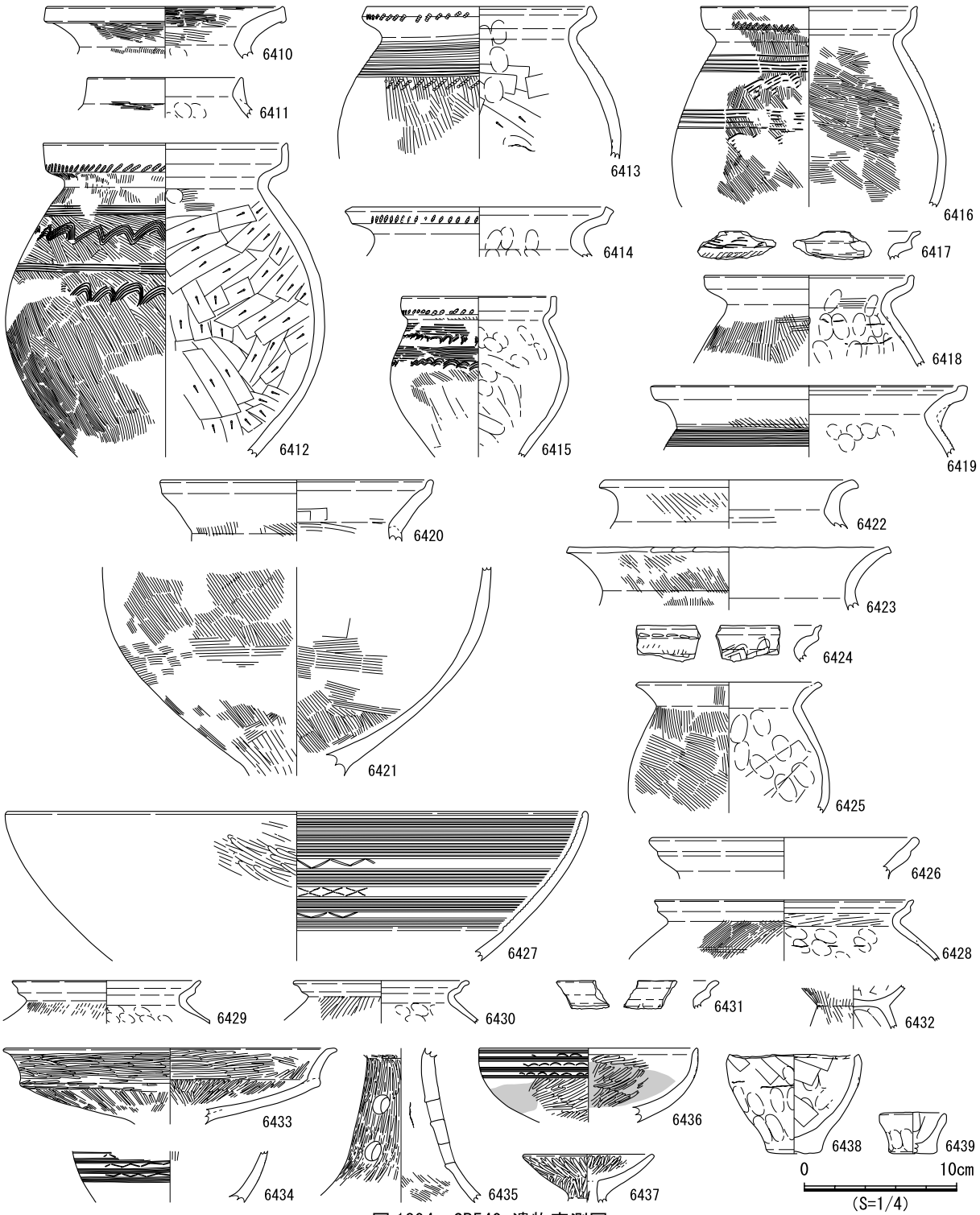


図 1894　SB540 遺物実測図

し、その間に波状文らしき文様が認められる。内外面ともにハケ調整を施し、外面には煤が付着する。6417はⅥ期甕D1a類。口縁部の屈曲が明瞭で、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6418、6419はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。6418は端部を丸くおさめ、強いヨコナデ痕が認められる。6419は端部に上面と外面に平坦面を形成し、強いヨコナデ痕が認められる。頸部内面は明瞭に屈曲するが外面には粘土を貼付して肥厚し、直下には直線文が認められる。頸部外面には煤が付着する。6420はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が屈折し、端部付近がわずかに内湾する。内面はナデ調整を施す。6421はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部を欠損する。外面にはハケ、内面にはハケ後ナデを施す。内外面ともに煤が付着する。6422はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部が強く外反して端部に平坦面を形成する。6423はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部が大きく外反し、端部には平坦面を形成する。6424はⅥ期期甕D1b類。口縁部が強く屈曲し、上段が短く外反して内傾面を形成する。外面には刺突が認められる。6425はⅥ期～Ⅶ期甕E2類。口縁部が短く外反し、胴部外面にはハケ目が残る。6426はⅦ期甕B2類。端部には平坦面を形成する。段は強いヨコナデによって作出されたと考えられる。6427はⅦ期高坏C4d類。やや内湾する口縁部内面に多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文２帯、クシによる対向山形文１帯が認められる。6428はⅦ期甕D2b類。口縁部下段が強く外方に引き出され、上段がわずかに屈曲する。6429はⅧ期甕Ｄ類。口縁部の屈曲は痕跡的で、外方に大きく開く。6430～6432はⅨ期甕。6430、6431は口縁部で、端部がやや肥厚して外面に煤が付着する。6432は脚部。6433はⅤ期高坏B2a類。浅い皿状の坏底部から口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁端部が強く外反し、端部を外方に引き出すように平坦面を形成する。屈曲部の稜は極めて明瞭である。6434はⅥ期～Ⅶ期高坏G3c類。口縁部に多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文が２帯認められる。6435はⅤ期～Ⅵ期高坏Ｂ類。脚部が付根から円錐状に開き、透孔は２段で３方向に配置される。裾部は外反する。6436はⅦ期高坏H2類。坏部が碗状を呈し、端部内面には内傾面を形成する。外面には多条沈線を施文し、その間にヘラによる連弧文を３帯加える。6437はⅦ期器台C2類。受部が浅い皿状を呈し、端部を丸くおさめる。6438、6439はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｃ類。平底の底部から胴部が外傾して開く。6438は口縁部が内湾し、内面にはユビナデ痕が認められる。6439は特に小型品である。

時期　埋土中の遺物はⅤ期～Ⅷ期までのものが多いが、Ⅴ期～Ⅶ期のSB537を切っていることと、P5、P7、P9からⅨ期甕が出土していることから、Ⅸ期と考える。

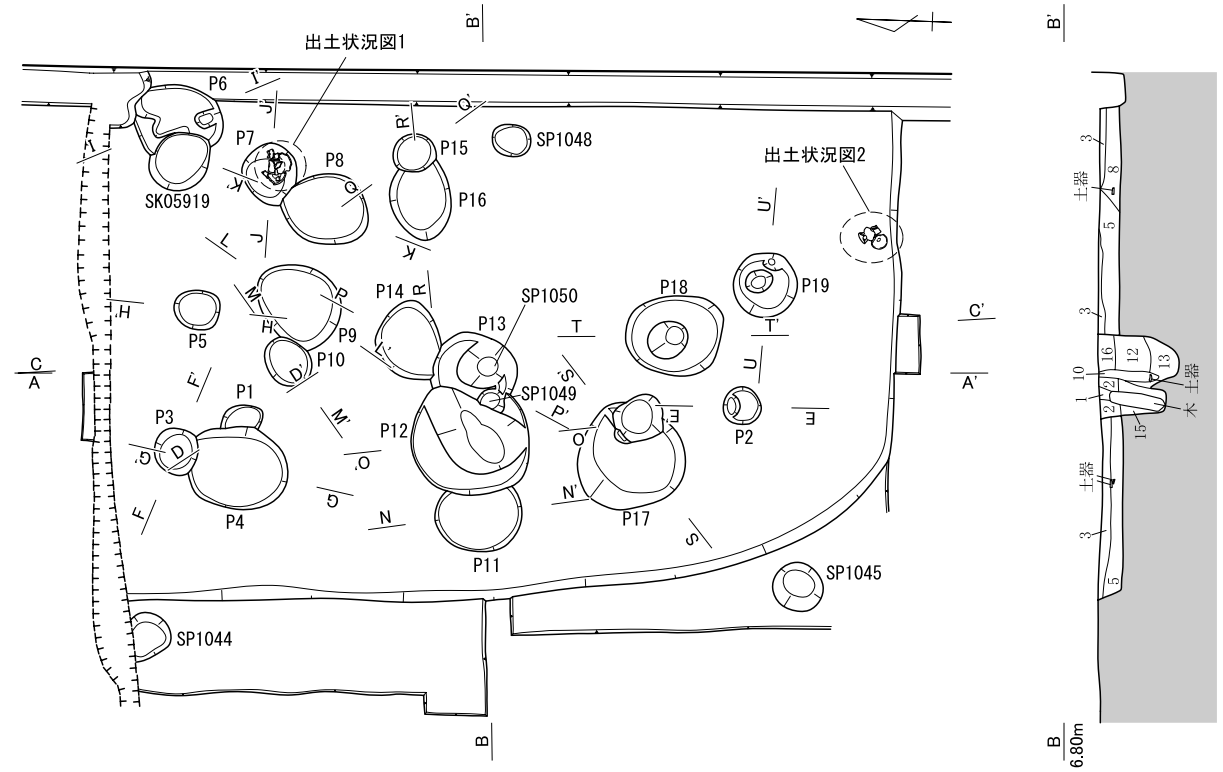
SB541（遺構：図1895・1896、遺物：図1897）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出したが、平面形は不明瞭であった。中央をSP1049とSP1050に切られ、南側でSB542を切っている。

形状　規模は不明であるが、西辺と南辺が直線的にのび、南西隅部が丸みを帯びることから、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　７層に分層した。南北壁面沿いではブロック土を含む土が斜めに堆積しており、全体的に炭の混入が認められる。また、ブロック土の混入も多く、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて19基の小穴を確認し、P17とP18では土層断面で柱痕跡を確認した。また、P7、P12、P13などは掘形が深く、壁面の傾斜も急



1　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　礫を含まず
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
3　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
4　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
5　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
6　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
7　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
8　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
9　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
10　N2/0　黒色粘質土　やや茶色　しまり弱い　礫を含まず
11　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
12　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
13　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　しまり弱い　礫を含まず
14　2.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
15　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　礫を含まず
16　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
※1,2,15層-SP1049埋土、10～14,16層-SP1050埋土

P1
D　D'
6.80m
土器
1

1　5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　炭が混じる
　礫を含まず

P2
E　E'
6.60m
1

1　5Y2/1　黒色粘質土
　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
　ブロックを含む

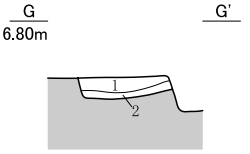
P3
F　F'
6.60m
1
2
3

1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
3　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

0　2m
(S=1/50)

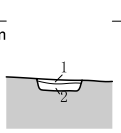
図 1895　SB541 遺構図（１）

P4



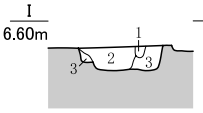
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
2 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P5



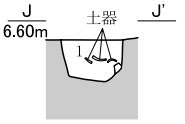
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P6



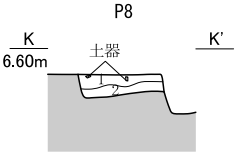
1 Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロック
(小動物の穴か？)
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

P7



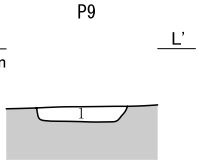
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
やや暗色 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む

P8



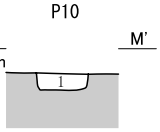
1 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 5Y4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P9



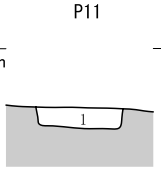
1 5Y2/1 黒色粘質土
やや暗色 ややしまりあり
炭が少し混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む

P10



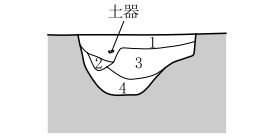
1 5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 炭が少し混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む

P11



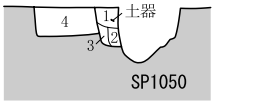
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず

P12



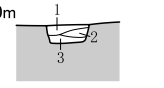
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 炭が少し混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
4 5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む

P14　P13



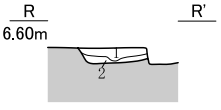
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
3 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
4 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず

P15



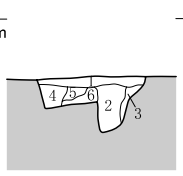
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり
炭が多く混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
3 5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり やや淡色
礫を含まず

P16



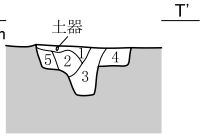
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを含む
2 7.5Y4/1 灰色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを含む

P17



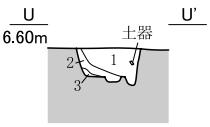
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
3 10Y5/1 灰色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを含む
4 5Y2/1 黒色粘質土 やや茶色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
5 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
6 10Y4/1 灰色粘質土 ややしまりあり 礫を含まず
黒土ブロックを少し含む

P18



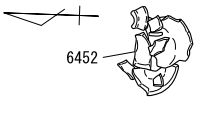
1 2.5Y2/1 黒色粘質土 ややしまりあり 炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
2 2.5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
径2cm以下のⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
3 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり 礫を含まず
径2cm以下のⅤ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを含む
4 5Y4/1 灰色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
礫を含まず 黒土ブロックを含む
5 5Y2/1 黒色粘質土 やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

P19

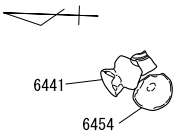


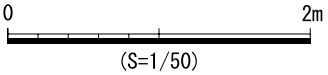
1 2.5Y2/1 黒色粘質土
やや暗色 ややしまりあり
炭が混じる 礫を含まず
2 5Y2/1 黒色粘質土
ややしまりあり 礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む
3 10Y4/1 灰色粘質シルト
Ⅴ層(10Y5/1 灰色粘質シルト)

出土状況図1

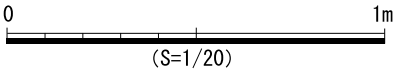


出土状況図2





(S=1/50)



(S=1/20)

図 1896　SB541 遺構図（２）

である。これらのいずれかが柱穴の可能性もあるが、平面的な位置関係からP1とP2を柱穴と考えた。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器4,422点、石器類１点、炭化物・炭化材１点が、小穴から土器343点、木製品１点が出土した。また、南壁沿いの床面上にて、Ⅵ期～Ⅶ期の鉢Ｆ類（6454）が正位で、Ⅴ期の壺Ｊ類（6441）が横位で、いずれもほぼ完形の状態で出土した。また、P4、P7、P14、P17からⅥ期～Ⅶ期の壺や甕（6446、6447、6450、6452）が出土した。出土土器はⅤ期～Ⅶ期のものが確認でき、特にⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6440はⅤ期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して平坦面を形成する。端部には擬凹線を施文し、口縁部内面には貝による羽状文２帯及び円形刺突文が認められる。6441はⅤ期壺J1類。口縁部が直線的に外傾しながら、直線的に立ち上がる。胴部最大径はやや上方に位置し、肩部が強く張る。6442はⅤ期～Ⅵ期壺Ａ類。胴部上半にクシによる直線文及び羽状文が認められる。6443、6444はⅥ期～Ⅶ期壺A2類。6443は形状、胎土等から6444と同一個体の可能性がある。6444は口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して顕著な平坦面を形成する。平坦面には刺突文が２帯認められるが、その方向を変えて羽状文風に施文する。6445はⅥ期～Ⅶ期壺Ｃ類。口縁部が直線的に

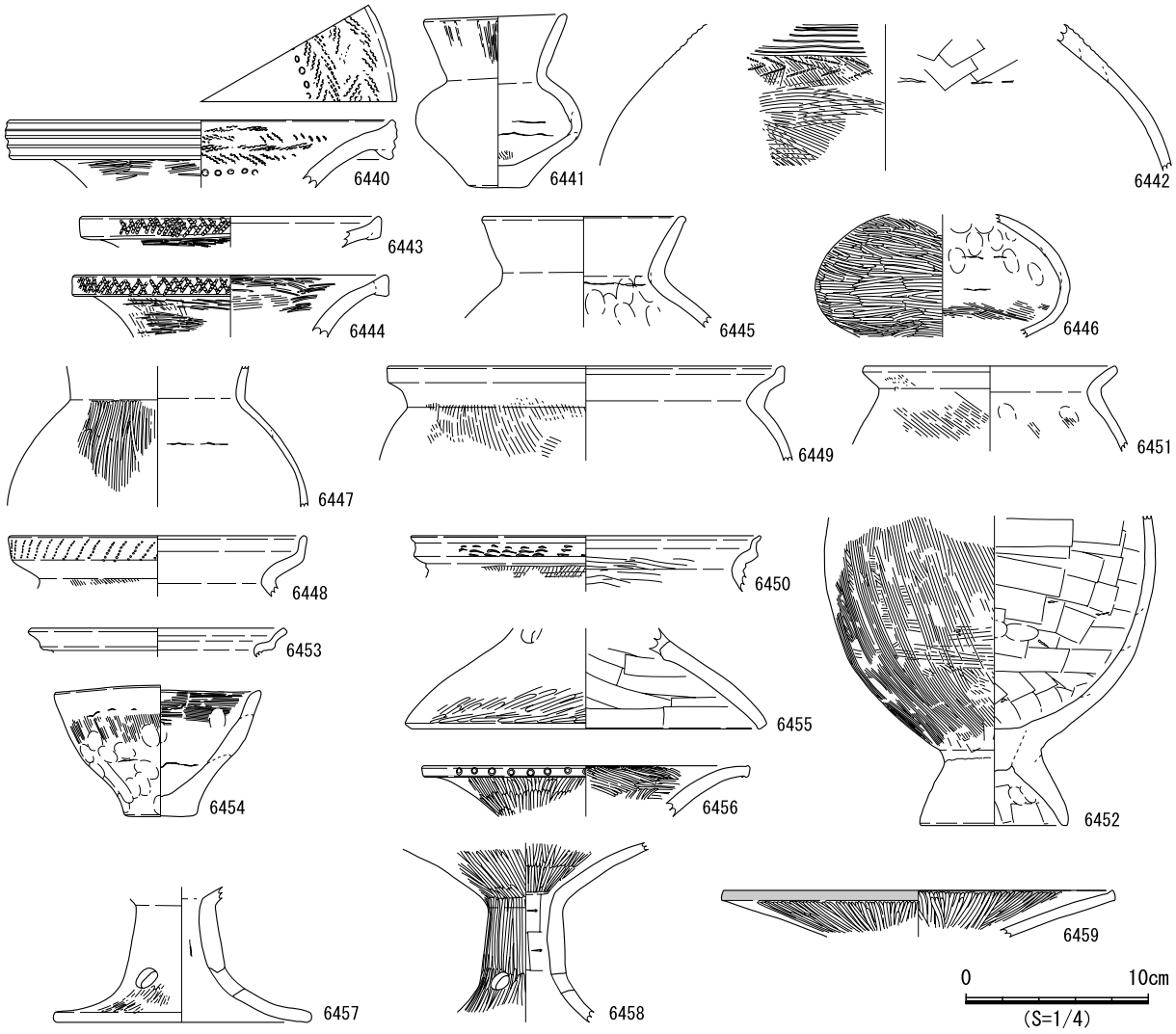


図1897　SB541 遺物実測図

外傾しながら立ち上がる。6446はⅥ期～Ⅶ期壺Ｈ類。胴部が扁平で、肩部が強く張る。外面にはミガキ調整を施す。6447はⅥ期～Ⅶ期壺Ｋ類。頸部はやや外反気味であり、端部を欠損する。6448はⅤ期甕Ａ2b類。口縁部が大きく外反し、端部が屈曲してほぼ直立する。端部を丸くおさめ、外面には刺突を加える。6449はⅥ期～Ⅶ期甕Ａ3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。端部には平坦面を形成し、外面にも垂直な平坦面を形成する。6450はⅥ期～Ⅶ期甕Ｄ1b類。口縁部が強く屈曲し、上段が短く外反する。外面には刺突が認められる。6451はⅥ期～Ⅶ期甕Ｅ4類。口縁部が短く屈折し、端部を丸くおさめる。6452はⅥ期～Ⅶ期甕。胴部下半の形状は丸みを帯び、外面には粗いハケ目が残る。内面にはハケ後ナデを施す。脚部の器壁は厚く、やや内湾気味にハの字に開く。6453はⅦ期甕Ｄ2b類。口縁部が屈曲して開き、端部が肥厚気味となる。6454はⅥ期～Ⅶ期鉢Ｆ類。胴部がやや内湾して立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。底部は平底で突出気味で、外面に強く煤が付着する。6455はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚裾部が内湾して開く。6456はⅤ期器台Ａ1a類。口縁部が外反し、端部に平坦面を形成して円形刺突文を加える。内外面ともにミガキ調整を施す。6457はⅤ期器台Ａ類。脚部は付根から柱状にほぼ直立し、３方向に配置された透孔を境に裾部が外反する。6458はⅤ期～Ⅵ期器台Ｂ類。口縁部が直線的に外傾し、わずかに外反する。脚部は付根から柱状にほぼ直立し、３方向に配置された透孔を境に裾部が外反する。6459はⅥ期器台Ｂ1a類。口縁部が直線的に開き、端部に平坦面を形成する。口縁部内面及び端部に煤が付着する。

時期　Ⅴ期～Ⅶ期のSB542を切っているが、小穴出土遺物の時期や埋土出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

SB542（遺構：図1898・1899、遺物：図1900）

検出状況　東部西側中央の遺構密集域に位置する。Ⅴ層上面において検出し、平面形は不明瞭であった。北東側をわずかにSB541に切られる。

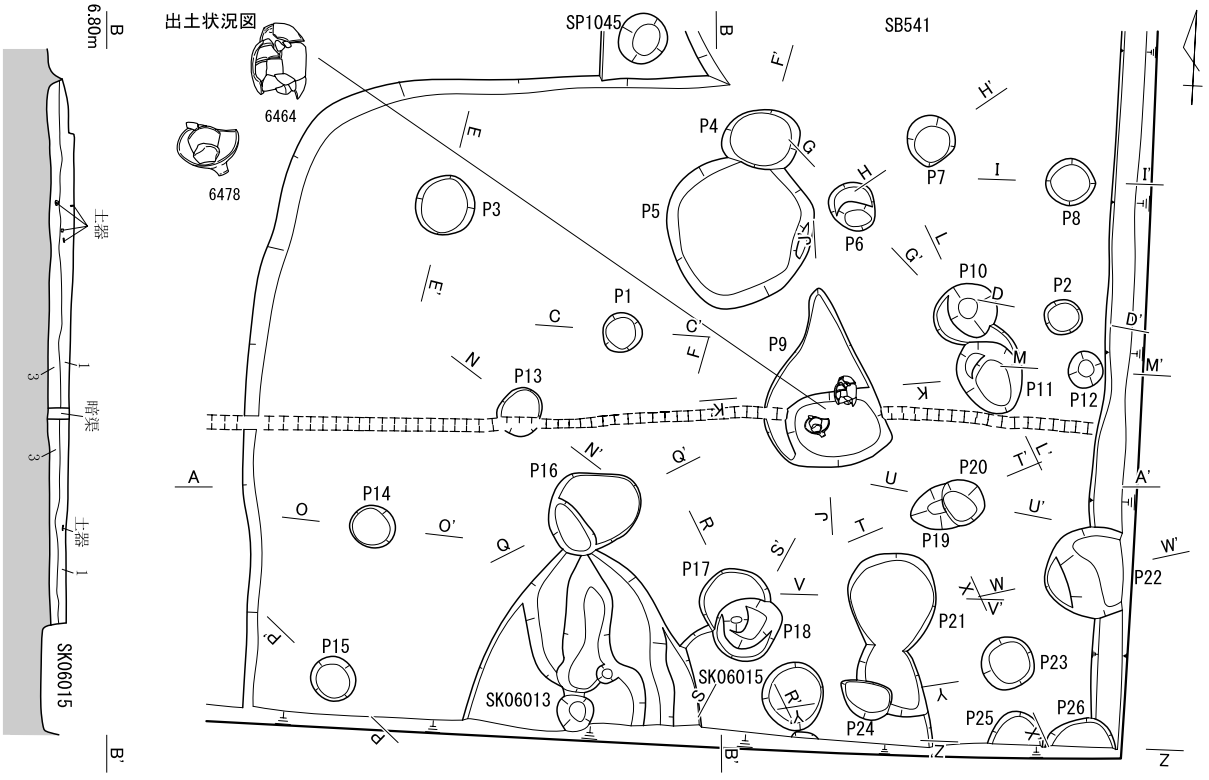
形状　規模は不明であるが、北辺と西辺がおよそ直線的にのび、北西隅部は丸みを帯びながら直角気味に屈曲することから、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

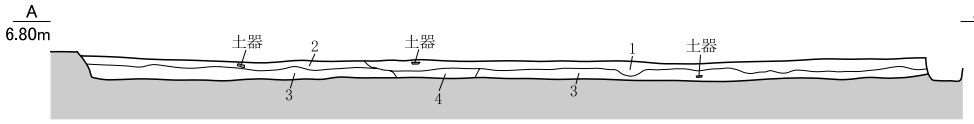
埋土　４層に分層し、すべての層に炭が混じる。また、ブロック土の混入も多く、層界の凹凸も確認できることから、人為堆積と考えられる。なお、３層はブロック土の混入が顕著であったため、貼床（整地土）の可能性もある。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上にて26基の小穴を確認し、大半の遺構は埋土が単層か２層に分層できたが、P15のみ土層断面で柱痕跡を確認した。P1とP2はやや深く、壁面の傾斜がほぼ垂直であることや、平面的な位置関係から柱穴と考えられる。しかし、住居の外縁ラインからかなり内側に位置するため、他の可能性を検討すべきかもしれない。なお、壁溝と炉跡は確認できなかった。

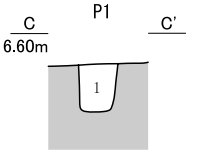
遺物出土状況　埋土中から土器4,455点、石器類１点、小穴等から土器603点が出土した。P9の南側の埋土中層にて、Ⅴ期～Ⅵ期壺（6464）とⅥ期～Ⅶ期高坏（6478）が残りの良い状態で出土した。全体的にはⅤ期～Ⅸ期までの時期幅の土器が出土し、その多くはⅤ期～Ⅶ期に属する。

出土遺物　6460はⅣ期壺Ｃ類。口縁部が大きく外反し、端部に平坦面を形成する。口縁部内面には

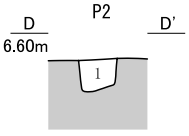




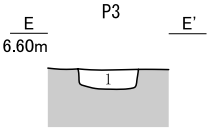
1　2.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
径5cm以下の円礫を少し含む
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
2　2.5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる
径3cm以下の円礫を少し含む
3　5Y2/1　黒色粘質土　やや茶色　ややしまりあり　炭が混じる
礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む
4　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる
礫を含まず　Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む



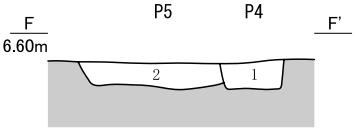
1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色
ややしまりあり　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む



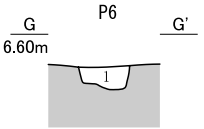
1　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
ややしまりあり　炭が混じる
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロック・黒土ブロックを多く含む



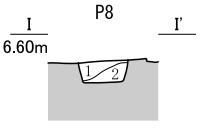
1　5Y2/1　黒色粘質土
やや暗色　ややしまりあり
礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む



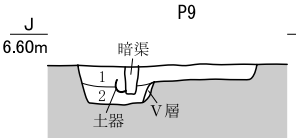
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
2　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む

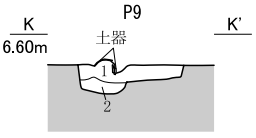


1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
炭が少し混じる　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを含む

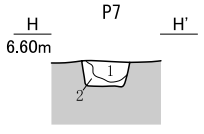


1　2.5Y2/1　黒色粘質土
やや暗色　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず
2　2.5Y3/1　黒褐色粘質土
ややしまりあり　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)
ブロックを多く含む





1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　炭が混じる　礫を含まず
径2cm以下のⅤ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを少し含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む



1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり
炭が混じる　礫を含まず
2　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　礫を含まず
Ⅴ層(10Y5/1　灰色粘質シルト)ブロックを多く含む

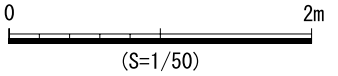


図 1898　SB542 遺構図（１）

扇形文が２帯認められる。6461はⅤ期壺A1b類。口縁部が大きく外反し、端部には顕著な平坦面を形成する。口縁部内面には振幅の大きい波状文が認められる。6462はⅤ期～Ⅵ期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を大きく下方に拡張して平坦面を形成する。端部平坦面には直線文を施文し、口縁部内面には羽状文と円形刺突文が認められる。端部下端はナデによって平坦に整形され、頸部外面にはミガキが施される。6463はⅥ期～Ⅶ期壺A3類。口縁部が外反し、内面は明瞭な段をもって屈曲する。端部を上下に拡張し、顕著な平坦面を形成する。口縁部内面にはヘラによる羽状文２帯と円形刺突文を施文し、端部平坦面には擬凹線と４本１組の棒状浮文が認められる。また、頸部下端や口縁端部には赤色顔料が塗布される。6464はⅥ期～Ⅶ期台付無頸壺である。口縁部を摘み上げるようにわ

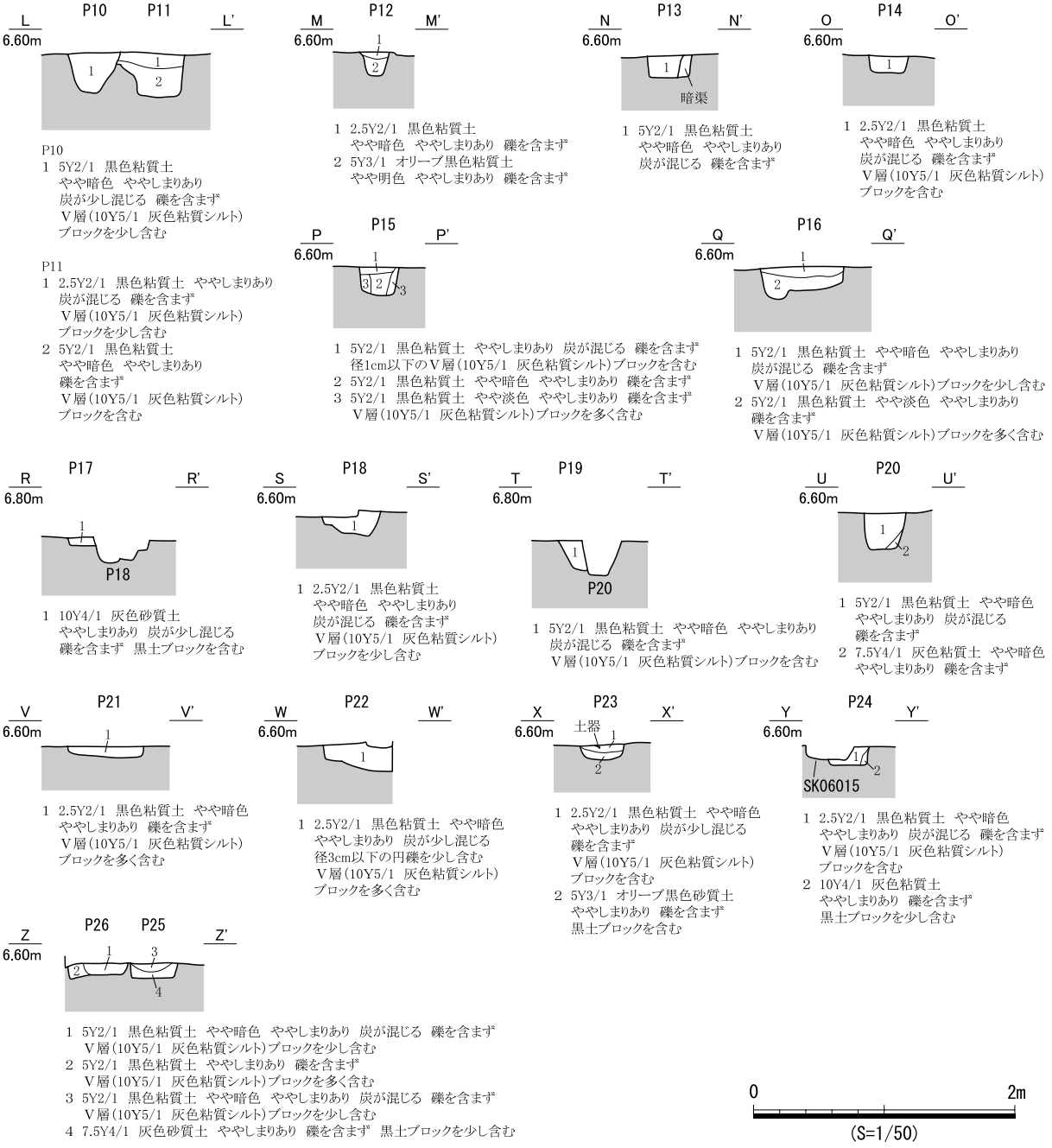


図 1899　SB542 遺構図（２）

ずかに外反させる。胴部はやや偏平で、ハケ及びナデ調整を施す。脚部の大半を欠損するが、ハの字に開くと考えられる。口縁端部に歪みがあり、胴部外面に輪積み痕が認められるなど、雑な作りである。6465、6466はⅤ期～Ⅵ期壺J1類。6465は口縁部が外傾しながら直線的に立ち上がり、端部には平坦面を形成する。胴部最大径は中央に位置し、肩部が強く張る。底部は平底である。6466は胴部最大径が強く屈曲し、底部に焼成後の穿孔が認められる。6467はⅧ期～Ⅸ期壺。やや突出する平底の底面には、木葉痕らしき痕跡が認められる。胴部にはミガキ調整を施し、底部から胴部に煤が付着する。6468はⅨ期壺。小型で扁平な胴部から、口縁部が大きく開く。6469はⅤ期～Ⅵ期甕Ａ類。胴部下半の外面にはハケ後ナデを施し、内面にはハケ目が残る。底部は丸みを帯び、中央がやや窪む。6470はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6471はⅦ期甕D2b類。口縁部下段が

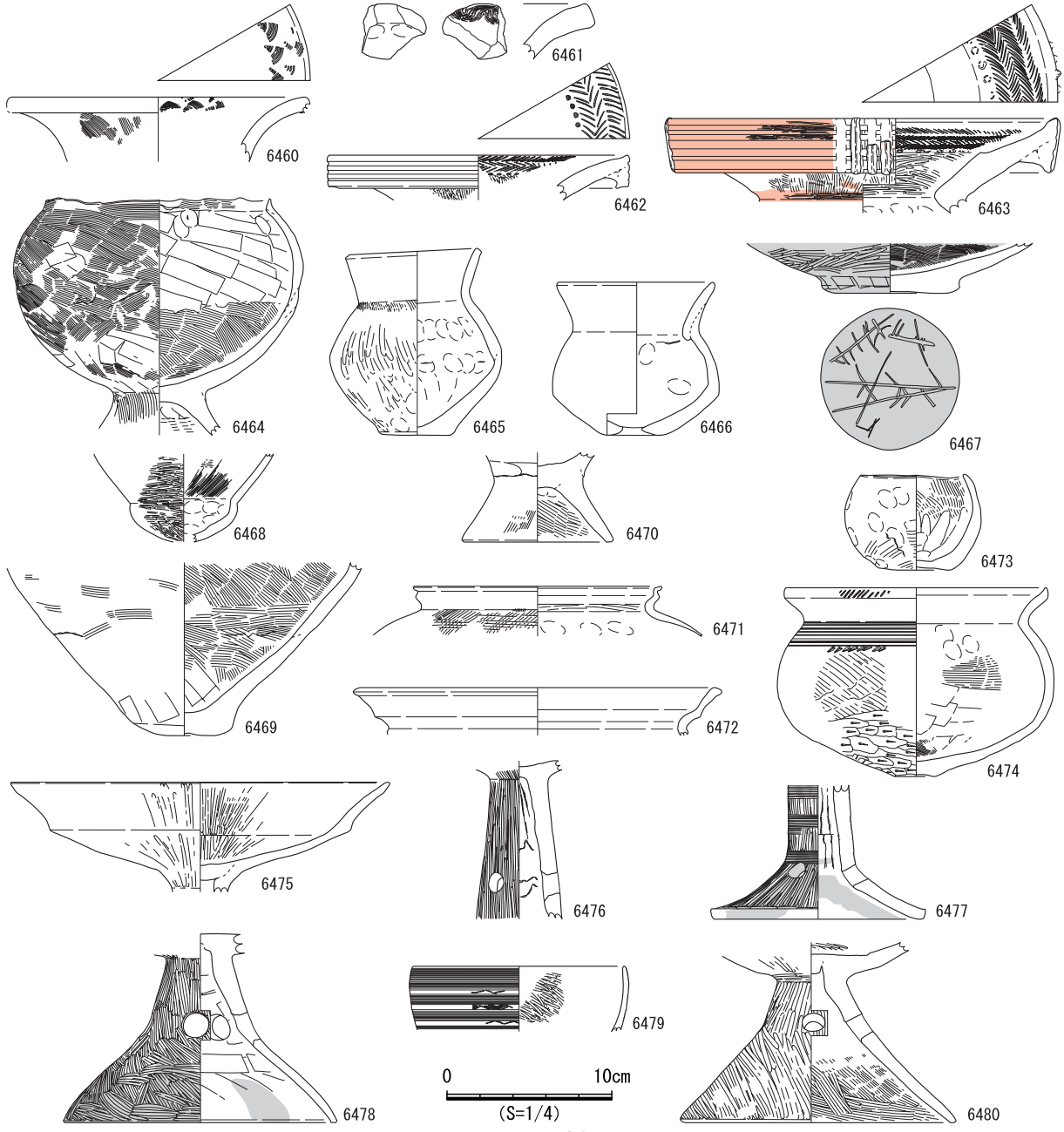


図 1900　SB542 遺物実測図

外方に引き出され、上段が短く屈曲し、端部には内傾面を形成する。6472はⅨ期甕。口縁部が屈曲し、上段が直線的に外傾して端部が肥厚する。6473はⅤ期～Ⅵ期手捏ね土器Ｃ類。胴部は球形を呈し、底部は平底である。口縁部は内湾し端部を尖らせる。外面にはハケ目が残り、内面の胴部上半にはハケ目が認められる。6474はⅤ期～Ⅵ期鉢A3a類。口縁部が外反し、端部がわずかに内湾してつまみあげるように尖る。外面には平坦面を形成し、刺突を加える。頸部直下には直線文及び刺突文が認められる。胴部上半にはハケ、下半にはケズリが認められ、底部は小さく、中央が窪む。6475はⅤ期高坏B3b類。浅い皿状の坏底部から、明瞭な稜をもって口縁部が外反して開き、端部付近はわずかに内湾気味である。6476はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から柱状に細長く伸び、わずかに円錐状に開き気味である。透孔を３方向に配置し、ミガキが認められる。6477はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から柱状に直立し、直線文を３帯施文する。３方向に配置される透孔を境に裾部が大きく外反し、端部に平坦面を形成する。6478はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。脚部が坏底部から円錐状に開き、裾部が大きく開いて端部が内湾する。透孔は２孔１対を２方向に配置する。外面や脚部上端の破断面に煤が付着する。6479はⅦ期高坏G3c類。口縁部がやや内湾し、端部を丸くおさめる。端部外面に多条沈線を施文し、その間にクシによる山形文を２帯、ヘラによる複合鋸歯文を１帯加える。6480はⅦ期～Ⅷ期高坏。坏底部は矯小で、口縁部は大きく開く。脚部は付根から円錐状に開き、やや外反する。透孔を４方向に配置する。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB541に切られるが、P9出土遺物の時期と埋土全体の出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅶ期と考えられる。

SB543（**遺構：図1901、遺物：図1902**）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。SB545と並列しており、北側は調査区域外にのび、西側はSB544を切る。北側の検出面には撹乱があり、西側は遺構の重複が著しかったため、平面形は不明瞭であった。

形状　東西長約4.7ｍの隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土　４層に分層した。１層～３層が住居埋土、５層が掘形埋土である。壁沿いの埋土は、中央に向かって下降するブロック土を含む堆積層が認められる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴３基と壁溝を検出した。このうち、P1とP2は掘形が浅いものの平面的な位置から柱穴と考えられ、P2底面には柱当たりと考えられる浅い凹みを確認した。また、P3は楕円形を呈する壁面の傾斜が緩やかな穴で、埋土中に炭化物を含んでいる。なお、南東隅部付近では貼床が認められなかった。壁溝は東壁面でわずかに途切れているが、掘形は比較的明瞭である。しかし、西壁面沿いは遺構の重複が著しく、検出はやや困難であった。

掘形　埋土は単層であり、ブロック土を含む。掘形底面は平坦であり、SH027-P1、P5、P6やSD1241などを検出したが、いずれも本遺構に伴わない遺構と判断した。

遺物出土状況　埋土中から土器303点、小穴から土器４点が出土した。出土土器はⅤ期～Ⅶ期のものが多いが、遺構の重複関係からⅤ期のものは混入の可能性がある。

出土遺物　6481はⅤ期壺A1a類。口縁部が外反し、端部を上下に拡張して平坦面を形成し、擬凹線を施文する。内面には二枚貝による刺突文が認められ、方向を変えて４帯施文する。さらに内側には、

円形刺突文が認められる。6482はⅤ期甕B2類。口縁部が短く屈折し、端部を平坦気味におさめる。胴部外面にはハケ目が残り、内面にはケズリが認められる。6483はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が外反し、端部が屈曲して短く直立する。屈曲部内面はくの字に屈折するが、外面には粘土を貼付して直立気味となる。6484はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器E類。高坏もしくは器台を模して作った土器の脚部である。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSH027より後出するが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

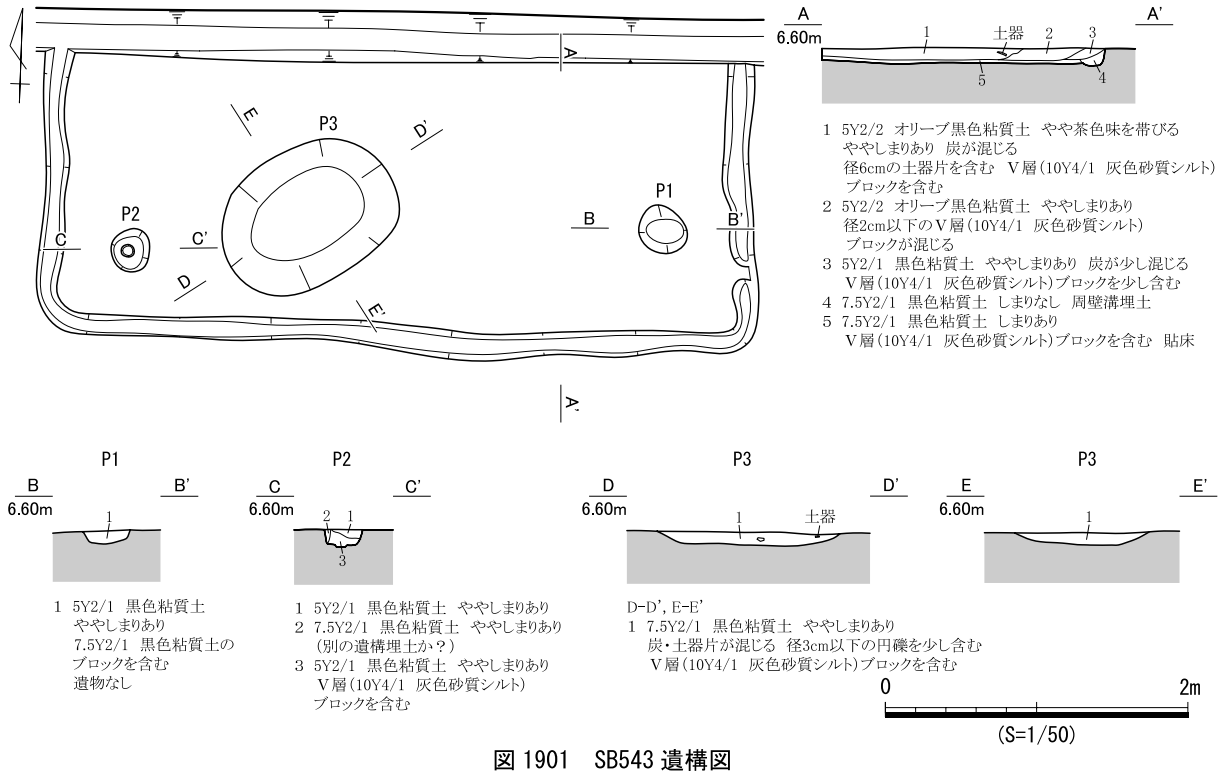


図 1901　SB543 遺構図

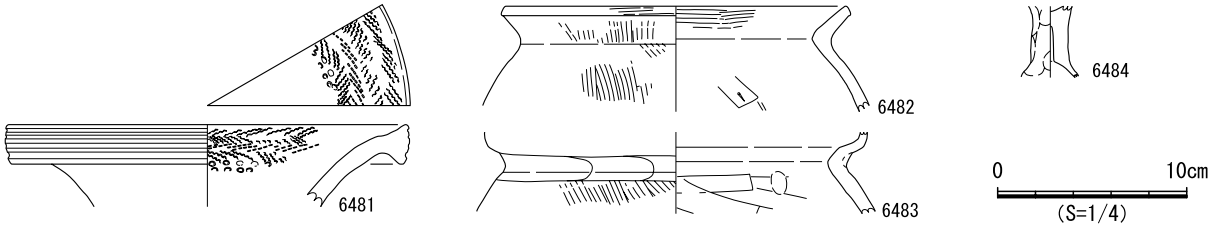


図 1902　SB543 遺物実測図

SB544（遺構：図 1904、遺物：図 1903）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北側は調査区域外にのび、中央をSD1254に、東側をSB543とSD1241に切られている。なお、SH027との前後関係は不明である。

形状　規模は不明で、全形はおよそ隅丸方形を呈するが、南壁中央付近がやや北側に湾曲している。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　３層に分層した。１・２層が住居埋土、３層が掘形埋土である。埋土中にはブロック土が混入し、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴２基と壁溝を検出した。小穴２基はい

ずれも浅く、柱痕跡も確認できていないが、平面的な位置から柱穴の可能性がある。壁溝は浅く、南壁沿いを中心に確認できた。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器61点、木製品１点、小穴から土器５点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多いものの、大半は小片である。なお、Ⅰ期の土器片もわずかに出土したが、混入資料と考えられる。

出土遺物　6485はⅠ期壺。遠賀川系土器である。

時期　出土遺物からの言及は困難であるが、Ⅵ期～Ⅶ期のSB543に切られることから、それ以前と考えられる。

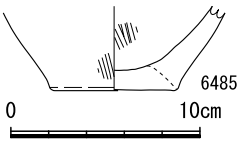


図 1903　SB544 遺物実測図

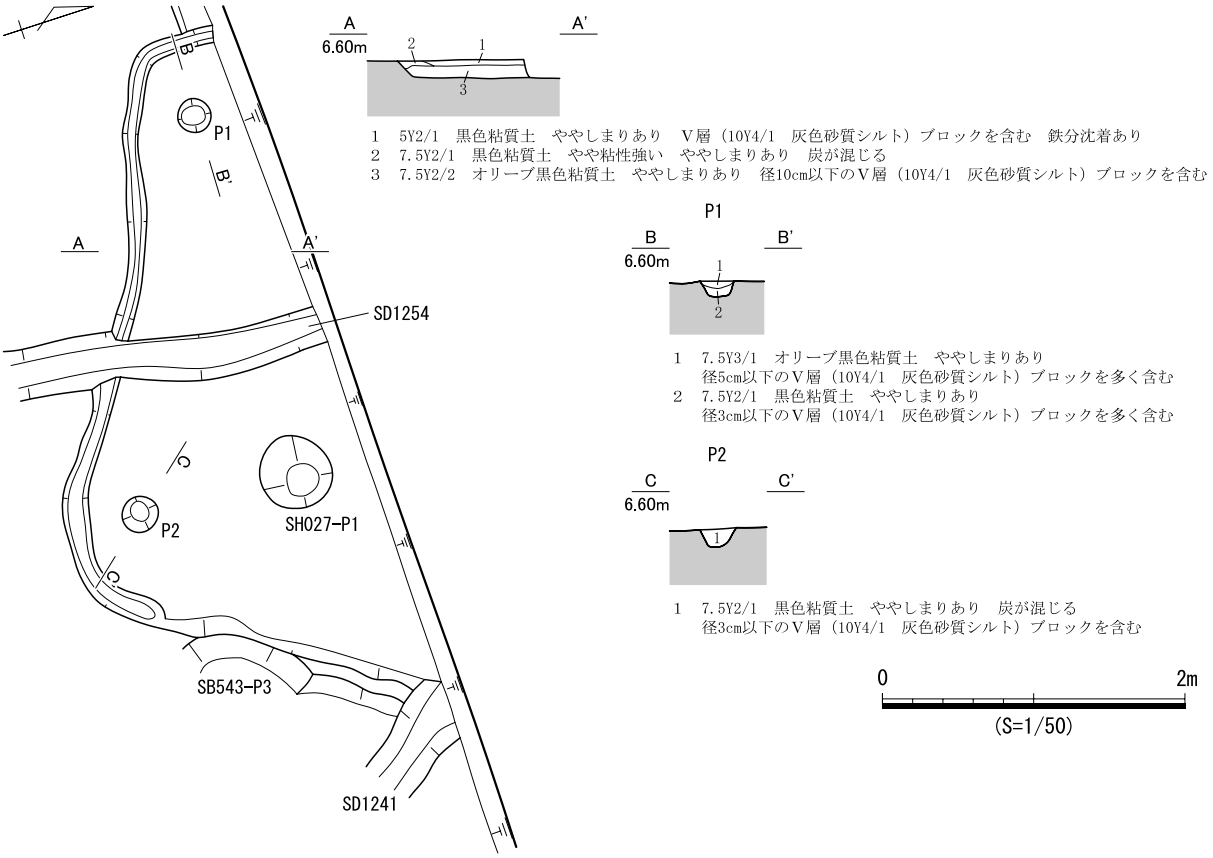


図 1904　SB544 遺構図

SB545（**遺構**：図 1905・1906、**遺物**：図 1907）

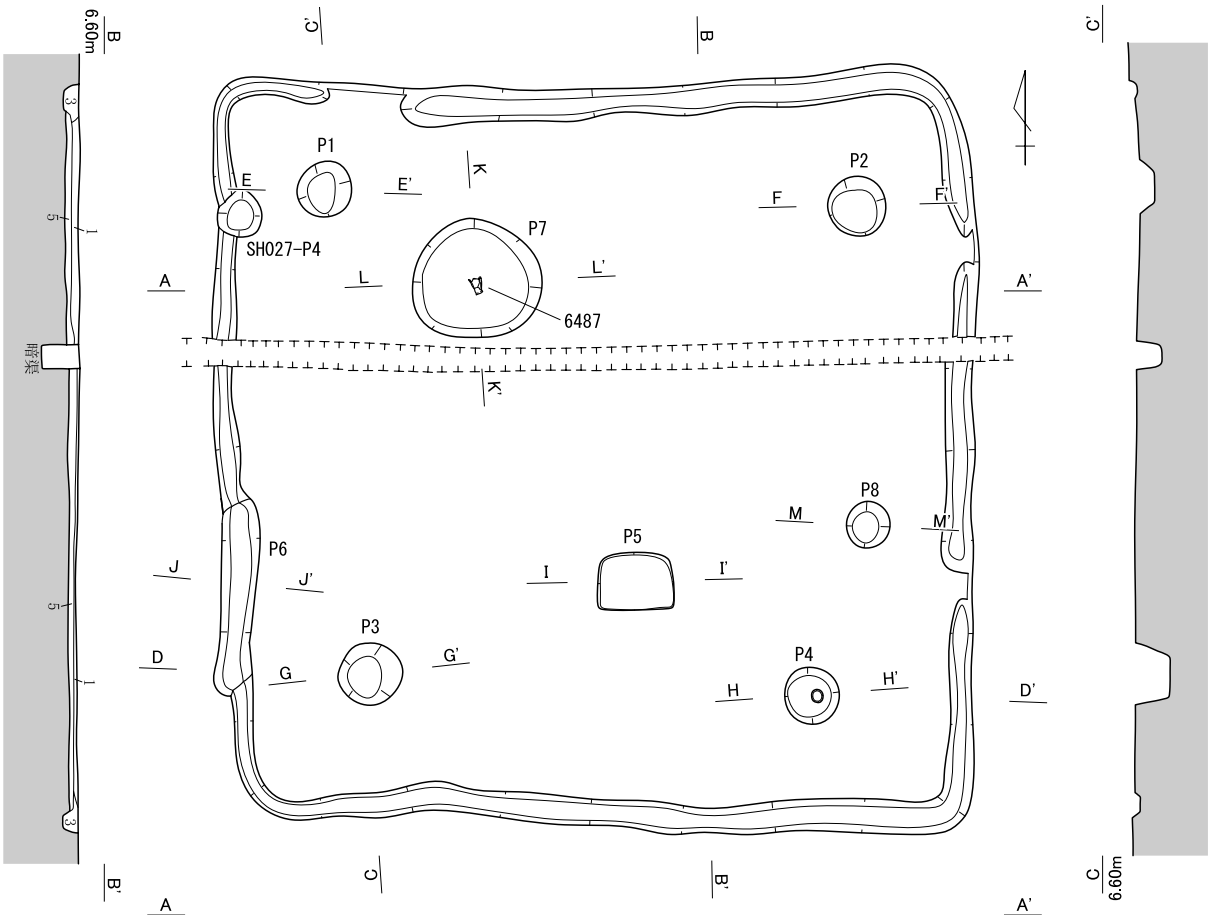
検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。SB543と並列しており、北東隅でSB549、南側でSB547、SB548を切り、周辺の竪穴住居跡との新旧関係では最も新しい。周辺遺構との重複が多く、遺構の輪郭も漸移的であったため、平面形は不明瞭である。

形状　東西長約5.0ｍ、南北長約4.9ｍの隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

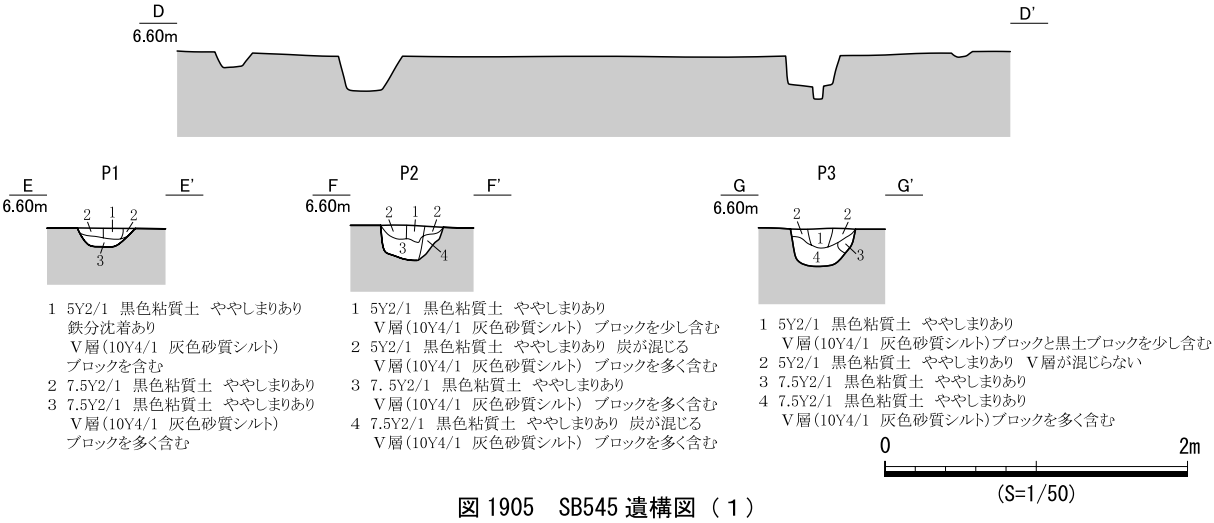
埋土　３層に分層した。１・２層が住居埋土、５層が掘形埋土である。埋土中にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面上では小穴８基と壁溝を検出した。このうち、P1～P4はいずれも土層断面で柱痕跡を確認できたことから柱穴と考えられる。P5は中央南寄りに位

置する方形土坑である。底面は平坦で、壁面の傾斜はほぼ垂直であり、土坑中央西寄りで円礫が２個立つように出土した。また、P7は不整円形を呈する小穴で、検出面中央において高坏脚部片が横位で出土した。なお、P6は壁溝上で検出した細長い小穴であるが、性格は不明である。壁溝の残存状



1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり
　7.5Y2/1　黒色粘質土ブロックを含む
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを少し含む
3　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
4　10Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
5　5Y2/2　オリーブ褐色粘質土　しまりありあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む



1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　鉄分沈着あり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを多く含む

1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)　ブロックを少し含む
2　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)　ブロックを多く含む
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)　ブロックを多く含む
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)　ブロックを多く含む

1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックと黒土ブロックを少し含む
2　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　Ⅴ層が混じらない
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを多く含む

0　2m
(S=1/50)

図 1905　SB545 遺構図（１）

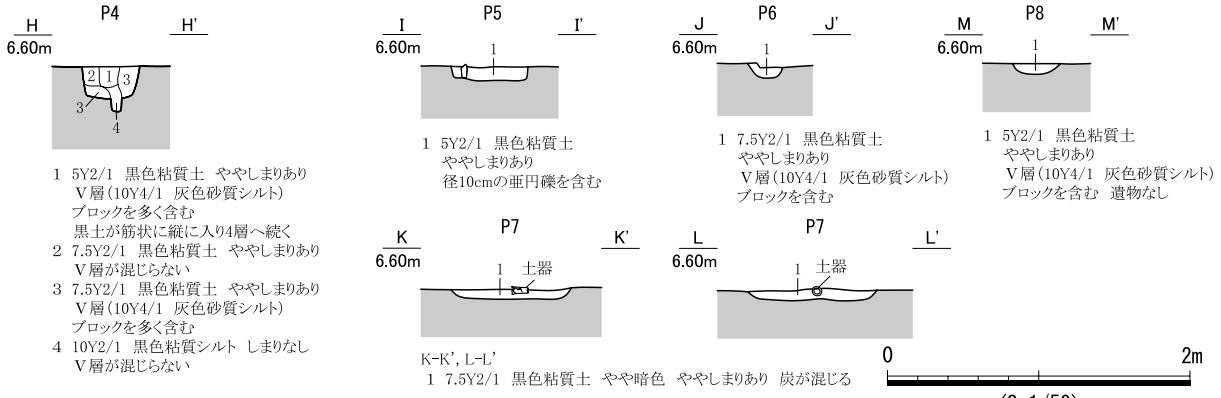


図 1906　SB545 遺構図（２）

況は良好であるが、北壁中央西寄りで１箇所と東壁中央付近で２箇所において途切れている。その埋土は単層で、およそ底面は平坦である。なお、SH027-P4 が SB545 の壁溝を切っていると判断したが、平面形の検出時に誤認した可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から土器 175 点、小穴から土器 10 点が出土した。出土土器はⅤ期～Ⅶ期が多く、P7 からⅤ期高坏脚部片（6487）が出土した。

出土遺物　6486 はⅥ期～Ⅶ期壺 A1a 類。口縁端部平坦面に擬凹線が認められる。6487 はⅤ期高坏Ｂ類。付根から脚部がわずかに円錐状に開き、裾部が大きく外反する。柱状部には直線文が４帯認められ、裾部には透孔が認められる。6488 はⅤ期高坏Ｊ類。脚裾部が外反し、端部は面取りされる。外面には、細い工具により斜格子文が施文される。6489 はⅤ期～Ⅵ期器台 B1a 類。口縁部が直線的に開き、端部を上下に拡張して平坦面を形成する。平坦面には沈線が認められる。

時期　P7 からⅤ期の遺物が出土したものの、Ⅵ期～Ⅶ期の SB548 と SB549 を切っていることと出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

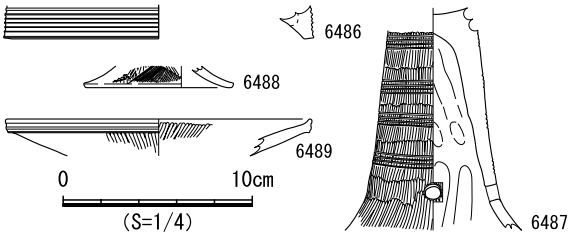


図 1907　SB545 遺物実測図

SB546（遺構：図 1909、遺物：図 1908）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。西側と南側は調査区域外にのび、北辺を SK06635 に、中央北寄りを SK06655 に切られ、東側で SB547 を切る。

形状　規模は不明であるが、北辺と東辺が直線的にのび、北東隅でほぼ直角に屈曲することから、全形はおよそ隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約 0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。１・２層が住居埋土、４・５層が掘形埋土である。埋土中にブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴４基と壁溝を検出した。そのうち、P1 は不整方形を呈し、断面形は西壁面の傾斜は緩やかで、東壁面はほぼ垂直である。ただし、埋土４～７層は SZ199 の周溝埋土を誤認して掘削した可能性もある。壁溝は浅く断面は皿状を呈し、東壁沿いの南側では部分的にしか検出できなかった。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器 77 点、小穴から土器 37 点が出土した。小穴のうち P1 からの出土が

目立ち、Ⅵ期～Ⅶ期の壺Ｂ類（6490）も出土した。また、住居埋土からはⅥ期～Ⅶ期のものが多く出土し、Ⅴ期の小片もわずかに出土した。

出土遺物　6490はⅥ期～Ⅶ期壺B2類。口縁部が強く外反し、内外面ともにハケ目が残り、端部平坦面には沈線状の窪みが認められる。

時期　Ⅴ期～Ⅶ期のSB547を切っているが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

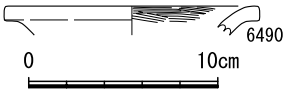


図 1908　SB546 遺物実測図

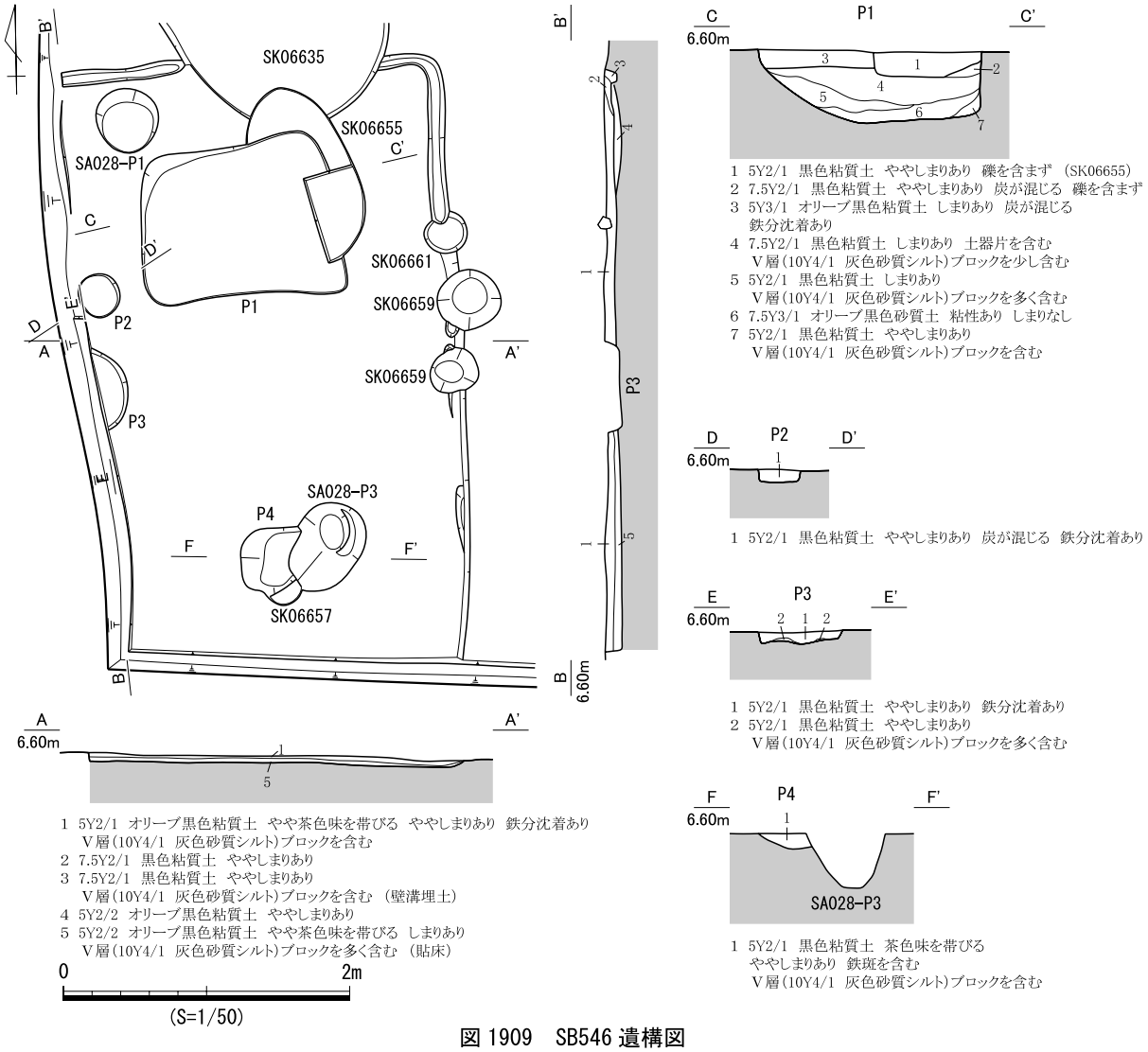


図 1909　SB546 遺構図

SB547（遺構：図 1910、遺物：図 1911）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。西側をSB546に、北側をSB545に、東側をSB548に切られており、周辺の竪穴住居跡との新旧関係では最も古い。検出時にすでに壁溝が見えていた。

形状　規模は不明であるが、壁溝の平面形から隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は急である。

埋土　４層に分層した。１層が住居埋土、３層～５層が掘形埋土である。住居埋土は部分的にしか残存していなかった。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴４基と壁溝を検出した。そのうち、P1は床面上、P3とP4は貼床除去後、P2は先行するSB545貼床除去後に検出し、P1とP2は位置的に柱穴の可能性がある。いずれも掘形は浅いが、P1のみ柱痕跡の可能性がある堆積を確認した。壁溝は北壁沿いと東壁の北側で検出した。北壁中央付近で途切れており、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は急である。なお、炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器429点、小穴から土器14点が出土した。土器はⅤ期～Ⅶ期までのものが出土し、多くはⅥ期～Ⅶ期に属する。また、P1からⅤ期の高坏Ｂ類（6498）が出土した。

出土遺物　6491はⅤ期～Ⅵ期壺F2類。口縁部が短く直立し、わずかに外傾する。端部には平坦面を

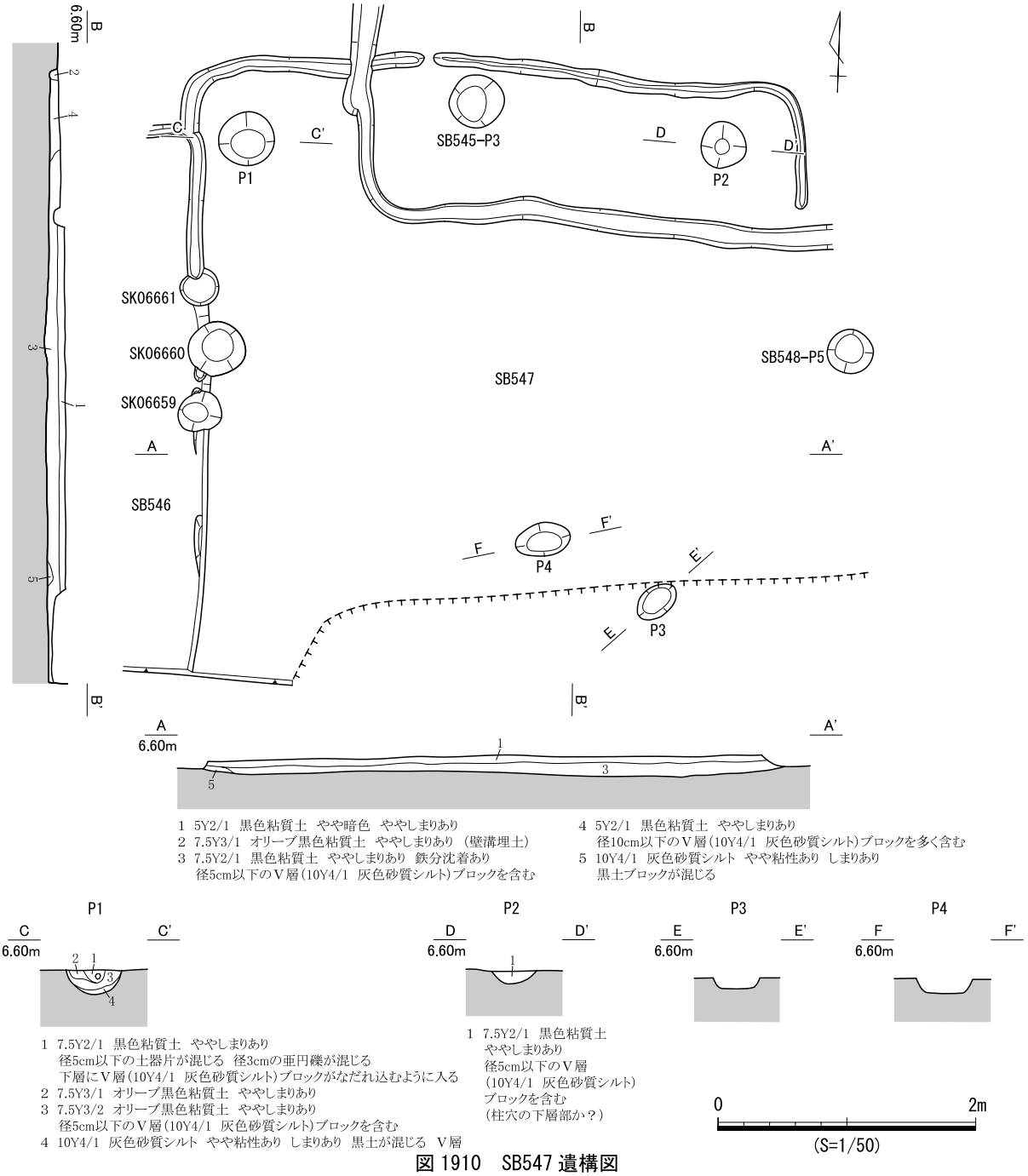


図 1910　SB547 遺構図

形成する。口縁端部から外面にかけて全面に赤彩を施し、煤も付着する。6492、6493はⅥ期甕D1b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が短く屈折する。外面に刺突を加える。6494はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が外反し、端部付近がナデによってわずかに屈曲して内湾する。6495はⅥ期～Ⅶ期甕Ｂ類。口縁部が外反し、端部をナデによって平坦に整形する。6496はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部が外反し、端部をナデによって平坦に整形する。頸部直下には直線文が認められる。6497はⅧ期甕Ｄ類。口縁部の屈曲が形骸化し、大きく開く。6498はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から円錐状に開き、裾部で大きく開く。透孔が縦方向に２孔並ぶ。6499はⅦ期高坏G3c類。外面に多条沈線を施文し、その間にヘラによる山形文、クシによる刺突文を加える。

時期　竪穴住居跡の重複関係では最も古い住居といえるが、出土遺物の時期からⅤ期～Ⅶ期と考えられる。

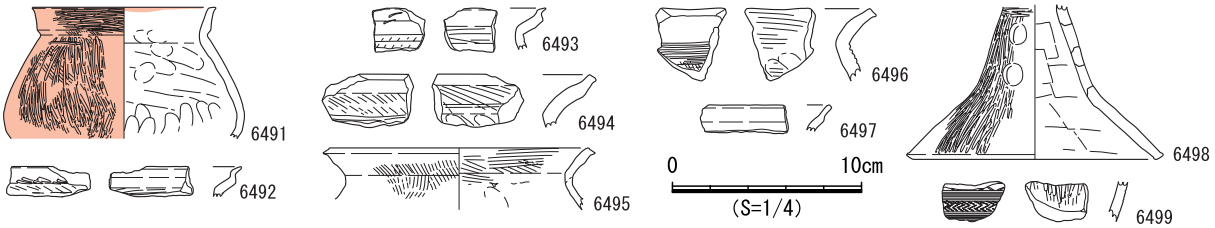


図 1911　SB547 遺物実測図

SB548（遺構：図 1912、遺物：図 1913）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置し、北西隅をSB545に切られ、西側でSB547を切る。Ⅴ層ブロックを含まない黒色土が全体的に広がっていたが、平面形はやや不明瞭であった。

形状　南側を撹乱により失われ全形は不明であるが、東西長約5.1ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

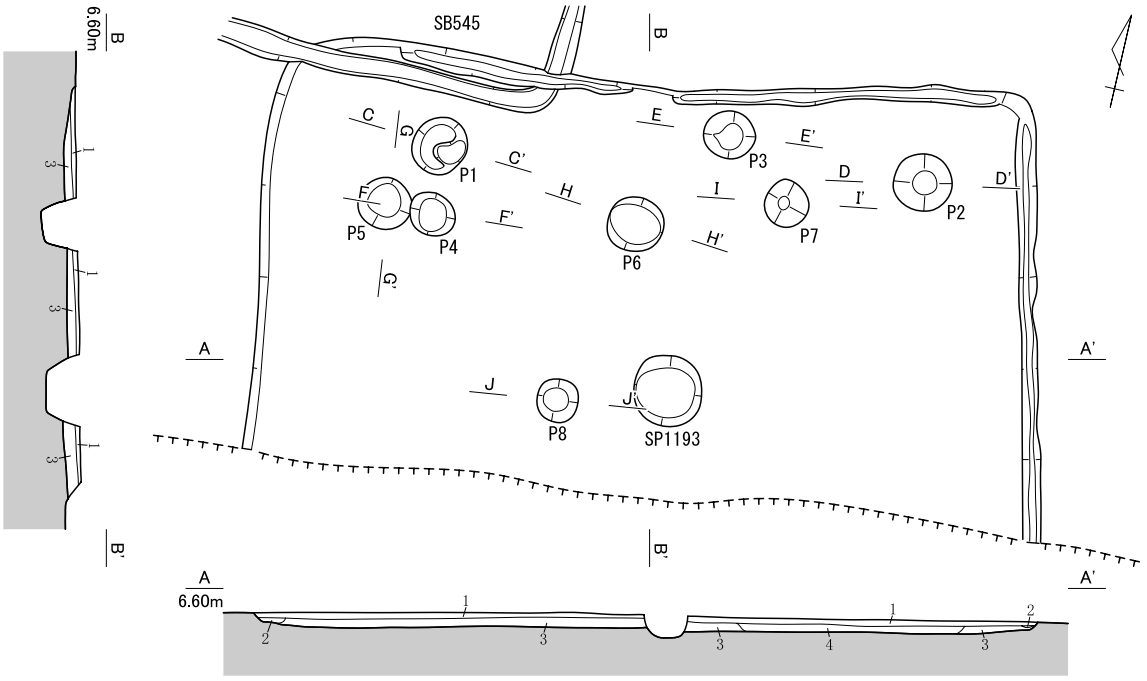
埋土　３層に分層した。１層が住居埋土、３・４層が掘形埋土である。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面はやや硬化しており、小穴８基と壁溝を検出した。そのうち、P1～P3、P6は土層断面で柱痕跡を確認し、P1は底面にて柱当たりを検出した。平面的な位置からP1とP2が柱穴と考えられ、他の小穴は住居の中央付近に分布している。壁溝は北、西、東壁沿いで確認したが、西壁沿いの平面図は図化できなかった。その掘形は浅く、断面形は皿状を呈し、北壁中央付近と北東隅でわずかに途切れている。なお、炉跡は確認できなかった。

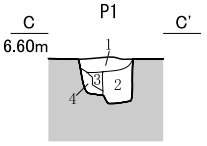
遺物出土状況　埋土中から土器332点、石器・石製品１点、小穴から土器２点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多く、Ⅴ期の土器もわずかに出土した。P3からⅥ期の甕Ｄ類（6502）が出土した。

出土遺物　6500はⅤ期壺A1類。口縁部が強く外反し、端部を下方に拡張して擬凹線を施文する。内外面ともに赤彩を施す。6501はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が短く外反して端部に平坦面を形成し、刺突を加える。6502はⅥ期甕D1b類。口縁部下段が外方に引き出され、上段が直立する。外面に押し引きを加える。6503、6504はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が屈折し、端部は直立して平坦面を形成する。6503は拡張気味の下端に刺突を加える。6504は頸部外面に直立部が認められる。6505はⅥ期～Ⅶ期手焙り形土器。覆部の小片で、貼付突帯上にキザミを加え、上方に波状文を施文する。

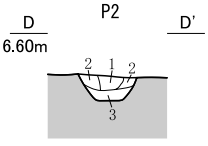
時期　Ⅴ期～Ⅶ期のSB547を切り、Ⅵ期～Ⅶ期のSB545に切られることと、出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。



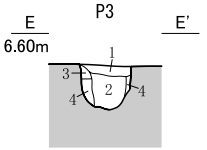
1　5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　鉄分沈着あり
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　ややしまりあり　鉄分沈着あり　径5cm以下のⅤ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　やや暗色　ややしまりあり　鉄分沈着あり　Ⅴ層の混じりなし



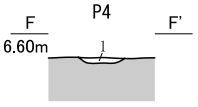
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
土器片を含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む



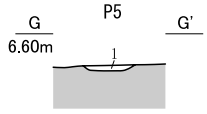
1　10Y2/1　黒色粘質土　しまりなし
2　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　しまりなし



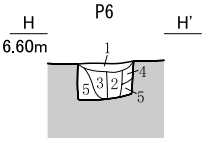
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　土器片を含む
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを少し含む
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを多く含む



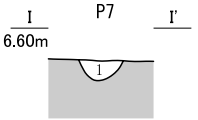
1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
炭が混じる やや茶色味を帯びる



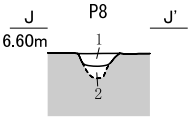
1　7.5Y2/1　黒色粘質土
やや茶色味を帯びる　ややしまりあり
径2cm以下のⅤ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)
ブロックを含む



1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる　土器片を含む
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
3　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む
4　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり　炭が混じる
5　7.5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを含む



1　5Y2/1　黒色粘質土　ややしまりあり
Ⅴ層(10Y4/1　灰色砂質シルト)ブロックを
わずかに含む



1　5Y2/1　黒色粘質土
ややしまりあり　炭が混じる　やや茶色味を帯びる
2　7.5Y2/1　黒色粘質土　1層より粘性が強い　ややしまりあり

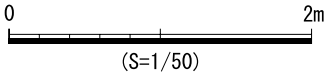
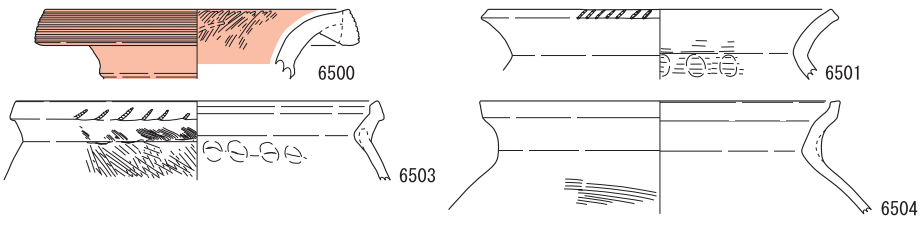


図 1912　SB548 遺構図



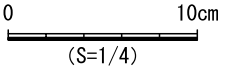


図 1913　SB548 遺物実測図

SB549（遺構：図 1914、遺物：図 1915）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置し、西側をSB545に切られている。平面形は北東隅が明瞭であったが、南辺と西辺はやや不明瞭であった。

形状　東西長約3.7ｍ、南北長約3.5ｍの隅丸方形を呈する。深さは約0.1ｍで、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土　３層に分層した。１層が住居埋土、３・４層が掘形埋土である。埋土はブロック土を含むことから人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴５基と壁溝を検出した。そのうち、P2は底面中央に円形の浅い凹みがあり、柱当たりの可能性がある。また、P3とP4はいずれも土層断面で柱痕跡を確認した。平面的な位置からP2とP3が柱穴と考えられ、P1も掘形が浅いものの柱穴の可能性がある。壁溝は西壁中央付近から北壁を経て、東壁中央付近まで確認でき、北東隅付近で約0.4ｍ間が途切れている。しかし、図化できなかった。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器16点が出土した。土器のうち時期がわかる破片は、Ⅵ期～Ⅶ期に属

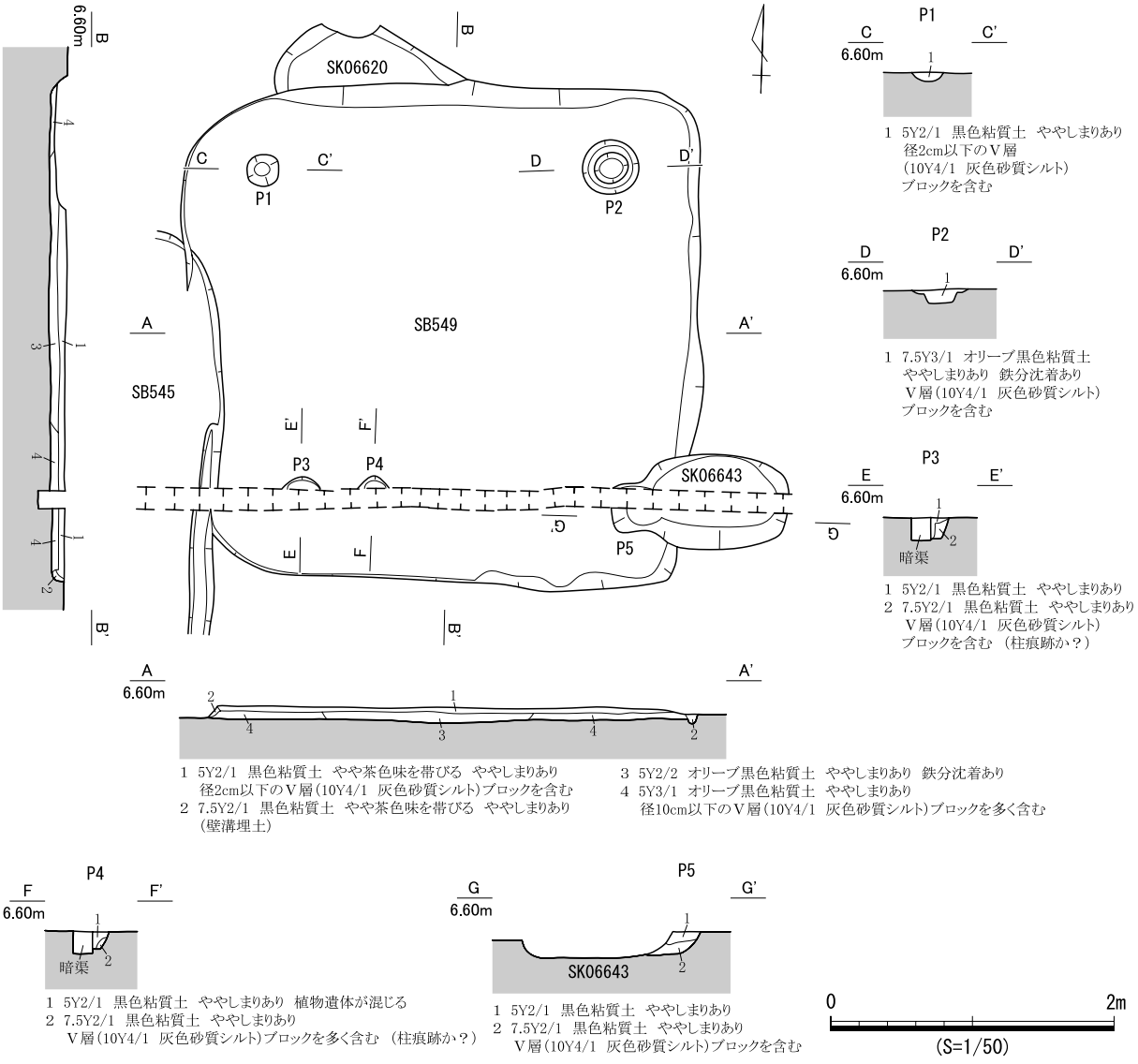


図 1914　SB549 遺構図

する。

出土遺物　6506はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が屈折し、端部付近で内側に屈曲する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には刺突を加える。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB545に切られるが、出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

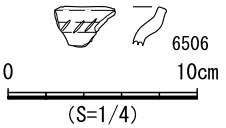


図 1915　SB549 遺物実測図

SB550（**遺構：図 1916、遺物：図 1917**）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。北側は撹乱により失われ、調査区域外へのびている。平面形は南西隅が明瞭であったが、南東隅はやや不明瞭であった。

形状　東西長約3.3ｍであり、各辺は直線的にのび、隅部はほぼ直角に屈曲することから、全形は隅丸方形を呈すると考えられる。深さは0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜は急である。

埋土　単層である。埋土中にブロック土の混入が認められ、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）を確認した。床面では小穴４基と壁溝を検出した。いずれも掘形は浅く、土層断面で柱痕跡を確認できていないが、P1とP2は平面的な位置関係から柱穴の可能性がある。なお、壁溝の残存状況は悪く、南西隅と南東隅においてわずかに確認できたのみである。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　埋土中から土器16点が出土した。そのうち、P1北側の埋土中にて手捏ね土器(6508)が割れた状態で出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが多い。

出土遺物　6507はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。口縁部が屈折し、端部付近で内側に屈曲して直立する。端部には顕著な平坦面を形成し、外面には煤が付着する。屈曲部内面はくの字に屈折するが、外面には粘土を貼付して直立部を形成する。頸部直下には直線文らしき文様が認められる。6508はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｂ類。胴部が丸みを帯び、底部が小さい。

時期　出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

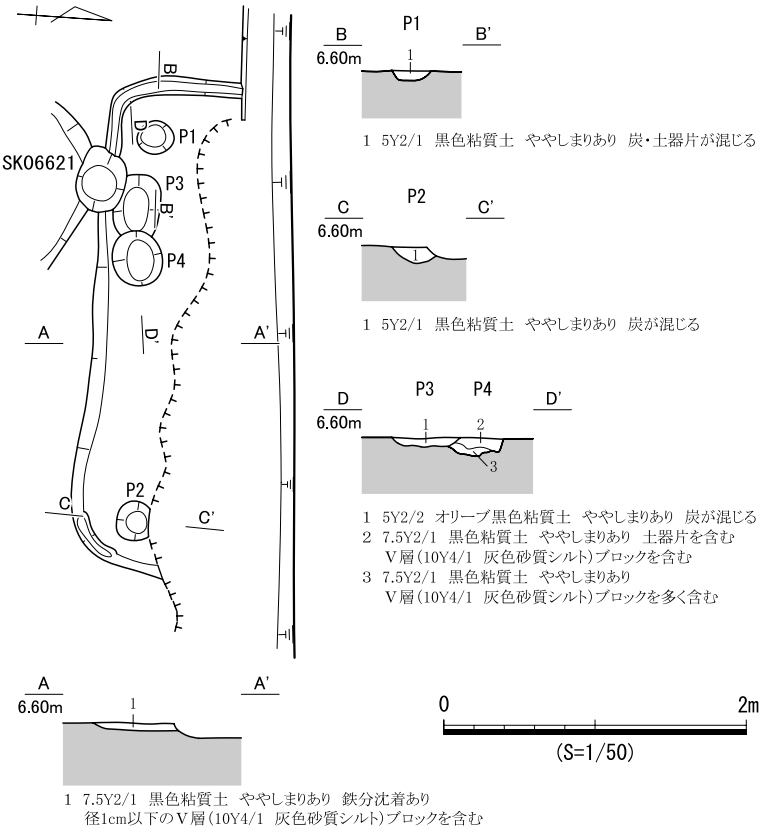


図 1916　SB550 遺構図

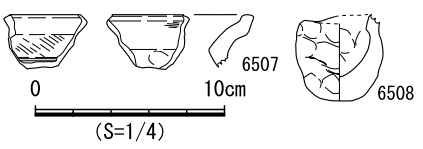


図 1917　SB550 遺物実測図

SB551（遺構：図 1919、遺物：図 1918）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置し、北側は調査区域外にのびる。本遺構周辺は遺構の重複が著しく、平面形が不明瞭であった。また、検出時にすでに壁溝が見えていた。

形状　東西長約 3.1ｍ、南北長約 4.0ｍであり、北側がやや外側に開く不整方形を呈する。掘形の深さは 0.1ｍ未満であり、壁面の傾斜はほぼ垂直である。

埋土　単層である。ブロック土が混入していることから、人為堆積と考えられる。

床面　平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面では小穴３基と壁溝を検出した。そのうち、P1 と P3 は土層断面で柱痕跡を確認し、P3 は底面に柱当たり痕が残る。住居の規模が小さいため、いずれかが柱穴であった可能性もある。壁溝はやや幅が広く、途切れることなく全周している。

遺物出土状況　埋土中から土器 37 点、小穴から土器 19 点が出土した。出土土器の多くはⅥ期～Ⅶ期の小片であるが、SZ201 と重複しているためか、Ⅳ期の土器片も出土した。

出土遺物　6509 はⅣ期甕 A2 類。口縁部がくの字に屈折し、下端にキザミを加える。胴部内面にはハケ、外面にはタタキ後ハケ調整を施す。6510 はⅣ期甕Ａ類底部。内面にはケズリ、外面にはハケ調整を施し、底部にもハケ目が残る。

時期　出土遺物から時期の言及は困難であるが、Ⅳ期の SZ201 を切ることからⅣ期以降といえる。

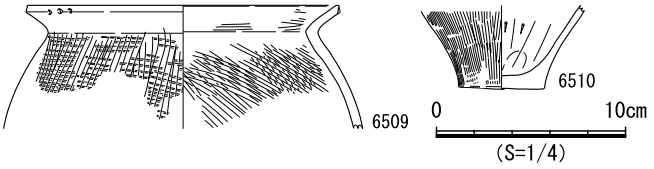


図 1918　SB551 遺物実測図

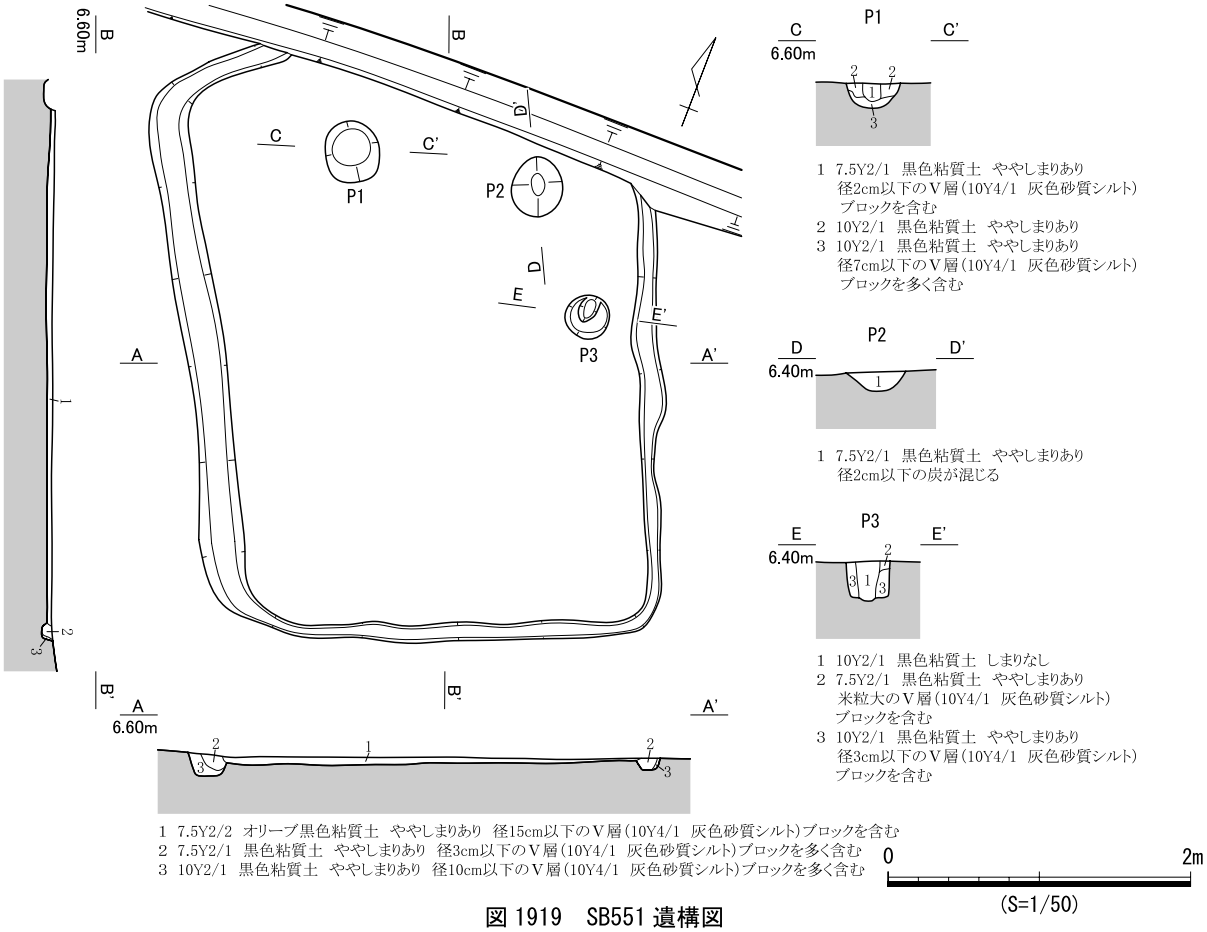
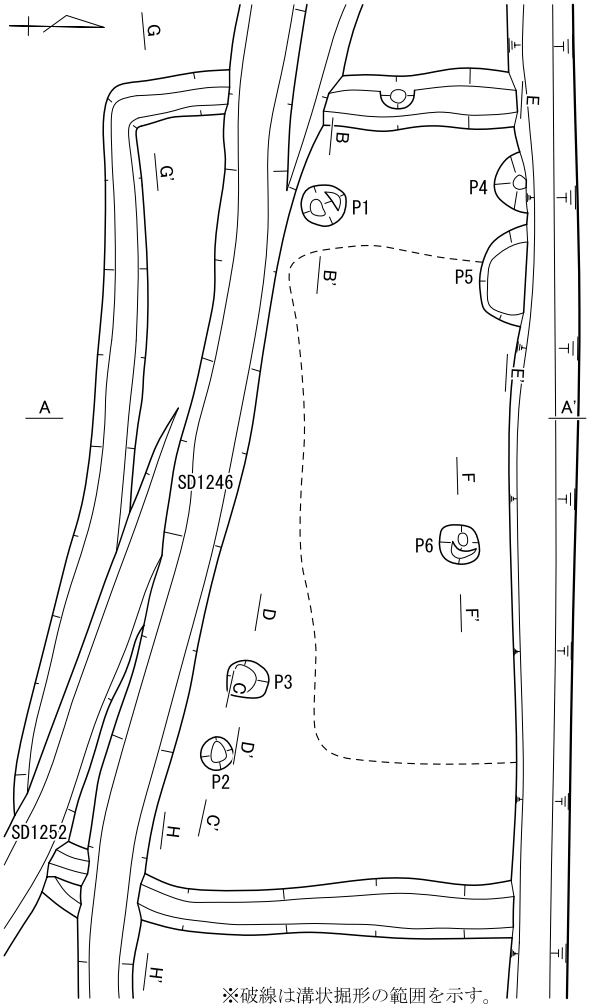


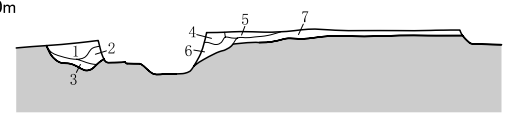
図 1919　SB551 遺構図

SB552（遺構：図 1920、遺物：図 1921）

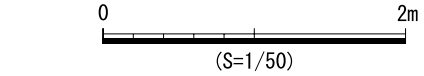
検出状況　東部中央に位置する。北側は調査区域外にのび、中央南側を２条の溝（SD1246、SD1252）に切られる。平面形はやや不明瞭であり、その周縁に幅広の溝状掘形を有する竪穴住居跡である。

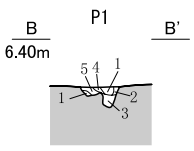
形状　東西長約5.8ｍで、東辺と西辺は直線的にのび、南東隅部が外側に膨らむ不整方形を呈する。掘形最深部までの深さは約0.2ｍであり、壁面の傾斜は急である。



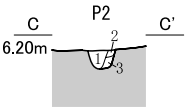


1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　7.5Y4/1　灰色シルトが混じる　1層より多く混じる
3　7.5Y4/1　灰色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土が斑状に混じる
4　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　7.5Y4/1　灰色シルトが混じる　1層より多く混じる
5　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
6　7.5Y4/1　灰色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土が斑状に混じる
7　7.5Y4/1　灰色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土のブロックが混じる

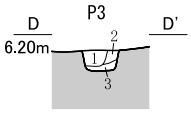




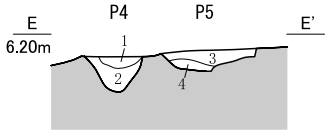
1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
2　5Y4/1　灰色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土が混じる
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色粘質土ブロックが混じる
4　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色粘質土が混じる
5　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
6　2層と同じ



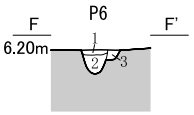
1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルト　炭化物が混じる
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルト　1層より多く混じる
3　5Y4/1　灰色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土が混じる



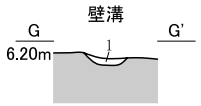
1　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる
2　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる　1層より多く混じる
3　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず

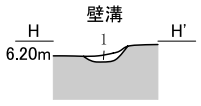


1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトブロックが混じる
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる
4　5Y4/1　灰色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土が混じる



1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　5Y4/1　灰色シルトが混じる　炭化物が混じる





1　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　しまりあり　礫を含まず　7.5Y4/1　灰色シルトを含む

図 1920　SB552 遺構図

埋土　７層に分層した。土層断面A-A’の１層は壁溝埋土、２、３、６層は溝状掘形の埋土、４、５層は住居埋土もしくは溝状掘形の埋土、７層は中央の掘形埋土である。１層のみ炭化物を含み、他の層はブロック土や２種類以上の土が混在していることから、１層以外は掘形埋土の可能性が高い。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面では小穴６基と壁溝を検出した。そのうち、P1～P3、P6は土層断面で柱痕跡を確認でき、平面的な位置関係からP1とP2（もしくはP3）が柱穴と考えられる。壁溝は確認した壁面を全周し、埋土は単層で、断面形は皿状を呈する。

掘形　壁面から約1.1ｍの幅で溝状の掘形が全周している。その埋土はシルトと粘質土が混在する土であり、最深部では深さ約0.2ｍであるが全体的には浅い。中央にはブロック土が混じる土があり、幅広の溝状掘形とは埋土が異なっている。掘形底面はおよそ平坦であるが、中央北寄りではやや凹凸が見られた。

遺物出土状況　埋土中から土器75点が出土した。主体はⅤ～Ⅵ期の小片で、Ⅶ期の土器片は認められなかった。

出土遺物　6511はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が屈折して短く外傾し、端部には平坦面を形成して刺突を加える。6512はⅥ期甕A3類。口縁部が外反し、端部には平坦面を形成して刺突を加える。外面には部分的に煤が付着する。

時期　Ⅴ期～Ⅵ期のSD1246に切られることと出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

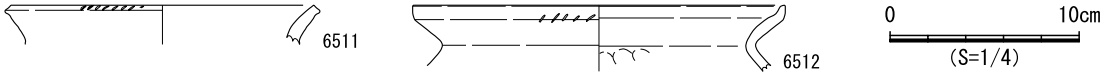


図1921　SB552 遺物実測図

SB553（遺構：図1923・1924、遺物：図1922）

検出状況　東部中央の遺構密集域に位置する。３基の小穴が重複もしくは近接して３箇所で検出でき、２回以上の建て替えを行った竪穴住居跡の柱穴と考えた。なお、北東隅の柱穴は不明である。

形状　柱穴（P1～P3、P4～P6、P7～P9）の位置から、東西に長い長方形を呈すると考えられる。

床面　９基の柱穴の対応関係は不明である。土層断面で柱痕跡を確認できたものはP2とP5であり、それ以外で掘形の深い遺構はP4、P7、P8である。残りの遺構は掘形が浅く単層である。また、９基の内側に小穴５基（P10～14）を検出したが、いずれも掘形は浅く、埋土は単層から２層で、その性格は不明である。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

遺物出土状況　小穴から土器43点が出土した。その多くはⅤ～Ⅵ期の小片である。

出土遺物　6513はⅥ期～Ⅶ期壺。器面に線刻の一部が認められる。6514はⅤ期高坏B4類。坏底部から口縁部が大きく外反する。屈曲部外面の稜は認められるが、屈曲そのものは形骸化している。6515はⅥ期器台B1a類。口縁部が直線的に開き、端部に顕著な平坦面を形成する。6516は時期及び用途が不明の土製品。

時期　出土遺物の時期から、Ⅴ期～Ⅵ期と考えられる。

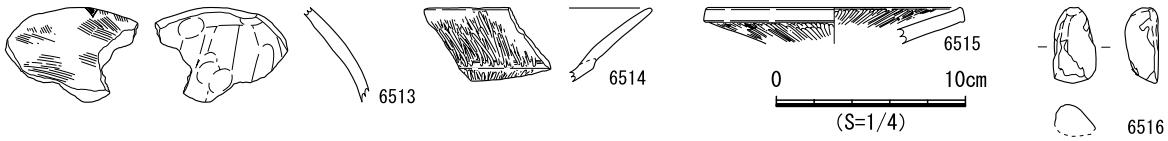
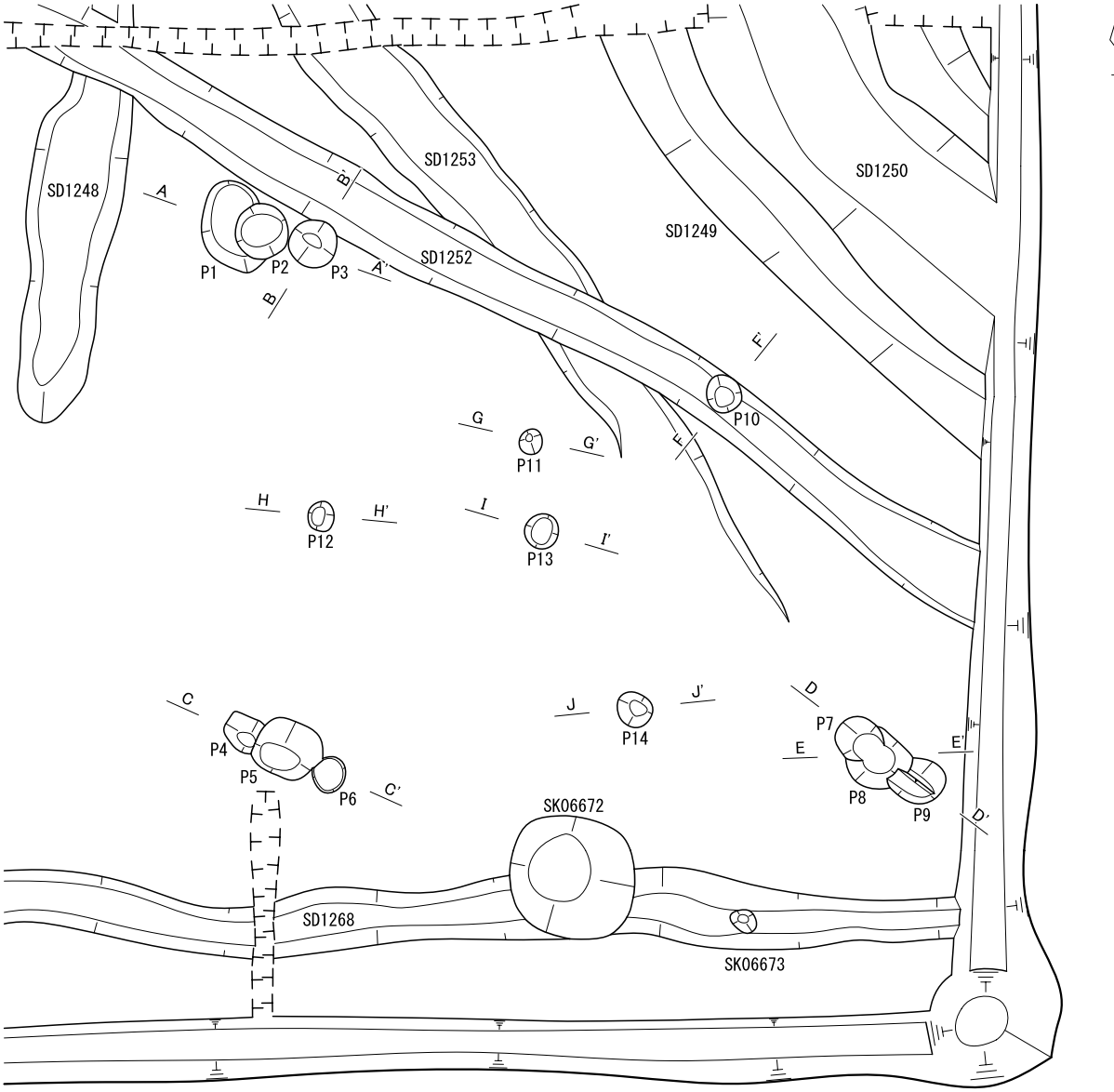
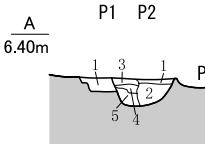
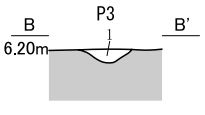


図1922　SB553 遺物実測図

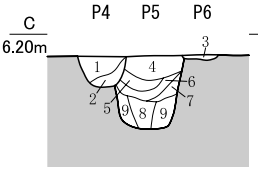




P1
1　7.5Y3/1　オリーブ黒色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　　2.5GY4/1　暗灰オリーブ灰色土が混じる
P2
1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　5Y4/2　灰オリーブ色シルトが混じる　炭化物が混じる
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
3　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　5Y4/2　灰オリーブ色シルトが混じる　炭化物が混じる
4　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　5Y4/2　灰オリーブ色シルトが混じる　(3層より少し)
5　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　5Y4/2　灰オリーブ色シルトが混じる



1　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルトブロックが混じる



1　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず
　　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルトが混じる　土器片が混じる　(P4埋土)
2　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　(P4埋土)
　　2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルトが1層より多く混じる
3　2層と同じ　(P6埋土)
4　2.5Y3/1　黒褐色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
　　7.5Y4/1　灰色シルトブロックが混じる　(P5埋土)
5　2.5Y3/1　黒褐色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
　　7.5Y4/1　灰色シルトブロックが混じる　4層より多く混じる　(P5埋土)
6　5Y2/1　黒色粘質土　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
　　7.5Y4/1　灰色シルトブロックが混じる (P5埋土)
7　5層と同じ
8　10Y3/1　オリーブ黒色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず　炭化物が混じる
　　7.5Y4/1　灰色砂質土ブロックが混じる (P5埋土)
9　10Y3/1　オリーブ黒色シルト　粘性なし　しまりあり　礫を含まず
　　2.5Y3/1　黒褐色粘質土が混じる
　　(P5埋土)

0　2m
(S=1/50)

図 1923　SB553 遺構図（１）

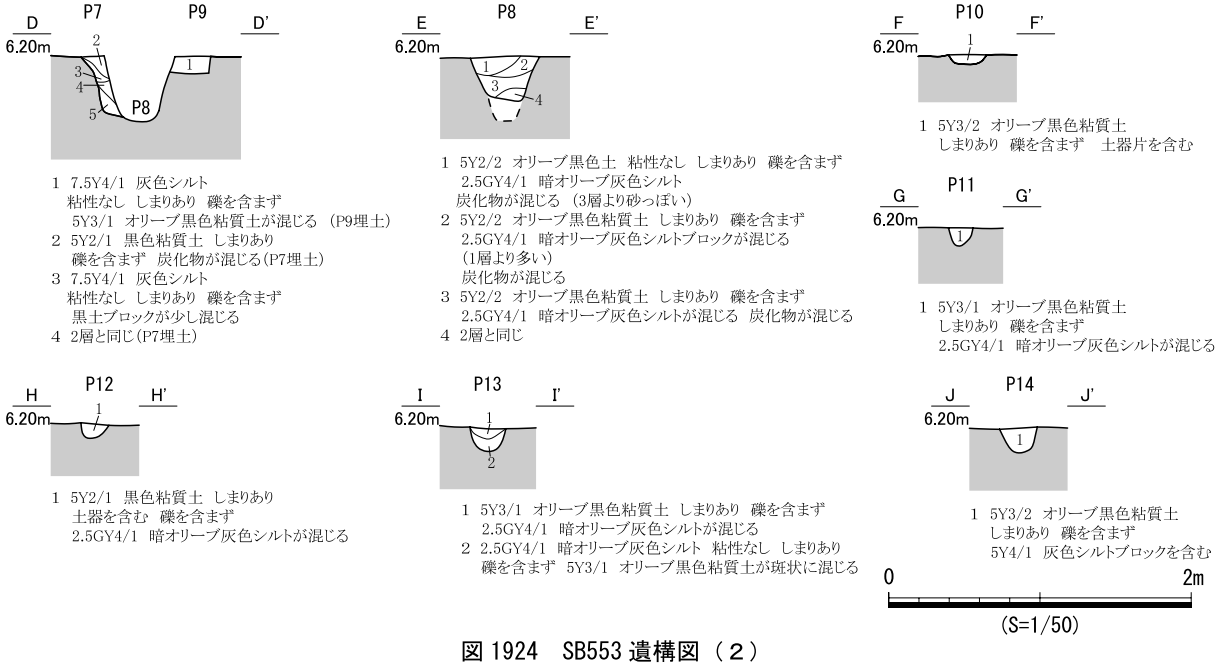


図 1924　SB553 遺構図（２）

SB554（遺構：図 1925 ～ 1928、遺物：図 1929）

検出状況　東部中央南寄りの、SD0381 東側に位置する。SD0381 の埋土上層を掘削した後に検出したことから、SD0381 の最終埋没時に SB554 も埋没したと考えられる。検出時には、最初に壁溝１と壁溝３を確認し、その後の精査で壁溝２を検出した。また、壁溝１の東側に SD1204、壁溝３の南西側に SD1207 を検出し、SB554 を中心とする一連の遺構（外周溝）であると考えた。なお、住居の埋土は削平されており、検出時にすでに床面が見えていた。

形状　南北側は調査区域外にのびるため、全形は不明である。しかし、壁溝の平面的な位置関係から東西長約 5.2 ｍの隅丸方形を呈していたと考えられる。

床面　壁溝を検出した面を床面とし、貼床（整地土）がある。壁溝のうち、壁溝３は壁溝２を切っており、壁溝２は掘形底面で検出した壁溝４に連続する可能性が高い。そのため、住居構築当初は壁溝２と壁溝４が存在し、その後床面等を再整地し、壁溝１と壁溝３が機能したと考えられる。床面上では、壁溝内側で小穴を 14 基検出した。このうち、P1 ～ P4 の４基は土層断面で柱痕跡を確認し、P1 と P2、P3 と P4 のそれぞれがほぼ同じ掘形の深さである。平面的な位置関係から P1 と P2 が柱穴と考えられ、P1 の底面には礎盤の可能性ある木材が残存していた。また、P6 検出面では炭化物層を検出したが、焼土や被熱痕跡は確認できなかった。P9 は住居南辺中央付近に位置する長軸長約 1.1 ｍの不整楕円形を呈する穴である。壁面の傾斜は緩やかで、壁面から底面にかけて凹凸が著しい。底面付近からベンガラ、粘土塊、炭化物、土器片などが混在して出土し、P1 と P9 からもベンガラが出土した。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形　掘形埋土を掘削すると、その底面にて小穴４基を検出した。そのうち、P17 は土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係から建て替え前の柱穴である可能性が高い。

外周溝　SD1204 は幅約 1.0 ｍ、深さ約 0.1 ｍ、SD1207 は幅約 0.7 ｍ、深さ約 0.2 ｍであり、壁溝１・３から約 1.3 ｍ～ 1.7 ｍ外側に位置する。いずれも SB554 を中心に緩やかな弧を描いており、検出時の埋

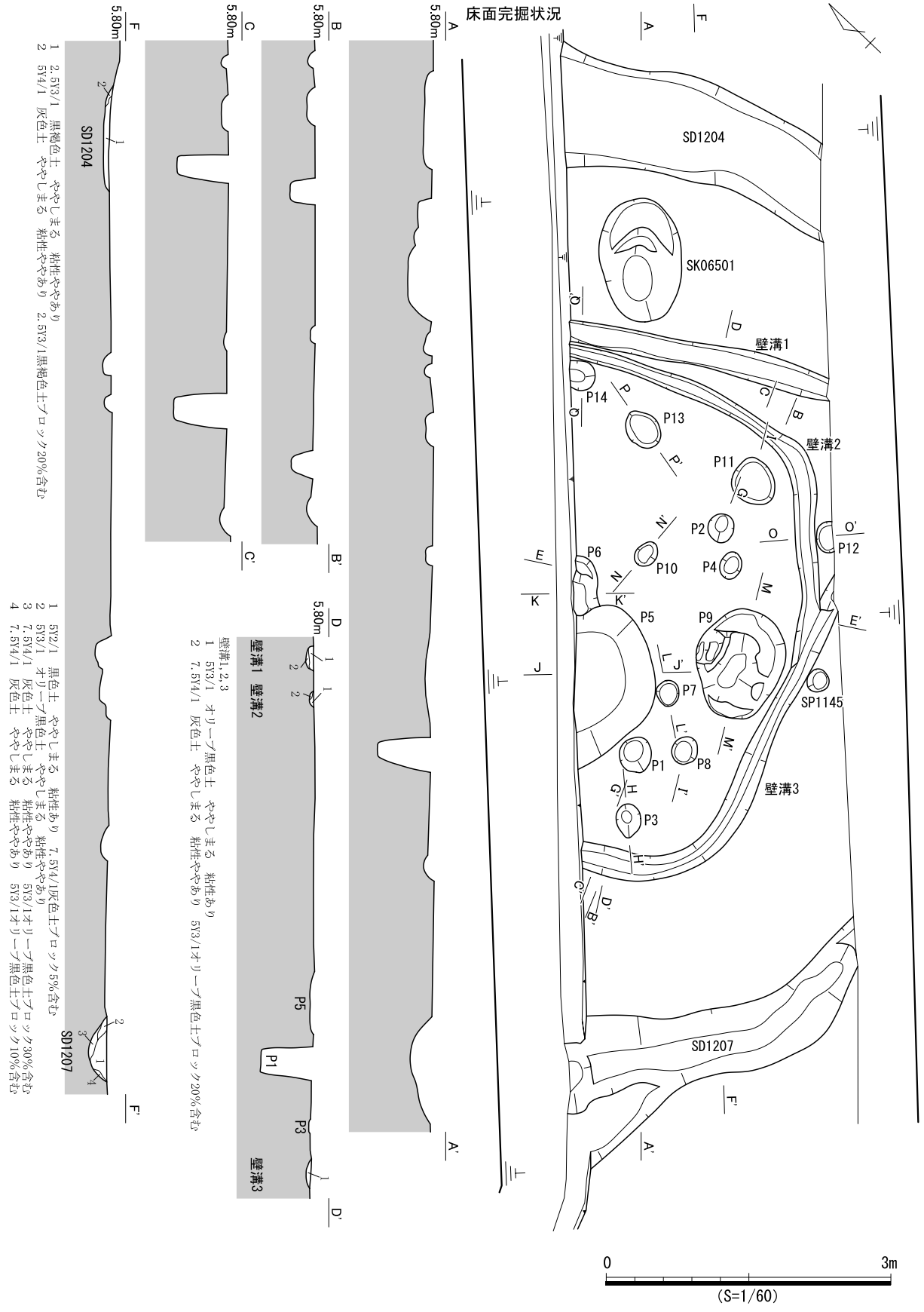


図 1925　SB554 遺構図（１）

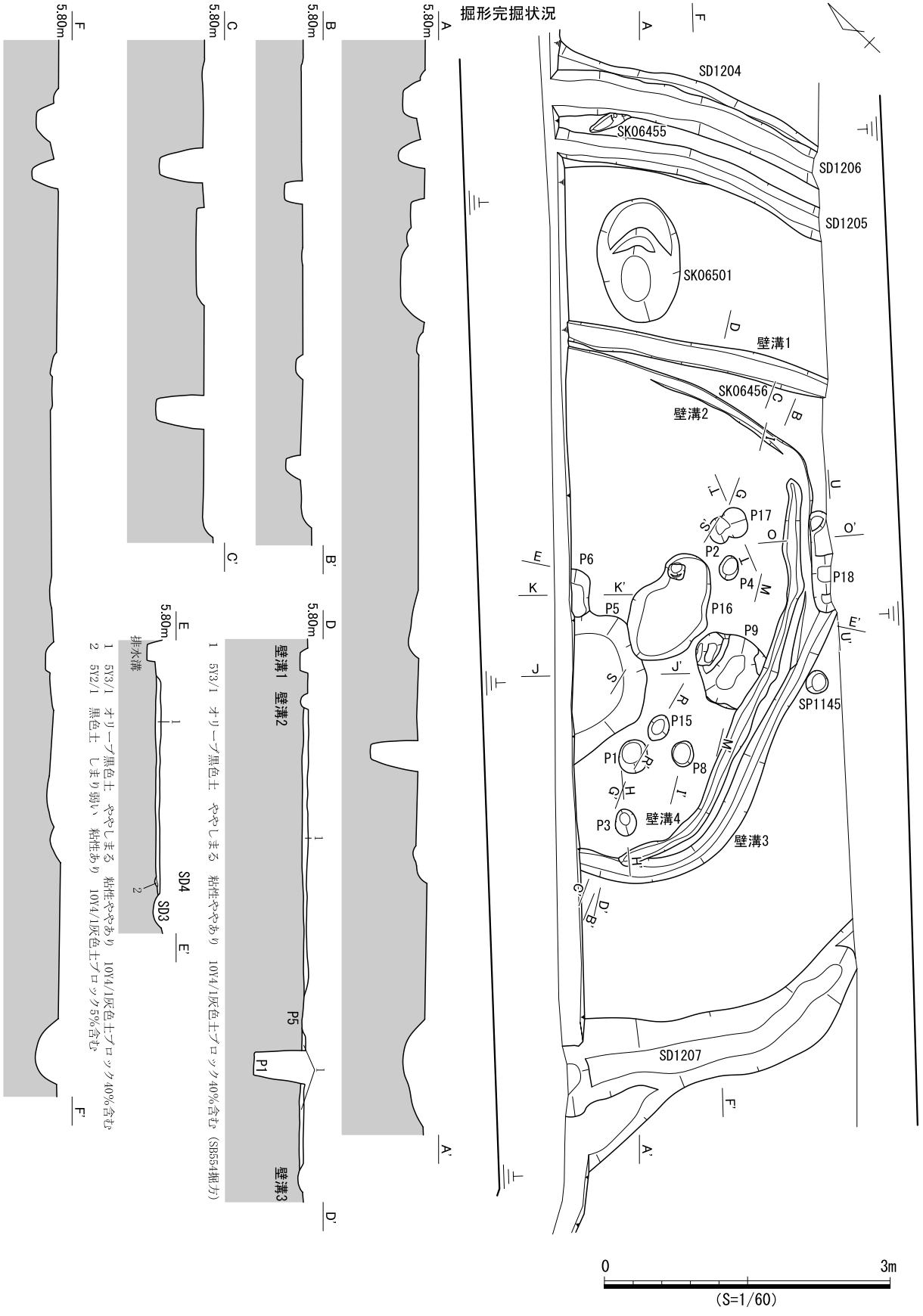
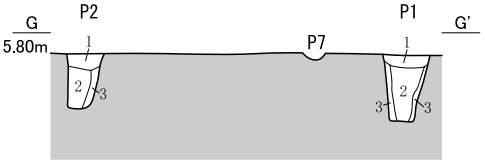


図 1926　SB554 遺構図（２）

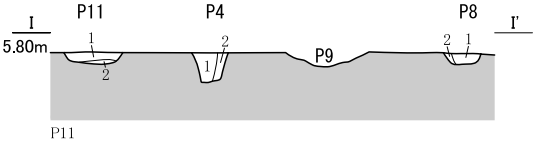
も類似することから、外周溝と考えた。その埋土は２層～４層に分層し、ブロック土を含む。外周溝と壁溝の間には空閑地があり、周堤等の施設の存在が想定できるため、その崩落土が外周溝内に堆積した可能性も指摘できる。なお、SD1204底面では細い溝状遺構２条（SD1205、SD1206）を検出した。いずれも掘形が深く、壁面の傾斜が急である。また、SD1207の西壁面には幅広い平坦面が形成されている。

遺物出土状況　小穴から土器118点、木製品１点、壁溝から土器１点、外周溝から土器153点、木製品６点が出土した。住居南西隅では、壁溝３の検出面で赤色顔料が面的に広がっていたが、壁溝３の



P2
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
2　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　径5㎜以下の炭化物1%含む(柱痕跡)
3　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む

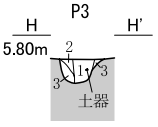
P1
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　1辺2cmの土器片1点あり
2　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　径5㎜以下の炭化物2%含む(柱痕跡)
3　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む



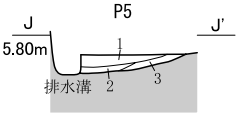
P11
1　7.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
2　7.5Y4/1　灰色土　しまりなし　粘性あり　7.5Y2/1黒色土ブロック15%含む

P4
1　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む(柱痕跡)
2　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土(やや暗い)ブロック40%含む

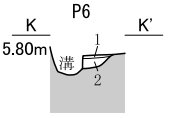
P8
1　7.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
2　7.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む



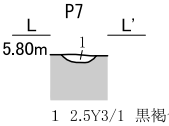
1　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　1辺3cmの土器片1点あり
　径5㎜程度のベンガラが1%混じる(柱痕跡)
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
3　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y2/1黒色土ブロック10%含む



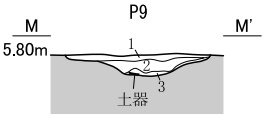
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色砂質土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック20%含む
3　7.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む



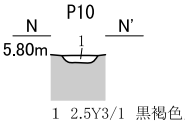
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　ややしまり強い　粘性ややあり
　炭化物が10%混じる
2　7.5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック20%含む



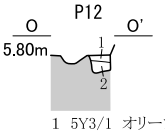
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック15%含む



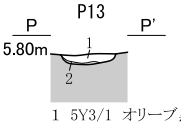
1　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり　10Y4/1灰色土ブロック5%含む
2　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり　径5㎜以下のベンガラ1%含む
　1辺10cmほどの炭化材が混じる
3　10Y4/1　灰色土　しまり弱い　粘性ややあり
　5Y2/1黒色土ブロック10%含む　1辺7cmの土器片1点あり



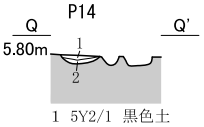
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性あり
　5Y4/1灰色土ブロック20%含む



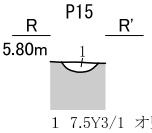
1　5Y3/1　オリーブ黒色(やや暗い)土
　ややしまる　粘性あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色(やや暗い)土
　ややしまる　粘性あり
　5Y4/1灰色土ブロック15%含む



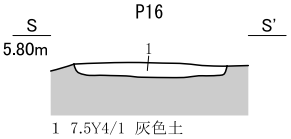
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまり弱い　粘性あり
2　5Y4/1　灰色土
　しまり弱い　粘性あり
　5Y3/1オリーブ黒色土
　ブロック30%含む



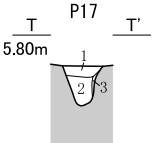
1　5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性あり
2　7.5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土
　ブロック20%含む



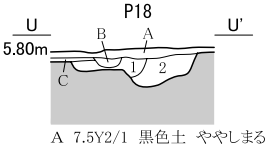
1　7.5Y3/1　オリーブ黒色土
　しまり弱い　粘性あり
　7.5Y4/1灰色土
　ブロック15%含む



1　7.5Y4/1　灰色土
　しまり弱い　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック7%含む



1　7.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土
　しまりなし　粘性あり(柱痕跡)
3　7.5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1黒褐色土ブロック15%含む



A　7.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり(SD0381埋土)
B　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　7.5Y4/1灰色土ブロック30%含む(P12埋土)
C　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性あり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック20%含む(SK06456埋土)
1　10Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性あり
　10Y4/1灰色土ブロック20%含む
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり

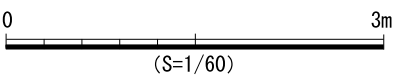


図1927　SB554遺構図（３）

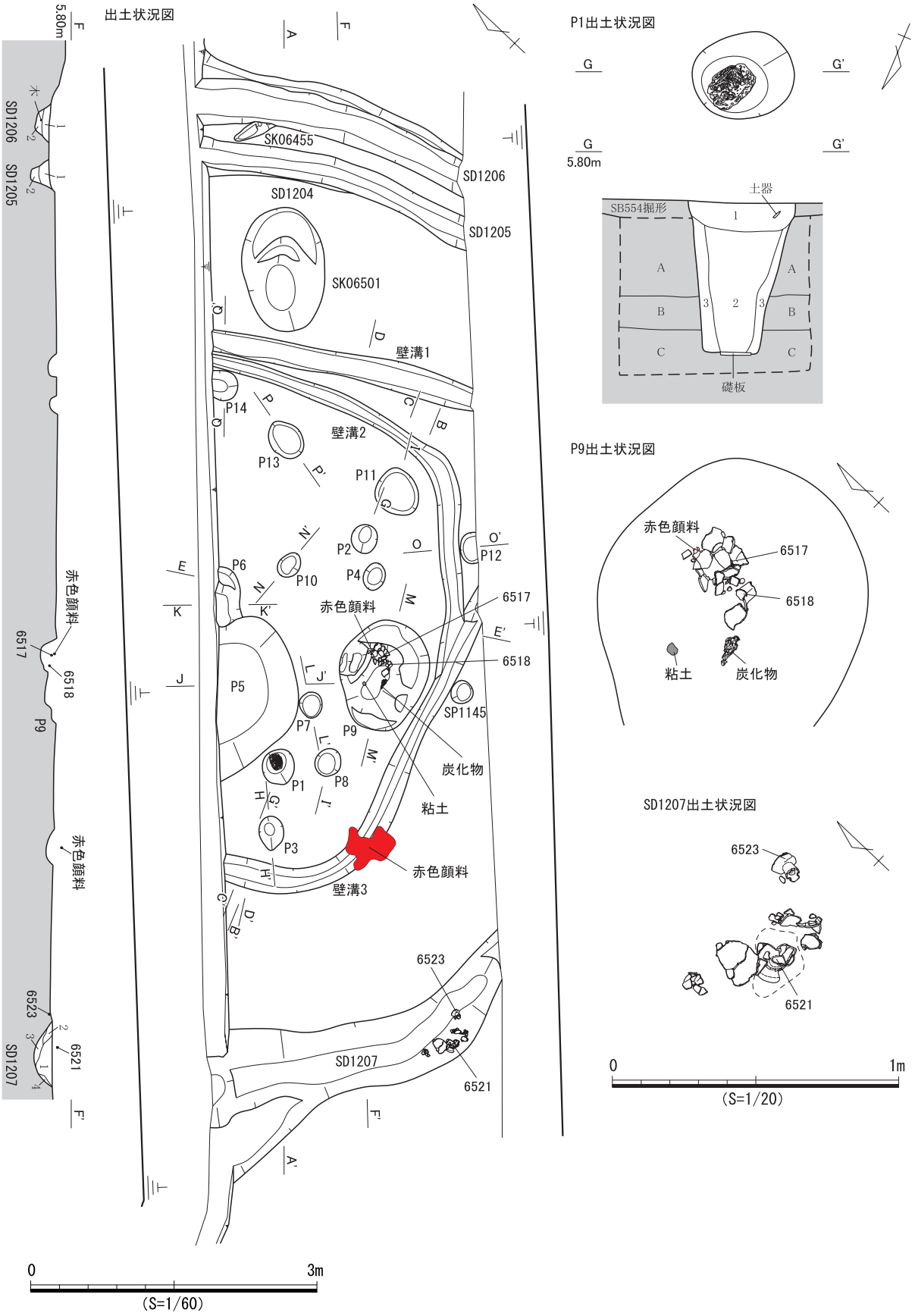


図 1928　SB554 遺構図（４）

平面形よりも南側（外側）に広がっており、住居機能時に伴う可能性は低い。外周溝から出土した木製品は棒状材であり、およそ溝の長軸方向に平行して出土した。しかし、いずれも腐食が著しく図示していない。なお、P9からⅤ期の遺物が出土し、外周溝からⅤ期～Ⅶ期の遺物が出土した。

出土遺物　＜SB554-P9出土遺物＞　6517はⅤ期甕。胴部上半以上を欠損するため全形は不明であるが、最大径は胴部中央より上方に位置すると考えられる。器面に文様は認められないが、全体にハケによる調整が認められ、煤が付着する。底部は矯小な平底で、中央が窪む。6518はⅤ期器台A1a類。付根から脚部が柱状に直立し、３方向に配置される透孔以下で大きく開く。

＜SD1205出土遺物＞　6519はⅥ期～Ⅶ期高坏Ｃ類。坏底部から口縁部が開いて立ち上がり、内面の段、外面の稜ともに明瞭である。脚部は付根から円錐状に開き、２孔１対の透孔をもつ。内外面ともに煤が付着する。

＜SD1206出土遺物＞　6520はⅤ期～Ⅵ期壺。胴部に赤彩が認められる。

＜SD1207出土遺物＞　6521はⅤ期～Ⅵ期甕B4類。口縁部が短く外反し、端部を丸くおさめる。胴部は球形を呈し、器面には粗いハケ目が残る。脚部がハの字に開く。胴部中央付近には煤が付着する。6522はⅤ期～Ⅵ期鉢A3a類。口縁部が短く屈曲し、端部はつまみ上げるように内湾して尖らせる。外

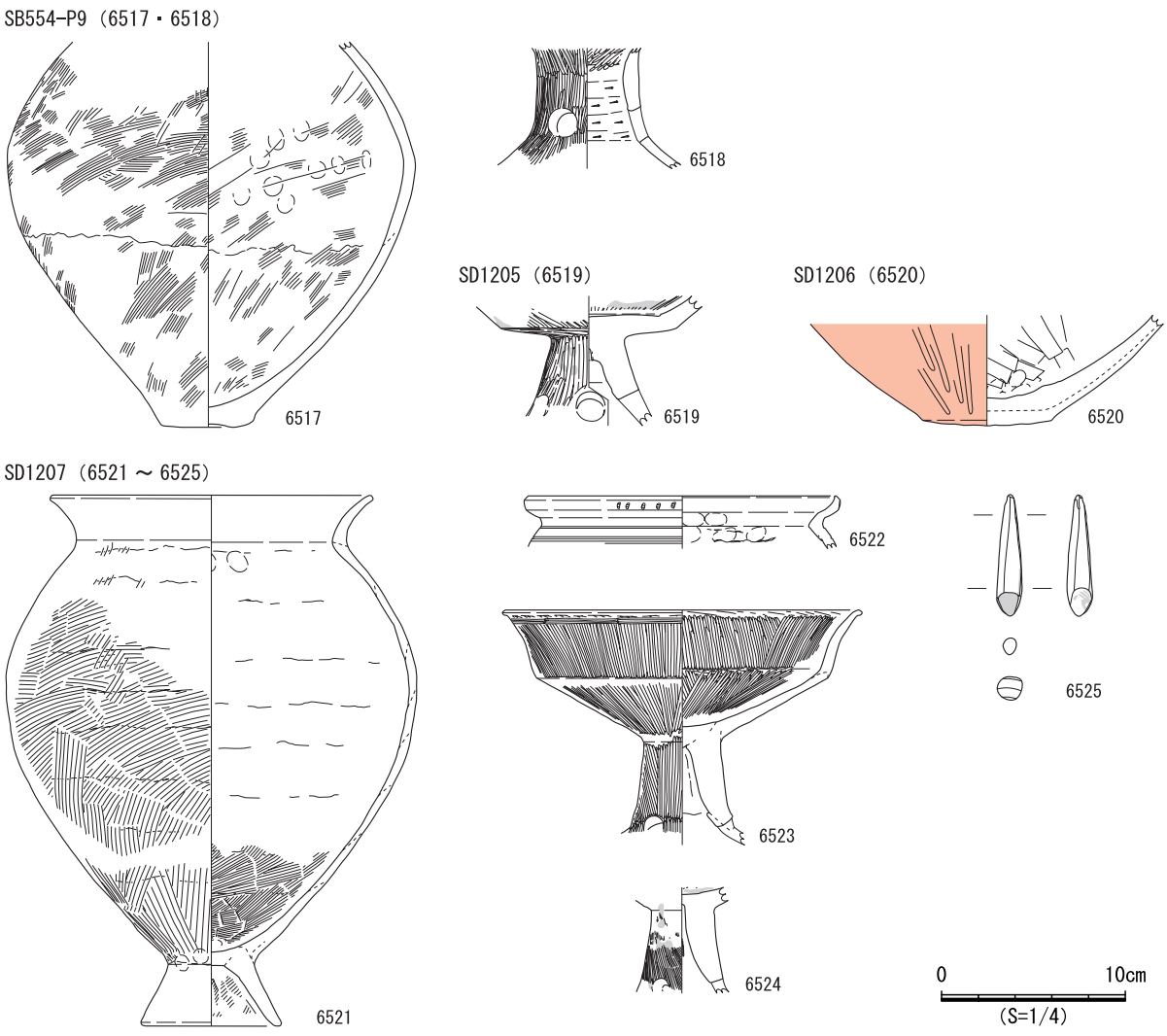


図 1929　SB554 遺物実測図

面には刺突を施し、頸部以下には直線文が認められる。6523はⅤ期高坏B2c類。坏底部は皿状を呈し、口縁部が大きく外反して端部を丸くおさめる。脚部は柱状にほぼ直立し、３方向に配置された透孔以下で裾部が開く。器面全体がハケ後ミガキの調整となるが、ミガキが一部に認められるのみで、ハケ目が目立って残る。坏底部と口縁部との接合痕が内外面ともに残ることも含めて、全体的に粗雑なつくりである。6524はⅤ期～Ⅵ期高坏。脚部が付根からわずかに円錐状に開き、透孔を３方向に配置する。6525はSD1207から出土した棒材。削り出し棒で、上下端部は尖り炭化している。木鏃かヤスの先端の可能性がある。

時期　小穴や外周溝出土遺物から、Ⅴ期には機能しており、Ⅶ期頃に埋没したと考えられる。

SB555（遺構：図1930～1933、遺物：図1934・1935）

検出状況　東部中央南寄りの、SD0381西側に位置する。Ⅴ層上面で検出したが、鉄分の沈着が著しく遺構の重複も多いことから、平面形は不明瞭であった。南側は調査区域外にあり、西側でSK06527とSB556を切る。

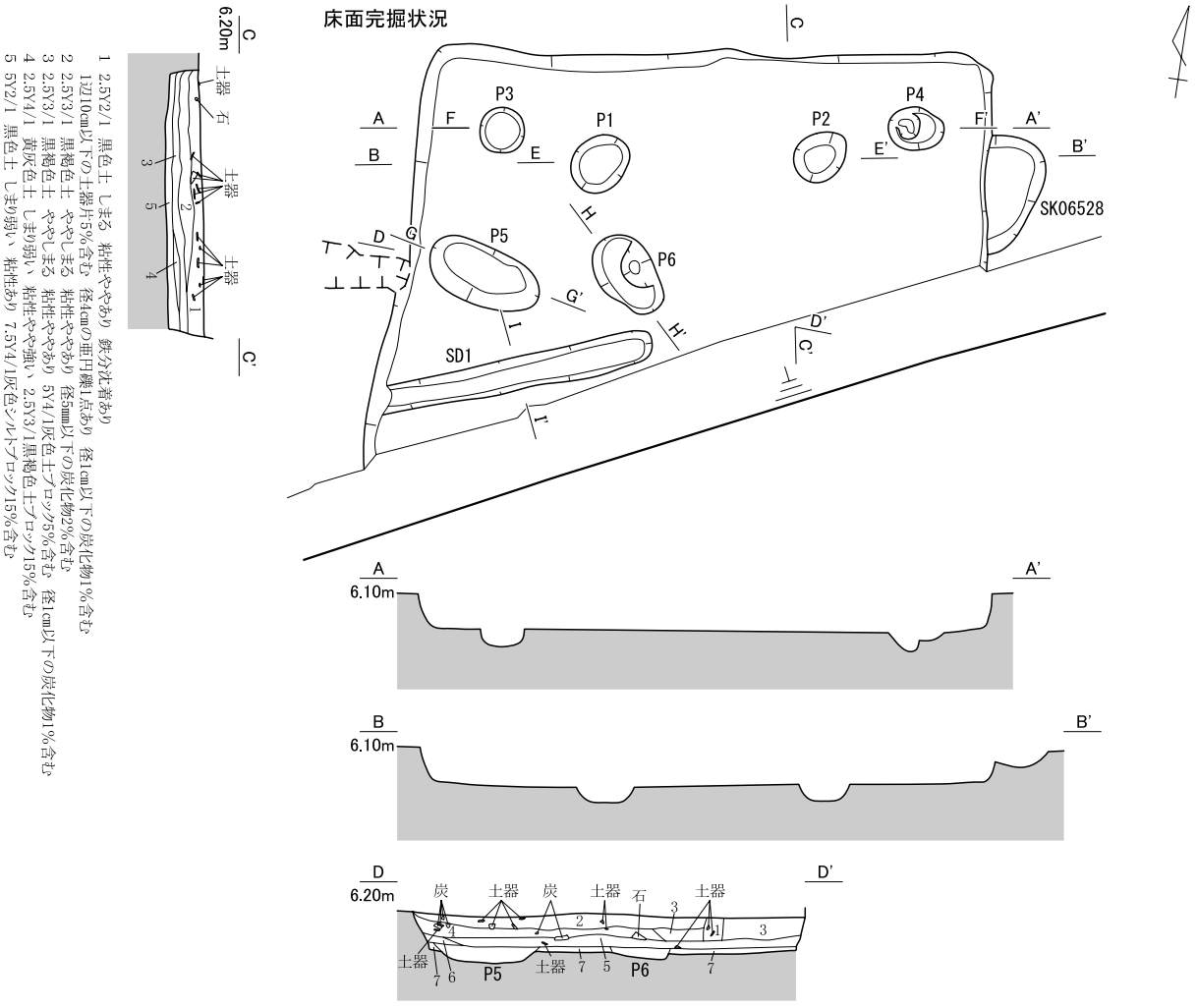
形状　各辺ともやや蛇行するものの、東西長約3.9ｍの隅丸方形を呈すると考えられる。深さは約0.2ｍで、壁面の傾斜は急である。

埋土　７層に分層した。Ⅴ層直上にある層（C-C’５層、D-D’７層）は掘形埋土であり、それ以外は住居埋土である。住居埋土はブロック土と土器片を多く含むことから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。床面上では、小穴６基と溝状遺構１条を検出した。いずれも掘形は浅く、埋土は１層～２層に分層した。このうち、P4の底面には柱当たりの可能性がある円形の窪みがある。平面的な位置関係から、P1とP2、あるいはP3とP4が柱穴と考えられる。なお、SD1の性格は不明である。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

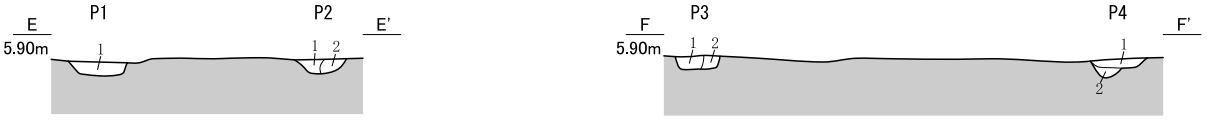
遺物出土状況　埋土中から土器3,010点、石器類27点、金属製品１点、小穴から土器８点、SD1から土器35点が出土した。埋土中の多くの遺物は細片で上層から出土しており、近い位置の破片同士が接合している。その中には、銅鏃（6563）も含まれている。また、住居の北西側では、上層遺物を取り上げた後に灰白色を呈する粘土塊や炭化材などが出土した。出土遺物の時期は、Ⅳ期～Ⅷ期まで認められる。このうちⅤ期の土器の遺存状態が良好であるが、重複するSK06527がⅤ期の遺構であるため混入している可能性がある。また、P6からⅥ期～Ⅶ期の甕が出土している。

出土遺物　6526はⅥ期壺Ｃ類。口縁部が短く直立し端部を丸くおさめる。6527はⅥ期～Ⅶ期壺。矮小な底部が突出する。6528はⅥ期～Ⅶ期壺A2類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張して擬凹線を施す。6529はⅧ期壺。口縁部が直線的に外傾して開き、端部を尖らせる。胴部はやや扁平で丸みを帯び、最大径は胴部中央より下方に位置する。底面は丸底で、器面にはミガキを施す。6530はⅥ期～Ⅶ期壺H1類。口縁部がやや長く直立する。6531はⅤ期～Ⅵ期甕B1a類。口縁部が短く外反し、端部には刺突を加える。6532はⅤ期～Ⅵ期甕B2類。口縁部が短く外反し、端部には平坦面を形成する。頸部にはわずかに直立する部位が認められる。6533、6534はⅥ期～Ⅶ期甕A3類。6533は頸部に直立部が認められず、口縁端部が直立する。外面に刺突文を施文し、頸部直下の胴部には直線文が認められる。6534は頸部がやや直立して口縁部が屈折し、端部が屈曲して受口状を呈する。6535はⅥ期～Ⅶ期甕A4類。口縁部が短く屈曲し、端部がわずかに内湾する。外面を肥厚して平坦面を形成し、クシに



1　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径1cm以下の炭化物1%含む
　1辺10cm以下の土器片5%含む　径4cmの亜円礫1点あり
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径5mm以下の炭化物2%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　径1cm以下の炭化物1%含む
4　2.5Y4/1　黄灰色土　しまり弱い　粘性ややあり　2.5Y3/1黒褐色土ブロック15%含む
5　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり　7.5Y4/1灰色シルトブロック15%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　1辺4cm以下の土器片3点あり
2　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　1辺6cm以下の土器片3%含む　径1cm以下の炭化物2%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　1辺3cmの土器片1点あり　径5mm以下の炭化物1%含む
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック5%含む　1辺5cm以下の土器片1%含む
　炭化物が部分的に多くまとまって混じる　1辺10cmの角礫1点あり
5　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック10%含む　1辺5cm以下の土器片1%含む　径5mm以下の炭化物1%含む
6　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる　粘性ややあり　5Y4/1灰色土ブロック20%含む
7　5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり　7.5Y4/1灰色シルトブロック20%含む

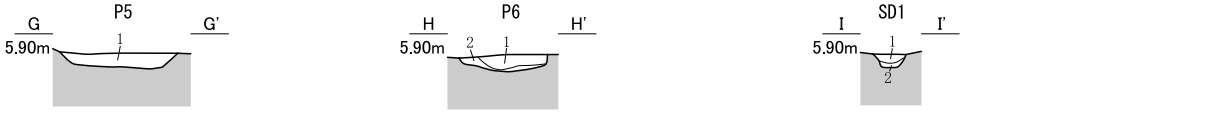


P1
1　2.5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性あり
　10Y4/1灰色シルトブロック
　10%含む

P2
1　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
　10Y4/1灰色シルトブロック10%含む
2　10Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック10%含む

P3
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性やや強い
　5Y4/1灰色土ブロック20%含む

P4
1　5Y2/1　黒色土
　しまり弱い　粘性やや強い
2　2.5Y2/1　黒色土
　しまりなし　粘性あり



1　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　10Y4/1灰色シルトブロック7%含む

1　2.5Y2/1　黒色土　しまり弱い　粘性あり
　10Y4/1灰色シルトブロック10%含む
2　10Y4/1　灰色シルト　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y2/1黒色土ブロック10%含む

1　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性あり
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック20%含む

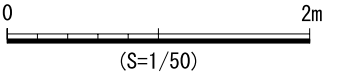


図 1930　SB555 遺構図（１）

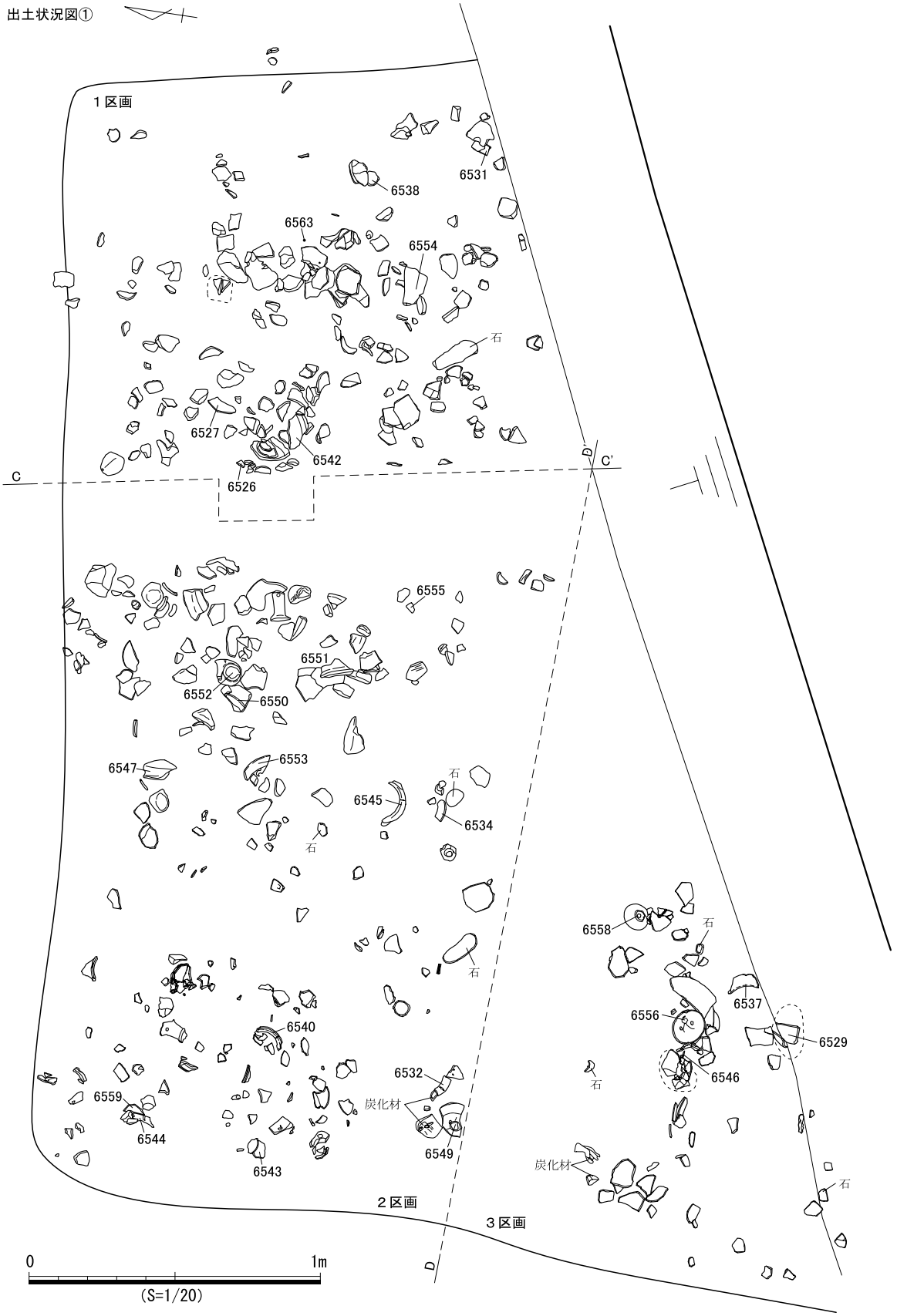
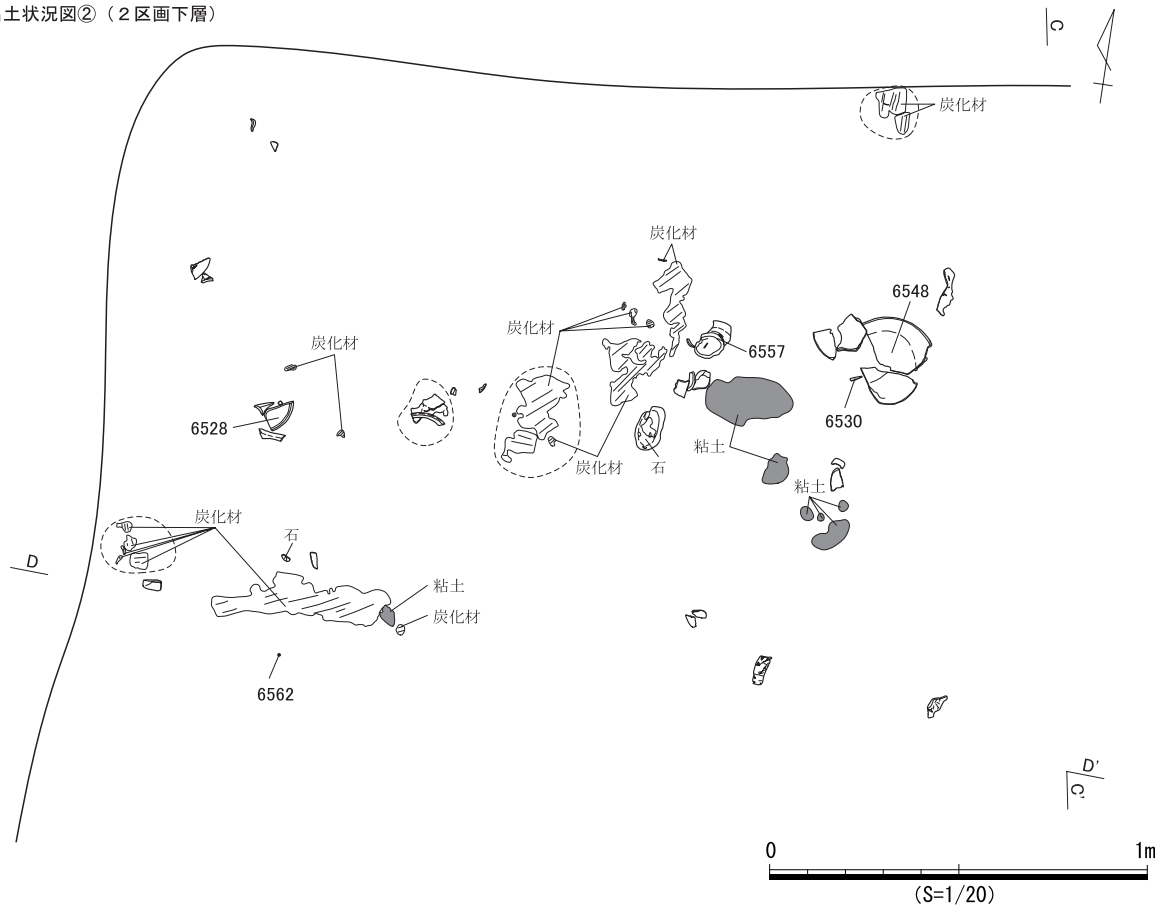


図 1931　SB555 遺構図（２）

出土状況図②（２区画下層）



遺物接合状況

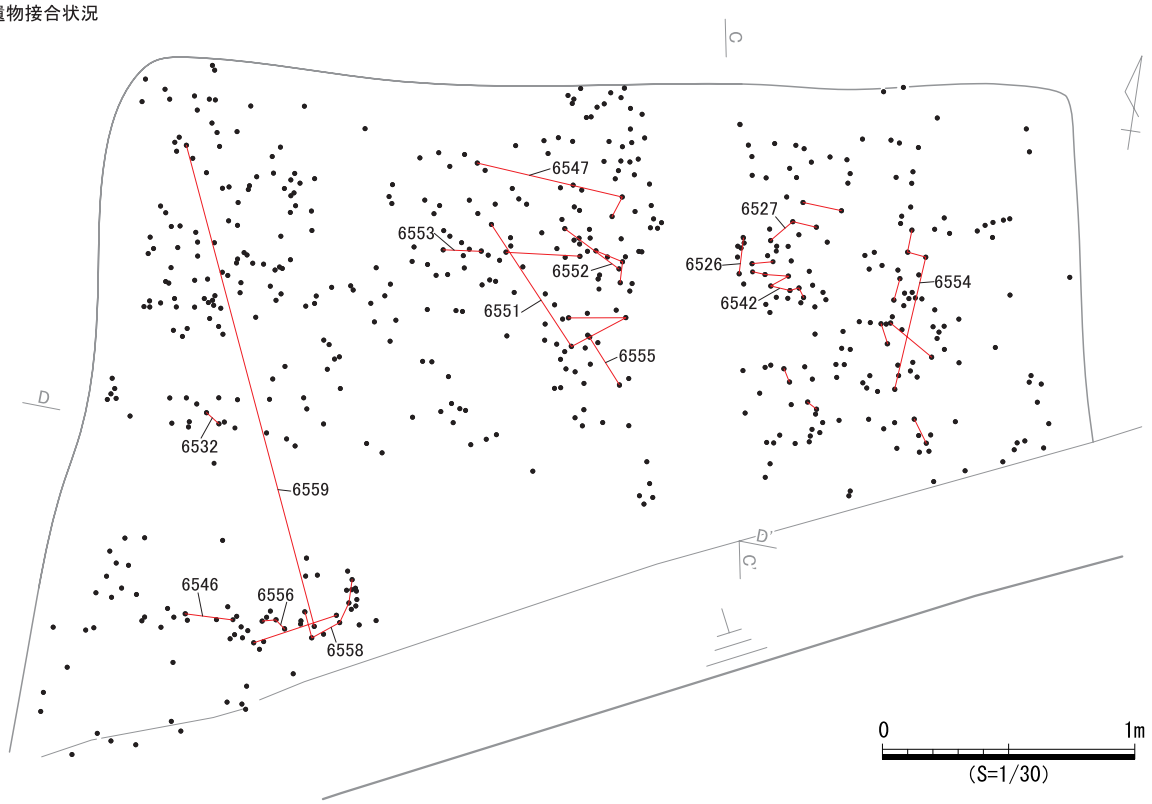


図 1932　SB555 遺構図（３）

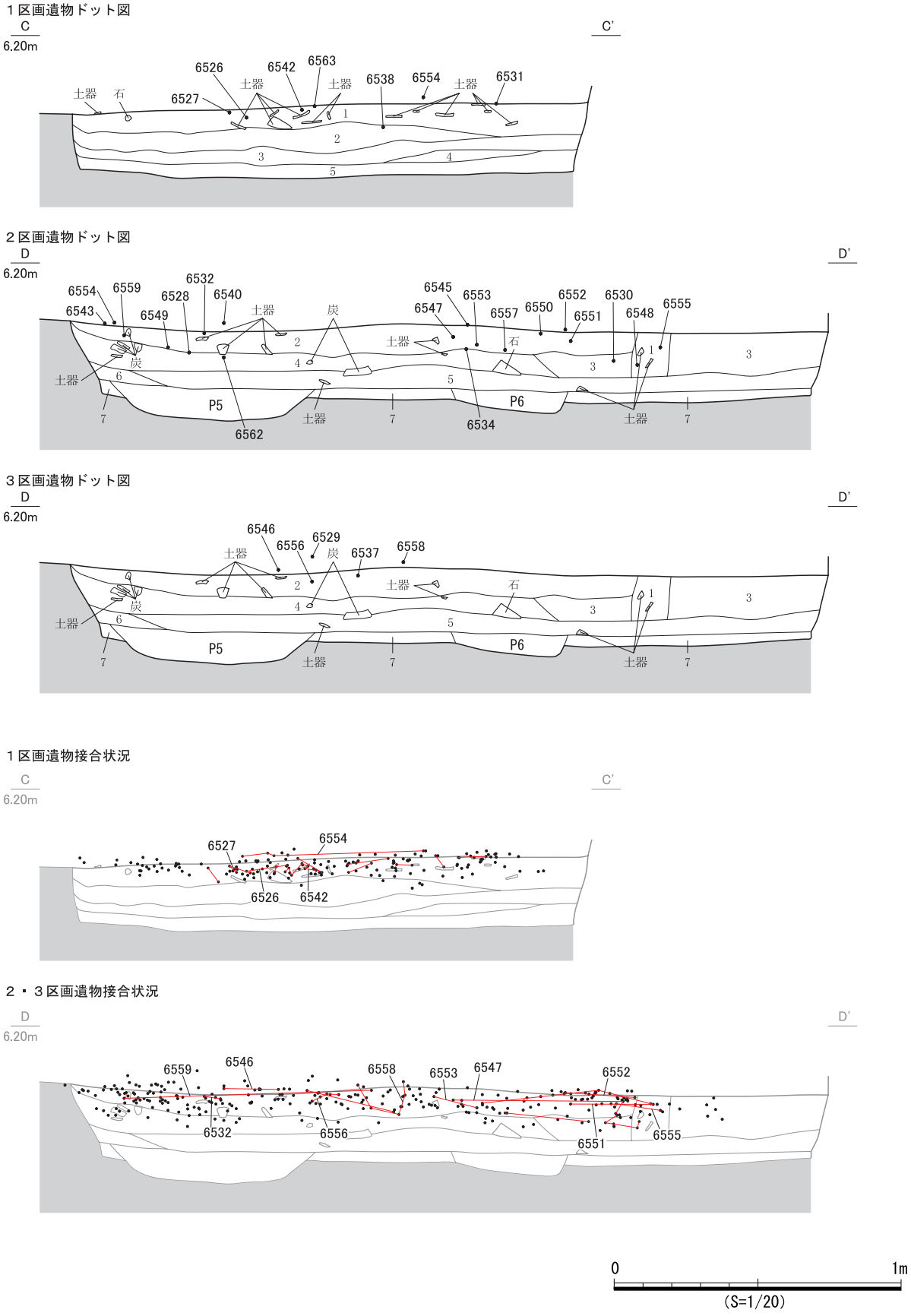


図 1933　SB555 遺構図（４）

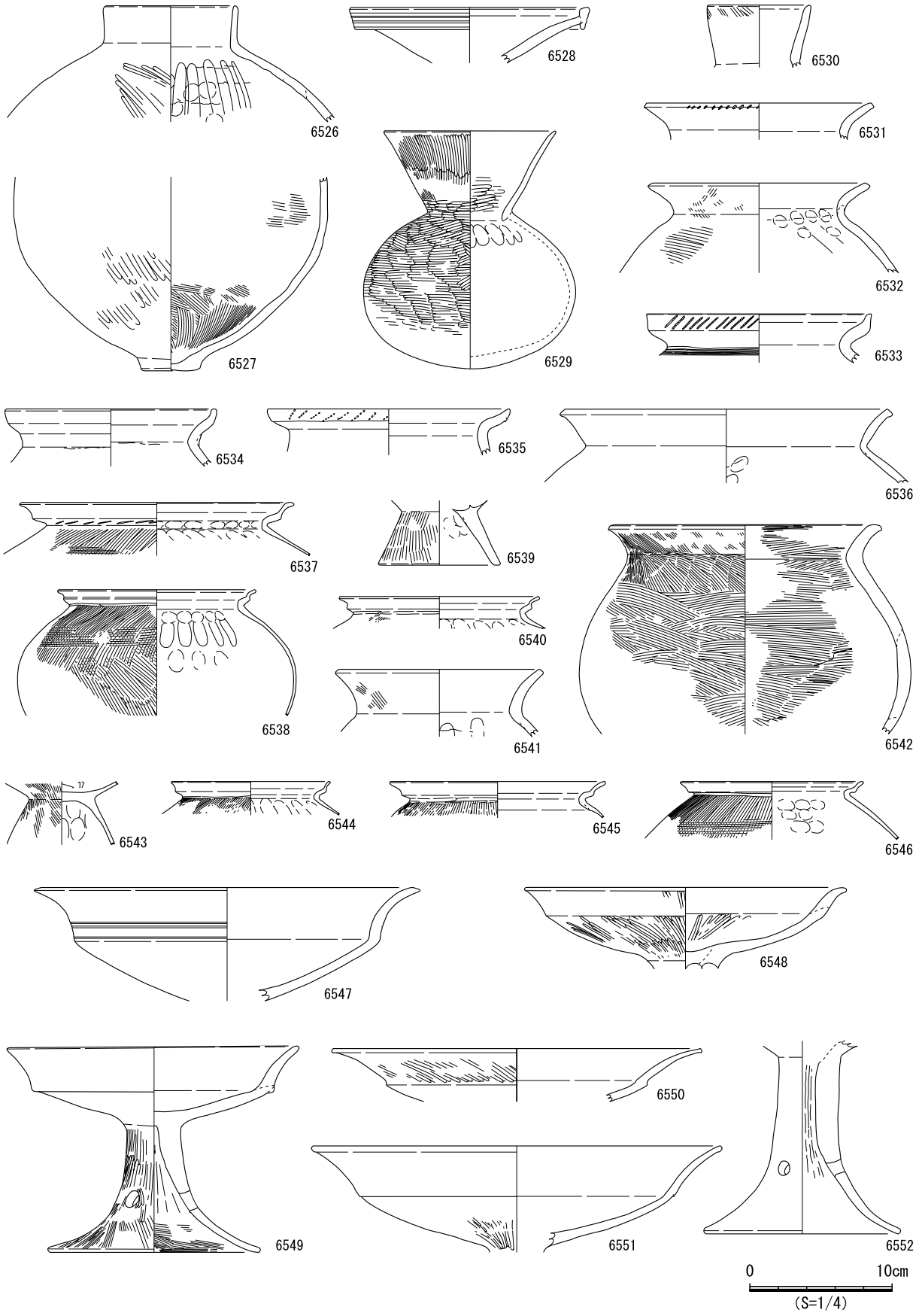


図 1934　SB555 遺物実測図（１）

よる刺突を加える。6536はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部がくの字に屈折してわずかに外反し、端部には平坦面を形成する。6537はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲して端部を肥厚する。下段外面には刺突状のハケが認められる。6538はⅦ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が外反して端部に平坦面をもつ。胴部に煤が付着する。6539はⅥ期～Ⅶ期甕。脚部がハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6540はⅦ期甕D2b類。端部が肥厚気味である。6541はⅦ期～Ⅷ期甕B4類。口縁部が屈折し、やや長く外反して開く。端部には平坦面を持つが、やや凹凸が認められる。6542はⅦ期～Ⅷ期甕B4類。頸部が直立してから口縁部が緩やかに外反し、端部は外傾する。曖昧ながら平坦面を形成する。口縁部、胴部ともに器壁が厚く、器面にはハケ調整を施す。6543はⅦ期～Ⅷ期甕Ｄ類脚部。6544はⅦ期～Ⅷ期甕D2b類。口縁部が屈曲し、上段が短く外反する。6545、6546はⅧ期甕Ｄ類。口縁部の屈曲が弱く、大きく開く。

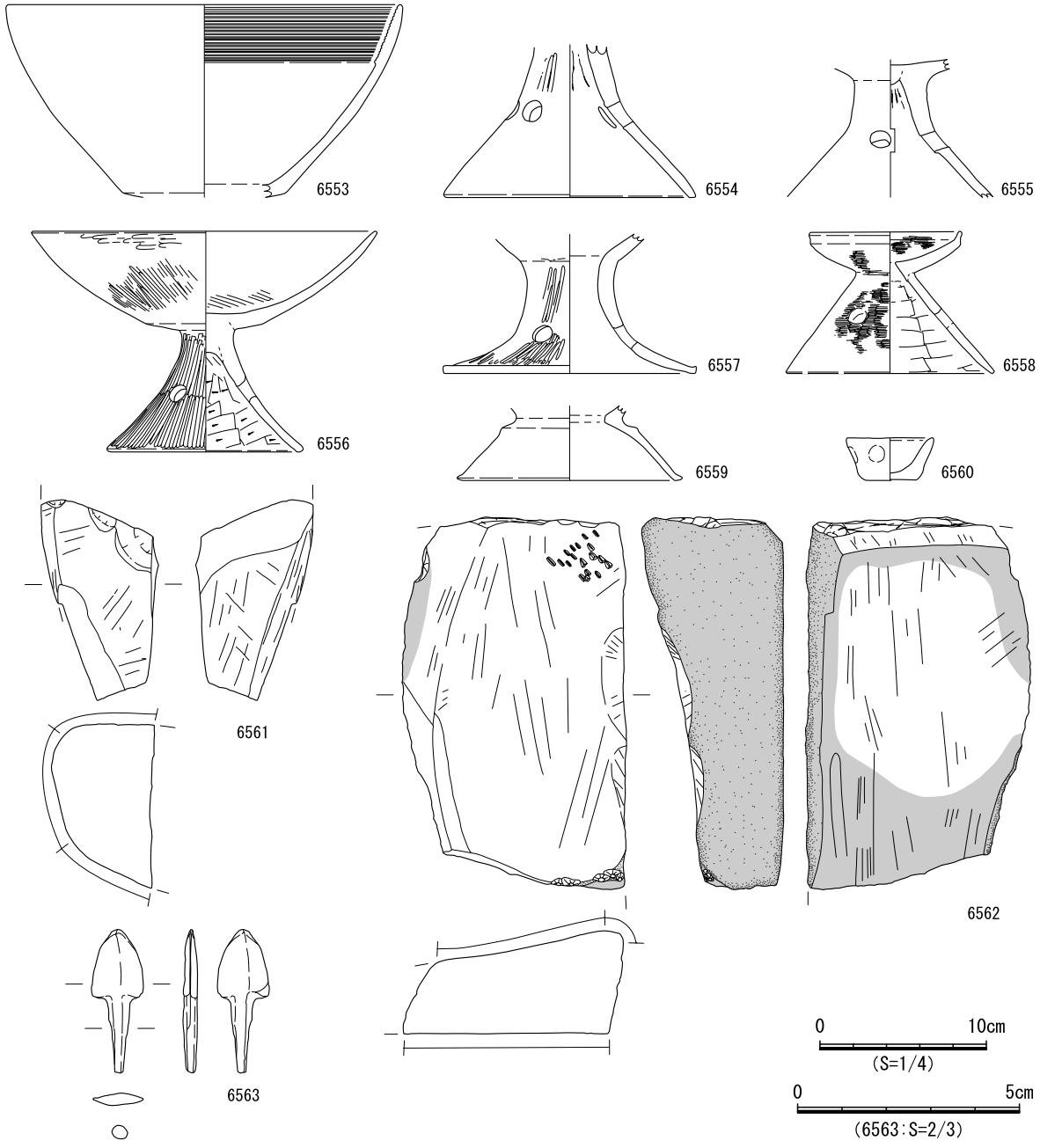


図 1935　SB555 遺物実測図（２）

6547はⅤ期高坏B2a類。坏底部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が大きく外反して顕著な平坦面を形成する。屈曲部外面の稜、内面の段ともに明瞭で、外面の稜付近には擬凹線が３条認められる。6548はⅤ期高坏B2b類。坏底部は浅い皿状を呈し、口縁部が短く外反して端部を丸くおさめる。内面に段は認められず、外面の稜も不明瞭である。外面はハケ後ミガキ、内面はハケ後ナデを施す。6549はⅤ期高坏B3a類。浅い皿状の坏底部から、口縁部が直立して強く外反する。屈曲部の稜は明瞭である。脚部は付根から柱状に直立し、裾部は大きく外反する。透孔は３方向に配置され、タテミガキを施す。6550、6551はⅤ期高坏B3b類。口縁部が坏底部から強く外反し、端部を丸くおさめる。外面の稜は明瞭に残る。6552はⅤ期高坏Ｂ類。脚部が付根から柱状に直立し、透孔を境に裾部が外反する。透孔は３方向に配置する。6553は、Ⅵ期～Ⅶ期高坏C3c類。口縁部が直線的に開き、端部付近は内湾する。口縁部内面の上から３分の１程を肥厚して多条沈線を施文する。6554はⅥ期高坏Ｃ類。脚部が円錐状に開き、裾部がわずかに内湾する。２孔１対の透孔を２方向に配置する。6555はⅥ期～Ⅶ期高坏C3類。脚部が付根から直立気味に立ち、裾部が大きく開く。透孔を３方向に配置する。6556はⅧ期高坏。坏部が碗状を呈し、口縁部は尖る。脚部が付根から円錐状に外反する。透孔を３方向に配置し、タテミガキが認められる。6557はⅤ期器台Ａ類。脚部が柱状に直立し、裾部が外反して端部に平坦面をもつ。透孔を３方向に配置する。6558はⅧ期器台C3類。受部が浅い皿状を呈し、端部が屈曲して直立する。脚部は付根から円錐状に直線的に開く。6559はⅧ期器台。受部直下の脚部にはナデによって強く凹面が形成され、下方には突帯状の凸部が認められる。脚部全体は円錐状に開く。山陰系と考えられる。6560はⅥ期～Ⅶ期手捏ね土器Ｃ類。口縁部が直線的に外傾して立ち上がる。6561、6562は砥石。砥面は6561が３面、6562が２面であり、6562の表面右上には断面三角形を呈する細かい窪みがあり、裏面から側面にかけて煤が付着している。6563は銅鏃。有茎鏃で、鏃身は膨をもつ三角形を呈する。基部には鋳型段階の腸抉がわずかに残る。

時期　Ⅴ期のSB556やSK06527を切ることや、埋土と小穴出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられ、最終的にⅧ期頃に埋没したと考えられる。

SB556（遺構：図1936・1937、遺物：図1938）

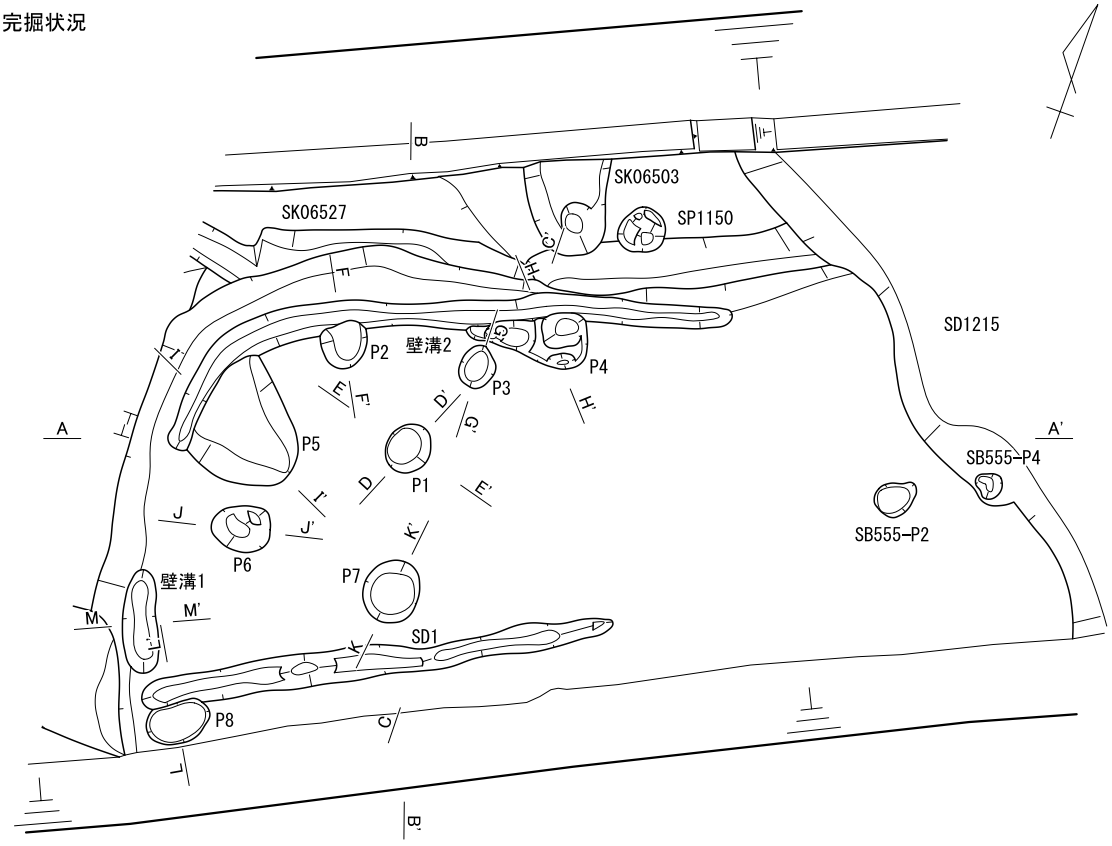
検出状況　東部中央南寄りの、SD0381西側に位置する。Ⅴ層上面で検出したが、鉄分の沈着が著しく遺構の重複が多いことから、平面形は不明瞭であった。なお、東側はSB555とSD1215に、西側はSK06527に切られており、検出時にはすでに大半の床面が見えていた。南側は調査区域外にある。

形状　全形は不明であるが、検出された遺構北西部の状況から、平面形は隅丸方形状となると考えられる。壁面の傾斜は緩やかで、確認できた掘形の深さ約0.1ｍである。

埋土　住居の住居埋土は削平されているため確認できなかった。土層図C-C’の４・５層は掘形埋土である。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）がある。貼床はブロック土の混入が顕著であったが、硬化面は確認できなかった。床面上では小穴８基と溝３条を検出した。小穴のうちP1は柱根が残存しており、その上部は東南東側（住居中央側）に傾いていた。平面的な位置関係から本遺構の柱穴と考えられるが、東側に対応する穴は確認できなかった。また、P6とP7は掘形が深く、壁面の傾斜は垂直に近い。

床面完掘状況



北東部炭化材出土状況

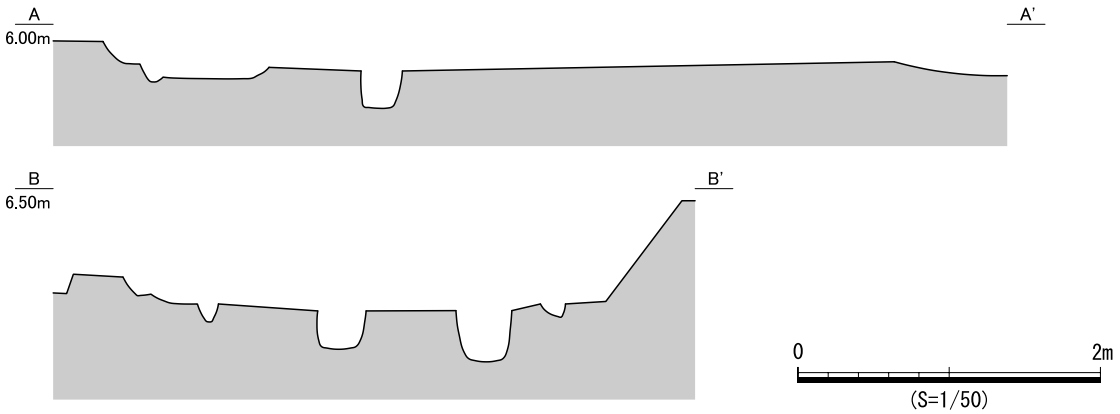


図 1936　SB556 遺構図（１）

なお、壁溝は２条確認し、いずれも住居の掘形上端線からやや内側で検出した。SD1の性格は不明である。なお、床面の北東側では炭化物がまとまって出土したが、その南側をSB555に切られているため、どの程度の広がりを有していたのか定かではない。炉跡は確認できなかった。

遺物出土状況　掘形埋土中から土器354点、小穴から土器39点、壁溝から土器８点、SD1から土器６点が出土した。出土遺物の時期はⅤ期～Ⅶ期であり、Ⅴ期の遺物が多い。なお、P1－d層からⅦ期の高坏Ｃ類(6568)が出土したが、P1出土の柱根の年代測定を実施したところ、41calBC-60calAD(95.4％)でⅣ期～Ⅴ期に相当する年代が測定された。

出土遺物　6564はⅤ期壺A1a類。口縁部が大きく外反し、端部を上下に拡張する。端部には擬凹線を施す。6565はⅤ期甕A4類。頸部内面はくの字に屈折するが、頸部外面には粘土を充填して直立部を形成し、刺突文を施文する。口縁部が外傾し、端部が屈曲して短く直立する。6566はⅤ期高坏B2b類。坏底部から口縁部が垂直に立ち上がり、端部が強く外反する。端部には平坦面を形成し、口縁部

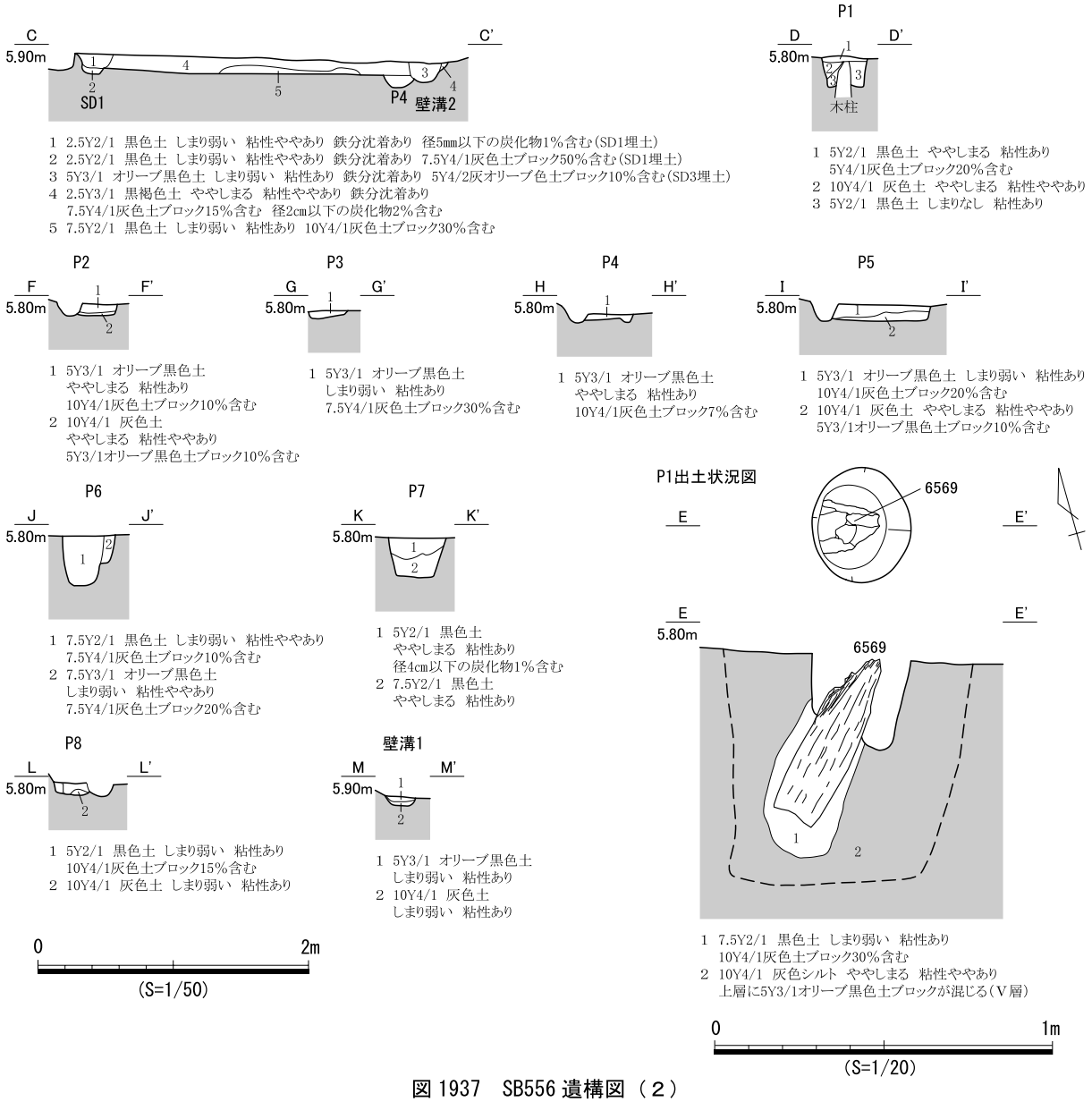


図1937　SB556遺構図（２）

外面には波状文が認められる。屈曲部外面の稜が強く残り、稜の直上、波状文の下方に沈線が２条認められる。6567はⅤ期高坏B2c類。坏底部から口縁部が直立して立ち上がり、外反する。端部には顕著な平坦面を形成する。6568はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部から口縁部が、明瞭な段、稜を持って外傾する。6569は柱根。削り出しの柱材で、底面は平坦であり、多方向からの粗い加工痕が残る。側面に加工痕は認められない。

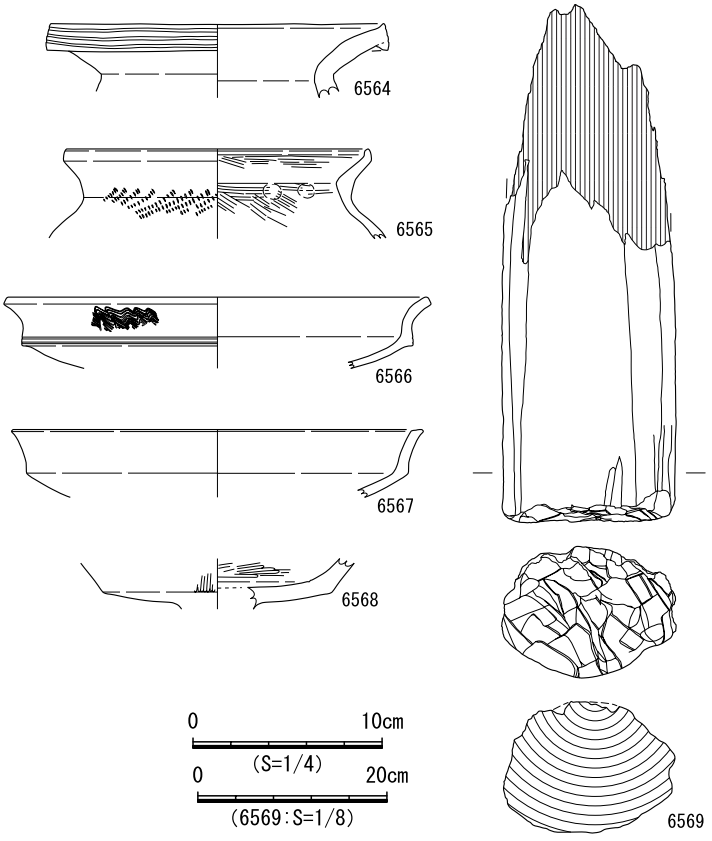


図 1938　SB556 遺物実測図

時期　本遺構の埋土中にⅤ期の遺物が多いこと、Ⅴ期の遺物がまとまって出土したSK06527に切られること、P1出土の柱根の年代がⅣ期～Ⅴ期であることなどから、Ⅴ期と考える。しかし、P1からⅦ期の破片が出土しており、検討を要する。

SB557（遺構：図 1939、遺物：図 1940）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。周辺はⅣ層がほとんど遺存せず、Ⅰb層除去後にⅤ層表出面で検出した。平面形は、東側は明瞭であったが、西側は不明瞭であった。

形状　北側は調査区域外となり全形は不明であるが、東辺と西辺がほぼ平行することから、東西長約4.4ｍの方形を呈すると考えられる。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は比較的急である。

埋土　10層に分層した。１～５層は住居埋土、６～10層が掘形埋土である。住居埋土中にはブロック土が混入することから、人為堆積と考えられる。

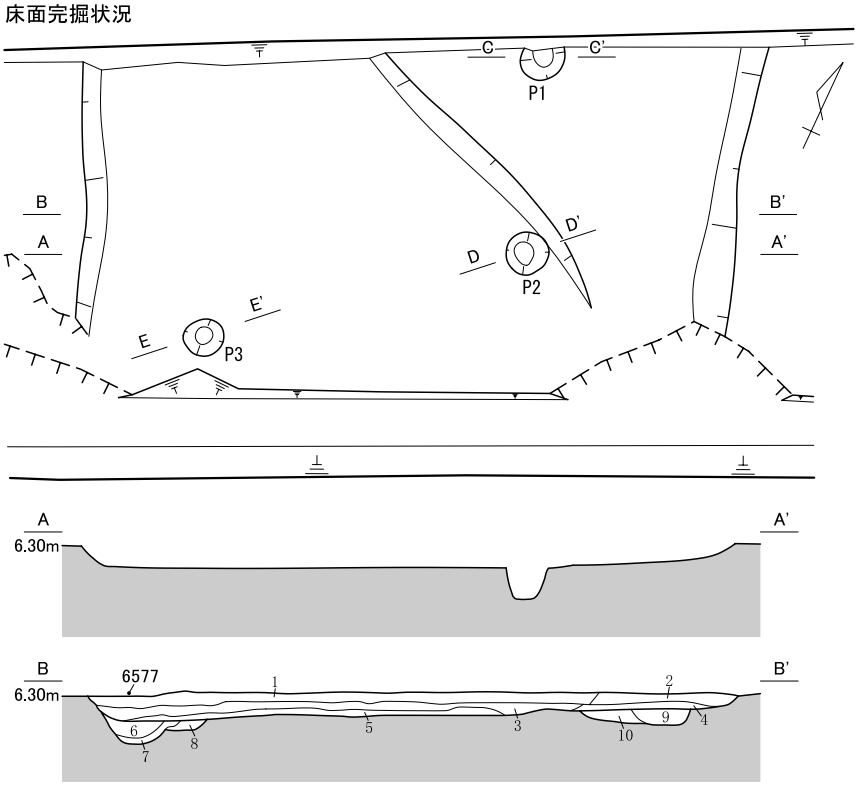
床面　中央付近から南東隅にかけて浅い段を有し、貼床（整地土）がある。床面上では小穴３基を検出した。このうち、P2とP3は掘形が深く、P2は壁面の傾斜が急である。平面的な位置関係から、P2は柱穴である可能性が高い。なお、炉跡と壁溝は確認できなかった。

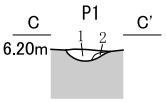
掘形　住居周縁に幅約0.8ｍ～1.0ｍ、深さ約0.1ｍ～0.2ｍの溝状遺構が全周しており、ブロック土の混入が目立つことから掘形埋土と考えた。溝状遺構の底面は南側がほぼ平坦であるが、東西側は幅約0.5ｍの細長い溝状の落ち込みが南北方向にのびている。

遺物出土状況　住居埋土中から土器1,383点、石器類２点、小穴から土器20点、掘形埋土から土器247点、石器１点が出土した。このうち、住居埋土からⅥ期～Ⅸ期の土器が、掘形からⅥ期～Ⅶ期の土器が出土している。

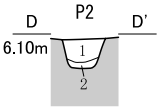
出土遺物　6570はⅥ期～Ⅶ期壺D3b類。口縁部が湾曲しながら大きく外反し、端部付近で屈曲する。

床面完掘状況

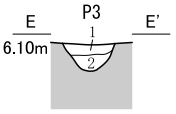




1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
粘性ややあり　鉄分沈着あり
5Y4/1灰色土ブロック10%含む
2　5Y4/1　灰色土　ややしまる
粘性ややあり　鉄分沈着あり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック30%含む



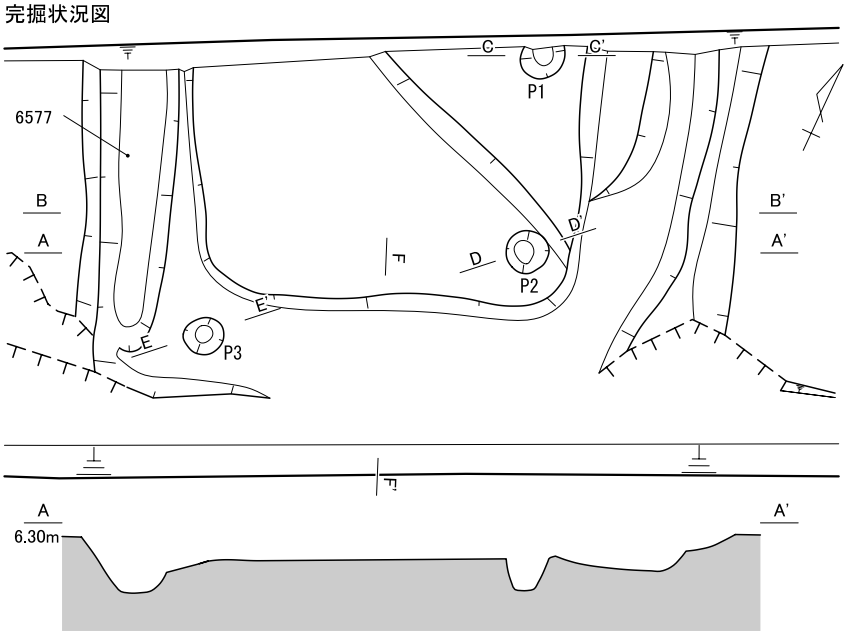
1　5Y3/1　オリーブ黒色土
ややしまる　粘性ややあり
鉄分沈着あり
7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
2　7.5Y4/2　灰オリーブ色土
ややしまる　粘性やや強い
5Y3/1オリーブ黒色土
ブロック15%含む

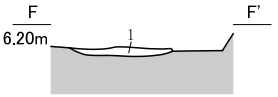


1　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1灰色土ブロック7%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土
しまり弱い　粘性ややあり
5Y4/1灰色土ブロック10%含む

1　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　径1cm以下の炭化物1%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　5Y4/1灰色土ブロック10%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色（やや暗い）土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり
4　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　5Y4/1灰色土ブロック20%含む
5　2.5Y3/1　黒褐色土　しまり弱い　粘性やや強い　鉄分沈着あり　7.5Y4/1灰色土ブロック40%含む
6　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　5Y4/1灰色土ブロック15%含む　1辺2cm程の土器片1点あり　炭化物がわずかに混じる
7　5Y3/1　オリーブ黒色土　しまり弱い　粘性ややあり　鉄分沈着あり
8　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　7.5Y4/1灰色土ブロック30%含む
9　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　鉄分沈着あり　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
10　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　2.5Y3/1黒褐色土ブロック40%含む

完掘状況図





1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
粘性ややあり　鉄分沈着あり
7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
炭化物がわずかに混じる

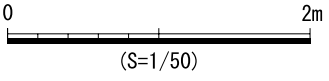


図 1939　SB557 遺構図

端部は丸くおさめ、文様は認められない。6571はⅨ期壺。二重口縁壺で、大きく外反する口縁部外面には段が認められる。頸部には突帯を貼付し、刺突を加える。6572はⅤ期～Ⅵ期壺B1a類。口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面をもつ。端部を下方にわずかに拡張する。6573はⅥ期甕D1b類。口縁部が屈曲し、上段は短く外反する。外面に刺突を加える。6574はⅥ期～Ⅶ期高坏C3c類。内湾する口縁部内面に多条沈線が認められる。6575はⅦ期高坏G類。坏底部から脚部がわずかに皿状に開き、透孔部を境に大きく外反する。透孔を３方向に配置する。6576はⅨ期高坏。器壁が薄く、坏底部は浅い円錐状を呈する。6577は砥石。断面方形を呈する長楕円礫を素材とし、自然面を砥面として利用している。

時期　掘形出土の遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期に構築され、Ⅸ期頃に埋没したと考えられる。

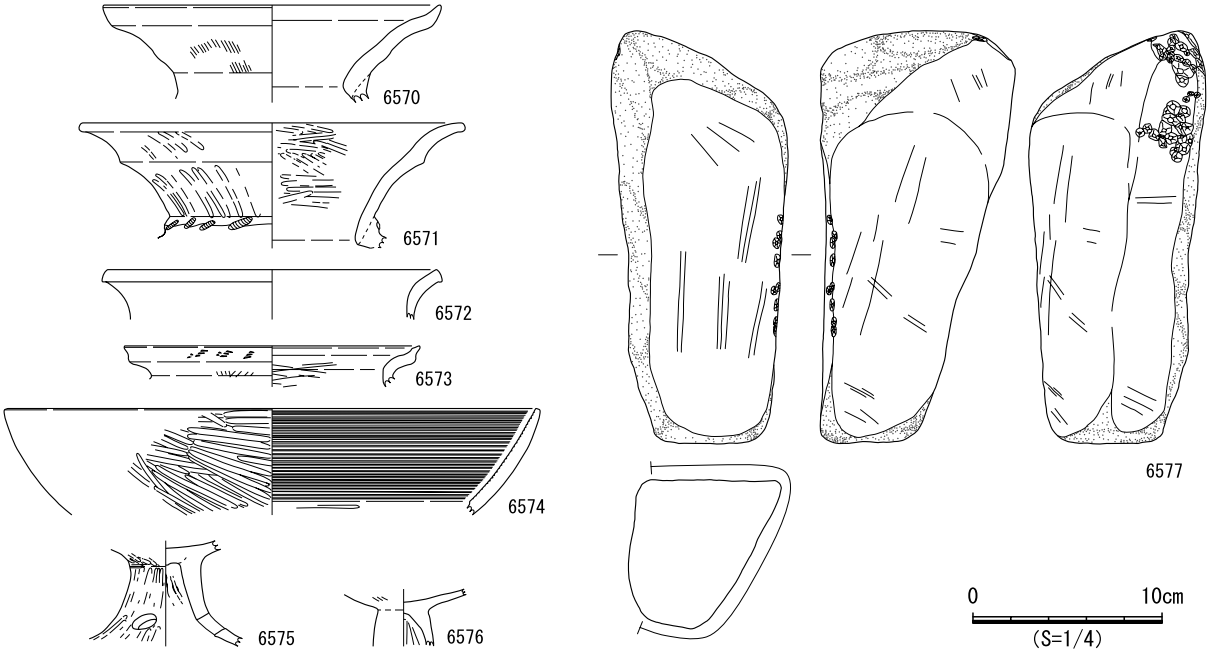


図 1940　SB557 遺物実測図

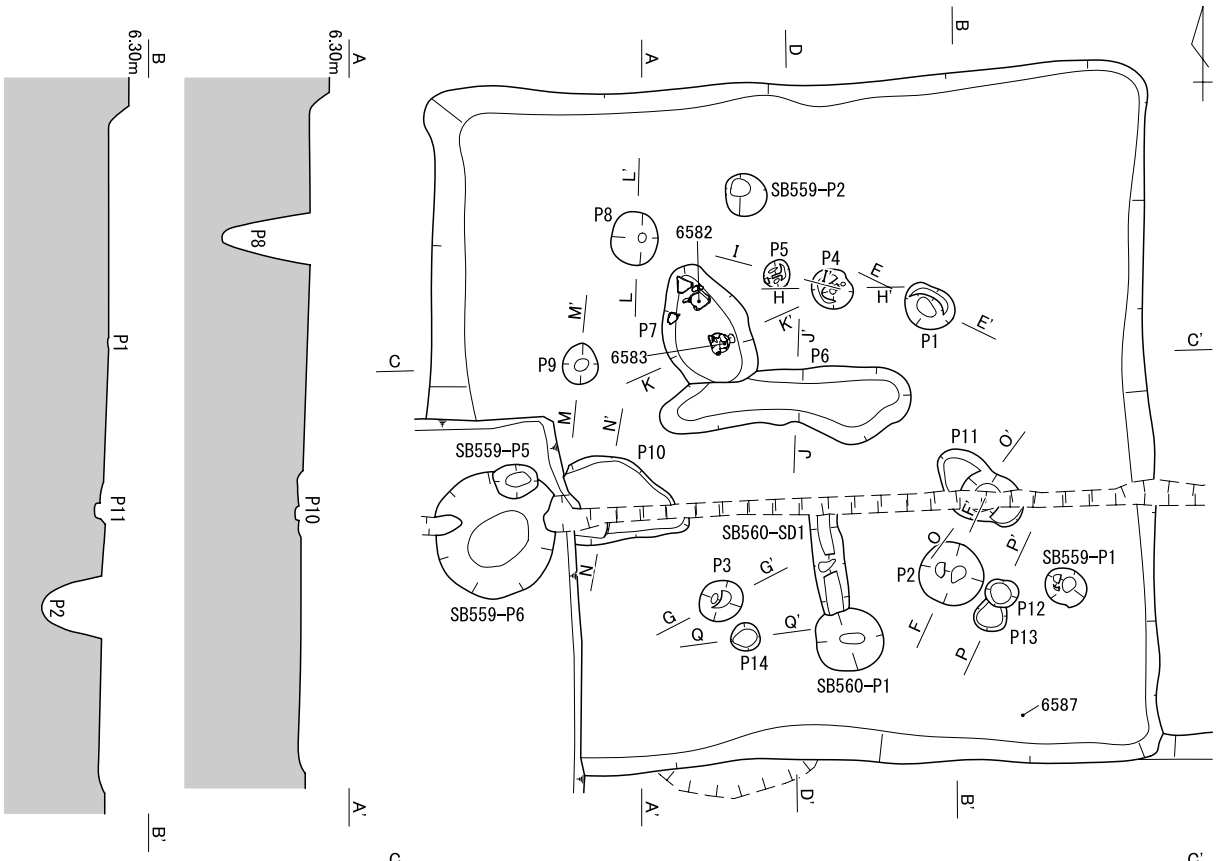
SB558（遺構：図 1941・1942、遺物：図 1943）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置し、SB559を切る。周辺はⅣ層がほとんど遺存せず、Ib層除去後にⅤ層表出面で検出した。遺構輪郭は不明瞭であり、排水溝や撹乱の壁面の土層を確認して判断した。なお、南西側は平成20年度調査、それ以外は平成22年度調査であり、平成20年度調査では平面形を確認できなかった。

形状　長軸長約4.7ｍ、短軸長約4.5ｍで、隅丸方形を呈する。各辺はやや蛇行するものの、およそ直線的にのび、北西隅部がやや外側に突出する。深さは約0.1ｍであり、壁面の傾斜は北辺が急で、他はやや緩やかである。

埋土　６層に分層した。２層が厚く堆積し、ブロック土の混入が多いことから、人為堆積と考えられる。

床面　ほぼ平坦であり、貼床（整地土）は確認できなかった。床面上で小穴14基を検出した。そのうち、P1～P3、P8では土層断面で柱痕跡を確認し、P9は掘形が深く壁面の傾斜もほぼ垂直である。平面的な位置関係からP1～P3は柱穴と考えられ、やや北西側にずれるがP8とP9のいずれかも柱穴の可能性がある。また、中央には住居の南北辺に平行する長軸を有するP6があり、P6を切るP7の底面



P1

1　2.5Y2/1　黒色土
ややしまる　粘性ややあり
1辺1cmの土器片1点あり
2　5Y2/1　黒色土
ややしまる　粘性ややあり
径5mm以下の炭化物1%含む（柱痕跡）
3　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
4　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む
5　7.5Y4/1　灰色土
ややしまる　粘性ややあり

P2

1　2.5Y3/1　黒褐色（やや暗い）土
ややしまる　粘性ややあり
鉄分沈着少しあり
5Y4/1灰色土ブロック5%含む
径1cm以下の炭化物1%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
鉄分沈着あり
7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む
3　7.5Y4/1　灰色土
ややしまる　粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック10%含む

1　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む　1辺3cm以下の土器片1%含む　径2cm以下の炭化物2%含む
2　2.5Y2/1　黒色土　ややしまり強い　粘性ややあり　鉄分沈着あり
7.5Y4/1灰色土ブロック5%含む　1辺3cm以下の土器片1%含む　径1cm以下の炭化物5%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまり強い　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む　径8mm以下の炭化物1%含む
4　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
5　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着あり　7.5Y4/1灰色土ブロック40%含む
6　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり　2.5Y3/1黒褐色土ブロック10%含む

P3

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
10Y4/1灰色土ブロック30%含む（柱痕跡）
2　5Y2/1　黒色土　ややしまる　粘性ややあり
10Y4/1灰色土ブロック15%含む
3　10Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック5%含む

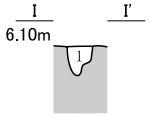
P4

1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
粘性ややあり
7.5Y4/1灰色土ブロック7%含む
2　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる
粘性ややあり
2.5Y3/1黒褐色土ブロック10%含む

0　2m
(S=1/50)

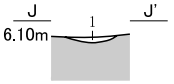
図 1941　SB558 遺構図（１）

P5



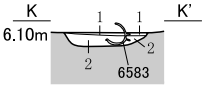
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　やや しまる　粘性ややあり

P6



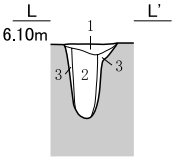
1　2.5Y2/1　黒色土　ややしまる
　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　7.5Y4/1灰色土ブロック15%含む

P7



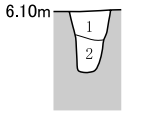
1　2.5Y2/1　黒色土
　ややしまり強い　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック7%含む

P8



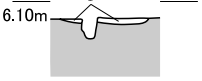
1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック5%含む
　1辺3㎝の土器片1点あり
　径4㎝の亜角礫1点あり
　径5㎝以下の炭化物1%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
　(柱痕跡)
3　7.5Y4/1　灰色土
　ややしまる　粘性ややあり
　2.5Y3/1黒褐色土ブロック30%含む

P9



1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　10Y4/1灰色土ブロック7%含む(柱痕跡)
2　7.5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性やや強い（柱痕跡）

P10

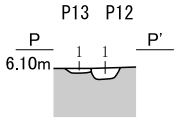


1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
　粘性ややあり　鉄分沈着あり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む

P11

1　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
　1辺3㎝の土器片1点あり

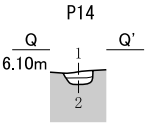
P13　P12



P13
1　7.5Y4/1　灰色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y3/1オリーブ黒色土ブロック10%含む

P12
1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる
　粘性ややあり　鉄分沈着少しあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック50%含む

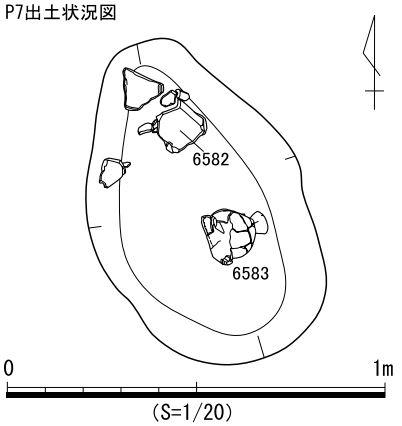
P14



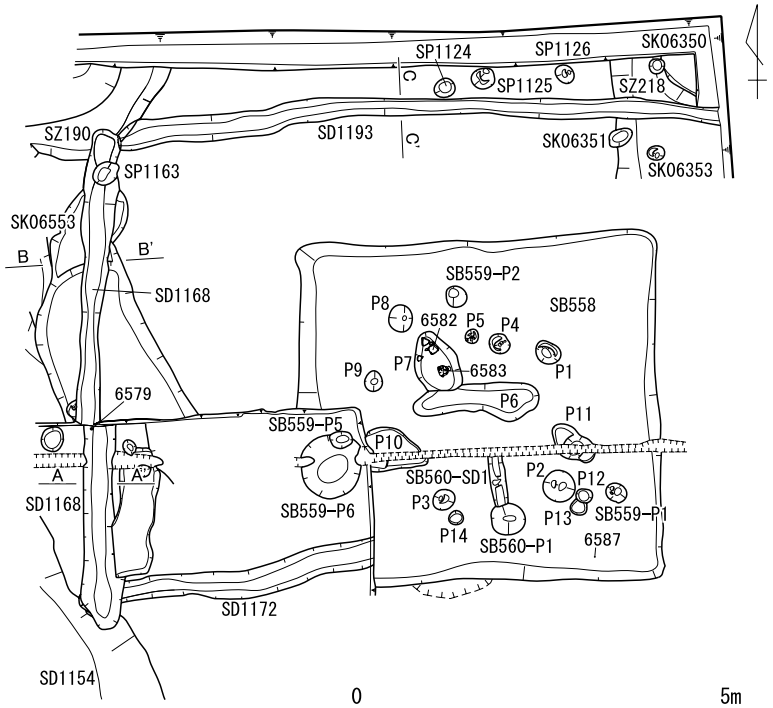
1　2.5Y2/1　黒色土
　ややしまる　粘性ややあり
2　2.5Y3/1　黒褐色土
　ややしまる　粘性あり

(S=1/50)

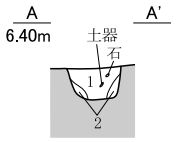
P7出土状況図



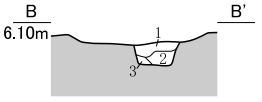
(S=1/20)



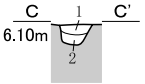
(S=1/100)



1　2.5Y2/1　黒色土　しまる　粘性あり
　土器片含む　炭化物わずかに含む
　φ2㎝の亜円礫含む
2　7.5Y3/1　オリーブ黒色土 ややしまる
　粘性ややあり　灰色土わずかに含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　5Y4/1灰色土ブロック7%含む
2　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む
3　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック50%含む



1　2.5Y3/1　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　7.5Y4/1灰色土ブロック7%含む
2　5Y3/1　オリーブ黒色土　ややしまる
　粘性ややあり　7.5Y4/1灰色土ブロック20%含む

(S=1/50)

図 1942　SB558 遺構図（２）

直上では、Ⅵ期～Ⅶ期の甕Ｅ類（6583）が口縁部を南西方向に向けて横位で出土した。

関連遺構　SB558の西側と北側には、SB558の主軸と同じ方位の細い溝（SD1168、SD1193）が存在する（図1942下）。SD1168とSB558西辺との距離は約2.6ｍ、SD1193とSB558北辺との距離は約1.8ｍであり、出土遺物の時期から同時期存在の可能性が考えられるため、本遺構の関連遺構として記載する。いずれも断面逆台形を呈する深さ約0.1ｍ～0.2ｍの溝で、SD1168の北端とSD1193の西端は底面が連続しないものの、上端は接している。埋土中にはブロック土の混入が認められるため人為堆積と考えられ、SD1168南側では残りの良い土器が横位でまとまって出土した。

遺物出土状況　埋土中から土器3,026点、石器類２点、小穴から土器157点が出土した。出土土器はⅥ期～Ⅶ期のものが大半で、他にⅣ期～Ⅴ期のものが混入している。P2からⅦ期高坏、P7からⅥ期～Ⅶ期の甕や高坏などが出土した。

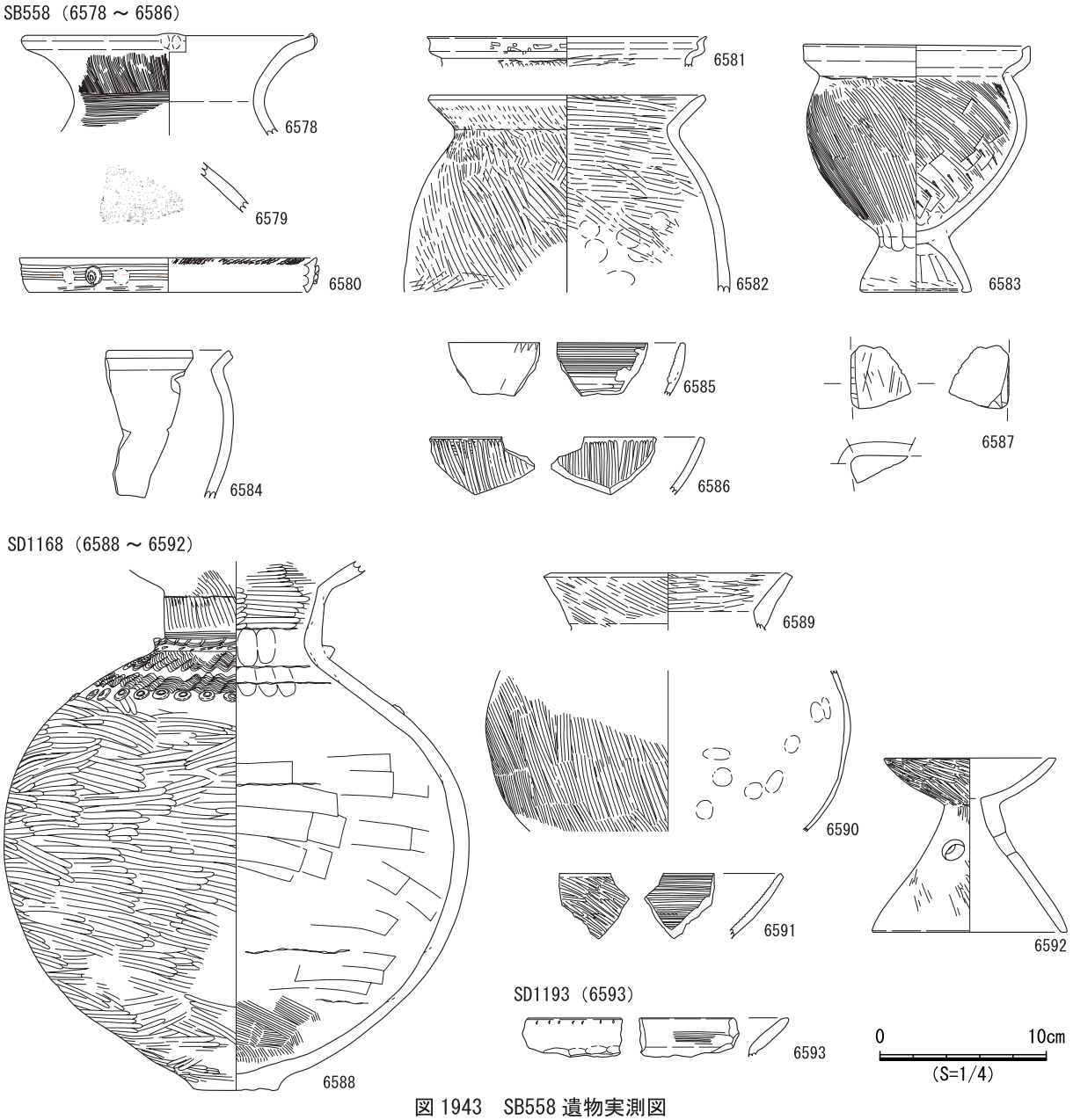


図1943　SB558遺物実測図

出土遺物　6578、6579はともにⅣ期壺Ｈ類。6578は口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。口縁部形状を確認することができる稀少な資料である。端部上端にはわずかなふくらみを形成するが、内面に加飾は認められない。口縁部外面は縦位のハケ調整が認められ、頸部には横位の直線文を施す。6579は、胴部に直線文が認められる。6580はＶ期～Ⅵ期壺A1b類。口縁端部を上下に拡張し、内面には貝による刺突文を施文する。端部には擬凹線を施文し、その上に円形浮文を貼付する。浮文上には円形刺突文を施し、３個１組で配置される。6581はⅥ期甕D1b類。口縁部が屈曲し、下段がやや外方に引き出される。外面には顕著な刺突が認められる。6582はⅥ期～Ⅶ期甕B2類。口縁部の屈曲は弱く、外反気味に開く。端部を丸くおさめ、胴部には粗いハケ目が認められる。6583はⅥ期～Ⅶ期甕E5類。口縁部が屈曲して受口状を呈する。ナデにより屈曲部内面に凹面が形成され、端部には内傾する平坦面を形成する。胴部最大径は頸部から３分の１付近に位置し、やや肩が張る。脚部は短くハの字に開き、接地面を平坦に仕上げる。6584はⅣ期鉢Ｂ類。口縁部がくの字に外反して端部には明瞭な平坦面を形成する。6585はⅥ期高坏C3b類。端部直下を肥厚して、その部分に多条沈線を施文する。6586はⅦ期高坏C4a類。口縁部が内湾し、端部にはわずかに平坦面が認められる。6587は砥石。大半は割れているが、線状痕が残る砥面が確認できる。

＜SD1168出土遺物＞　6588はⅦ期～Ⅷ期壺Ｅ類。口縁部を欠損するが、二重口縁壺と考えられる。頸部がほぼ直立してハケ目が残り、口縁部が屈曲して外方に開く。頸部と胴部の境には貼付け突帯を形成し、ナデによって尖らせた後に刺突を加える。突帯直下には、振り幅の小さい波状文が、わずかな無文帯を挟んで２帯施文される。さらにその下方には円形浮文を貼付し、浮文上から円形刺突を加える。それ以下は無文帯となり、全面が丁寧なミガキによって器面調整が施される。胴部径の大きさに比して、平底の底部は矮小である。胴部最大径は中央よりやや上方に位置するものの、肩の張り出しは弱く、球形に近い。頸部以下がほぼ完存する稀少な資料である。6589はⅥ期～Ⅶ期甕B3類。口縁部が屈曲して直線的に外傾し、端部にはわずかに平坦面を形成する。内外面ともに粗いハケ目が残り、外面には調整後の粘土塊がそのまま残り、器面整形が雑である。6590はⅥ期～Ⅶ期甕Ｄ類。器壁の薄い胴部に煤や炭化物が付着する。6591はⅦ期高坏C4c類。口縁部内面に多条沈線を施文する。6592はⅦ期器台C2類。小型の器台で、受部は皿状に内湾し、端部にはわずかに平坦面をもつ。透孔を３方向に配置し、脚部は円錐状に開くが、裾部は内湾気味となる。

＜SD1193出土遺物＞　6593はⅥ期～Ⅶ期甕B4類。口縁部が直線的に外傾して端部を丸くおさめ、下端に刺突を加える。

時期　Ｖ期～Ⅶ期のSB559を切るが、小穴出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

SB559（遺構：図1944・1945、遺物：図1946）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。遺構の大半をSB558床面で検出し、SB560を切る。検出時にすでに壁溝が見えており、平面形は明瞭であった。

形状　住居の住居埋土は削平されて不明だが、壁溝間の距離は長軸長約5.0ｍ、短軸長約4.8ｍの方形を呈する。

床面　ほぼ平坦であり、住居周縁にブロック土を多く含む貼床（整地土）がある。床面上では小穴８基を検出した。このうち、P1～P3では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1～P3

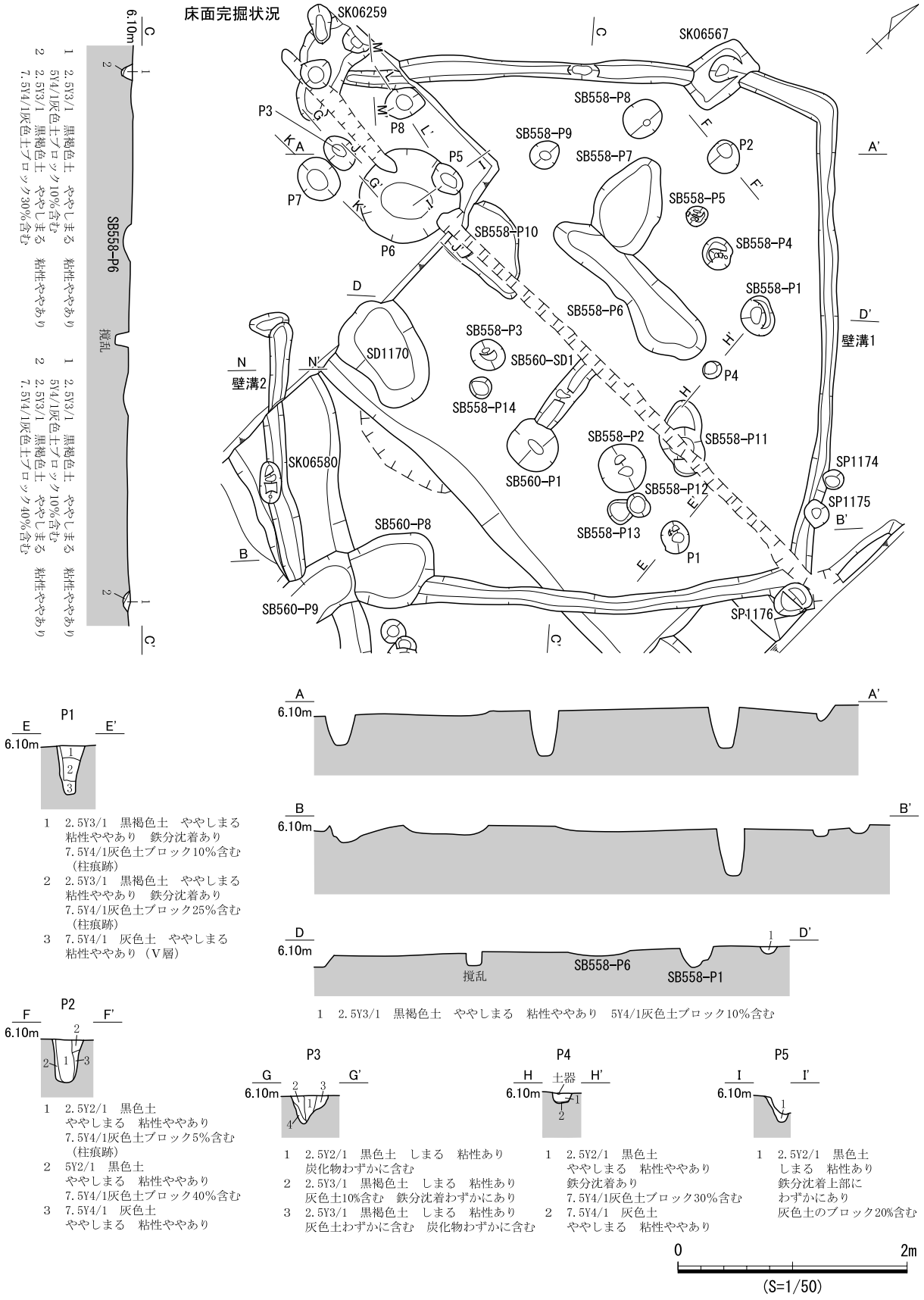


図 1944　SB559 遺構図（１）

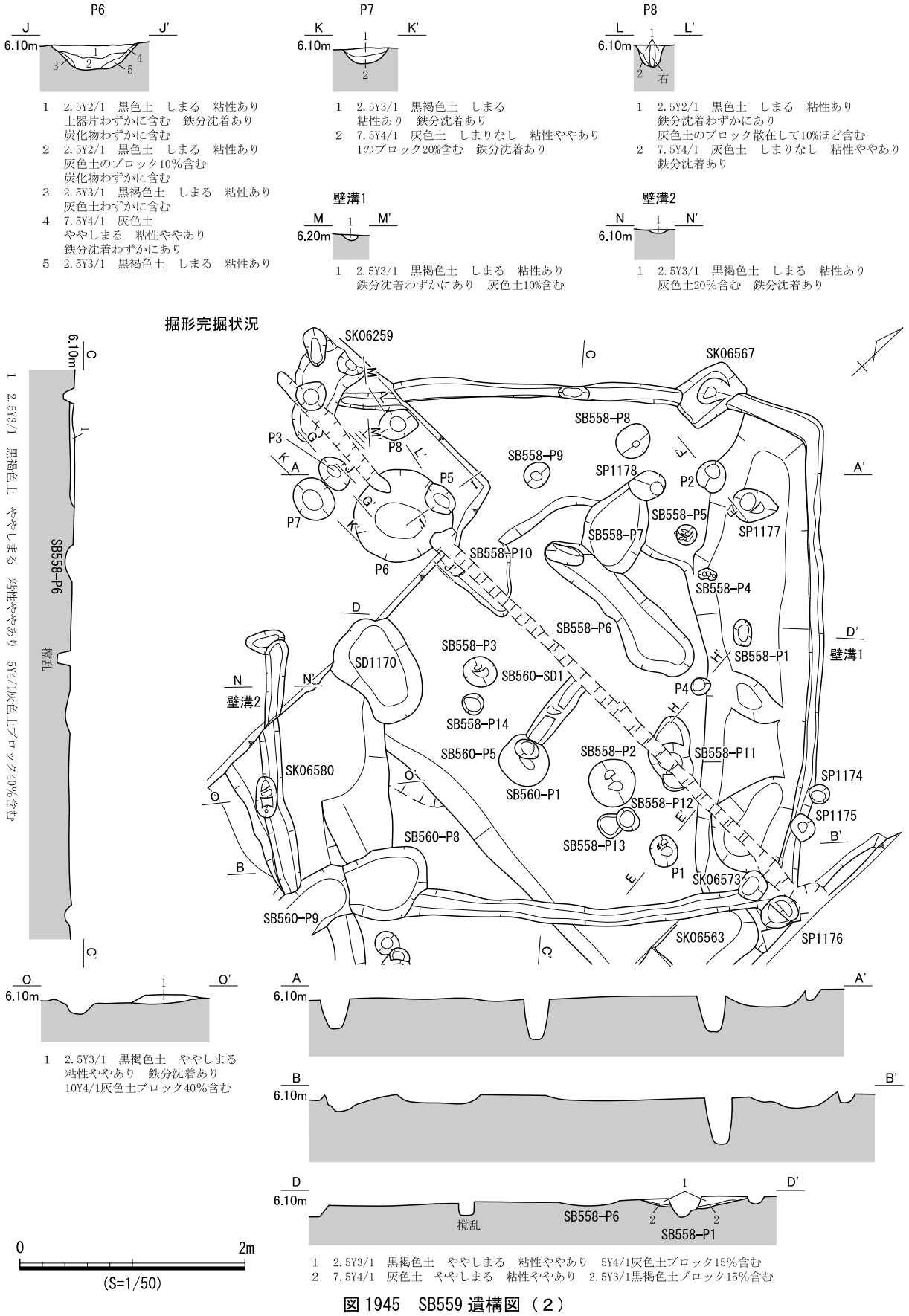


図 1945　SB559 遺構図（２）

が柱穴と考えられる。また、P8では中央に長さ24.2㎝の砥石（6599）が立った状態で出土した。一方、住居周縁に整地土が巡る竪穴住居跡の場合、整地土の隅部付近に柱穴が配置されることが多く、掘形はやや浅いもののSB559-P5、SB558-P5、SB558-P11も柱穴となる可能性がある。壁溝は幅約0.2ｍで、深さは0.1ｍ未満である。南西辺の一部は検出できていないが、それ以外は全周している。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形　住居周縁に幅約1.0ｍ、深さ約0.1ｍ～0.2ｍの溝状遺構が南東辺を除いて全周しており、ブロック土の混入が目立つことから掘形埋土と考えた。溝状遺構は北東辺沿いのものが他より深く、底面に凹凸が認められる。

遺物出土状況　小穴から土器51点、周溝から土器23点、掘形埋土から土器125点が出土した。出土土器はⅣ期～Ⅶ期のものであり、掘形埋土からはⅥ期～Ⅶ期の土器が、P2からⅥ期～Ⅶ期の壺（6596）が、P6からＶ期の壺（6595）が出土した。

出土遺物　6594はⅣ期壺Ｈ類。胴部に横位の直線文が複数帯認められ、間に無文帯をはさむ。その上部には、同じ工具で弧状に施文する文様も認められる。6595はＶ期壺B1類。口縁部が大きく外反し、端部に平坦面をもつ。口縁部、胴部ともに無文で、ハケの後にナデによる調整が施される。6596はⅥ期～Ⅶ期壺A1b類。口縁部を上下に拡張し、内面に羽状文を施文する。6597はⅥ期～Ⅶ期甕。器壁の厚い脚部が内湾し、接地面を平坦に仕上げる。6598はⅦ期高坏Ｃ類。坏底部から口縁部が外傾して開く。外面の稜が明瞭に認められる。6599は砥石。大型の亜円礫を素材とし、その自然面の一面を砥面として利用している。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB558に切られ、Ⅵ期～Ⅶ期のSB560を切ることと、掘形や小穴出土遺物の時期から、Ⅵ期～Ⅶ期と考えられる。

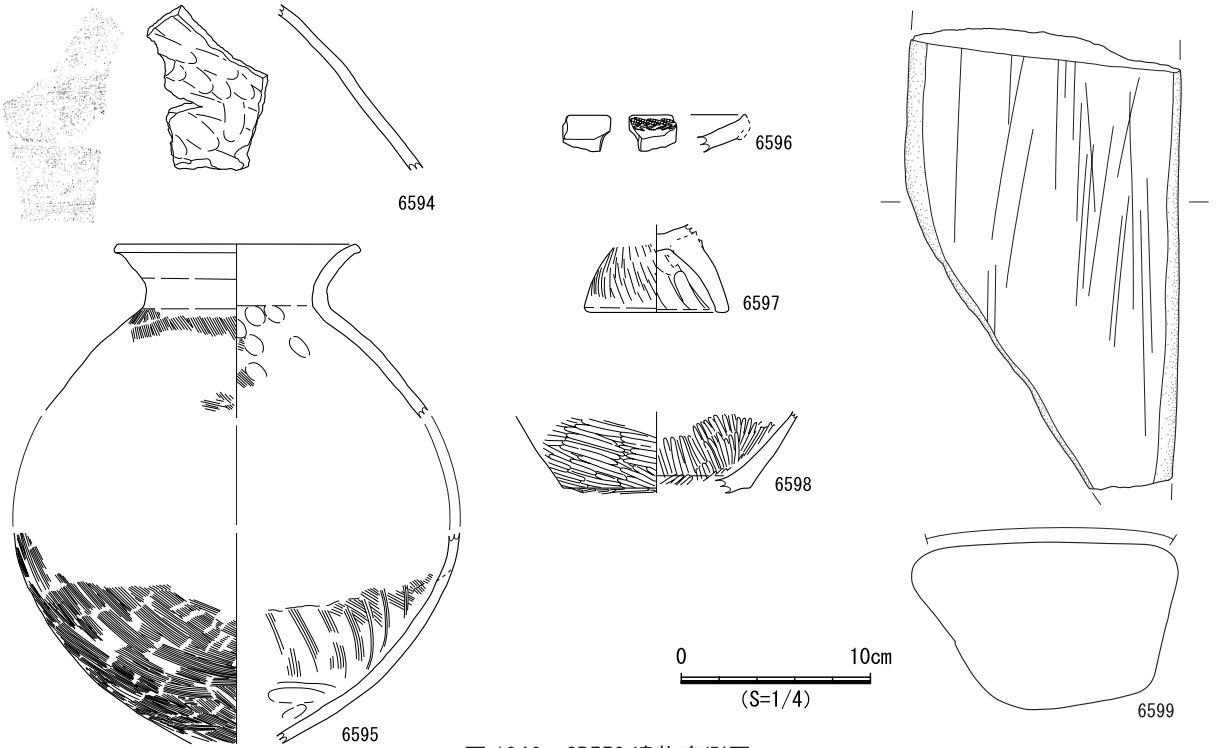


図1946　SB559遺物実測図

SB560（遺構：図 1947・1949、遺物：図 1948）

検出状況　東部西側南寄りの遺構密集域に位置する。北側をSB558、SB559に切られ、中央をSD1170やSD1183に切られる。検出時にすでに壁溝が見えており、平面形は壁溝１・２が比較的明瞭で、壁溝３が不明瞭であった。

形状　住居の住居埋土は削平されて不明だが、壁溝間の距離は長軸長約5.0ｍ、短軸長約4.9ｍの方形を呈する。

床面　ほぼ平坦であり、西隅部にブロック土を多く含む貼床（整地土：SD2）を確認した。床面上では小穴16基と壁溝を検出した。このうち、P2～P4、P6、P12では土層断面で柱痕跡を確認し、平面的な位置関係からP1～P4が柱穴と考えられる。また、P8、P9は住居中央にある楕円形状を呈する穴であり、炉跡の可能性も検討したが焼土や被熱痕は確認できなかった。壁溝は幅約0.2ｍで北東辺の一部が途切れている。なお、炉跡は確認できなかった。

掘形　住居西隅に幅約0.9ｍ～1.0ｍ、深さ約0.1ｍの溝状遺構がＬ字状に巡り、ブロック土の混入が認められることから掘形埋土と考えた。しかし、他の隅部では確認できておらず、詳細は不明である。

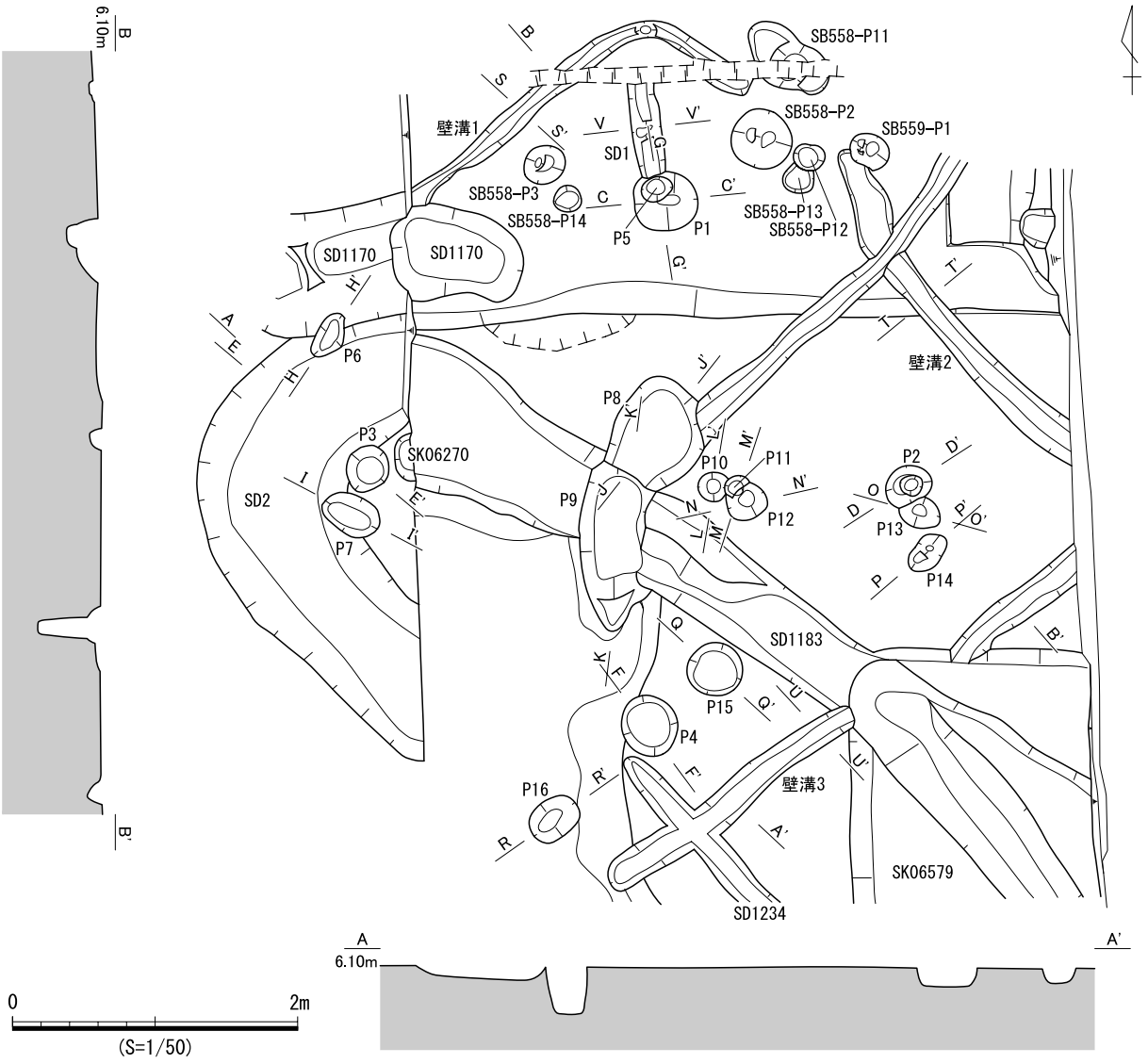


図 1947　SB560 遺構図（１）

遺物出土状況　小穴から土器212点、壁溝から土器21点、掘形埋土から土器９点が出土した。出土土器はⅣ期とⅥ期～Ⅶ期のものであるが、いずれも細片で摩滅が進んでいる。なお、P16からⅥ期～Ⅶ期の壺（6600）が出土した。

出土遺物　6600はⅥ期～Ⅶ期壺。平底の底部がやや突出する。

時期　Ⅵ期～Ⅶ期のSB558、SB559に切られるが、P16出土遺物の時期からⅥ期～Ⅶ期と考えられる。

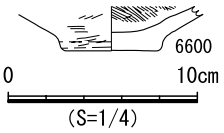


図 1948　SB560 遺物実測図

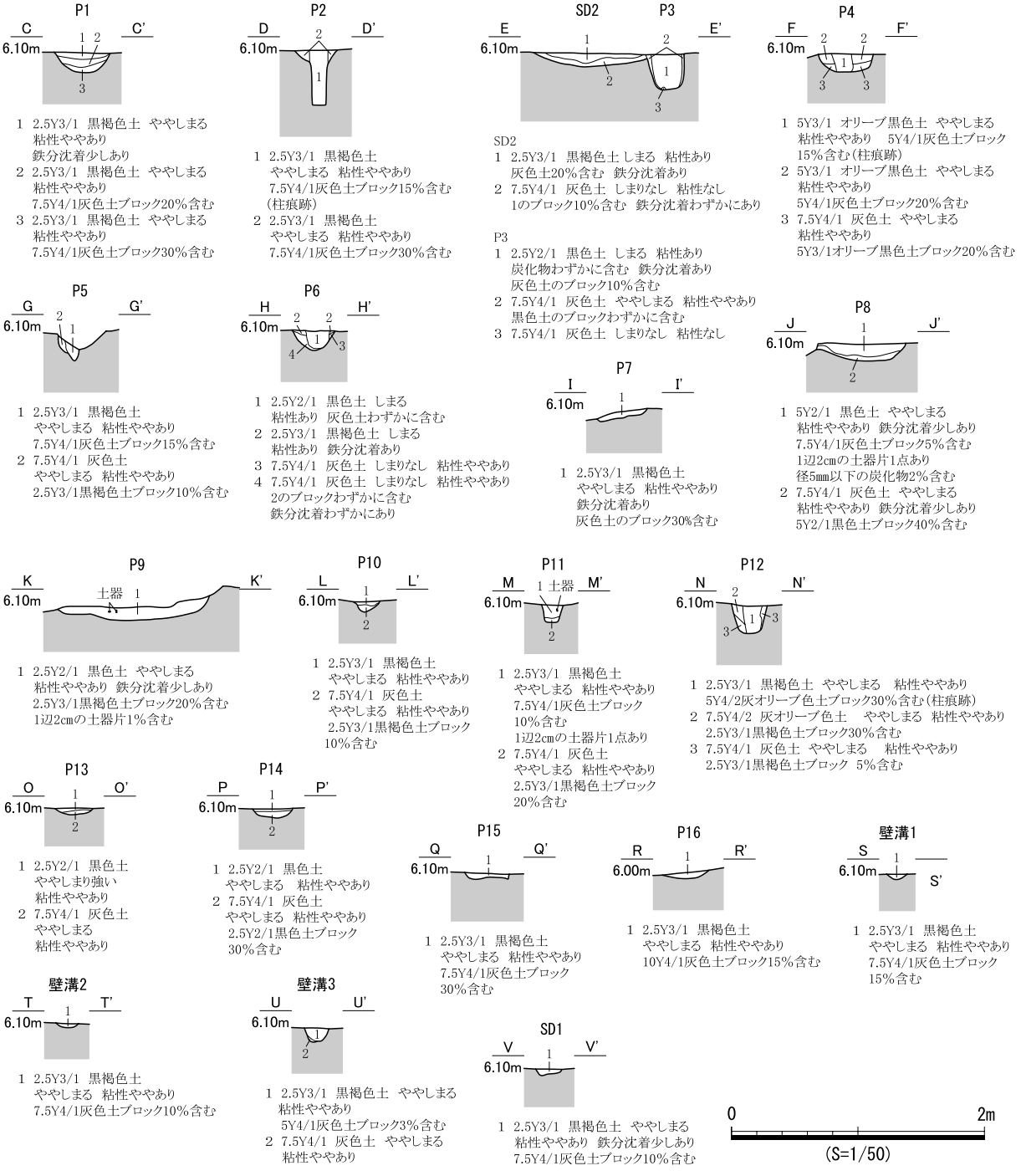


図 1949　SB560 遺構図（２）

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第 131 集

荒尾南遺跡Ｂ地区Ⅱ

（第５分冊）

2015 年 3 月 13 日

編集・発行　岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1
印　　刷　株式会社もとすいんさつ